千葉県八千代市

上　谷　遺　跡

（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

— 第5分冊 —

2005

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

序　　文

八千代市は下総台地の北西部に位置し、東京への通勤圏内として昭和32年の八千代台団地の入居以来、おもに住宅都市として発展してまいりました。特に、昭和40年代半ばからは次々と住宅団地の建設が行われ、それに伴う人口の増加は目ざましいものがあり、八千代市の姿は近郊農業地帯から住宅都市へとその趣を変えております。しかし八千代市はかつての印旛沼と新川等の豊かな水を背景とした豊かな自然も残され、新川を中心とする水辺は市民の憩いの場ともなっており、今後も自然を多く残した住宅都市として発展していくことと思われます。

一方、この住宅都市としての発展にともなう宅地造成等によって失われる遺跡を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そしてこの緑豊かな大地には、およそ三万年前の昔である旧石器時代から多くの人々がくらしを営んできていたことが、近年の調査によって分かってまいりました。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは、数多くの墨書土器が出土し、八千代市は全国でも墨書土器の出土では有数の地となっております。

このようななかで、八千代市域の北東部の保品、神野、米本にわたる地区に『(仮称) 八千代カルチャータウン』の開発が計画されたのは昭和40年代とのことでした。この開発予定区域内には多くの遺跡の所在が知られており、ここに所在する埋蔵文化財の保護について関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存のできない地区についてはやむをえず発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により昭和63年３月から開始され、平成11年３月に終了致しましたが、この期間に調査を行った遺跡は９遺跡34地点に及び、旧石器時代から近代に至る貴重な調査成果を得ることができました。そして平成12年４月より順次、整理作業を進めてまいりました。

本報告書はこの９遺跡のうち、上谷遺跡の調査の成果の一部をまとめたものです。広範囲に及ぶ上谷遺跡では調査成果を５地区に分け、５分冊によって報告することとなっております。本遺跡では縄文～奈良・平安時代のムラの跡が検出されており、その当時の人々の暮らしに伴う遺物も数多く出土しております。本書が学術資料としてはもとより、広く教育機関や地域の歴史に関心をもたれる方々、また、文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長い期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、数々のご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関並びに関係諸氏に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査及び整理作業に従事された方々に深く感謝いたすところです。

平成17年３月

八千代市遺跡調査会
会　長　三浦　幸子

例　　言

1．本書は、『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』である。

2．上谷遺跡は、千葉県八千代市保品字上谷1786外に所在する。

3　上谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。

5．発掘調査の実施期間、調査面積等については、第１章に記載した。

6．整理作業及び報告書刊行作業は朝比奈竹男・宮澤久史が担当し、平成16年７月１日～平成16年３月31日までの期間実施した。

7．報告書の執筆・編集は朝比奈竹男が主として行ったが、２章の２・３調査区の検出遺構については発掘調査当時の担当である宮澤久史が記した。また、縄文時代早期土器の観察および考察等については、発掘調査当時に調査員であった峰村篤氏にお願いした。なお、墨書土器にかかわる習俗等について増尾伸一郎東京成徳大学助教授の玉稿を賜った。

8．本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、八島大介の指導のもと、伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。

9．発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。

10．整理作業及び報告書刊行作業におけるＤＴＰシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。

11．遺物の実測図及びトレース図の作成については、八千代市遺跡調査会が行ったものと、株式会社東京航業研究所に委託したものがある。委託実測については、佐々木藤雄氏の指導のもと今井千恵・飯野正子・水野藍の各氏のお手を煩わせた。

12．発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。

13．出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授いただいた。

14．発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）

館山市立博物館　千葉県教育庁文化財課　（財）千葉県文化財センター　（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター　南山大学人類学博物館　明治大学考古学博物館　八千代市教育委員会　八千代市立郷土博物館

青沼道文　阿部寿彦　阿部芳郎　安藤広道　井上賢　大澤孝　小笠原永隆　岡田光広　小川和博　小倉淳一　大塚達朗　小久貴隆史　小笠原永隆　柿沼修平　上守秀明　鄭田良一　菊池健一　菊池慎太郎　黒沢浩　郷堀英司　佐藤順一　関口達彦　島田和高　田形孝一　高花宏　田川良　田中英世　野口行雄　原田昌幸　平川南　深谷昇　藤岡孝司　増尾伸一郎　峰村篤　村松篤　山岸良二

凡　　例

1．遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通番号を新たに付与し直した。この遺構番号については、第１章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2．本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図１　国土地理院発行　1/25,000地形図　「小林」「佐倉」「白井」「習志野」（平成12年発行）

図２　大成建設株式会社発行　1/4,000　Ｙ．Ｋ．プロジェクト　空中写真測量図（昭和63年発行）

3．本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4．本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡　1/80　　掘立柱建物　1/80　　土坑　1/50　　溝　1/50　　炉穴　1/50　　その他の遺構　1/80

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。

(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5．本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図　1/4　　土器拓影図　1/3　　土製品　1/3　　石器・石製品　2/3　1/2　1/3　1/4

鉄器・鉄製品　1/4　　銅製品　1/2　　支　脚　1/4

(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗りで、不明瞭な部分は20％のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は縁取りを行った。なお、推定復原部分は破線で示した。

6．墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、一部コンピュータによって画像処理を行い、読みやすくしたものがある。
7．本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「箆（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたものを「線刻」として区分している。
8．鉄製品及び銅製品については、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。
9．遺構図は、セクション図を優先させている。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
表目次

第１章　上谷遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　上谷遺跡の調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　上谷遺跡Ｖ地区の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第２章　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第１節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第１項　竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第２項　炉穴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　第３項　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　第２節　弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
　第３節　奈良・平安時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　　第１項　竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
　　第２項　掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181
　　第３項　土　坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・203
　第４節　中世以降・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
　　第１項　土　坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・218
　　第２項　溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
　第５節　調査区出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・227
第３章　小　結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
　　第１節　旧石器時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
　　第２節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
　　第３節　弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
　　第４節　奈良・平安時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・230
　　第５節　上谷遺跡Ｖ地区の墨書土器について・・・・・・・・・・・・230
　　第６節　墨書土器にみる信仰と習俗　（増尾伸一郎東京成徳大学助教授）・242
　　第７節　上谷遺跡出土の撚糸文土器について　（峰村　篤）・・・・・・・247
　　第８節　上谷遺跡出土の土偶・動物形土製品・土製品　（越川欣和）・・・283

写真図版
調査抄録

挿 図 目 次

図 1 上谷遺跡位置図 ・・・・・・・・・・ 1
図 2 （仮称）八千代カルチャータウン
開発事業関連遺跡地形図・・・ 2
図 3 上谷遺跡本調査区区割図・・・・・ 2
図 4 上谷遺跡Ⅴ地区遺構配置図・・・・ 3
図 5 上谷遺跡Ⅴ地区
縄文時代遺構配置図・・・・ 6
図 6 A227・・・・・・・・・・・・・・・ 7
図 7 F302・F303・・・・・・・・・・・ 8
図 8 F302（2）・・・・・・・・・・・・ 9
図 9 F303（2）・F304・・・・・・・・・ 10
図 10 F305・・・・・・・・・・・・・・ 11
図 11 F305（2）・・・・・・・・・・・・ 12
図 12 F306・F307・F307・F309・F310・・ 14
図 13 F311・F312・F313・F314a,b・・・・ 16
図 14 F311・F314a,b（2）・・・・・・・ 17
図 15 F315a,b・F316・・・・・・・・・・ 18
図 16 F315（2）・・・・・・・・・・・・ 19
図 17 F317・F318・F319・・・・・・・・ 20
図 18 F320・F321・・・・・・・・・・・ 21
図 19 F320（2）・・・・・・・・・・・・ 22
図 20 F321（2）・・・・・・・・・・・・ 23
図 21 F322・・・・・・・・・・・・・・ 24
図 22 F322（2）・・・・・・・・・・・・ 25
図 23 F323・F324・・・・・・・・・・・ 26
図 24 F325・・・・・・・・・・・・・・ 27
図 25 F325（2）・F326・F327・・・・・ 28
図 26 D277・・・・・・・・・・・・・・ 30
図 27 D278a,b・・・・・・・・・・・・・ 31
図 28 D279・D280・D301・・・・・・・・ 32
図 29 D281・D282・D283・D284・・・・ 33
図 30 D285.D286.D288.D289・・・・・・・ 35
図 31 D290・・・・・・・・・・・・・・ 36
図 32 D291・・・・・・・・・・・・・・ 37
図 33 D292・D293・D295・・・・・・・ 39
図 34 D296・D297・・・・・・・・・・・ 40
図 35 D299・D301・・・・・・・・・・・ 41
図 36 D301（2）・・・・・・・・・・・・ 42
図 37 D302・D305・・・・・・・・・・・・ 43
図 38 D303・D304・D306・D307・・・・・・ 44
図 39 D308・D309・D310・D313・D314・・ 46
図 40 D308・D309・D310・
D313D313・D314（2）・・・・・ 47
図 41 D315・D316・・・・・・・・・・・・ 48
図 42 D316（2）・・・・・・・・・・・・・ 49
図 43 D332・D334・・・・・・・・・・・・ 50
図 44 D350・・・・・・・・・・・・・・・ 51
図 45 D351・D352・D355・・・・・・・・・ 52
図 46 D362・・・・・・・・・・・・・・・ 54
図 47 D363・・・・・・・・・・・・・・・ 55
図 48 上谷遺跡Ⅴ地区
弥生時代遺構配置図・・・・・ 56
図 49 A230・・・・・・・・・・・・・・・ 57
図 50 A234・・・・・・・・・・・・・・・ 58
図 51 A234（2）・・・・・・・・・・・・・ 59
図 52 A235・・・・・・・・・・・・・・・ 60
図 53 A238a・・・・・・・・・・・・・・ 61
図 54 A241a・・・・・・・・・・・・・・ 62
図 55 A241a（2）・・・・・・・・・・・・ 63
図 56 A248a・・・・・・・・・・・・・・ 64
図 57 A249・・・・・・・・・・・・・・・ 65
図 58 A249（2）・・・・・・・・・・・・・ 66
図 59 A251a・・・・・・・・・・・・・・ 67
図 60 A255・・・・・・・・・・・・・・・ 69
図 61 A259（2）・・・・・・・・・・・・・ 70
図 62 A264・・・・・・・・・・・・・・・ 71
図 63 A264（2）・・・・・・・・・・・・・ 72
図 64 上谷遺跡Ⅴ地区
奈良・平安時代遺構配置図・・・ 74
図 65 A226・・・・・・・・・・・・・・・ 75
図 66 A226（2）・・・・・・・・・・・・・ 76
図 67 A228・・・・・・・・・・・・・・・ 79
図 68 A228（2）・・・・・・・・・・・・・ 80
図 69 A229・・・・・・・・・・・・・・・ 81
図 70 A229（2）・・・・・・・・・・・・・ 82
図 71 A231・・・・・・・・・・・・・・・ 83

図 72 A231（2）・・・・・・・・・・・・84
図 73 A232・・・・・・・・・・・・・85
図 74 A232（2）・・・・・・・・・・・86
図 75 A232（3）・・・・・・・・・・・87
図 76 A233・・・・・・・・・・・・・91
図 77 A233（2）・・・・・・・・・・・92
図 78 A233（3）・・・・・・・・・・・93
図 79 A233（4）・・・・・・・・・・・94
図 80 A236・・・・・・・・・・・・・99
図 81 A236（2）・・・・・・・・・・・100
図 82 A237・・・・・・・・・・・・・102
図 83 A238・・・・・・・・・・・・・103
図 84 A238（1）・・・・・・・・・・・104
図 85 A238（3）・・・・・・・・・・・105
図 86 A239・・・・・・・・・・・・・106
図 87 A239（2）・・・・・・・・・・・107
図 88 A240・・・・・・・・・・・・・110
図 89 A240（2）・・・・・・・・・・・111
図 90 A241b・・・・・・・・・・・・・112
図 91 A242・・・・・・・・・・・・・114
図 92 A242（2）・・・・・・・・・・・115
図 93 A242（3）・・・・・・・・・・・116
図 94 A243・・・・・・・・・・・・・119
図 95 A243（2）・・・・・・・・・・・120
図 96 A244・・・・・・・・・・・・・122
図 97 A244（2）・・・・・・・・・・・123
図 98 A245・・・・・・・・・・・・・125
図 99 A245（2）・・・・・・・・・・・126
図 100 A246・・・・・・・・・・・・・128
図 101 A246（2）・・・・・・・・・・・129
図 102 A247・・・・・・・・・・・・・129
図 103 A247（2）・・・・・・・・・・・130
図 104 A248b・・・・・・・・・・・・・132
図 105 A248b（2）・・・・・・・・・・・133
図 106 A250a・b・・・・・・・・・・・134
図 107 A250a（2）・・・・・・・・・・・135
図 108 A250b（2）・・・・・・・・・・・136
図 109 A250a・b（3）・・・・・・・・・・137
図 110 A251b・・・・・・・・・・・・・139
図 111 A251b（2）・・・・・・・・・・・140
図 112 A252・・・・・・・・・・・・・142
図 113 A252（2）・・・・・・・・・・・143
図 114 A253・・・・・・・・・・・・・144
図 115 A253（2）・・・・・・・・・・・145
図 116 A254・・・・・・・・・・・・・146
図 117 A254（2）・・・・・・・・・・・147
図 118 A256・・・・・・・・・・・・・148
図 119 A256（2）・・・・・・・・・・・149
図 120 A256（3）・・・・・・・・・・・150
図 121 A257・・・・・・・・・・・・・152
図 122 A257（2）・・・・・・・・・・・153
図 123 A258・・・・・・・・・・・・・154
図 124 A258（2）・・・・・・・・・・・155
図 125 A258（3）・・・・・・・・・・・156
図 126 A260・・・・・・・・・・・・・159
図 127 A260（2）・・・・・・・・・・・160
図 128 A260（3）・・・・・・・・・・・161
図 129 A260（4）・・・・・・・・・・・162
図 130 A261・・・・・・・・・・・・・165
図 131 A261（2）・・・・・・・・・・・166
図 132 A262・・・・・・・・・・・・・167
図 133 A262（2）・・・・・・・・・・・168
図 134 A263・・・・・・・・・・・・・170
図 135 A263（2）・・・・・・・・・・・171
図 136 A265・・・・・・・・・・・・・174
図 137 A265（2）・・・・・・・・・・・175
図 138 A265（3）・・・・・・・・・・・176
図 139 A265（4）・・・・・・・・・・・177
図 140 B125・・・・・・・・・・・・・181
図 141 B125（2）・・・・・・・・・・・183
図 142 B126・・・・・・・・・・・・・184
図 143 B127・・・・・・・・・・・・・185
図 144 B128a,b・・・・・・・・・・・・186
図 145 B128a,b（2）・・・・・・・・・・187
図 146 B129・・・・・・・・・・・・・188
図 147 B130・B131・・・・・・・・・・189
図 148 B132・・・・・・・・・・・・・190
図 149 B133・・・・・・・・・・・・・191
図 150 B134a,b・・・・・・・・・・・・192
図 151 B134a,b（2）・・・・・・・・・・193

図 152　B135a,b ・・・・・・・・・・・・195
図 153　B135a,b（2）　・・・・・・・・・196
図 154　B136 ・・・・・・・・・・・・・197
図 155　B137 ・・・・・・・・・・・・・198
図 156　B138 ・・・・・・・・・・・・・199
図 157　B139 ・・・・・・・・・・・・・200
図 158　D287・D298・D317・・・・・・204
図 159　D318・D321・D323・
　　D324・D325・・・・・・205
図 160　D326・D327・D328・・・・・・207
図 161　D329・D330 ・・・・・・・・・208
図 162　D333・D335・D336・
　　D337・D338・D342・・・・209
図 163　D339 ・・・・・・・・・・・・210
図 164　D340・D341・D343・D344・・・・211
図 165　D347・D348 ・・・・・・・・・213
図 166　D349 ・・・・・・・・・・・・215
図 167　D353・D354・D359・・・・・・216
図 168　D294・D311・D319・D320・・・・218
図 169　D322・D331・D346・・・・・・219
図 170　D356・D357 ・・・・・・・・・221
図 171　D358 ・・・・・・・・・・・・222
図 172　E004・E005 ・・・・・・・・・223
図 173　E004・D361 ・・・・・・・・・224
図 174　E004 ・・・・・・・・・・・・225
図 175　調査区出土の遺物
　　奈良・平安時代（墨書土器）・・228
図 176　上谷遺跡Ⅴ地区
　　墨書土器検出遺構配置・・・・・232
図 177　上谷遺跡Ⅴ地区
　　「西」「竹」出土遺構配置図 ・・233
図 178　撚糸文土器（全点）
　　グリッド別出土状況・・・・・・258
図 179　撚糸文土器前半期（口縁部のみ）
　　グリッド別出土状況・・・・・・259
図 180　撚糸文土器（口縁部のみ）
　　グリッド別出土状況・・・・・・260
図 181　撚糸文土器（1）　・・・・・・・261
図 182　撚糸文土器（2）　・・・・・・・262
図 183　撚糸文土器（3）　・・・・・・・263
図 184　撚糸文土器（4）　・・・・・・・264
図 185　撚糸文土器（5）　・・・・・・・265
図 186　撚糸文土器（6）　・・・・・・・266
図 187　撚糸文土器（7）　・・・・・・・267
図 188　撚糸文土器（8）　・・・・・・・268
図 189　条痕文土器（1）　・・・・・・・269
図 190　条痕文土器（2）　・・・・・・・270
図 191　条痕文土器（3）　・・・・・・・271
図 192　条痕文土器（4）　・・・・・・・272
図 193　縄文時代の土製品　・・・・・・・287

表目次

表　1　上谷遺跡新旧遺構番号対照表・・・・5
表　2　A227遺物観察表・・・・・・・・・8
表　3　F305遺物観察表 ・・・・・・・・・12
表　4　F311遺物観察表 ・・・・・・・・・15
表　5　F322遺物観察表 ・・・・・・・・・25
表　6　D301遺物観察　・・・・・・・・・43
表　7　D350遺物観察表・・・・・・・・・51
表　8　D352遺物観察表・・・・・・・・・53
表　9　A230遺物観察表・・・・・・・・・57
表　10　A234遺物観察表・・・・・・・・・59
表　11　A238遺物観察表・・・・・・・・・62
表　12　A241a遺物観察表 ・・・・・・・・63

表 13 A249遺物観察表 ・・・・・・・・・66
表 14 A251a遺物観察表 ・・・・・・・・・68
表 15 A259遺物観察表 ・・・・・・・・・69
表 16 A264遺物観察表 ・・・・・・・・・73
表 17 A226遺物観察表 ・・・・・・・・・77
表 18 A228遺物観察表 ・・・・・・・・・80
表 19 A229遺物観察表 ・・・・・・・・・82
表 20 A231遺物観察表 ・・・・・・・・・84
表 21 A232遺物観察表 ・・・・・・・・・88
表 22 A233遺物観察表 ・・・・・・・・・95
表 23 A236遺物観察表 ・・・・・・・・・100
表 24 A237遺物観察表 ・・・・・・・・・103
表 25 A238遺物観察表 ・・・・・・・・・105
表 26 A239遺物観察表 ・・・・・・・・・108
表 27 A240遺物観察表 ・・・・・・・・・111
表 28 A241b遺物観察表 ・・・・・・・・113
表 29 A242遺物観察表 ・・・・・・・・・116
表 30 A243遺物観察表 ・・・・・・・・・120
表 31 A244遺物観察表 ・・・・・・・・・124
表 32 A245遺物観察表 ・・・・・・・・・127
表 33 A246遺物観察表 ・・・・・・・・・129
表 34 A247遺物観察表 ・・・・・・・・・131
表 35 A248b遺物観察表 ・・・・・・・・133
表 36 A250a遺物観察表 ・・・・・・・・・135
表 37 A250b遺物観察表 ・・・・・・・・・137
表 38 A251b遺物観察表 ・・・・・・・・・140
表 39 A252遺物観察表 ・・・・・・・・・143
表 40 A253遺物観察表 ・・・・・・・・・145
表 41 A254遺物観察表 ・・・・・・・・・147
表 42 A256遺物観察表 ・・・・・・・・・150
表 43 A257遺物観察表 ・・・・・・・・・153
表 44 A258遺物観察表 ・・・・・・・・・156
表 45 A260遺物観察表 ・・・・・・・・・162
表 46 A261遺物観察表 ・・・・・・・・・166
表 47 A262遺物観察表 ・・・・・・・・・168
表 48 A263遺物観察表 ・・・・・・・・・171
表 49 A265遺物観察表 ・・・・・・・・・177
表 50 B125遺物観察表 ・・・・・・・・・182
表 51 B134遺物観察表 ・・・・・・・・・194
表 52 掘立柱建物跡一覧表 ・・・・・・・201
表 53 D298遺物観察表 ・・・・・・・・・203
表 54 D348遺物観察表 ・・・・・・・・・214
表 55 D349遺物観察表 ・・・・・・・・・215
表 56 上谷遺跡Ⅴ地区墨書土器等一覧 ・・234
表 57 調査区遺物観察表 ・・・・・・・・273

写 真 図 版 目 次

図版1 上谷遺跡Ⅴ地区遺構検出状況
上谷遺跡Ⅴ地区遺構検出状況（真上）
図版2 A227
F302・F303・F304・F305・F306・
F308,D288・F309・F310・F312・
F313・F314・F316・F317・F318
図版3 F319・F320・F321・F322・F323・
F324・F325a・F325b・F326・
D277・D278a,b・D279・D280・
D281・D282・D283・D284・D285
図版4 D286・D289・D290a,b・D291・
D292・D293・D295・D296・D297・
D299・D300・D301・D301(2)・
D302・D303・D304・D305・D306
図版5 D307・D308・D309・D310・D313・
D314・D315・D316・D332・D334・
D350・D350(2)・D351・D352・
D352(2)・D355・D362・D363
図版6 A230・A234・A235・A238a・A241a・
A249・A251a・A255

図版７　A259・A264・A226・A226(2)・A228・
A229・A231・A232
図版８　A232(2)・A233・A236・A237・
A238b・A239・A240・A241b
図版９　A242・A243・A244・A245・A246・
A247・A248a,b・A250
図版10　A251b・A252・A253・A254・A256・
A257・A258・A260
図版11　A261・A262・A263・A265
B125・B126・B127・B18a,b
図版12　B132・B133・B134a,b・B135a,b・
B136・B137・B138・B139
図版13　D287・D298・D317・D318・D333・
D335・D336・D337・D338・D339・
D340・D341・D342・D343・D344・
D345・D347・D348
図版14　D349・D353・D354
D294・D319・D346・D356・D357・
D358・D359・D361
A242調査風景
A244調査風景
図版15　D322・D331
E004・E005
図版16　出土遺物（１）
図版17　出土遺物（２）
図版18　出土遺物（３）
図版19　出土遺物（４）
図版20　出土遺物（５）

第１章　　上谷遺跡Ｖ地区の概要

第１節　上谷遺跡Ｖ地区の調査の経緯

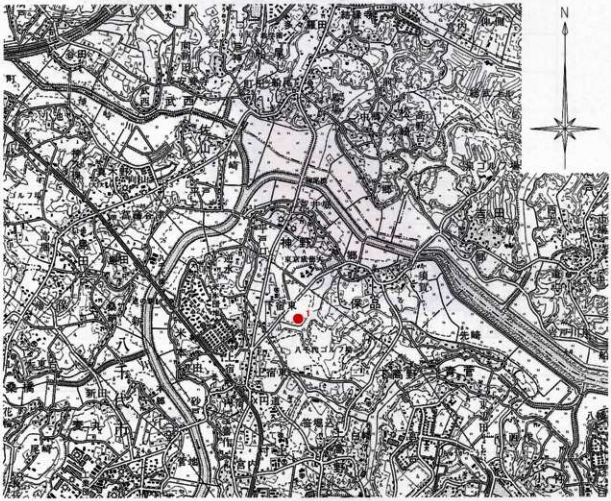


図１　上谷遺跡位置図(1/50,000)

上谷遺跡の発掘調査は、八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として行われた。例言に記したとおり本報告書は『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書』としては10冊目にあたり、『上谷遺跡』としは第５分冊目となる。調査に至る経緯や整理計画などの詳細については、既刊の『栗谷遺跡－第１分冊－』を参照していただき、ここでは上谷遺跡Ｖ地区の調査について触れておきたい。

上谷遺跡の発掘調査は平成４年４月より10月にかけて第１次確認調査を、平成８年度から10年度にかけて第１・２・３・４次本調査を実施した。このうち上谷遺跡Ｖ地区の本調査は第１・２次本調査の一部がこれにあたり、調査面積は約11,669 ㎡であった。

調査区の設定にあたっては既刊の報告書で触れたとおり、公共座標系に沿ってグリッドを設定した。100m方眼を大グリッド、10mを中グリッド、５mを小グリッドとして調査を進めた。また、記録作成上で別途の調査区番号も用いた。表土層は重機による作業を進め、ソフトローム上面を遺構確認面とした。そして写真撮影や必要に応じた図を作成しながら、遺構の調査を行った。遺構・遺物の記録については光波測距儀による測量を必要に応じて行い、遺構図については航空測量を基本として、それぞれ補完することとした。

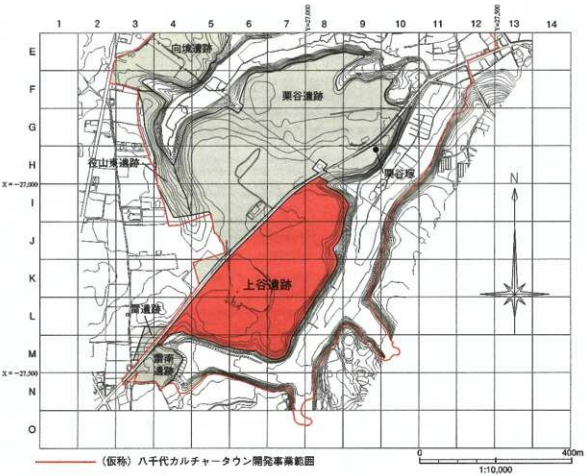


図2　(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連遺跡地形図

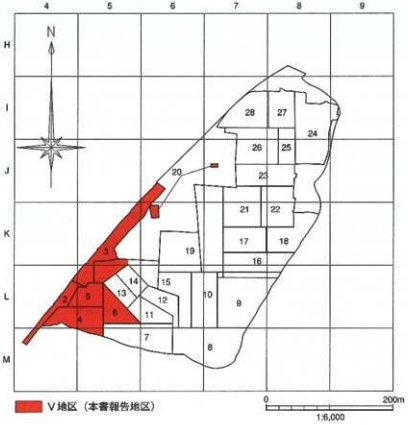


図3　上谷遺跡本調査地区割図

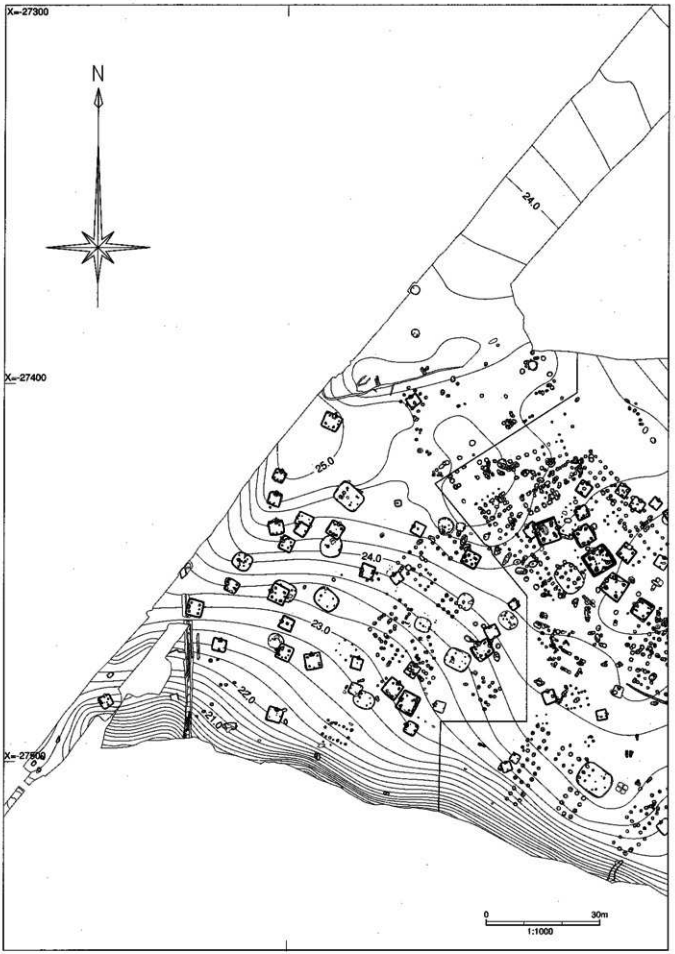


図4　上谷遺跡Ⅴ地区遺構配置図

第２節　上谷遺跡Ｖ地区の概要

上谷遺跡は千葉県八千代市保品に所在する。八千代市の北東部にあり、かつては直接に印旛沼に面した広い舌状台地の南東部に残された遺跡である。地理的には下総台地の北西部に位置し、かつての印旛沼の南岸に立地している。下総台地の地形は樹枝状に解析された谷津によって、台地と谷津が複雑に入込む地形となっている。特に八千代市域では全体的に比高差のない地形であるが、そのなかでも谷津に対して南側が比高差のある急傾斜となり、北側が緩斜面となる傾向が指摘されている。そしてこの台地上を中心に、谷津に面して各時代の遺跡が残されている。

上谷遺跡もその一つであり、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代をとおして断続的に集落が営まれ、特に、奈良・平安時代を主体とした遺跡である。標高24～26mの大きな舌状台地の東側に位置し、旧水田面との比高差は５～６ｍとなっている。台地上は比較的に平坦であるが、東側と南側は急傾斜をもって谷津に下っている。また、台地に対して東と南から、また、栗谷遺跡側から谷頭が西から入込んでおり、細かくみると上谷遺跡も複雑な地形となっている。また、小支谷などによって栗谷遺跡などと便宜上区分されてきたところである。今回ここに報告する上谷遺跡Ｖ地区は、上谷遺跡調査区としては南西側に位置し、更に西側に役山東遺跡、南側に雷・雷南遺跡へと続く地区である。

本地区において検出された遺構は、竪穴住居跡44軒、掘立柱建物跡18棟（重複した掘立柱建物跡も含む）、炉穴28基、土坑89基、溝状遺構（中世以降）３条であり、計182遺構となる（遺構番号の付与の方式で遺構数に若干の増減は生じる）。

時代別にみると、縄文時代は竪穴住居跡１軒、炉穴28基、土坑42基である。竪穴住居跡は後期・堀之内１式期であり、今までのⅠ～Ⅳ地区の報告地区では検出されておらず、新たな知見が得られた。また、炉穴は早期・条痕文の野島期が主体を占めている。土坑は早期・条痕文期を主体とするが、中期・五領ヶ台期４基、後期・堀之内１式期２基が検出された。五領ヶ台期の土坑４基のうち３基が小竪穴状の土坑であり、Ⅴ地区の西側に偏在する。Ⅱ地区から谷頭にかけて、東西に帯状に遺構は検出されたことになる。出土遺物は検出遺構の関係から早期・野島式が主体を占めるが、胴部中位から口縁にかけての文様帯を構成する土器は少なく、全面が条痕文となるものが主体を占めている。また、早期・撚糸文も破片であるが、多く出土していた。

弥生時代の遺構は竪穴住居跡11軒であり、土坑などは検出されなかった。何れも後期の所産であるが、規模の大きなものと小規模な竪穴住居跡に分かれる。出土遺物は少なかった。

古墳時代は、土師器を中心に廃棄した様な状態で遺物は出土している。形状として古墳時代後期に近似する竪穴住居跡も検出しているが、遺構としては明確にできなかった。

奈良・平安時代は本地区の遺構の主体となる時代であるが、竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡18棟、土坑36基を検出した。遺物としては墨書土器がやはり多く出土している。「集団の特徴的な文字」は「竹」が減少し、「西」が主体を占めるようになった。「人面墨書土器」も出土している。

中世以降の遺構は少なく、土坑11基、溝状遺構３条である。土坑の大半は用途不明であり、時代判断ができなかった土坑も含めており、時代が異動する遺構もあるかも知れない。炭窯３基を検出したが、２基は生産用の窯として捉えられた。

なお、上谷遺跡Ｖ地区の基本土層は他の地区と変化はなく、Ⅰ層・表土層、Ⅱ層・黒色土層、Ⅲ層・暗褐色土層、Ⅳ層・ソフトローム漸移層、Ⅴ層・ソフトロームと捉えている。そして遺構確認は、Ⅳ・Ⅴ層で行っている。

表1　上谷遺跡新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号
竪穴住居址	
A226	15-006
A227	06-001
A228	06-002
A229	06-003
A230	06-004
A231	06-005
A232	06-006
A233	06-007
A234	06-008
A235	06-026
A236	04-001
A237	04-002
A238a	04-003a
A238b	04-003b
A239	04-004
A240	04-005
A241a	04-006a
A241b	04-006b
A242	04-007
A243	04-008
A244	04-009
A245	04-010
A246	04-011
A247	05-001
A248a	05-002a
A248b	05-002b
A249	05-003
A250	05-004
A251a	05-005a
A251b	05-005b
A252	05-006
A253	05-007
A254	05-008
A255	05-010
A256	02-001
A257	02-007
A258	02-008
A259	02-009
A260	02-010
A261	02-011
A262	03-001
A263	03-002
A264	03-003
A265	03-004
掘建柱建物址	
B125	15-007
B126	06-012a
B127	06-013

新番号	旧番号
B128a,b	06-014a,b
B129	04-012
B130	04-013a
B131	04-014
B132	04-015
B133	04-016a
B134a,b	04-017a,b
B135a,b	05-011a,b
B136	05-012
B137	05-013
B138	05-014a
B139	05-015
穴穴	
F302	15-031
F303	15-032
F304	15-034
F305	15-035
F306	15-036
F307	15-040
F308	15-041a
F309	15-042
F310	15-043
F311	15-046b
F312	15-049
F313	15-052
F314a,b	15-053
F315a,b	15-058c,d
F316a	15-059a
F316b	15-059b
F317a	15-060a
F317b	15-060b
F318	15-063
F319	15-064b
F320	06-021
F321	06-022
F322	06-023
F323	06-032
F324	06-033
F325	06-034
F326	04-043
F327	03-007
土坑	
D277	15-005
D278a,b	15-020
D279	15-021
D280	15-022
D281	15-023
D282	15-024
D283	15-025

新番号	旧番号
D284	15-026
D285	15-027
D286	15-029
D287	15-037
D288	15-041b
D289	15-044
D290a,b	15-046a,b
D291	15-047
D292	15-048
D293	15-050
D294	15-054
D295	15-055
D296	15-057
D297	15-058a
D298	15-061
D299	15-064a
D300	15-084
D301	15-086
D302	15-087
D303	15-091
D304	15-092
D305	15-093
D306	15-094
D307	15-095
D308	15-096
D309	15-098
D310	15-099
D311	06-012b
D312	06-014c
D313	06-020
D314	06-024
D315	06-025
D316	06-027
D317	06-028
D318	06-029
D319	06-030
D320	04-013b
D321	04-016b
D322	04-020
D323	04-021
D324	04-022
D325	04-023
D326	04-024
D327	04-025
D328	04-026
D329	04-027
D330	04-028
D331	04-029
D332	04-030

新番号	旧番号
D332	04-030
D333	04-031
D334	04-032
D335	04-033
D336	04-034
D337	04-035
D338	04-036
D339	04-037
D340	04-038
D341	04-039
D342	04-040
D343	04-041
D344	04-042
D345	04-044
D346	05-009
D347	05-014b
D348	05-014c
D349	05-016
D350	05-017
D351	05-018
D352	05-019
D353	05-020
D354	05-021
D355	05-022
D356	02-002
D357	02-003
D358	02-004
D359	02-005
D360	02-006
D361	02-012
D362	03-005
D363	03-006
溝	
E004	04-018
E005	04-019

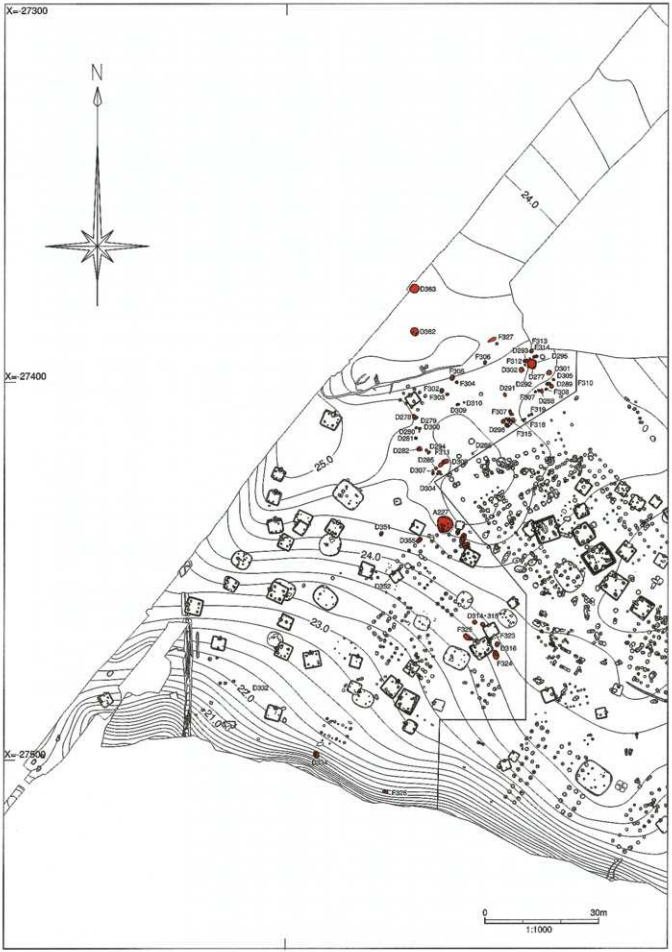


図５　上谷遺跡Ⅴ地区縄文時代遺構配置図

第1節　縄文時代

上谷遺跡V地区から検出した縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、炉穴28基、土坑42基であった。遺構の主体は炉穴と土坑であり、早期・条痕文期に主体をおくが、全体として遺構の分布傾向は調査区の北側に多く、15地区西側を主体としている。また、15地区西側～3区北側には他の時代の遺構も少なく、縄文時代の遺構がやや集中して営まれる傾向が窺えるものであった。

遺物は炉穴などの遺構に関連して早期・条痕文が主体を占めているが、撚糸文系土器片の出土もやや多かった。また、前期末葉～中期初頭の土器片が認められている。

第1項　竪穴住居跡

本地区における縄文時代の竪穴住居跡は、1軒のみの検出であった。この他に土坑として扱ったが、竪穴状の遺構を3基検出している。上谷遺跡では縄文時代の竪穴住居跡の検出は極めて少ないが、今回報告する後期・堀之内期の住居跡については、全体的な遺構確認作業においても遺物の出土は殆ど確認されておらず、新たな知見を得ることとなった。

A227

検出地区　　L5-5-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸(4.64)m×短軸(4.20)m×壁高0.08m、方位はN-40°-Eを測る。平面形は歪んだ円形である。床はソフトロームの地床であり、平坦ではあるが軟弱な床であった。ソフトロームを0.10m前後

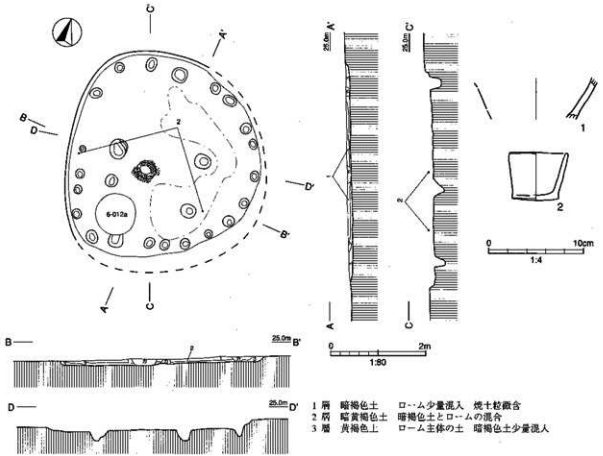


図6　A227

掘込んだものであり、壁や立上がりは判然としなかった。炉跡は住居跡の略中央に検出され、炉跡の壁が焼土化してブロック状となっていた。柱穴はP1・P2が主柱穴と捉えられ、P3～P27は壁下を巡っている。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であり、色調や包含物などから3層に分層した。また覆土の状態からも、壁の立上がりが判然としない理由でもあった。

遺　物　総数25片（土器片17点、礫8点）の出土であるが、早期・撚糸文及び条痕文系が主体を占めている。住居跡中央から北東にかけて多く出土するが、出土層や出土範囲に特記する傾向は窺われなかった。

所　見　出土遺物は早期・条痕文片の出土が多く調査時には当該時期と捉えていたが、竪穴住居跡の形状や掲載遺物の出土から、後期・堀之内1式期と判断した。

表2　A227遺物観察表

(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	－×　－×（44） 内外面とも研磨される	外橙褐 内暗褐 普	砂粒	胴部片	
2	縄文 ミニチュア	61×　49×　51 コップ状を呈し口唇部は平坦に作出　胴部下端に括れを持つ　平底 内外面ともナデやミガキにより比較的丁寧に調整される	橙褐 良	砂粒	3/4	

第2項　炉穴

本地区では炉穴を28基を検出した。主たる分布域は調査区北側にあたり、15調査区西側地区を中心に6調査区と3調査区に散在し、これはⅣ地区からの分布傾向に引き続いている。遺物は早期・条痕文片が多いが、野島式が主体を占めており、前後の時期は極めて少なかった。野島式でも微隆起や沈線区画する口縁部文様帯を有するものが少なく、条痕文が口縁部文様のモチーフとなっていた。

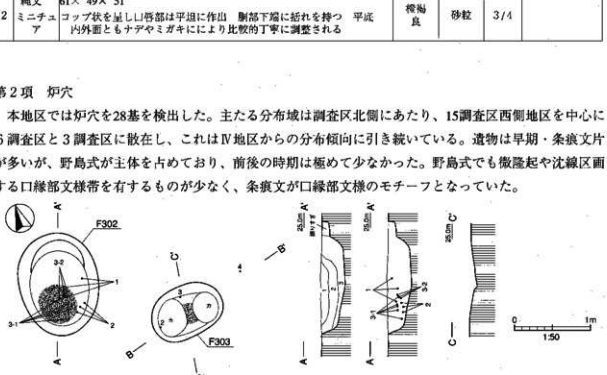


図7　F302・F303

F302

検出地区　L5-41-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.36m×短軸1.04m×深さ0.31m、方位はN-9°-Eを示している。平面形は楕円形であ

る。ソフトロームへの掘込みはしっかりとしたものであった。火床は南壁際にかけて検出し、壁も含めて赤化は強かった。また、初期の埋没段階においても火の使用が認められた。覆土は褐色土を主体とした自然堆積と捉えられた。

遺　物　縄文早期・条痕文片がやや多く出土している。1は外面沈線による三角区画内に集合沈線を施し、2は丁寧な条痕文を、3・4は茎状工具による条痕文を施す。

所　見　火床の状況から、ある程度の期間、高温の火の使用を伴う炉穴と判断された。

F303

検出地区　L5-41-1gにて検出した。

遺　構　長軸－m×短軸0.69m×深さ0.09m、方位はN-82°-Eを示している。平面形は楕円形である。掘込みは浅く、凹み状の炉穴である。赤化した火床は認められず、火熱痕のみであった。覆土は攪乱を被り判然としないが、自然堆積と捉えられた。

遺　物　早期・条痕文片が僅かに出土している。1・2は内外面とも斜位の条痕文を主体とするが、外面はやや粗いものとなっている。3は内面は縦位の条痕文を、外面は茎状工具を束ねた様な工具による横位に近い擦痕状の条痕文を施している。

所　見　攪乱を大きく被り、火床範囲などは意識的に捉えている。覆土に焼土層が存在せず、火床も焼土ブロック化していないことから、使用期間は短かったのではないかと捉えている。

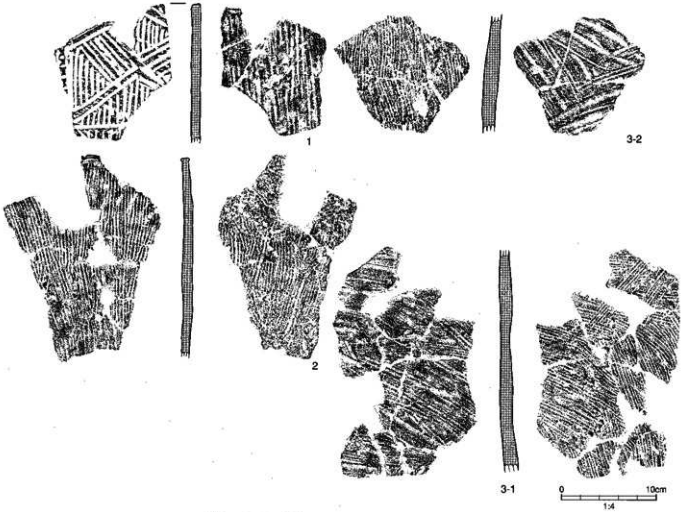


図8　F302（2）

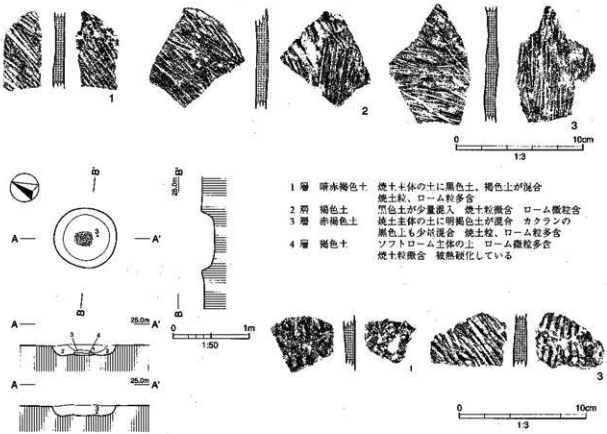


図9 F303（2）・F304

F304

検出地区　K5-50-2・4g、L5-41-1・3gにわたって検出した。

遺　構　長軸0.77m×短軸0.77m×深さ0.16m、方位は形状から測定しなかった。、平面形は略円形である。ソフトロームを浅く掘込み、坑底はやや凹凸を有している。火床は坑底の略中央に検出したが、範囲は小規模であった。覆土は褐色土を主体とした、自然堆積と捉えた。

遺　物　条痕文片が僅かに出土している。1は内外面とも条痕文を施すが、不明瞭な施文となっている。2は外面は斜位に、内面は縦位に近い条痕文を施し、内面の条痕文は外面に比してやや筋が太いものとなっている。

所　見　単独の炉穴であり、火床の状態から一定期間の高温による被熱と捉えられた。

F305

検出地区　K5-50-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.58m×短軸1.19m×深さ0.81m、方位はN-18°-E、平面形は楕円形である。掘込みは0.35mとやや深く、また壁の立上がりは略垂直となっている。坑底は平坦であった。火床は南壁際にかけて検出し、赤化している。覆土は褐色土・暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　炉穴としては、総破片数14点と出土遺物は多かった。平面的分布としては炉穴の中央に、垂直分布は覆土中層からの出土傾向を示していた。土器片はいずれも比較的丁寧な条痕文を施している。1は坑底から0.15m程度高く、略覆土中層から潰れた様に横倒しの状態で出土している。

所　見　遺構確認面では遺構規模がやや判然としなかった炉穴であり、調査当初より遺構規模が拡大した。覆土は自然堆積と捉えたが、層厚や遺物の出土傾向から、人為的な埋戻しの可能性のある炉穴である。

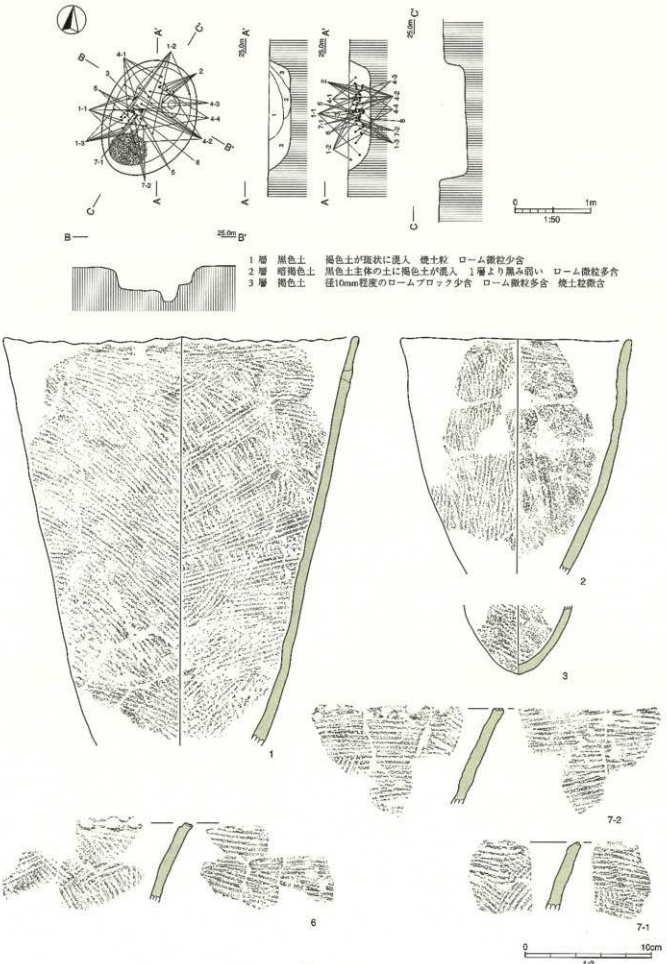

1 層　黒色土　　褐色土が斑状に混入　焼土粒　ローム微粒少含
2 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土が混入　1層より黒み弱い　ローム微粒多含
3 層　褐色土　　径10mm程度のロームブロック少含　ローム微粒多含　焼土粒微含
0　1m
1:50
0　10cm
1:3

図10　F305

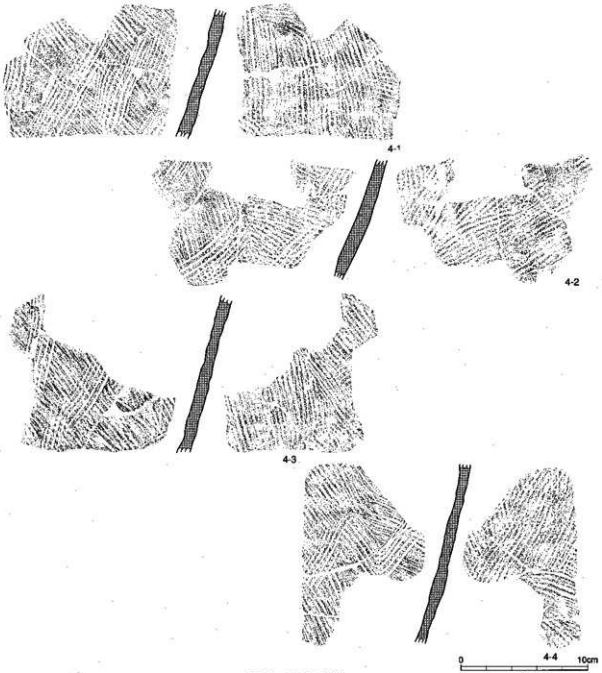


図11　F305（2）

表3　F305遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(278)×－×318　波状口縁　口縁下に補修孔有り 外面　口縁～胴上半－斜位の条痕文 内面　横位の条痕文、斜位の条痕文を交叉	茶褐～ 暗褐色 普	繊維 白色粒	1/3	
2	縄文 深鉢	(179)×－×186　1山縁部やや尖る 外面　口縁－横位の条痕文　頸部～胴下半－横位、縦位の条痕文 内面　口縁－横位の条痕文　頸部～胴下半－縦位、斜位の条痕文？痕跡不明瞭	暗褐～ 茶褐色 普	繊維 白色粒	口縁～ 胴部片	
3	縄文 深鉢	－×－×(55)　尖底 内外面とも斜位の条痕文	茶褐色 普	繊維	底部片	
4-1	縄文 深鉢	－×－×－　外 面　斜位の条痕文 内面　不定方向の条痕文	茶褐～ 暗褐色 普	繊維 白色粒	胴部片	4-1～-4同一個体

5	縄文 深鉢	ー× ー× ー　口唇部押圧 外面　横位の条痕文→斜位の条痕文交叉 内面　横位→斜位の条痕文	褐色 普	繊維	口縁片	未提示
6	縄文 深鉢	ー× ー× ー　口唇部押圧 外面　横位、斜位の条痕文 内面　横位の条痕文	明褐色 普	繊維	口縁片	
7-1	縄文 深鉢	ー× ー× ー　口唇部押圧 外面　横位、斜位の条痕文 内面　横位の条痕文	明褐～ 暗褐色 普	繊維	口縁片	7-1,2同一個体

F306

検出地区　K5-70-4g、80-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.05m×短軸0.81m×深さ0.17m、方位はN-13°-E、平面形は楕円形である。掘込みはやや浅く、壁は斜めに立上がっている。坑底は略平坦である。火床は坑底中央から、南縁寄りに検出され、赤化していた。覆土は、褐色土・暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　坑底からも条痕文片が出土しているが、出土量は多くはなかった。1は内外面とも縦位の条痕文を施している。

所　見　単独の炉穴であり、火床の赤化より長期間にわたる炉穴の使用と捉えた。

F307

検出地区　L5-61-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.67m×短軸0.62m×深さ0.04m、方位はN-65°-E、平面形は略円形である。遺構確認面において火床が検出された、極めて掘込みの浅い凹み状の炉穴である。掘込みが浅く壁は判然としないが、傾斜をもって立上がっている。坑底はやや凹凸を有している。赤化した火床は、坑底の略中央に検出された。覆土は褐色土を主体とした自然堆積と捉えたが、掘込みが浅く判然としないものであった。

遺　物　早期・条痕文片が僅かに出土しており、また、黒曜石砕片も出土している。

所　見　F308やF309と隣接しており、特にF308と近接する炉穴である。遺構確認面で既に火床を検出したことは、遺構の上部が失われ、本来はF308と同一の炉穴と捉えられるかも知れない。火床の赤化から使用期間は長期にわたる炉穴と捉えている。

F308

検出地区　L5-61-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.97m×短軸0.66m×深さ0.08m、方位はN-31°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームをわずかに掘込み、凹み状の炉穴である。淡く赤化した火床を、坑底の北西壁際から壁の立上がりにわたって検出した。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

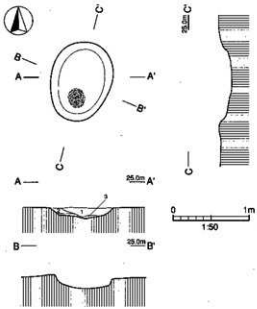
遺　物　出土遺物はなかった。

所　見　F307と近接する。F307で記した様に、本来は同一の炉穴である可能性も否定できないが、単独の炉穴として報告する。また、 D288と重複するが、覆土からは本遺構が時間差はないものの新しい時期の所産と捉えられた。火床の状況から、炉穴の使用期間はやや短いのではないかと判断した。

F309

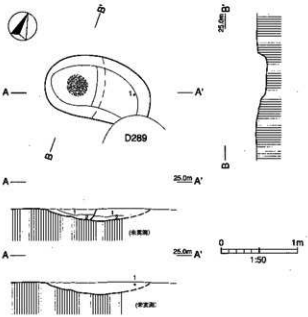
検出地区　L5-61-38gにて検出した。

遺　構　長軸0.85m×短軸0.61m×深さ014m、方位はN-55°-E、平面形は楕円形である。ソフトロームを北東側から掘込んだ様な浅い炉穴であり、北東壁と坑底との境は判然とせず、南西壁はやや急な立上がりを示していた。小規模な淡く赤変した火床を坑底中央に検出したが、火床としては不明瞭なものであった。掲示することは出来なかったが、覆土は褐色土を主体とした自然堆積であった。



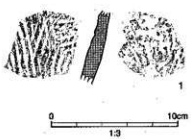
1 層　暗褐色土　黒色土主体の上に褐色土が混合
　　焼土粒ローム微粒含
2 層　褐色土　　極少量の黒色土混合　ローム微粒含
3 層　赤褐色土　焼土主体の土にソフトローム混合
　　焼土粒、ローム微粒多含

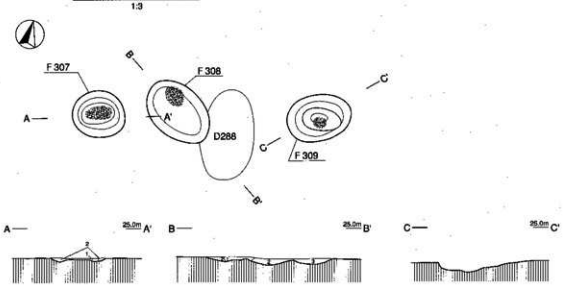
F306



1 層　黒褐色土　褐色土混入　ローム微粒多含　焼土粒多含
2 層　赤褐色土　黒色土混入　ローム微粒多含　焼土粒多含

F310





15-040
1 層　赤褐色土　焼土を主体とした土に暗褐色土が少量　火熱したロームブロック含
2 層　褐色土　　黒色土少含　　焼土粒微含　ローム微粒含

15-041a
1 層　赤褐色土　焼土主体　褐色土混入　ローム微粒多含　火熱したロームブロック含
2 層　褐色土　　黒色土混入　ローム粒微含
3 層　褐色土　　黒色土混入　焼土粒　炭化粒少含

F308・F309・F310

図12　F306・F307・F308・F309・F310

遺　　物　　出土遺物は無かった。

所　　見　　F307・F308と隣接する炉穴であり、いずれもソフトロームをわずかに掘込んだ遺構である。しかし近接するF308とはF307・F308との距離よりは隔たりが大きく、遺構上部が失われたとしても同一の炉穴とはならず、単独の炉穴と捉えている。

F310

検出地区　　K5-70-4g、L5-61-2gにわたって検出した。

遺　　構　　長軸1.47m×短軸0.82m×深さ0.17m、方位はN-83°-E、平面形は楕円形である。ソフトロームをスリ鉢状に掘凹めた様な炉穴であり、坑底と壁の境は不明瞭である。坑底は略平坦と捉えた。覆土から2坑の重複であった。新しい炉穴に伴う赤化した火床が、坑底の東壁寄りに1か所検出された。覆土はロームを多含する褐色土を主体として各層の4層に捉えた。

遺　　物　　早期・条痕文片が僅かに出土している。

所　　見　　古い炉穴の火床は失われたものと判断した。覆土が近似しており、時間差のない炉穴の重複と捉えている。遺存する火床の赤化は強く、やや長期にわたる使用と考えられた。

F311

検出地区　　L5-43-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸－m×短軸－m×深さ0.15m、方位はN-4°-E、平面形は略円形である。東西とも土坑によって失われ、全体の形状などは判然としない。このため遺構規模は測定できなかった。ソフトロームを掘込み、坑底は南北に段差を有しているが、それぞれ平坦であった。壁は坑底からやや急に立上がっている。赤化した火床を、坑底の略中央に広く検出した。覆土は褐色土を主体として、自然堆積と捉えた。

遺　　物　　早期・条痕文片が出土しているが、僅かであった。しかし接合する破片が多く、同一個体の破片として捉えられた。

所　　見　　火床の赤化から炉穴としては長期の使用が捉えられた。

表4　F311遺物観察表　　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	297×　－×(275)　口縁外反しやや平坦面を作り出す 内外面とも擦痕	茶褐～ 暗褐 普	繊維	1/2	内面繊維の脱痕 有り

F312

検出地区　　K5-60-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.58m×短軸0.47m×深さ0.04m、方位はN-43°-E、平面形は楕円形である。遺構確認面において火床を認める程掘込みは浅く、ソフトロームを僅かに凹めた程度の皿状の炉穴である。火床は坑底中央から北西壁にかけて検出し、若干の硬化は認めるが、赤変する程度であった。覆土はローム・焼土を含む黒色土が主体の層であったが、包含物が多く色調的に本来の覆土と異なりを示していた。炉穴の掘込みが極めて浅く1層のみの把握となっているため、自然堆積とは想定するが判然としない。

遺　　物　　出土しなかった。

所　　見　　小規模な遺構であり、遺構上部が失われた炉穴と捉えている。

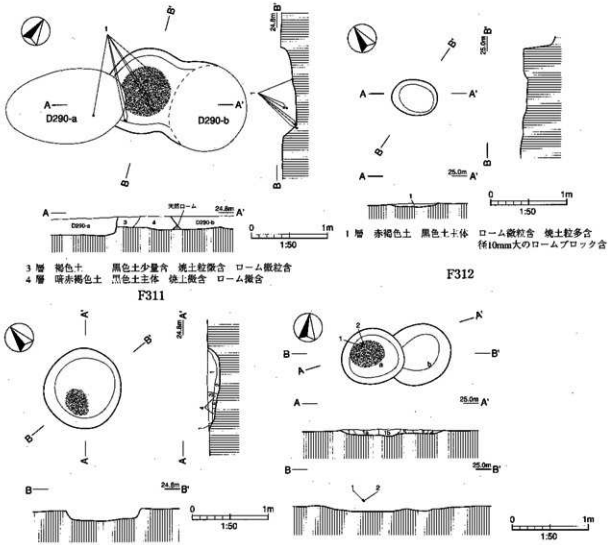


図13　F311・F312・F313・F314ab

F313

検出地区　K5-60-3・4gて検出した。

遺　構　長軸1.06m×短軸1.01m×深さ0.15m、平面形は略円形であり、この形状から方位は測定しなかった。ソフトロームを掘込み坑底としているが、南から北側に傾斜する坑底であった。火床は西壁寄りに検出され、坑底から0.12m程度高い3層下に検出された。覆土は褐色土を主体とする。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　覆土より2基の重複と捉えた。1・2層の自然堆積後、掘返して再使用した状況を示している。坑底には古い時期の火床が存在したと思われるが、調査で検出することは出来ず、覆土中の火床に伴う炉穴により失われたものと捉えた。

F314a・b

検出地区　K5-70-1gにて検出した。

遺　構　2基の炉穴の重複した遺構である。いずれも平面形は略円形であり、凹み状の炉穴である。

F314aは、長軸0.81m×短軸0.74m×深さ0.07m、方位はN-49°-Eを示し、浅い掘込みのため坑底と壁の境は判然とせず、緩傾斜をもって立上がっている。赤化した火床が、坑底中央から西壁にかけて検出

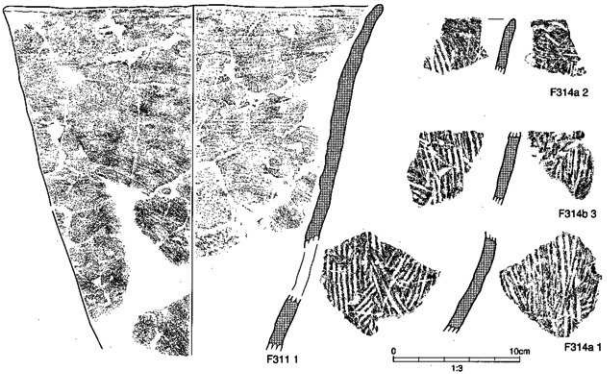


図14　F311・F314ab（2）

された。

F314bは、長軸0.86m×短軸0.79m×深さ0.05m、方位はN-43°-Eを示し、F314a同様ソフトロームを僅かに掘凹めた浅い遺構である。このため坑底と壁の境は判然としない。赤化した火床が、坑底中央に検出された。

覆土は、いずれも褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　早期・条痕文片が僅かに出土しているが、F314aからの出土を中心としており、F314bからは殆ど出土しなかった。1～3はいずれも外面は縦位・斜位の、内面は縦位の条痕文を施したものである。1は内剥ぎ条痕文の口縁片で、口唇は尖頭状となる。

所　見　F314bの自然埋没後に掘返されF314bが営まれた炉穴であり、覆土から先後関係をF314b→F314aと捉えることができた。また、火床のそれぞれの赤化が強いことから長期の使用も捉えられるが、先後関係の時間的な差は殆どないとも考えられた炉穴である。

F315a・b

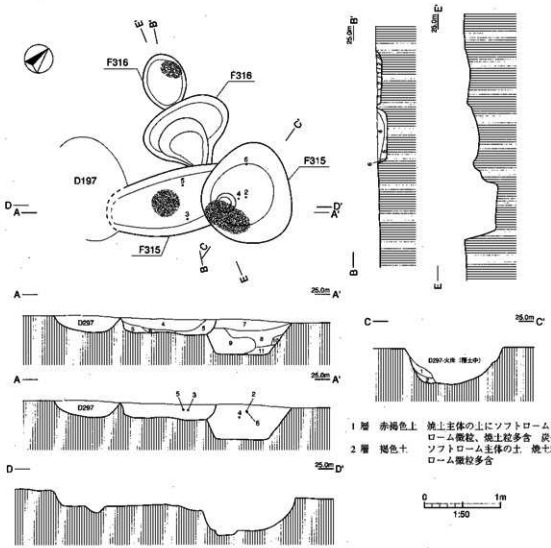
検出地区　L5-51-3・4gにて検出した。

遺　構　2基の炉穴重複した遺構である。

F315aは、長軸－m×短軸0.82m×深さ0.14m、方位はN-41°-E、平面形は長楕円である。ソフトロームを掘込みが、掘込みはしっかりとした炉穴であり、略平坦な坑底から壁は垂直に近い状態で立上がっている。坑底の中央に、赤化した火床を検出した。覆土はF315bを掘込み、褐色土・暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

F315bは、長軸1.29m×短軸1.20m×深さ0.45m、方位はN-23°-W、平面形は三角形（オムスビ）状である。ハードロームまで掘込んだ坑底は平坦であり、壁の立上がりは急である。南壁際から壁にかけて、赤化した火床を検出した。覆土は複雑な堆積を示し、一度埋戻した様な11層の上に9層（焼土層）が堆積している。

遺　物　それぞれに早期・条痕文片が若干出土しているが、時間的な差はない様である。3・5は



F315

4 層	暗褐色土	黒色土主体の上に褐色土が混入　ローム微粒　焼土粒含
5 層	褐色土	ソフトローム主体の土に黒色土少量混入　焼土粒微含　ローム微粒含
6 層	赤褐色土	ソフトローム主体の土に焼土が多量に混入　焼土粒、ローム微粒多含
7 層	暗褐色土	黒色土主体の土に褐色土が混入　ローム微粒　焼土粒少含
8 層	暗褐色土	黒色土主体の土に褐色土が混入　径30mm前後のロームブロック含
9 層	暗赤褐色土	焼土主体の上に黒色土混入　褐色土が少量混入　焼土粒、ローム微粒多含　火床
10 層	黄褐色土	ロームブロック
11 層	黄褐色土	褐色土主体の土　ローム微粒含

F316

1 層	明褐色土	ソフトローム主体の土　ローム微粒多含　被熱し硬化している　火床
2 層	暗褐色土	黒色土主体の上に褐色土が混入　焼土粒、炭化粒含
3 層	褐色土	少量の黒色土が混入　焼土粒微含
4 層	暗赤褐色土	黒色土主体の土に褐色土が混入　焼土粒、ローム微粒多含
5 層	暗赤褐色土	黒色土主体の土に褐色土が混入　焼土粒、ローム微粒多含　炭化粒微含
6 層	暗褐色土	黒色土主体の土に褐色土が混入　焼土粒微含

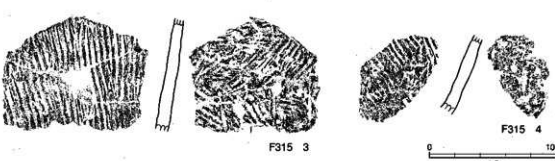


図15　F315ab・F316

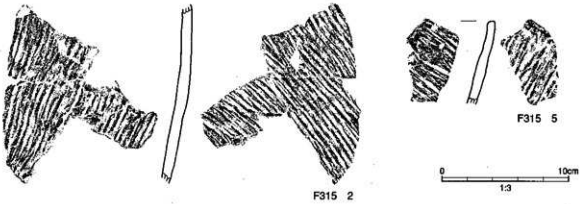


図16　F315（2）

F315a、2・4・6はF315bより出土しているが、いずれも覆土上層からの出土であった。いずれも内外面とも比較的丁寧な条痕文を施している。

所　見　　覆土より、重複する炉穴の先後関係はF315b→F315aと捉えられた。5層と7層に不整合があることから、もう1基所在した可能性も否定できなかった。

F316a・b

検出地区　L5-51-3・4gにて検出した。

遺　構　2基の重複した様な炉穴であるが、本来は独立した炉穴である。また、F315aと重複する遺構である。

F316aは、長軸0.69m×短軸0.56m×深さ0.04m、方位はN-58°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを僅かに掘込んだ皿状の遺構であり、坑底は平坦である。遺構確認面において、北壁際に火床を検出した。覆土は垂直的に分層され、人為的な堆積状況を示していた。

F316bは、長軸1.17m×短軸0.69m×深さ0.18m、方位はN-28°-E、平面形は不整形である。ソフトロームを掘込んだ坑底は平坦であり、壁の立上がりはやや斜めであった。赤化した火床を東壁際に検出した。覆土は黒色土主体であるが、包含物により色調は異なりを示しているが自然堆積であった。

遺　物　いずれも炉穴も出土遺物は無かった。

所　見　調査において坑底を掘過ぎたため、それぞれの火床を明確に捉えることはできなかった。意識的に復元した火床である。調査当初は重複した炉穴と捉えたが、覆土からそれぞれ独立した遺構であることが捉えられた。F316aの掘込みは浅く、遺構確認面で火床が検出されたことから、炉穴上部が失われており、重複した遺構の可能性も指摘できる。

F317

検出地区　K5-60-4g、L5-51-3gにて検出した。

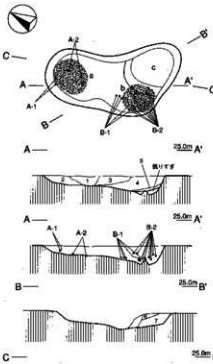
遺　構　長軸1.50m×短軸0.71m×深さ0.15m、方位はN-7°-W、平面形は「へ」の字状である。c坑の方位はN-60°-Wであった。本来、3坑の炉穴と捉えられるが、検出した火床は2か所であった。火床a・bともに赤化するが、火床aがbより使用度が高いと捉えた。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えられた。

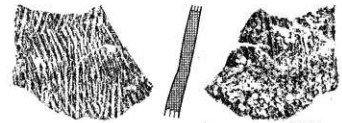
遺　物　2か所の火床に伴い、それぞれ若干の出土をみた。1は火床aに、2は火床bに伴い、内外面とも丁寧な条痕文を施している。

所　見　c坑についてはbにより火床が失われたか、または、火床bに伴うピットの掘方かも知れない。重複による先後関係は、c坑→火床b→火床aと覆土から捉えた。

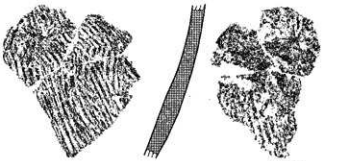
F318

検出地区　L5-61-1gにて検出した。





F317 1



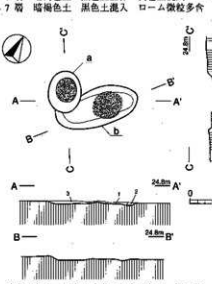
F317 2

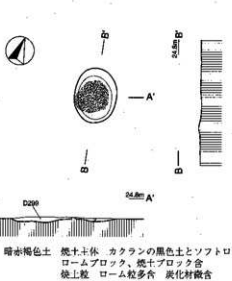
F318 1

0 10cm
1:3

1 層　黒色土　少量の褐色土混入　ローム粒多含　焼土微含
2 層　暗褐色土　黒色土主体　褐色土少混入　ローム粒多含
3 層　暗褐色土　黒色土主体　褐色土少混入　ローム粒多含　焼土微含
4 層　暗褐色土　黒色土混入　ローム微粒
5 層　褐色土　ソフトローム主体　ローム微粒　焼土粒少含
6 層　暗褐色土　黒色土主体　褐色土混入　ローム微粒多含
7 層　暗褐色土　黒色土混入　ローム微粒多含

F317





1 層　暗赤褐色土　黒色土主体に褐色土混入　焼土粒、ローム粒多含
2 層　褐色土　黒色土混入　ローム微粒含
3 層　暗褐色土　黒色土主体に褐色土混入　焼土粒、ローム粒含

F318

2 層　暗赤褐色土　焼土主体　カクランの黒色土とソフトロームが混合
ロームブロック、焼土ブロック含
焼土粒　ローム粒多含　炭化材微含

F319

0 1m
1:50

図17　F317・F318・F319

遺　構　2基の重複した炉穴である。

aは、長軸0.54m×短軸0.42m×深さ0.04m、方位はN-32°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを極めて浅く掘込んだ、凹み状の炉穴である。火床は坑底に広がり、赤化したものとなっていた。

bは、長軸1.09m×短軸0.49m×深さ0.03m、方位はN-47°-E、平面形は長楕円形である。ソフトロームを極めて浅く掘込んだ、凹み状の炉穴である。火床は坑底略中央から東壁寄りに検出したが、ローム

の被熱による硬化は認めるものの、赤色化はaに比し弱いものであった。

覆土は、褐色土・暗褐色土を主体とするが、遺構が浅く自然堆積か人為堆積かは捉えられなかった。

遺　物　　出土する遺物は希であった。1は外面はタテに近い斜位の、内面は縦位・斜位の交差した条痕文を施しているが、内面は粗くなっている。

所　見　　掘込みが浅く、覆土からの重複の先後関係は捉えられなかった。いずれも凹み状の炉穴となっており、遺構上部が失われた可能性を指摘しておきたい。

F319

検出地区　　L5-61-1gにて検出した。

遺　構　　長軸0.71m×短軸0.56m×深さ0.03m、方位はN-18°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを掘凹めた様な炉穴である。赤化が強い火床は坑底に大きく広がり、一部が西壁にかかっていた。覆土は、火床直上層の1層のみが捉えられた。

遺　物　　出土した遺物は無かった。

所　見　　D300と近接し、遺構確認時には重複すると捉えていたが、それぞれ単独の土坑と捉えられた。凹み状の炉穴であることから、遺構上部を失っているかも知れない。

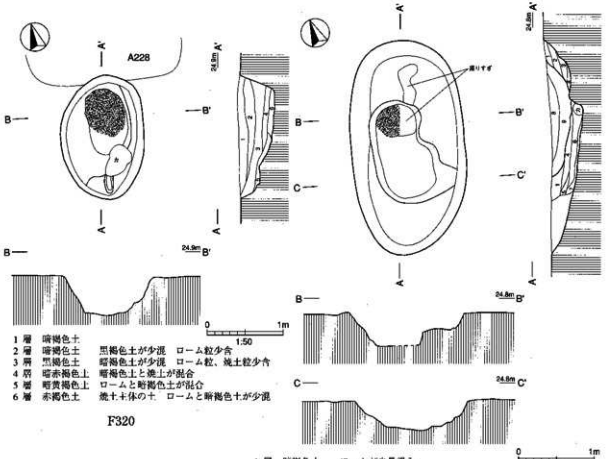


図18　F320・F321

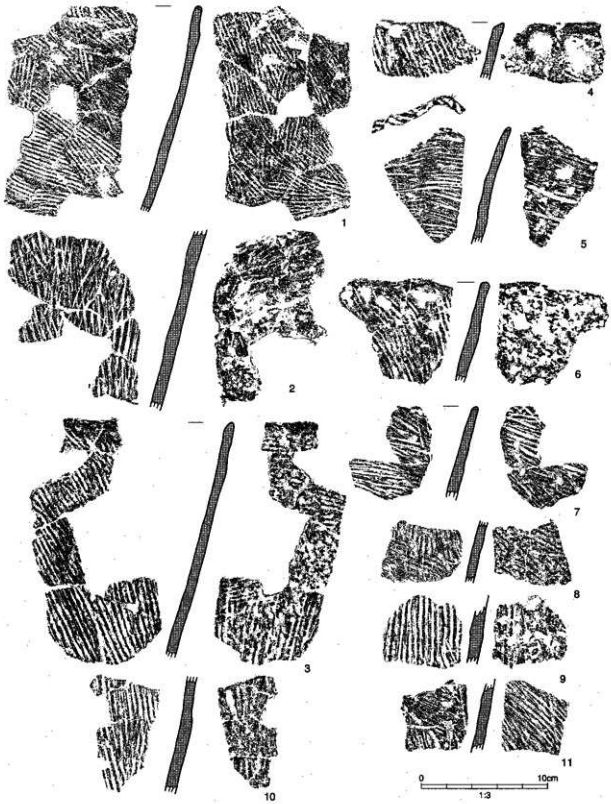


図19　F320（2）

F320

検出地区　L5-44-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.64m×短軸1.10m×深さ0.52m、方位はN-12°-E、平面形は楕円形である。ハードロームを掘込み、壁の立上がりは垂直に近いものとなっていた。南側は一段テラス状となり、坑底は更に南側から北側に次第に下っている。火床は坑底を更に大きく掘込んだピット内の北壁際に、被熱による

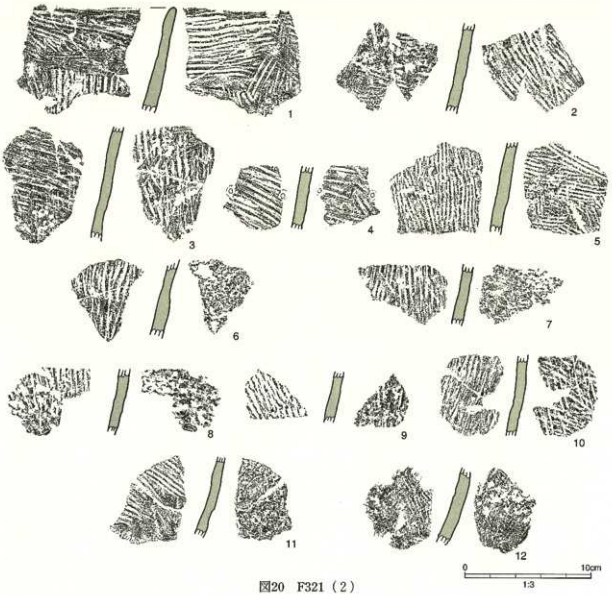


図20　F321（2）

赤変は強いが、ロームの硬化には至っていなかった。

遺　　物　　炉穴としては、早期・条痕文片がやや多く出土している。器形を窺うことはできないが、大きく接合する土器片もあった。

所　　見　　A228と重複するため北壁側は大きく損壊を被っており、報告のため意識的に図化した。掘込みは他の炉穴に比し深く、調査では検出できなかったが、煙道を有していたかも知れない。

F321

検出地区　　L5-44-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸2.82m×短軸1.40m×深さ0.29m、方位はN-21°-E、平面形は長楕円形である。ハードロームを掘込んだ坑底には更にピットが検出され、覆土などから重複した遺構と捉えることができた。坑底は全体的に平坦であり、壁は内湾して立上がっている。火床は坑底より掘込んだピット内の北壁際に検出され、被熱による赤変は強いが、ロームの硬化には至っていない。覆土はロームを包含した暗褐色土を主体として、1～7層の自然堆積後、掘返され8・9層の再度の自然堆積によって埋没していた。

遺　　物　　炉穴としては早期・条痕文片がやや多く出土しているが、F320と異なり、大きく接合する土器片は少なかった。

所　　見　　掘込みの深さや坑底に段差を有することから、調査では検出できなかったが、煙道を有する炉穴であったかも知れない。

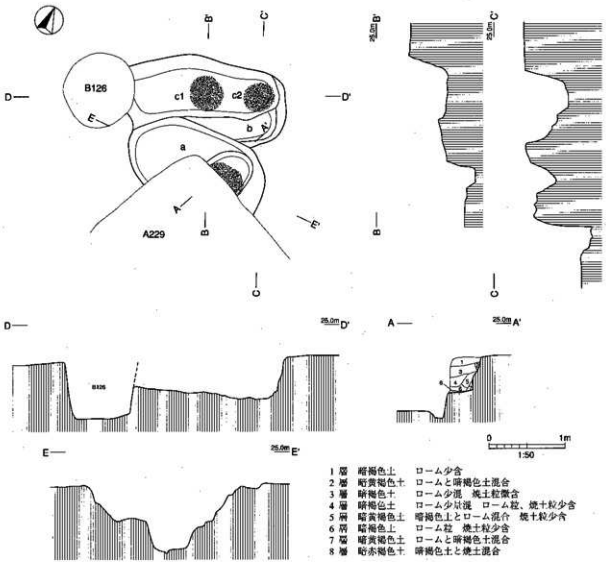


図21　F322

F322

検出地区　K5-44-2gにて検出した。

遺　構　大きく３坑の重複した遺構であり、不整長方形状の炉穴が長軸方向に重複した様な形状を示している。

ａ坑は、長軸(1.98)m×短軸1.02m×深さ0.45m、方位はN-85°-W、平面形は不整長方形である。A229によって、遺構の南東側が大きく損壊を被っている。ハードロームまで掘込み、壁及び坑底は凹凸を有している。坑底の東側に更に浅くピットを掘込み、その坑底中央から南側に火床を検出したが、赤色硬化は極めて強いものであった。

ｂ坑は、ａ・ｃ坑にそれぞれ損壊を大きく被り、規模などは計測しなかった。平面形は不整長方形と思われる。火床も検出することはできなかった。

ｃ坑は、長軸(1.98)m×短軸(0.72)m×深さ0.52m、方位はN-66°-E、平面形は不整長方形である。ハードロームを深く掘込んだ坑底は、西側から東側に凹凸を有して次第に下り、壁の立上がりは垂直に近いものである。火床は坑底に２か所検出し、c1は坑底中央に、c2は東壁際から壁の立上がりにけて認めた。火床はそれぞれ赤変は強いが、被熱のためのロームの硬化には至っていなかった。

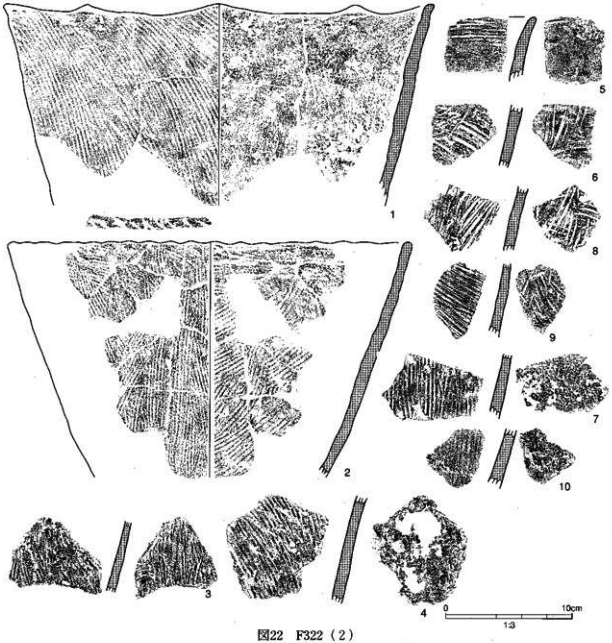


図22　F322（2）

覆土はａ坑のみ捉えられたが、暗黄褐色土・暗褐色土を主体として下層は人為堆積、上層は自然堆積と捉えた。

遺　物　重複した炉穴のため、早期・条痕文片がやや多く出土している。また、接合から器形を窺える土器を２点認めた。

所　見　遺構確認時はａ坑のみの検出であり、ｂ・ｃ坑は認めずらい炉穴であった。このため覆土の堆積状況はａ坑のみとなり、各坑の先後関係は捉えられなかった。また、調査時にはｂ・ｃ坑を同一の遺構として扱っているが、報告では分離することとした。

表５　F322遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1-1	縄文 深鉢	(335)×　－×（160）　波状口縁　口唇部内削ぎ状 外面　斜位の条痕文	外暗茶褐 内暗橙褐 悪	繊維	口縁～ 胴部片	野島式
2	縄文 深鉢	(315)×　－×（186）　口唇部に斜めのキザミ 外面　斜位、縦位の条痕文　内面　横位、斜位の条痕	茶褐～ 暗茶褐 普	繊維	口縁～ 胴部片	野島式

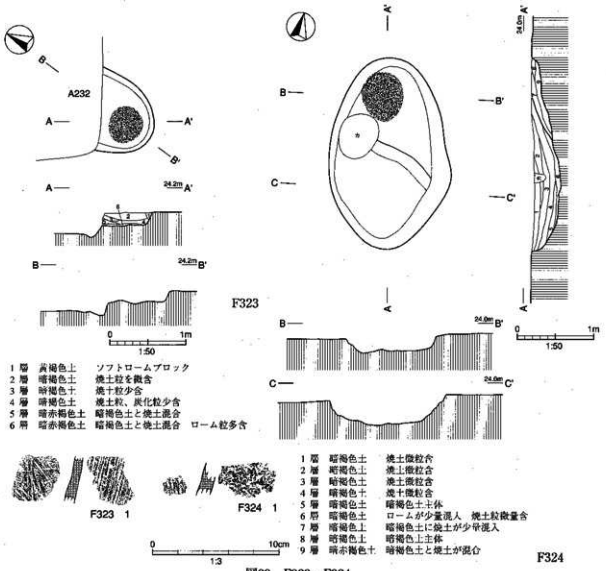


図23　F323・F324

F323

検出地区　L5-47-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸(1.02)m×短軸1.02m×深さ0.21m、方位はN-3°-E、平面形は楕円形である。A232によって遺構の北側が大きく損壊し、形状・規模とも不明瞭となっている。ソフトロームを掘込んだ坑底は緩やかな凹凸を有し、壁はやや急に立上がっている。火床は坑底南側に検出した。覆土は全体的に焼土を包含しており、1層のみ人為堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文片が出土するが、希である。1は小破片であるため全体を想定できないが、外面は縦位・斜位の条痕を、内面は縦位の条痕文を比較的丁寧に施している。

所　見　A232と重複するため判然としないが、遺構廃絶後に埋戻した様な1層である。

F324

検出地区　L5-47-1gにて検出した。

遺　構　長軸2.52m×短軸1.54m×深さ0.36m、方位はN-14°-W、平面形は不整形楕円形である。坑底は北壁側から南壁側に火第に下り、スリ鉢状となっている。火床は北東壁際の坑底に検出し、一部は壁にまで火床範囲は広がっている。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であるが、南側は遺構埋没後に掘返されたようである。

遺　物　　早期・条痕文片が希に出土する。1は外面は縦位の条痕を、内面は擦痕状の粗い条痕文であるが不鮮明となっている。

所　見　　覆土からは1基の土坑とも見られるが、南側の一段低くなったピットが新たに掘返された遺構と捉えた。新しいピットには火床が認められず炉穴とは即断できかねたが、覆土中に焼土を包含することから、炉穴と判断した。

F325

検出地区　　L5-47-4gにて検出した。

遺　構　　調査時には重複する炉穴と捉えた、A233と近接する2基の炉穴である。

F325 a は、長軸2.76m×短軸1.39m×深さ0.29m、方位はN-70°-W、平面形は不整長楕円形である。南東壁側が浅く、北西壁側に次第に緩く下っている。火床は南東壁際に検出した。

F325bは、A233によって大きく損壊を被り、形状・規模とも不明瞭である。平面形は略円形となろう。坑底はやや凹凸を有し、壁の立上がりはやや急である。火床は坑底に広がっている。覆土は、いずれも暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　　F325aを出土主体としている。早期・条痕文片が出土している。1・2、4～6はいずれも外面は斜位の条痕を比較的丁寧に施すが、内面は粗いものとなっていた。3は尖頭状の口縁片であるが、内外面とも横位の条痕文を施している。

所　見　　覆土から炉穴の重複は認められず、単独の炉穴2基である。

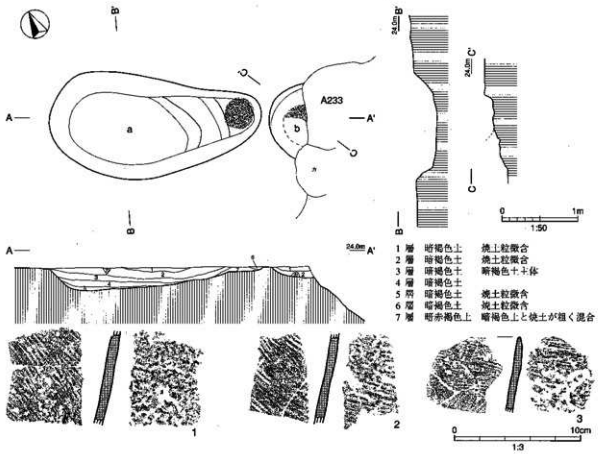
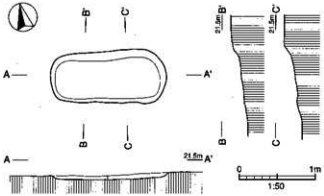


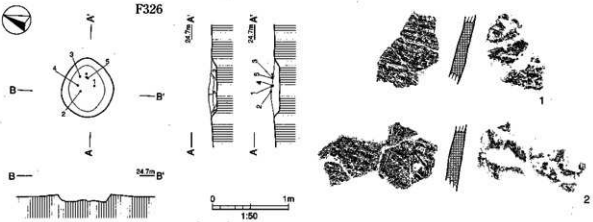
図24　F325

F325（2）

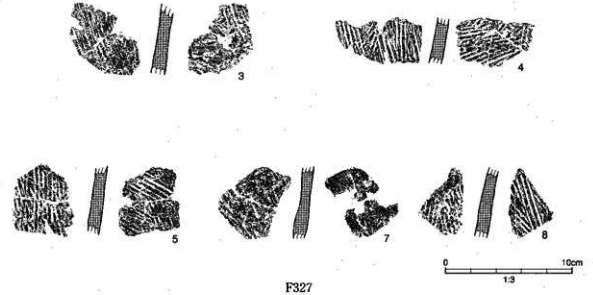


1 層　暗黄褐色土　湿ったローム主体　焼土微含

F326



1 層　暗褐色土　極少量の黒色土を帯びるように混入　焼土を全体に含
2 層　暗赤褐色土　暗褐色土主体　少量のロームが帯びるように混入　多量の焼土が荒く混入
3 層　暗黄褐色土　汚れ落ちたロームと暗褐色土が均一に混合



F327

図25　F325（2）・F326・F327

F326

検出地区　L5-20-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.54m×短軸0.66m×深さ0.05m、方位はN-78°-W、平面形は長方形である。斜面部に設けられた遺構のため、ソフトロームを掘込んで坑底としているが、東西は平坦であるが、南北は谷津に沿って下っている坑底である。坑底中央に極めて小範囲の火床を検出したが、周辺は広く焼土が散布していた。覆土は1層として捉え、自然堆積と捉えた。

遺　物　土師器小片が出土している。

所　見　土師器片の出土をみるが、覆土から早期・条痕文期の炉穴と捉えた。しかし形状などからも、炉穴と判断できるか判然としなかった。ここでは炉穴として報告するが、今後、時期の異動かあるかも知れない遺構である。

F327

検出地区　K5-59-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.79m×短軸0.69m×深さ0.06m、方位はN-60°-E、平面形は卵形である。ソフトロームを斜めに掘込み、坑底は凹凸を有するが平坦な遺構である。覆土は、暗黄褐色土と暗褐色土を衷心とした自然堆積と捉えた。特に3層はピットを掘った後に充填した様な層である。

遺　物　遺構確認面において纏まって早期・条痕文片が出土している。1・2・6とも内面の繊維の剥落が著しく条痕文が不明瞭であるが、外面は横に近い斜位の条痕文を施している。3～5・7はやや細い条痕文を内外面に丁寧に施したものである。

所　見　覆土2層に多量の焼土が包含され、出土遺物も早期・条痕文片であることから、当該時期の炉穴と捉えた。火床は明確にし得なかった。

第3項土　坑

上谷遺跡Ⅴ地区における縄文時代の土坑は42基を数える。その時期の主体は早期・条痕文期におくが、前期末葉から中期初頭にかけての竪穴状の土坑も検出されており、また、後期・堀之内期の遺構も検出された。遺構分布は台地平坦面に多く、斜面部での検出は少なかった。また、本地区の東側から北へかけて遺構は形成されており、これらの遺構検出状況は上谷遺跡Ⅳ地区からの広がりと捉えた。

特に、前期末葉から中期初頭にかけての遺構は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区とも、調査の都合上、東西に帯状に設定した15調査区の延長線上において検出される傾向が窺えた。なお、土坑のうち炉穴と思われるものもあるが、炉穴とは明確にし得ず土坑と捉えた遺構もあることをお断りしておく。

以下、縄文時代の土坑について報告していきたい。

D277

検出地区　K5-59-4g、60-3gにて検出した。

遺　構　長軸2.65m×短軸2.24m×深さ0.41m、方位はN-22°-W、平面形は略円形の、タライ状の土坑である。ハードロームを掘込んで床とした地床である。床面はよく踏み固められているが、硬化まではいっていない。炉跡は検出されず、床には2基のピットが検出され、また、北側の遺構外に1基検出された。各ピットの掘込みは略垂直であり、坑底は平坦であった。南東壁際に床から0.30m程高い覆土層中に、暗褐色土が赤変した様な焼土の分布が認められている。覆土は自然堆積であり、色調・包含物により5層をとらえた。

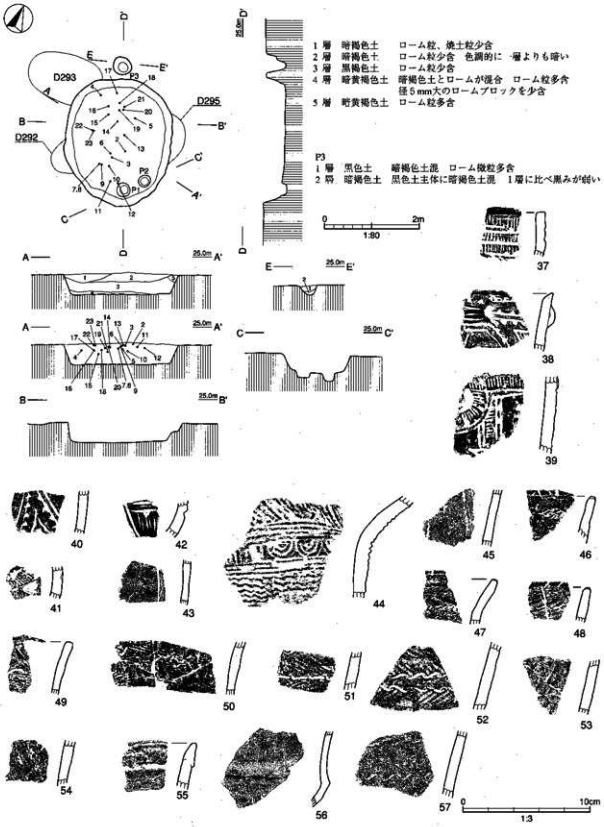


図26　D277

遺　物　遺構規模に比して、土器片を主体として比較的多くの出土を見ている。出土傾向に大きな傾向はなく、遺構全体から出土している。出土する遺物は、早期・条痕文片が主体を占めるが、撚糸文や中期・五領ヶ台式も出土する。また、黒曜石砕片も出土している。

37・39は梯子状の、38・40～42は三角の刻み目を鋸歯状に施している。44は半裁竹管による。45～54・57は結節文を配するが、45は縦に、それ以外は横走させている。46・48は格子化に刻みを配している。56は折返し口縁である。

所　見　P3は配置上で本遺構に属するピットと判断した。また、竪穴状の土坑とするか、竪穴住居跡とするか判断に迷う遺構である。調査時は竪穴住居跡とも捉えられていたが、炉跡が検出されず、遺構も小規模なことから、竪穴状の土坑と捉えることとした。

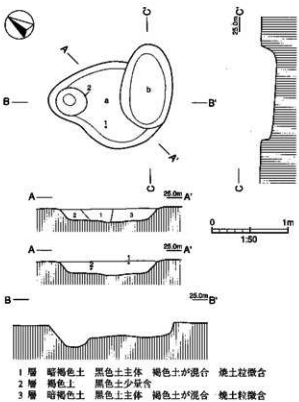


図27　D278ab

D278a・b

検出地区　L5-21-3gにて検出した。

遺　構　D278aは、長軸－m×短軸1.11m×深さ0.15m、、方位はN-33°-W、平面形は不整形である。ソフトロームを掘込んだ坑底はやや凹凸を有するものの略平坦であり、軟弱である。壁は坑底から急に立上がっている。

D278bは、長軸1.09m×短軸0.67m×深さ0.20m、方位はN-56°-E、平面形は楕円形である。やはりソフトロームを掘込み坑底として、軟弱な坑底であるが平坦であった。壁は垂直に近く立上がっている。

覆土は、堆積状況が縦に近いものがあるが、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文片が若干出土している。

所　見　当初、重複した遺構と考えていたが、覆土の堆積状況から2坑を有する単独の土坑と判断した。出土遺物から早期・条痕文期の所産と捉えた。

D279

検出地区　L5-21-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.79m×短軸0.59m×深さ0.27m、方位はN-53°-E、平面形は不整楕円形である。掘込みは深く坑底は平坦であり、、壁の立上がりは垂直に近いものである。坑底の北東側に、坑底より0.10m程の尖底状のピットが掘込まれている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文片が若干出土している。1は外面は縦に近い斜位の条痕文を施し、口唇部に刻み目を有する波状の口縁片で器形は内湾する。内面は縦位・斜位の条痕をランダムに施している。

所　見　出土遺物・覆土から早期・条痕文期の所産と捉えた。覆土に焼土が混入することから、火床は検出されなかったが、炉穴の可能性も否定できなかった。

D280

検出地区　L5-21-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.87m×短軸0.70m×深さ0.37m、、方位はN-22°-E、平面形は楕円形である。ロームを掘込んだ坑底は凹凸があり、壁の立上がりは急である。坑底西側に更に浅いピットが掘込まれている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えられた。

遺　物　出土した遺物は無かった。

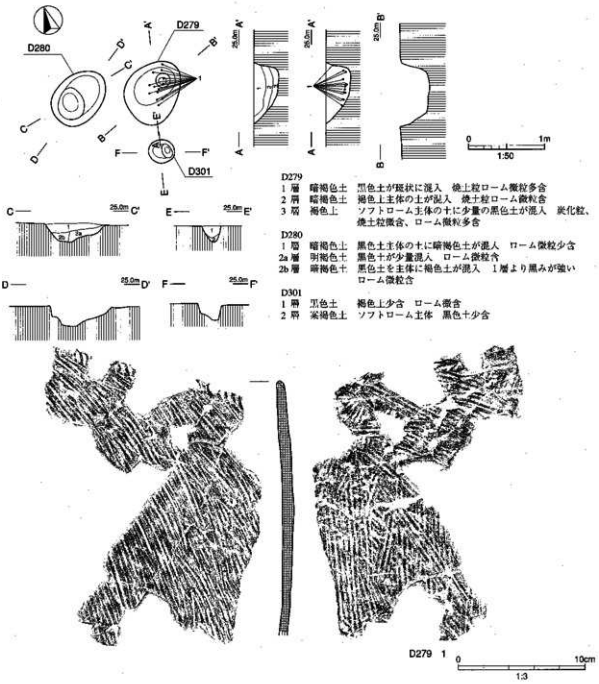


図28 D279・D280・D301

所　見　覆土がD279に近似し、また、遺構が近接することなどから、早期・条痕文期の土坑と捉えた。用途は不明である。

D281

検出地区　L5-21-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.78m×短軸0.75m×深さ0.20m、、方位はN-52°-W、平面形は略円形である。ソフトロームを掘込み坑底とし、若干凹凸を有する。壁は斜めに立上がっている。覆土は黒色土主体の自然堆積であり、包含物との混合により色調に異なりを示し、それにより分層した。

遺　物　出土した遺物は無かった。

所　見　所属年代・時期を決定する資料に乏しいが、覆土などから早期・条痕文期の所産と捉えた。

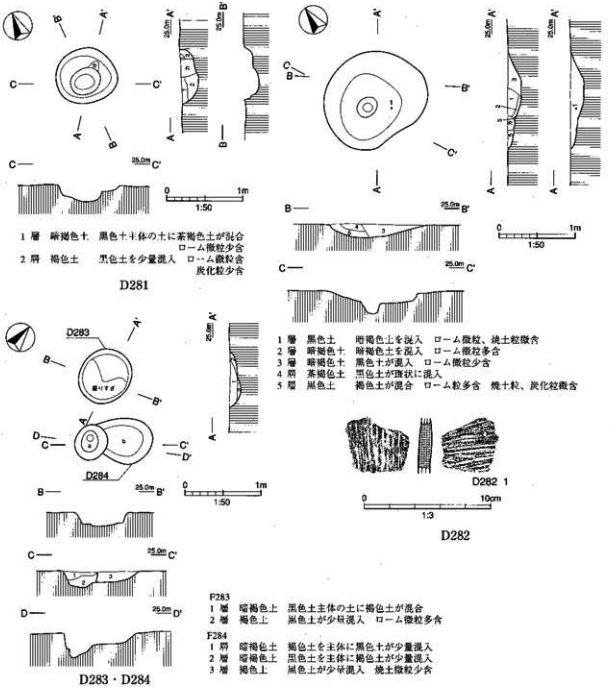


図29　D281・D282・D283・D284

D282

検出地区　　L5-21-4gにて検出した。

遺　構　　長軸1.36m×短軸1.15m×深さ0.17m、、方位はN-89°-E、平面形はやや崩れるが不整円形と捉えた。ソフトロームを浅く掘込み、多少の凹凸を有する坑底となっている。壁はむ緩やかに立上がっている。坑底中央に更に0.20m程、尖底状に掘込んだ小ピットが検出された。覆土は、黒色土・暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　　早期・条痕文片が僅かに出土している。1は外面は縦位の、内面は横位の条痕文を施したものである

所　見　　出土遺物や覆土から、早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D283

検出地区　L5-21-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.73m×短軸0.66m×深さ0.17m、、方位はN-15°-W、平面形は円形である。ソフトロームを掘込んだ坑底は、北側から南側に向けて緩く傾斜している。壁は彎曲して立上がっている。覆土は、褐色土・黒色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土より・早期・条痕文期の所産と捉えた土坑である。

D284

検出地区　L5-22-3gにて検出した。

遺　構　２坑の重複する土坑である。

D284aは、長軸－m×短軸0.59m×深さ0.16m、、方位はN-55°-W、平面形は円形である。ソフトロームを掘込んだ坑底は尖底であり、壁は垂直に近いものとなっている。

D284bは、長軸0.46m×短軸0.41m×深さ0.21m、、方位はN-35°-W、平面形は楕円形である。D284aより浅い坑底は平担であり、壁の立上がりは斜めとなっていた。

覆土は、いずれも褐色土・暗褐色土を主体としており、D284aの埋別後に、D284bが掘込んでいた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土から重複の先後関係は、D284b→D284aと捉えられた。しかし覆土の状態から時間差はあまりないものと考えている。また、やはり覆土から早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D285

検出地区　L5-33-3g、43-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.92m×短軸0.74m×深さ0.12m、、方位はN-78°-E、平面形は円形である。ソフトロームを浅く掘込んだ平担な坑底で、壁はやや緩く立上がっている。覆土は褐色土を主体とした自然堆積後、火の使用を行った遺構である。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土１層に火床状の堆積を認めた。遺構確認面において検出していたが、記録作成を亡失したため、土坑と扱うこととした。覆土１層を火床と捉えることも可能ではあるが、明瞭ではないためでもある。このことから早期・条痕文期の所産と捉えた。

D286

検出地区　L5-52-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.65m×短軸0.54m×深さ0.19m、、方位はN-3°-W、平面形は略円形である。ソフトロームをしっかりと掘込み、坑底と壁の境が不明瞭な断面形が彎曲した土坑である。覆土は、褐色土・黒色土の２層の自然堆積であった。

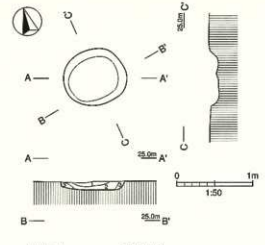
遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　掘込みはしっかりとした土坑であり、坑底・壁とも良好な遺構である。用途を判断する特徴はなかった。覆土などから、早期・条痕文期の所産と捉えた。

D288

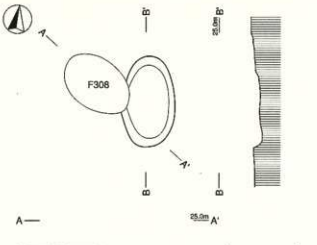
検出地区　L5-61-3gにて検出した。

遺　構　長軸1.18m×短軸0.69m×深さ0.11m、、方位はN-10°-W、平面形は長楕円形である。ソフトロームを極めて浅く掘込み、北側から南側に緩く傾斜して坑底は下っている。壁は北側は殆どなく、南側はやや彎曲して立上がっている。覆土は褐色土を主体としたものであり、掘込みが極めて浅いので



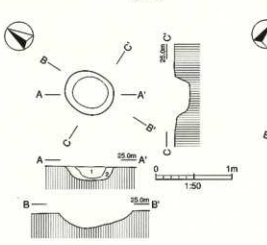
1 層　暗赤褐色土　焼土層焼土を主体に被熱したローム ブロック、黒色土が混合　ローム微粒、焼土粒多含
2 層　明褐色土　明褐色土を中心とした土に暗褐色土が混合焼土粒ローム粒多含
3 層　褐色土　黒色土を少量混合

D285



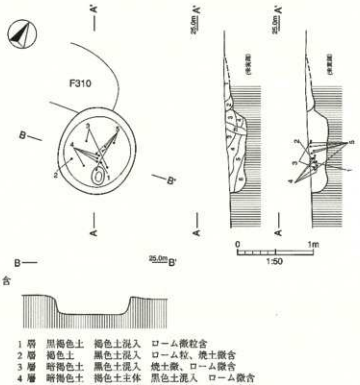
1 層　赤褐色土　焼土土主体　褐色土混入　ローム微粒多含火熱したローム ブロック含
2 層　褐色土　黒色土混入　ローム粒微含
3 層　褐色土　黒色土混入　焼土粒　炭化粒少含

D288



1 層　黒色土　少量の暗褐色土が混合　ローム微粒含炭化粒微含
2 層　褐色土　黒色土が少量混入　ローム微粒1層より含

D286



1 層　黒褐色土　褐色土混入　ローム微粒含
2 層　褐色土　黒色土混入　ローム粒、焼土微含
3 層　暗褐色土　黒色土混入　焼土微、ローム微含
4 層　暗褐色土　褐色土主体　黒色土混入　ローム微含
5 層　暗褐色土　黒色土主体　褐色土混入　ローム多含
6 層　褐色土　ローム多含

D289

図30　D285・D286・D288・D289

判然としないが、自然堆積と判断した。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　凹み状の土坑であり、覆土などから早期・条痕文期の所産と捉えた。

D289

検出地区　L5-71-1gにて検出した。

遺　構　長軸(1.14)m×短軸0.99m×深さ0.26m、、方位はN-31°-W、平面形は円形である。ソフト

ロームを略垂直に掘込み、緩やかな凹凸のある坑底である。覆土はロームを多含する暗褐色土・褐色土を主体として、南側から投入したような人為堆積である。

遺　　物　　早期・条痕文片が若干出土するが、覆土上層から出土する傾向が窺えた。

所　　見　　F310と重複するが、先後関係はD289→F310と覆土から捉えられた。しかし時間的な差はあまりないものと捉えている。

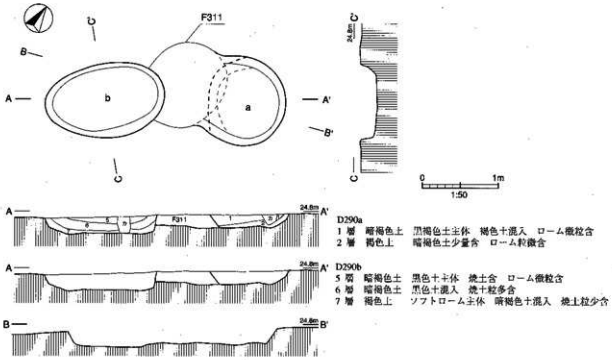


図31　D290

D290a・b

検出地区　　L5-43-1gにて検出した。

遺　　構　　F311を中間に重複する土坑である。

D290aは、　長軸1.18m×短軸0.97m×深さ0.22m、、方位はN-49°-W、平面形は略円形である。ソフトロームを略垂直に掘込み、平坦な坑底となっている。覆土は、褐色土・黒褐色土を主体とした自然堆積と捉えられた。

D290bは、長軸1.18m×短軸(1.02)m×深さ0.20m、、方位はN-32°-W、平面形は楕円形である。F311やD290aよりやや深くソフトロームを掘込み、平坦な坑底から壁は垂直に近い状態で立ち上がっている。覆土は包含物により色調に異なりを示すが、褐色土、黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　　F311を掘込んで各土坑が設けられているため、早期・条痕文片の混入が認められたが出土量は稀であった。

所　　見　　覆土より、重複する遺構の先後関係はD290a・b→F311と捉えた。炉穴より新しい遺構となるが、覆土などから時間差はあまりないものと捉えた。

D291

検出地区　　L5-51-3gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.09m×短軸0.78m×深さ0.45m、方位はN-25°-W、平面形は楕円形である。ハードロームを略垂直に掘込んだ土坑であり、坑底は平坦であった。覆土は坑底直上に薄く褐色土が堆積し、黒色土を主体とするロームを多含する自然堆積捉えた。

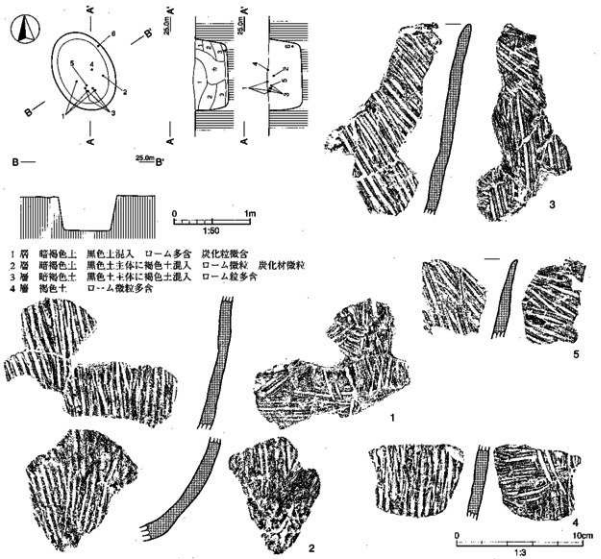


図32　D291

遺　　物　　遺構確認面より早期・条痕文片がやや纏まって出土している。1から5はいずれも外面は縦位及び縦に近い斜位の条痕を、内面はややランダムに条痕を施している。条痕の深さはしっかりしたものである。

所　　見　　調査時には自然堆積と捉えたが、ローム粒の多含や土器片の出土傾向から人為的な堆積も想定される土坑である。しかし遺物などから、早期・条痕文期の所産と捉えている。

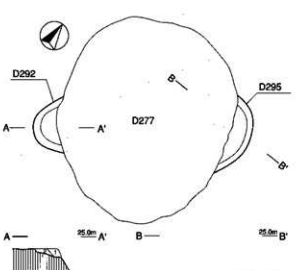
D292

検出地区　　K5-70-38gにて検出した。

遺　　構　　D277との重複により損壊が大きいため、規模などは計測しなかった。、平面形は楕円形である。ソフトロームを浅く掘込み、平面形は平坦な坑底である。覆土は、褐色土と黒色土を主体とする自然堆積と捉えた。

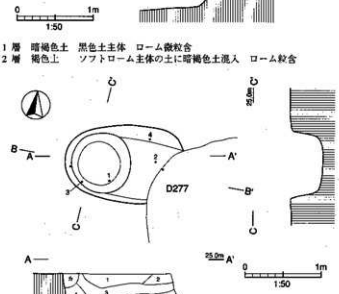
遺　　物　　出土遺物は無かった。

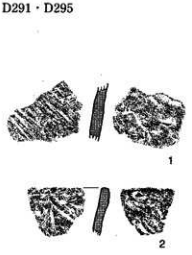
所　　見　　D277は中期・五領ヶ台期の所産であり、それ以前の遺構となるが、時期は捉えられなかった。周辺の遺構状況から、早期・条痕文期の所産であろうか。用途不明の土坑である。



D291・D295

1 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム微粒合
2 層　褐色土　　ソフトローム主体の土に暗褐色土混入　ローム粒合





D293

1 層　黒褐色土　黒色土主体に褐色土混入　ローム少含　炭化粒微含
2 層　暗褐色土　黒色土混入　ローム粒少含　炭化材微粒
3 層　暗褐色土　黒色土主体に褐色土混入　ローム粒微含
4 層　褐色土　　黒色土混入　ローム微粒多含
5 層　褐色土　　黒色土混入　ローム粒微含

図33　D291・D293・D295

D293

検出地区　　K5-70-1・3gにて検出した。

遺　　構　　長軸(1.29)m×短軸1.04m×深さ0.44m、、方位はN-90°、平面形は隅丸長方形となっている。D277に一部が損壊を被り、全体型は不明瞭となる。ハードロームまで略垂直に掘込んだ土坑である。坑底は緩い凹凸を有するが略平坦であり、西壁際の坑底は僅に凹んでいる。覆土は、黒色土・暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　　物　早期・条痕文片が若干出土している１～３は外面は斜位の条痕文を施すもので、内面は器面の荒れがあり、不明瞭である。

所　　見　D277によって遺構の一部が損壊を被ることから、所属時期は時間差をおかない中期・五領ヶ台期かそれ以前となるが、調査時には中期・五領ヶ台期の所産と捉えていた。出土遺物は早期・条痕文片であったが、自然堆積時の流込みと捉えている。

D295

検出地区　K5-70-3gにて検出した。

遺　　構　規模などは、本土坑がD277によって大きく損壊を被るため不明である。平面形は楕円形と想定される。ソフトロームを浅く掘込み、坑底は平坦であった。壁は、垂直に近い状態である。覆土の記録を残せなかったが、調査時には自然堆積と捉えられている。

遺　　物　出土遺物は無かった。

所　　見　D277以前の所産であるが、詳細な時期は捉えられなかった。重複する状況や遺構状況などは、D292と近似する遺構であり、早期・条痕文期の所産であろうか。判断できない土坑である。

D296

検出地区　L5-51-4g・52-3gにて検出した。

遺　　構　長軸1.19m×短軸1.00m×深さ0.68m、、方位はN-38°-E、平面形は楕円形である。ハードロームを深く掘込み坑底は平坦であるが、壁は段差をもって急激に立上がっている。覆土下層の自然堆積後、シオフキを主体として、ハイガイも少量投棄され、覆土中層である３層はロームが多含し、層厚もあることから人為的な堆積と捉えた。

遺　　物　貝殻投棄層と同レベルにおいて、早期・条痕文片が若干出土している。いずれも外面は縦位・斜位の条痕文を施し、内面は５以外は粗い条痕である。

所　　見　遺構確認時は、小規模な土坑として捉えられた遺構である。本来は別途の目的を有している土坑であるが、自然堆積による埋没後、覆土中位においてシオフキ・ハイガイの投棄が行われた土坑である。貝ブロックと同レベルから早期・条痕文片が出土することから、貝の投棄は当該時期の所産と捉えた。また、本来、掘込まれた土坑も遺構の状況から時間差のあまりない時期の所産と捉えている。

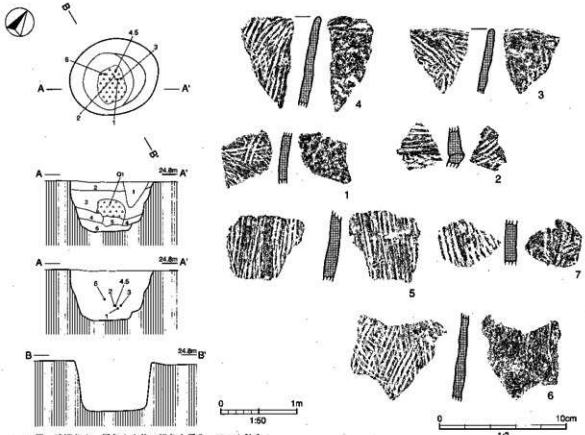
D297

検出地区　L5-52-3gにて検出した。

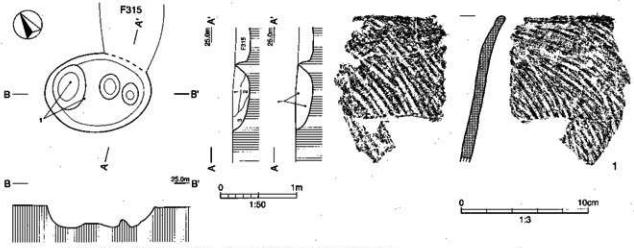
遺　　構　長軸1.39m×短軸1.04×深さ0.23m、方位はN-58°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを垂直に近く掘込んだ坑底は平坦であり、壁は坑底から彎曲して立上がっている。坑底に0.07～0.10m掘凹めた様な小ピットが３基検出された。覆土は、褐色土・黒色土を主体として自然堆積と捉えた。

遺　　物　早期・条痕文片が僅かに出土している。１は平坦な口唇で、口縁内は内剥ぎ状。やや口縁外反する。

所　　見　F315とは重複しなかったが、覆土に焼土を微含することから、その影響はあったかも知れない。出土遺物や覆土から、早期・条痕文期の所産と捉えられたが、覆土１・２層にロームを多含することから人為堆積の可能性も否定できない土坑であった。



D296



D297

図34　D296・D297

D299

検出地区　L5-61-2gにて検出した。

遺　構　長軸0.71m×短軸0.57×深さ0.05m、方位はN-44°-E、平面形は略円形である。ソフトロームを掘凹めた様な土坑であり、壁と坑底の境は判然としない。覆土は、ソフトロームを主体としており、焼土の混入を認めた。

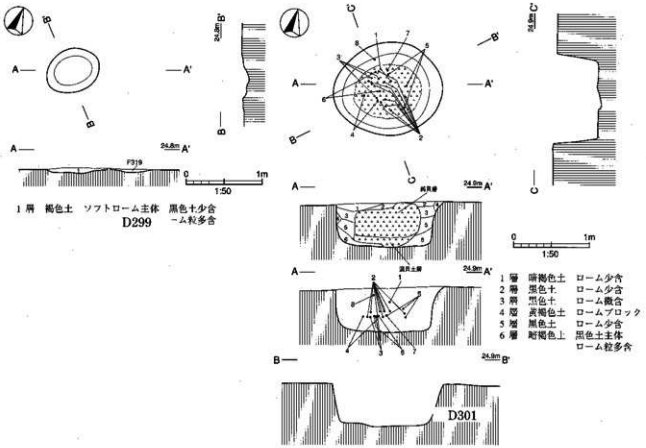


図35　D299・D301

遺　　物　　出土遺物は無かった。

所　　見　　当初はF319と重複するかと思われたが、単独の土坑であった。焼土粒を包含するが火の使用とまでは言えず、炉穴とも捉えられなかった。覆土などから早期・条痕文期の所産と捉えた。

D300

検出地区　　L5-21-3gにて検出した。(図28)

遺　　構　　長軸0.35m×短軸0.29×深さ0.22m、平面形は略円形であるため、方位は計測しなかった。ソフトロームを略垂直に掘込み、坑底は段差を有して東壁側に更に小ピットを設けている。覆土は、黒色土・褐色土を主体としたものである。

遺　　物　　遺構確認面において早期・条痕文片が出土しているが、出土は稀である。

所　　見　　出土遺物から早期・条痕文期の所産と捉えたが、小規模な遺構であり、用途は捉えられなかった。

D301

検出地区　　K5-70-4g、80-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.44m×短軸1.24×深さ0.59m、方位はN-68°-E、平面形は略円形である。ハードロームまで略垂直に掘込み、坑底は平坦である。覆土は暗褐色土・黒色土を主体とした自然堆積であるが、遺構埋没後に掘返され、貝の廃棄を行っている。貝の投棄層は坑底から遺構確認面まで認められ、純貝層と混土貝層の２層に捉えられた。

遺　　物　　廃棄された貝はハイガイが多く、シオフキ・アサリ・小型のマガキであり、量は少ないがニナ類も認められた。また、早期・条痕文片も多く出土し、坑底から0.25～0.30mの高さに、遺物の平

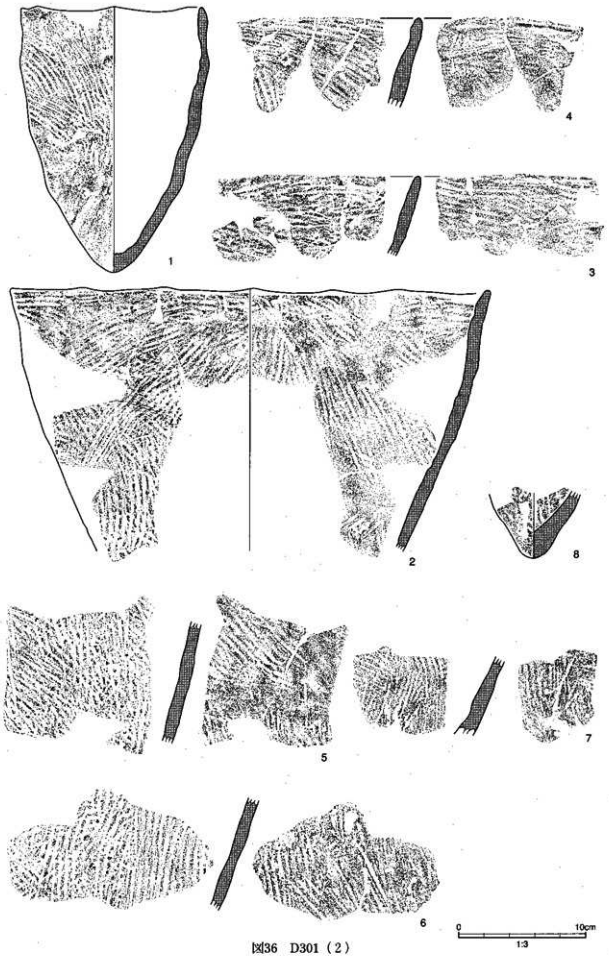


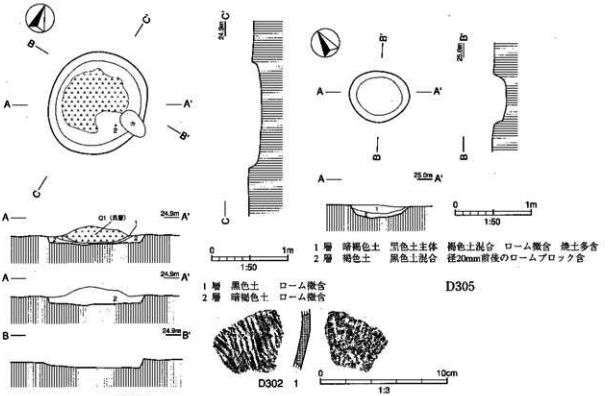
図36 D301（2）

面的な広がりを捉えることが出来た。器形を窺えるものも出土した。図示した遺物はいずれも条痕を外面は縦に近い斜位に施し、1・2は弧状となっている。4は内面がナデ状となっていた。

所　見　純貝層・混土貝層から、2回にわたる貝の廃棄が窺われた。しかもその境界に土器の出土範囲が捉えられた土坑である。しかし時間的差は無く、比較的短期間に廃棄された貝層と捉えられた。

表8　D301遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(143)×　－×　211　小波状Ll縁　尖底 外面　口縁～胴上半－不定方向の条痕文　下半～下端－ナデ 内面　繊維の脱痕が見られる	外灰茶褐 内暗褐 普	繊維	1/2	
2	縄文 深鉢	(377)×　－×　(207)　小波状口縁 内外面とも横位、斜位の条痕文	暗褐 普	繊維	口縁片	



D302

図37　D302・D305

D302

検出地区　K5-70-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.39m×短軸0.75m×深さ0.14m、方位はN-11°-E、平面形は略円形である。ソフトロームを浅く掘込み、やや凹凸を有する坑底である。壁は斜めに立上がっている。覆土は黒色土を主体とする自然堆積であり、埋没過程で貝の廃棄が行われた土坑である。貝種はハイガイを主体としていた。

遺　物　早期・条痕文片が若干出土している。1は内外面とも縦に近い斜位の条痕を施し、内面はやや荒れた状態となっている

所　見　D301と近似するが、掘込みは浅い土坑である。また、坑底直上層の堆積の薄さから、遺構廃絶後、時間をおかずに貝の廃棄が行われたものと捉えた。出土土器片及び貝種より、早期・条痕文期の所産と捉えている。

D303

検出地区　L5-43-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.89m×短軸0.56m×深さ0.06m、方位はN-73°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを浅く掘凹めた様な、断面形が皿状の土坑である。坑底は小さな攪乱があり、このためか凹凸を有している。覆土は、褐色土を主体とする自然堆積と捉えた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土から早期・条痕文期の土坑と捉えた。また、覆土を自然堆積と捉えているが、掘込みが浅く判然としないことも併せて報告する。

D304

検出地区　L5-43-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.72m×短軸0.46m×深さ0.07m、方位はN-72°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを浅く掘凹めた様な、断面形が皿状の土坑である。壁は北壁側が垂直に近く、他壁は緩い傾斜をもって坑底に至っている。覆土は褐色土を主体とした視線堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文片が出土するが、希である。1は内外面とも横位の条痕文を施す口縁片であり、口唇は押さえる。

所　見　D303と近似する土坑である。出土遺物・覆土から早期・条痕文期の所産と捉えた。覆土を自然堆積と捉えているが、掘込みが浅く覆土層厚が無いことから判然としないことも報告しておく。38

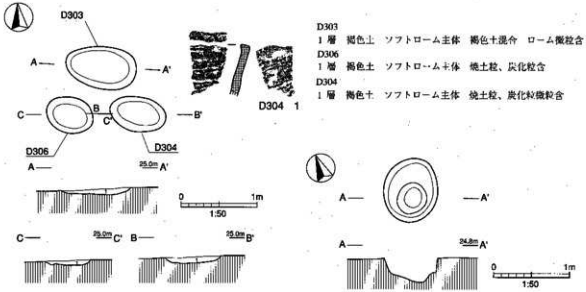


図38　D303・D304・D305・D307

D305

検出地区　K5-70-2gにて検出した。

遺　構　長軸0.74m×短軸0.69m×深さ0.11m、方位はN-37°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを掘込んだ坑底は若干凹凸を有するものの、略平坦である。壁は急傾斜で坑底から立上がっている。覆土は包含物により色調に異なりを示すが、黒色土を基本とした自然堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文の尖底部小片が出土した。

所　見　尖底部の出土から、早期・条痕文期の所産と捉えた。

D306

検出地区　L5-53-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.63m×短軸0.46m×深さ0.06m、方位はN-68°-W、平面形は楕円形である。ソフトロームを浅く掘凹めた様な断面形が皿状の土坑である。坑底はやや凹凸を有していた。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　D303・D304と近似する土坑である。時期を決定する遺物の出土はないが、D304に近似することなどから早期・条痕文期の所産と捉えた。覆土を自然堆積と捉えているが、掘込みが浅く覆土層厚が無いことから判然としないことも報告しておく。

D307

検出地区　L5-33-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.84m×短軸0.72m×深さ0.32m、方位はN-27°-E、平面形は楕円形である。ハードロームまで垂直に近い状態で掘込んでおり、坑底は丸みを有していた。また、略円形の小ピットを掘込んでいた。覆土は図示できなかったが、包含物により色調の異なりを示す黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土や周辺の遺構状況より早期・条痕文期の土坑と想定しているが、明確には出できなかった。

D308

検出地区　L5-42-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.28m×短軸1.01×深さ0.34m、方位はN-90°、平面形はは楕円形である。ハードローム上部まで掘込んだ坑底は平坦であり、壁の立上がりは急である。覆土は包含物により色調の異なりを示すが、褐色土と黒色土を主体とした自然堆積と捉えた。、

遺　物　早期・条痕文片が出土するが、稀であった。1は胴部片であり、外面は縦位を主として交差する様に、内面は器面粗く判然としないが斜位の、それぞれ条痕文を施したものである。

所　見　出土遺物より早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D309

検出地区　L5-91-4gにて検出した。

遺　構　長軸m1.01×短軸0.66×深さ0.34m、方位はN-69°-E、平面形は楕円形である。ソフトロームをやや斜に掘込み、坑底の南半に更に浅いピットを長楕円形に掘込んでいる。覆土は、ロームの包含の多寡により色調に異なりを示す黒色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文片が出土するが、稀である。1は内外面ともに縦に近い斜位の条痕文を施しているが、条痕文はやや粗いものである。

所　見　出土遺物から早期・条痕文期の所産と捉えた。

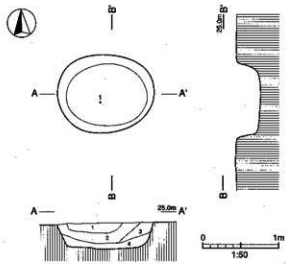
D310

検出地区　L5-91-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.65m×短軸0.45×深さ0.24m、方位はN-50°-W、平面形は略円形である。ソフトロームを略垂直に掘込み、坑底は丸みを帯びたものとなっている。坑底南側に、更に浅くピットが掘込まれていた。覆土は、ローム包含の多寡により色調に異なりを示す黒色土・褐色土を主体とした、自然堆積と捉えた。

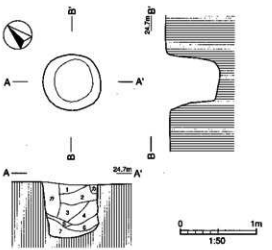
遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土などから、早期・条痕文期の所産と捉えた。



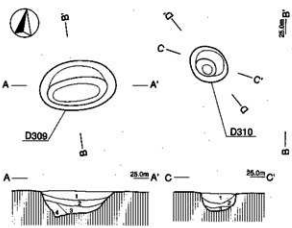
1 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム微含
2 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム多含
3 層　暗褐色土　ローム少含
4 層　褐色土　ローム少含

D308



1 層　黒色土　　暗褐色土が少混
2 層　黒色土　　暗褐色土が少混　ローム粒少含
3 層　暗褐色土　ローム粒少含
4 層　暗褐色土
5 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が混合
6 層　暗褐色土　ロームが少混　ローム粒少含
7 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が混合

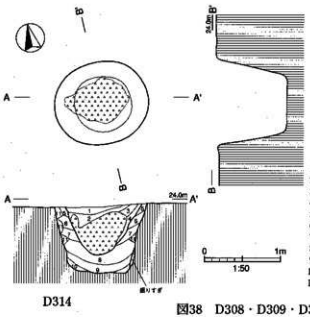
D313



15-98
1 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム微少含
3 層　褐色土　黒色土主体
4 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム微少含

15-99
1 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム微含
　　炭化粒微含
2 層　褐色土　褐色土主体
3 層　暗褐色土　黒色土主体　ローム微含

D309・D310



1 層　黒褐色土　ロームが少量混入　焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒、焼土粒微含
3 層　黒褐色土　ロームが少量混入　ローム粒微含
4 層　黒褐色土　ロームが少量混入　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　黒褐色土が少量混入　ローム少量混合　焼土粒微含
6 層　暗褐色土　ロームが少量混入　ローム粒少含
7 層　暗褐色土　ロームが少量混入　ローム粒微含
8 層　暗褐色土　ローム粒多含
9 層　暗褐色土　ローム粒少含
10 層　黄褐色土　ローム主体の土に暗褐色土少量混入
11 層　黄褐色土　ソフトロームブロック　壁が崩落したもの

D314

図38　D308・D309・D310・D313・D314

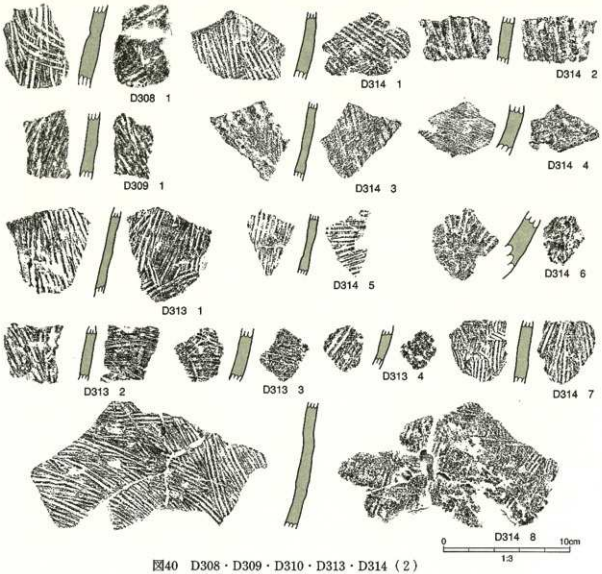


図40　D308・D309・D310・D313・D314（2）

D313

検出地区　L5-55-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.77m×短軸0.75m×深さ0.67m、平面形は円形であり、方位は計測しなかった。ハードロームを垂直に深く掘込み、坑底は丸みを有するが、平坦である。覆土は暗褐色土・黒色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　早期・条痕文片が若干出土している。1～4はいずれも条痕文を施すが、1・2はやや放射筋の太いものを縦に近い斜位に施す。2の内面は茎状工具による擦痕状となっている。3はランダムに、4は斜位に条痕を施すが、ともに内面は粗いものであった。

所　見　出土遺物から早期・条痕文期の所産と捉えた。また、覆土を自然堆積としたが、堆積の乱雑さから柱穴の柱材の引抜きを思わせてもいる。

D314

検出地区　L5-47-3g、57-1gにて検出した。

遺　構　2基の重複する土坑である。長軸1.23m×短軸1.08m×深さ0.91m、方位はN-10°-W、平面形は円形である。ハードロームを略垂直に深く掘込んだ土坑で、坑底は比較的平坦である。本来の土坑の自然堆積による埋没後、貝の廃棄場所であるかの様に掘込まれ、マガキを主体として多量の貝が投棄されている。貝ブロックは純貝層であり、一気の廃棄が窺われる。本来の土坑の覆土は暗褐色土にロ

ームを包含した物であり、11層の様に壁の自然崩落の痕が見られた。廃棄場所として掘込まれた土坑は、黒褐色土を主体として貝投棄後は自然堆積として捉えられた。

遺　物　覆土中層から上層にかけて、マガキを主体とした貝が多量に検出された。また、貝ブロックからは早期・条痕文片が出土している。1・5～8は内外面とも丁寧な条痕文を施し、2～4は茎状工具による擦痕状の条痕である。6は尖底部付近で、条痕文は粗いものとなっている。

所　見　貝を廃棄した新たに土坑は遺構確認面では貝ブロックは認められず、覆土中層～上層に検出した。壁までは貝の広がりは至らず、土坑中に留まる廃棄であった。純貝層から、時間をおかない、一気の廃棄・投棄と捉えた。出土遺物及び貝種から、早期・条痕文期の所産と捉えた。

一方、本来の土坑の用途は捉えられず、所属時期も早期・条痕文期を含めた以前と把握できたに過ぎない。壁の崩壊ロームの堆積などから、貝ブロックの廃棄よりは大分以前の遺構ではなかろうか。

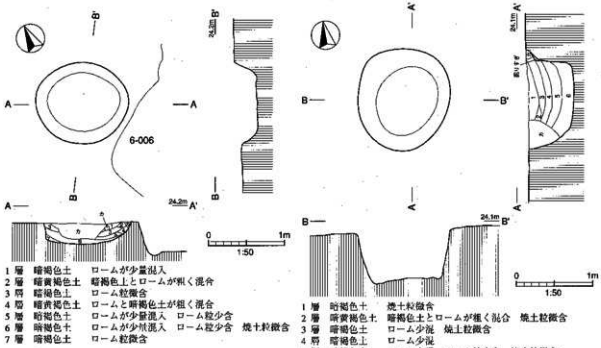


図41　D315・D316

D315

検出地区　L5-57-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.22m×短軸1.06m×深さ0.25m、方位はN-67°-W、平面形は円形である。ソフトロームを掘込み、西壁側は略垂直に、東壁側は彎曲して立上がっている。坑底は平坦であった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　早期・条痕文片が出土するが、希であった。

所　見　覆土に焼土粒を微含するが、炉穴とは捉えられなかった。出土遺物から早期・条痕文期の所産と捉えた。

D316

検出地区　L5-57-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.35m×短軸1.21m×深さ0.64m、方位はN-34°-E、平面形は略円形である。ハードロームを略垂直に掘込み、坑底は凹凸を有するものの全体としては平坦である。坑底は壁際が坑底中央より、僅かに低くなっている。覆土は暗褐色土を主体とした、自然堆積と捉えた。

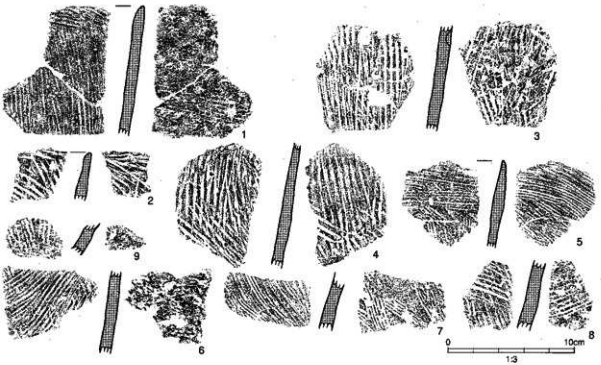


図42　D316（2）

遺　　物　　覆土中層～下層からは遺物は出土せず、土坑の南西側の坑底0.60m程にやや纏まって早期・条痕文片が出土する傾向があった。1・5～8は外面はやや細い条痕文を丁寧に施している。1は内面は擦痕状となる。3・4はやや筋の太い条痕文を内外面とも施し、2は内外面ともしっかりと施文している。

所　　見　　出土遺物は、覆土の自然堆積による埋没過程の流込みと捉えた。しかし本土坑はこれらの出土遺物から、早期・条痕文期乃至それ以前と捉えている。

D332

検出地区　　L4-99-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.47m×短軸0.47m×深さ0.16m、、平面形は遺構上部は略円形であり、坑底は楕円形となっている。この形状のため方位は計測しなかった。ソフトロームを斜めに掘込み、坑底と壁の境が不明瞭な土坑である。覆土は、暗黄褐色土・褐色土の自然堆積と捉えた。

遺　　物　　中期・五領ヶ台片が若干出土している。

所　　見　　出土遺物から、中期・五領ヶ台期の所産と捉えた小規模な土坑である。

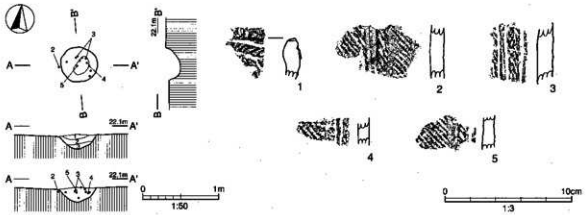
D334

検出地区　　L5-10-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸2.02m×短軸1.46m×深さ1.01～1.41m、方位はN-17°-W、平面形は楕円形である。ハードロームを略垂直に深く掘込み、坑底は段差をもっていた。覆土から本土坑の自然堆積による埋没後、掘返されたことが捉えられた。覆土のうち本来の土坑に伴うものは3～6層であるが、自然堆積と捉えている。また、掘返された目的は不明であるが、1・2層もまた自然堆積と捉えた。

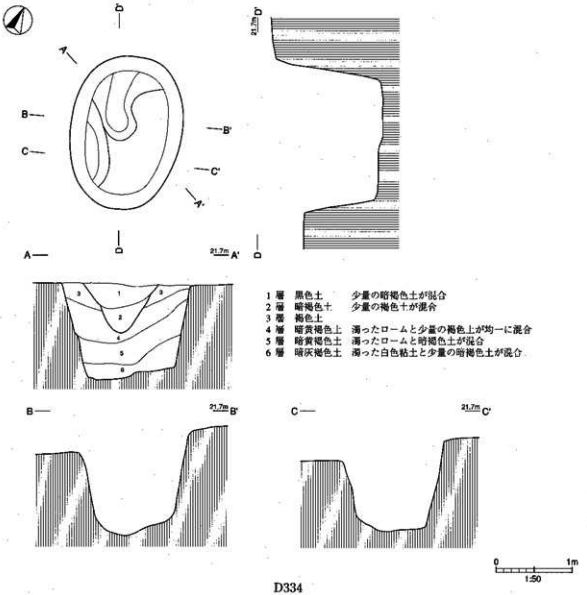
遺　　物　　遺物は出土しなかった。

所　　見　　調査では自然堆積による埋没と捉えていたが、坑底直上層である6層は白色粘土を主体としており、人為的な投入土とも考えられる。



1 層　褐色土　　褐色土主体の土
2 層　褐色土　　褐色土と薄ったロームが均一に混合
3 層　暗黄褐色土　薄ったロームが主体の土

D332



1 層　黒色土　　少量の暗褐色土が混合
2 層　暗褐色土　少量の褐色土が混合
3 層　褐色土
4 層　暗黄褐色土　薄ったロームと少量の褐色土が均一に混合
5 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土が混合
6 層　暗灰褐色土　薄った白色粘土と少量の暗褐色土が混合

D334

図43　D332・D334

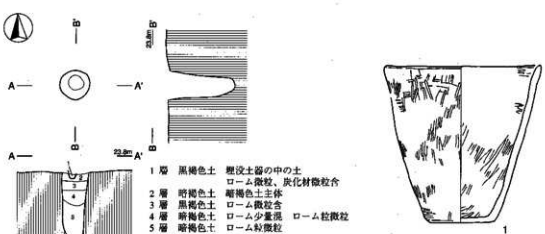


図44　D350

D350

検出地区　L5-16-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.38m×短軸0.38m×深さ0.85m、平面形は円形であり、方位は計測しなかった。小規模な土坑であるが、ハードロームを極めて深く垂直に掘込んでおり、坑底は丸みを有している。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体としており、自然堆積である。

遺　物　覆土1層中に、堀之内1式の略完形の小型の深鉢土器が出土している。また、弥生・後期甕片や土師器小片も出土している。

所　見　遺構確認面から覆土1層中に深鉢形土器が正置で出土したことから、埋置したものと考えられた。このため覆土も充填による人為堆積と捉えていたが、調査進行に伴い、土器は流込みと判断するに至った。柱を立てた様な垂直的な深い土坑であるが、用途は判然としなかった。遺物から後期・堀之内1期と捉えている。

表7　D350遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	162×72×167　口唇やや尖る 内外面　研磨される	橙褐～ 暗褐 普	砂粒	3/4	

D351

検出地区　L5-24-4g・25-3gにて検出した。

遺　構　長軸(1.21)m×短軸1.46m×深さ0.40m、方位はN-28°-E、平面形は不整楕円形状である。ロームを斜めに掘込み、壁は坑底から丸みを有して立上がっており、坑底と壁の境は不明瞭な土坑である。西壁際に坑底を更に掘込んだピットを検出した。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体とした、自然堆積であった。

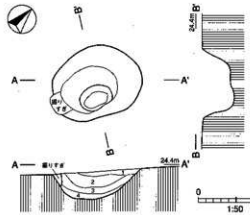
遺　物　遺物の出土は無かった。。

所　見　時期を決定する資料に乏しいが、覆土などから縄文時代の土坑と捉えた。

D352

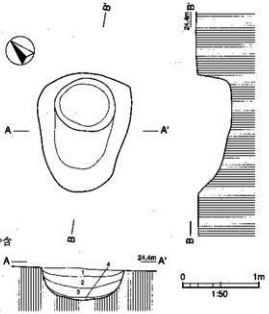
検出地区　L5-35-2gにて検出した。

遺　構　長軸－m×短軸0.84m×深さ0.38m、方位はN-35°-E、平面形は略円形である。土坑の両端をそれぞれ重複する遺構により損壊を被り遺存状況は悪いが、略垂直にロームを掘込んでおり、凹凸



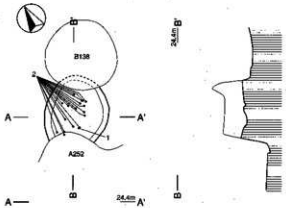
1 層　黒褐色土　ローム少量混　炭化材微含
2 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒多含
3 層　黒褐色土　ローム少含　径10～20mm大のロームブロック少含
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合　径10mm大のロームブロック少含

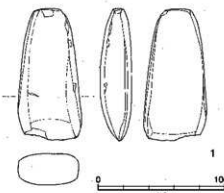
D351

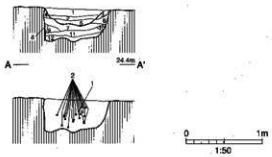


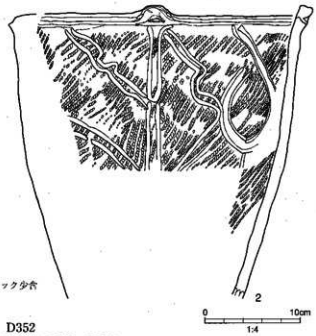
1 層　暗褐色土　ローム粒少含　焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ローム微少含
3 層　暗褐色土　暗褐色土主体　ローム粒微含
4 層　暗黄褐色土　ローム微少含

D355









1 層　暗褐色土　焼土が滲むように少量混合
2 層　暗赤褐色土　焼土混合
3 層　暗褐色土　ローム粒微含
4 層　暗褐色土　ローム混合　焼土粒微含
5 層　赤褐色土　火床　火熱により焼土化した部分
6 層　黒褐色土　ローム少量混　焼土粒微含
7 層　黒褐色土　ローム少量混　焼土粒少含
8 層　黄褐色土　ハードロームブロック
9 層　暗褐色土　ローム少量混　径5mm大のロームブロック少含
10 層　暗黄褐色土　9層と類似した層　ローム多含
11 層　黒褐色土　ローム少量混
12 層　暗褐色土　ローム少量混

D352

図45　D351・D352・D352・D355

ある坑底が認められた。更に覆土から、2基の土坑の重複であることが認められた。本来の土坑の黒褐色土・暗褐色土を主体とした覆土の、自然堆積による遺構埋没後に掘込まれていた。掘込んだ坑底を火床として使用し、再び暗褐色土の自然堆積によって埋没した土坑である。

遺　　物　重複した土坑に関わりなく、後期・堀之内1式の深鉢や定角式磨製石斧も出土している。

所　　見　遺物は上坑の掘込みによって動かされたと捉え、深鉢や石斧は本来の土坑である下坑に属するものと捉えた。このため後期・堀之内1式期の所産の土坑と捉えている。上坑は不明である。

表8　D352遺物観察表　　(単位mm)

	種別器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 磨製石斧	長軸105×短軸50×厚さ25　重量214.4g　所謂定角式磨製石斧　断面は隅丸長方形を呈する 全面に良好な研磨痕　頭部に敲打痕を残す			略完形	砂岩
2	縄文 深鉢	(300)×－×(311)　口縁に小突起（巻らく2単位） LJ縁上部から小突起をなぞるように沈線が1条めぐる。胴部は地文LR縄文が施され、平行沈線により曲線的な文様が描かれる。 内面は磨滅される	赤褐～ 橙褐 普	砂粒	口縁～ 胴部	

D355

検出地区　L5-35-3gにて検出した。

遺　　構　長軸1.58m×短軸1.22m×深さ0.45m、方位はN-45°-E、平面形は不整楕円形に近い形状である。ロームを略垂直に掘込むが、北東壁側に比し南西側は彎曲をもって立上がっており、坑底と壁の境は不明瞭である。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　早期・条痕文片が出土するが、少なかった。

所　　見　出土遺物や覆土から早期・条痕文期の土坑と捉えた。

D362

検出地区　K5-39-2・4gにて検出した。

遺　　構　長軸2.25m×短軸2.09m×深さ0.18m、方位はN-60°-W、平面形は略円形の竪穴状の土坑である。やや掘込みは平面規模に比して浅くなるが、タライ状の竪穴状遺構である。坑底は平坦であり、中央に硬化面を認めた。しかし坑底に検出した3基のピットを主柱穴と捉えることはできず、炉跡も検出できなかった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　早期・条痕文片や中期・五領ヶ台式が若干出土している。1は早期・条痕文片で口唇は外側に尖頭状となり、開く深鉢片である。流込みと捉えた。2は単節縄文を地文とし、結節文を2段にわたって横走させている。

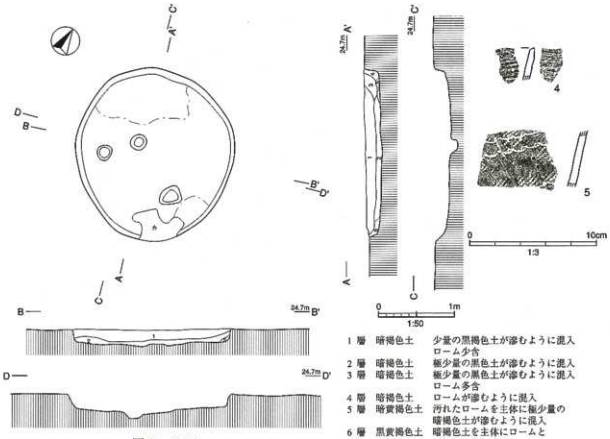
所　　見　遺構の形状や遺物から、中期・五領ヶ台期の所産と捉えた。

D363

検出地区　K5-38-1・2gにて検出した。

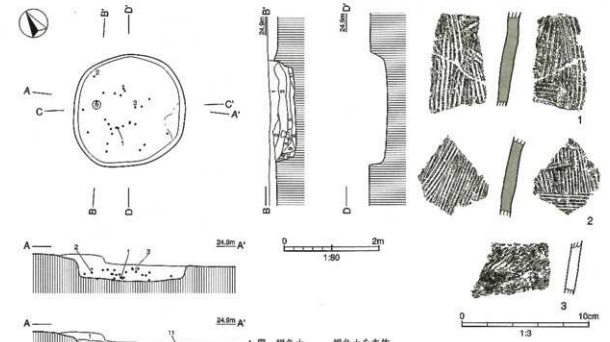
遺　　構　長軸1.46m×短軸1.46m×深さ0.25m、方位はN-29°-E、平面形はやや角張る円形状である。ロームを略垂直に掘込み、坑底は平坦な竪穴状の土坑である。坑底は比較的踏み固められた様子が認められが、柱穴や炉跡は検出されなかった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　　物　早期・条痕文片の出土が多いが、中期・五領ヶ台式の深鉢片も出土している。1・2はいずれも条痕文片であるが、1は内外面とも縦位の、2は外面は斜位に、内面は縦位と横位に細かな条痕



1 層　暗褐色土　少量の黒褐色土が滲むように混入
　　ローム少含
2 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入
3 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入
　　ローム多含
4 層　暗褐色土　ロームが滲むように混入
5 層　暗黄褐色土　汚れたロームを主体に極少量の
　　暗褐色土が滲むように混入
6 層　黒黄褐色土　暗褐色土を主体にロームと
　　黒褐色土が粗く混入

図46　D362



1 層　褐色土　褐色土を主体
2 層　暗褐色土　少量の褐色土が滲むように混入
3 層　暗褐色土　少量の黒色土が全体に滲むように混入　ローム少含
4 層　暗褐色土　黒色土を全体に滲むように混入　ローム極少含
5 層　暗褐色土　多量の黒色土が滲むように混入
6 層　暗褐色土　黒色土を全体に滲むように混入　ローム を斑状に混入
7 層　暗黄褐色土　暗褐色土主体　多量のローム を滲むように混入
8 層　暗黄褐色土　汚れたロームでできているロームブロック
9 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　ローム少含
10 層　暗黄褐色土　汚れたローム土主体
11 層　暗褐色土　少量の黒色土ロームが滲むように混入　ローム少含
12 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入　ローム少含

図47　D363

文を施している。3は単節縄文を地文として、結節文を押捺させている。

所　　見　　早期・条痕文片の出土が中期・五領ヶ台式を上回るが、遺構の形状などから中期・五領ヶ台期の所産とした、条痕文片は流込みと捉えている。

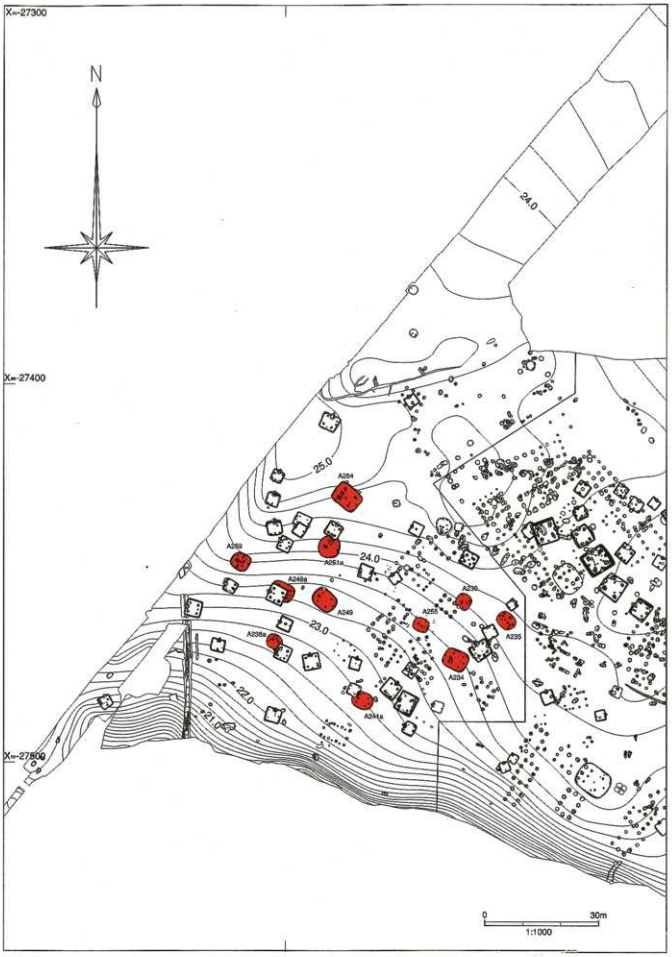


図48　上谷遺跡Ⅴ地区弥生時代遺構配置図

第2節　弥生時代

上谷遺跡Ⅴ地区から検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居跡11軒であり、土坑やその他の遺構は検出されなかった。竪穴住居群はⅣ地区からの集落の広がりとして捉えられたが、Ⅳ地区の竪穴住居跡がどちらかと言うと平坦部に営まれたの対して、Ⅴ地区は緩斜面部に営まれていた。また、遺構規模は大型の住居跡が4軒に対して、小規模な住居跡が7軒となっている。

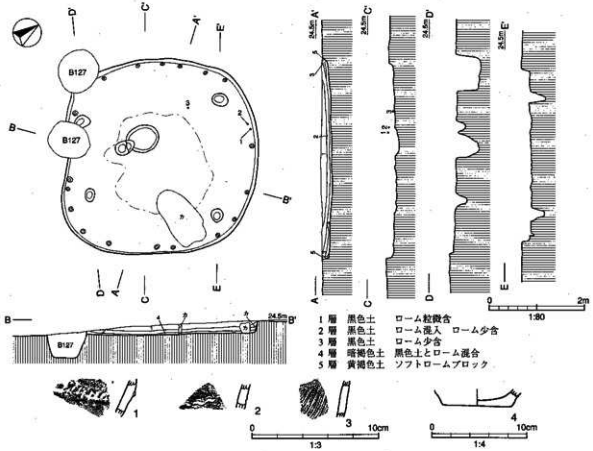


図49　A230

A230

検出地区　L5-46-4gにて検出した。

遺　構　長軸4.14m×短軸4.01m×壁高0.23m、方位はN-53°-Wを測る。平面形は歪んだ隅丸方形である。ソフトロームを掘込み地床を基本とするが全体的に軟弱であり、住居跡中央は意識的に硬化面と捉えた。緩斜面に立地するため、南東壁は殆ど失われていた。主柱穴は壁寄りに4基検出し、壁際に壁柱穴を19基認めた。炉跡は住居跡の略中央に、床を0.05～0.10m程掘凹めて設けられていた。しかし火床は認められず、火熱痕も殆ど認められなかった。覆土は黒色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　弥生・甕の小片を主体とするが出土遺物は極めて少なく、特に西壁寄りには出土は無かった。2～3層に出土の主体をおいている。

表9　A230遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考

1	弥生 甕	−× −× − 外面　輪積痕を痕跡的に一段残し、下端－棒状工具で連続刺突	外橙褐 内淡褐 良	石英 長石 砂粒少	頸部片	
2	弥生 甕	−× −× − 外面　S字状結節文で区画	外褐 内黒 良	緻密	頸部片	
3	弥生 甕	−× −× − 外面　胴部－附加条縄文の後上端を櫛描波状文によって区画する	外黒褐 内黒 良	緻密	頸部片	
4	弥生 甕	−× (72)× (16) 外面　胴下端－ヘラケズリ	外褐 内黒 良	緻密	底部片	

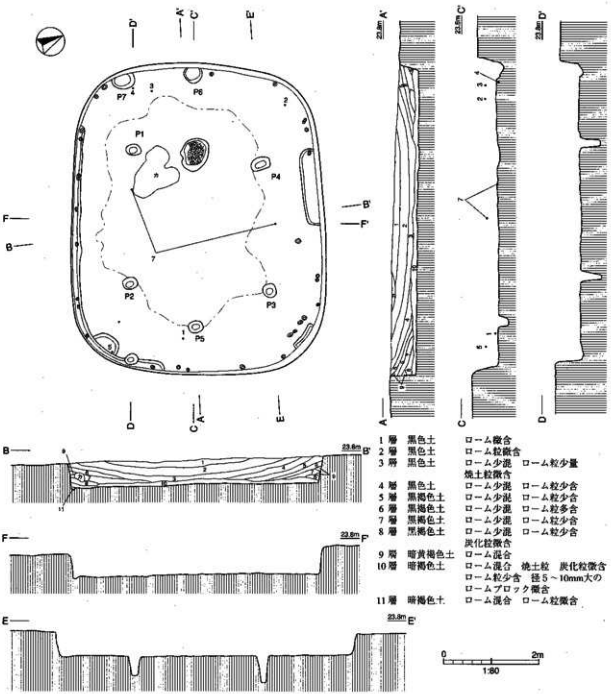


図50　A234

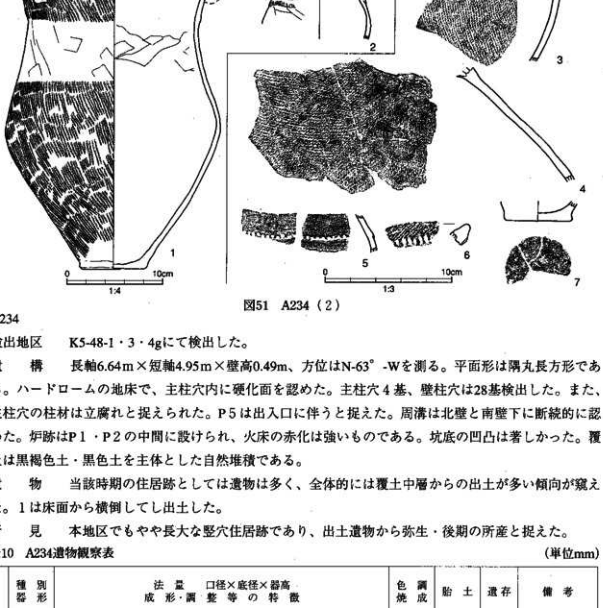


図51　A234（2）

A234

検出地区　　K5-48-I・3・4gにて検出した。

遺　　構　　長軸6.64m×短軸4.95m×壁高0.49m、方位はN-63°-Wを測る。平面形は隅丸長方形である。ハードロームの地床で、主柱穴内に硬化面を認めた。主柱穴４基、壁柱穴は28基検出した。また、主柱穴の柱材は立腐れと捉えられた。P５は出入口に伴うと捉えた。周溝は北壁と南壁下に断続的に認めた。炉跡はP１・P２の中間に設けられ、火床の赤化は強いものである。坑底の凹凸は著しかった。覆土は黒褐色土・黒色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　　当該時期の住居跡としては遺物は多く、全体的には覆土中層からの出土が多い傾向が窺えた。１は床面から横倒してし出土した。

所　　見　　本地区でもやや長大な竪穴住居跡であり、出土遺物から弥生・後期の所産と捉えた。

表10　A234遺物観察表　　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	216×71×329　口縁やや外反　胴やや上半張り底部にかけすぼまる外面　口縁、口唇とも附加条縄文　口縁下－縦長の突起を持つ（残存４ヶ所）頸部－ナデ　胴上半～下半－附加条縄文　下端－ヘラナデ　内面　口縁～頸部－横ナデ胴部－ヘラナデ	明褐 普	砂粒	略完形	上総吉式 内外面スス付着
2	弥生 甕	99×－×(82)　口縁外反　頸部ごく緩やかに括れ、胴部丸味持つ外面　口縁－押圧　頸部－輪積痕５段　胴部との境に刺突列　胴部－ヘラナデ　内面　口縁－横ナデ　頸部－ヘラナデ	暗褐 普	砂粒	口縁～ 胴部	
3	弥生 甕	－×－×－ 胴部　外・附加条縄文　内・ハケ目調整	橙褐色 良	砂粒 緻密	胴部 中位	
4	弥生 甕	－×－×－ 頸部　ヘラケズリ　胴部　外・R撚糸文　内・ヘラミガキ	褐色 良	緻密	胴部 上半	
5	弥生 鉢？	－×－×－ 胴部　外・竹管による連続刺突　内・ヘラミガキ	褐色 良	緻密	頸部片	
6	弥生 壺	－×－×－　　折返し口縁 口縁部　LR縄文　口縁下端は原体で押圧する	橙褐色 普	粗	口縁片	南関東系

7	弥生 甕	－×(68)×(21) 胴部下端　縦位のヘラミガキ 底部　木葉痕	淡褐色 良	緻密	底部片	

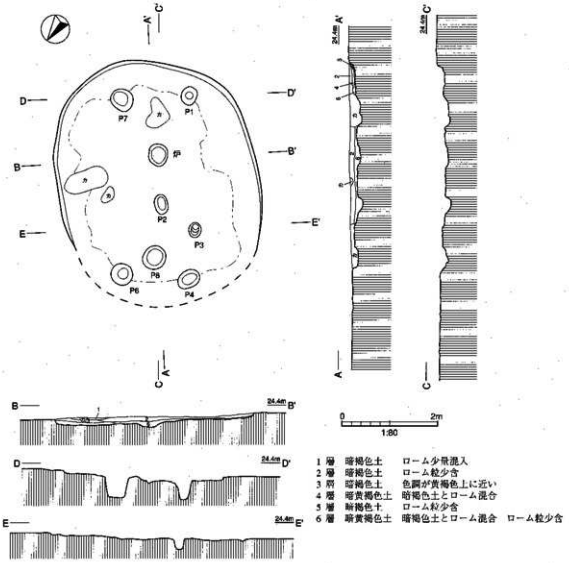


図52　A235

A235

検出地区　L5-57-3・4g、67-1gにて検出した。

遺　構　長軸(5.28)m×短軸4.06m×壁高0.16m、方位はN-37°-Wを測る。平面形は不整楕円形である。ソフトロームに暗褐色土が若干混合した床で、また攪乱の影響もあり凹凸ある床面となる。踏固められてはいるが、硬化には至らない。柱穴は主柱穴はP１・４・６・７であり、この他に３基のピットを検出した。炉跡は住居跡中央からやや南壁寄りに設けられ、火床は検出できなかったが坑底に焼土粒・炭化粒の散布が認められたため、床面を僅かに凹めた炉跡と捉えた。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　住居跡中央から南側に、縄文早期・条痕文片が多くはないが出土している。

所　見　調査時には、出土した土器から縄文早期・条痕文期の竪穴住居跡と捉えていた。弥生時代の土器片などの出土は認められないが、遺構形状などから、弥生・後期の所産と捉えなおした。坑底の凹凸が著しく、重複して何らかの遺構が存在したかも知れない。

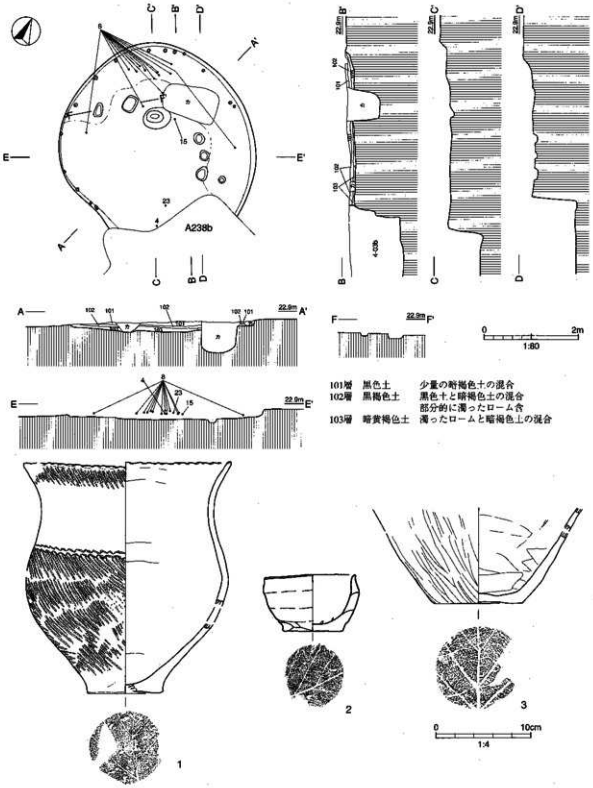


図53　A238a

A238a

検出地区　　L4-97-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸4.24m×短軸3.88m×壁高0.14m、方位はN-86°-Wを測る。平面形は円形に近い形状である。ソフトロームを掘込んだ、住居跡中央が僅かに凹んだ軟弱な地床である。床面にピットを6基検

出したが、柱穴かは判然としなかった。15基の壁柱穴を検出した。炉跡は住居跡中央より北寄りに、床面上に淡く赤変した範囲として認めた。覆土は黒色土、暗褐色土の自然堆積と捉えた。

遺　物　　出土する遺物は少なく、また、A238bと重複するため土師器片の混入も認められた。

所　見　　出土遺物から弥生・後期の所産と捉えられた。A238bとの先後関係はA238a→A238bである。

表11　A238a遺物観察表　　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 機成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	(215)×　78×　245　　口縁外反し上端やや内湾　頸部緩やかに括れる 胴やや上手が膨らむ　　外面　口唇－押圧　口縁－附加条縄文 頸部－ナデ　胴上半－結節2段　下半－附加条縄文条　下端－ヘラナデ 底部－木葉痕　　内面　口縁－横ナデ　頸部～胴部－ヘラナデ	橙褐～ 暗褐 普	砂粒	4/5	内外面コゲ及び スス付着
2	手捏ね 鉢形	96×　64×　61　　輪積痕が顕著に残る 外面　輪積後ナデ　底部－木葉痕　　内面　ヘラによる調整後ナデ	橙褐 良	細砂 比較的 緻密	略完形	
3	土師器 壺	－×　93×　(100) 外面　胴下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ　底部－木葉痕 内面　胴下半－ヘラナデ　底面－ヘラケズリ	暗褐 普	小石 粗砂粒多	胴部～ 底部片	常総型

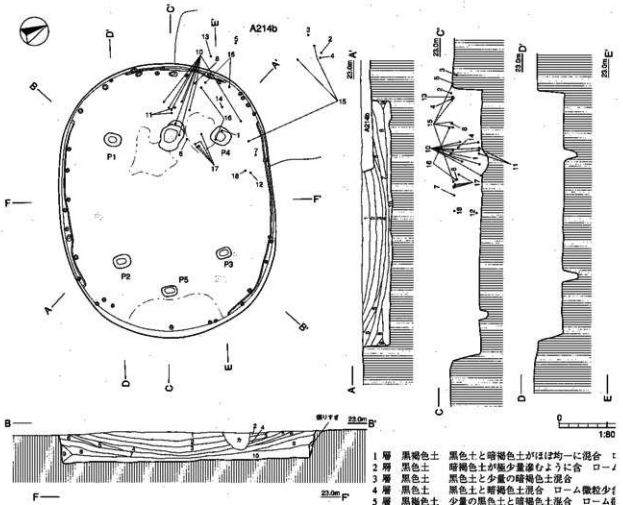


図54　A241a

図55　A241a（2）

A241a

検出地区　L5-19-3・4g、29-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸5.80m×短軸4.48m×壁高0.56m、方位はN-63°-Wを測る。平面形は小判形である。ハードロームを深く掘込んだ地床で、全体に硬化面を認めた。壁の立上がりは垂直に近かった。P1～P4は主柱穴で、P5は出入口に伴う。壁柱穴は36基を検出した。主柱穴の柱材は引抜かれたものと捉えられた。炉跡はP1・P4の中間に設けられ、やや掘込みは深かった。赤化した火床は小範囲であったが、坑底全体に火熱痕を認めた。周溝は断続的に壁下を巡っていた。覆土は暗褐色土、黒褐色土、黒色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　出土遺物は極めて少なく、床面からの出土はなかった。A241bとの重複域に集中する傾向が窺えた。

所　見　出土遺物から弥生・後期の所産と捉えた。重複するA241bとの先後関係はA241a→A241bである。

表12　A241a遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
10	弥生 甕	(178)×－×(138)　口縁外反し頸部は緩やかに括れる 外面　口縁ー押圧　頸部ー横ナデ　結節2段　胴部との境に輪積痕を利用した段をつける　下端ー縄文原体押圧　胴下半まで附加条縄文 内面　口縁ー頸部ー横ナデ　胴部ーヘラナデ	茶褐 普	砂粒	2/3	
11	弥生 甕	－×－×(64) 外面　胴下半ー附加条縄文　　内面　胴下半ーヘラナデ	外褐 内橙褐 普	砂粒	胴部片	
12	弥生 壺	－×68×(45) 外面　胴下半ーヘラミガキ　下端ーヘラケズリ 内面　胴下半ーヘラナデ後ヘラミガキ	明褐 やや悪	砂粒	胴部～ 底部片	内外面赤彩 器面の剥離、磨耗著しい

A248a

検出地区　L4-96-3・4g、L5-6-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸(6.49)m×短軸(4.81)m×壁高0.61m、方位は計測できなかった。A248bとの重複のため全容を捉えられないが、平面形は方形に近い隅丸長方形である。ハードロームを略垂直に掘込み地床とし、全体として硬化するが、中央部帯状にやや硬化の弱い部分を認めた。主柱穴はP2～P4であり、P5・6は支柱穴と捉えた。壁柱穴は6基のみ検出した。炉跡は失われ、周溝は2カ所に断続的に認めた。

遺　物　弥生・後期の小片が点在するが、出土は僅かである。その中でも覆土中層から上層の出土であった。

所　見　A248bと大きく重複するため住居跡西側が失われており全容を捉えられないが、やや規模の大きな竪穴住居跡である。図示する遺物は無かったが、出土遺物から弥生・後期の所産と捉えた。

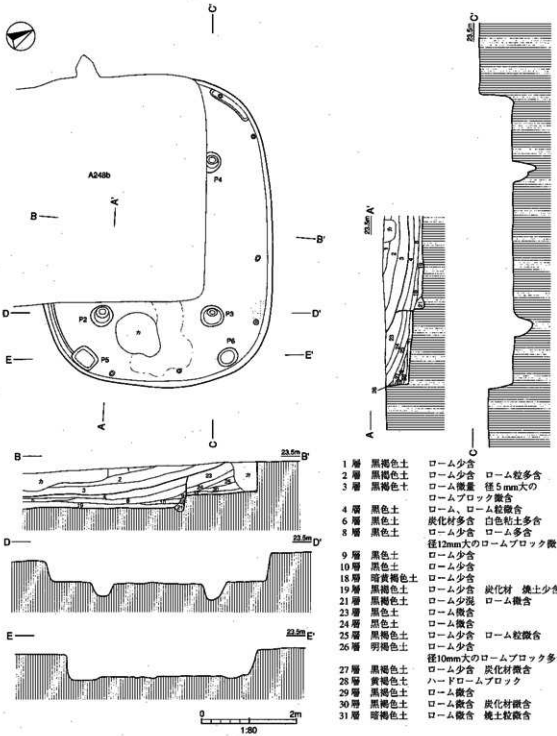


図56　A248a

A249

検出地区　　L5-19-3・4g、29-1・2gにて検出した。

遺　　構　　長軸6.72m×短軸5.14m×壁高0.65m、方位はN-52°-Wを測る。平面形は小判形である。ハードロームを深く掘込み地床とし、主柱穴内は硬化面を認めた。主柱穴はP1～P4であり、P5は出入口に伴っている。壁柱穴は8基検出し、周溝は壁下を全周している。炉跡はP1・P4の中間に、柱間の軸線より北東壁寄りに設けられていた。床面を0.10m程掘回め、坑底中央から南側の床面にかけて赤化した火床を検出した。覆土は、黒褐色土・黒色土を主体とした自然堆積である。南東コーナー付近に床から0.05m程度高く、炭化材が出土している。

遺　　物　　出土遺物は少量であり、床面からの出土遺物は殆ど無く、覆土中層から上層が中心である。

所　　見　　出土遺物から弥生・後期の所産と捉えた。床面上の出土ではないため、若干の時間差があろうが、その差はあまりないものと捉えている。報告できる土器の多い当該時期の竪穴住居跡であった。

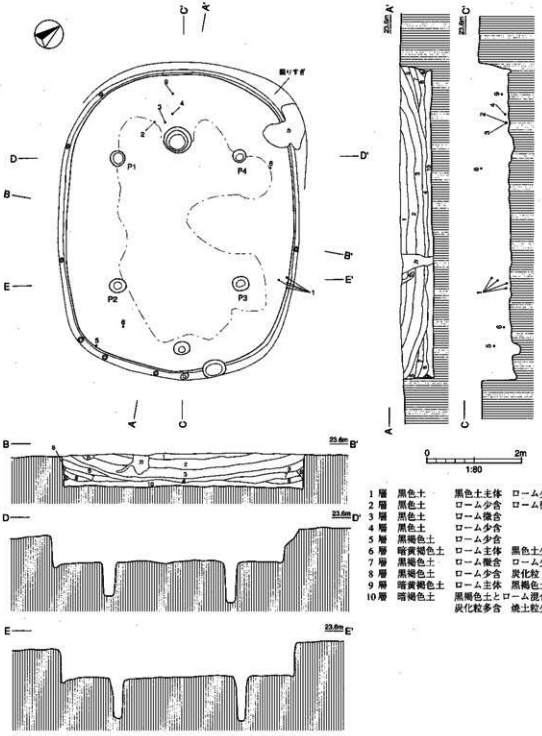


図57　A249

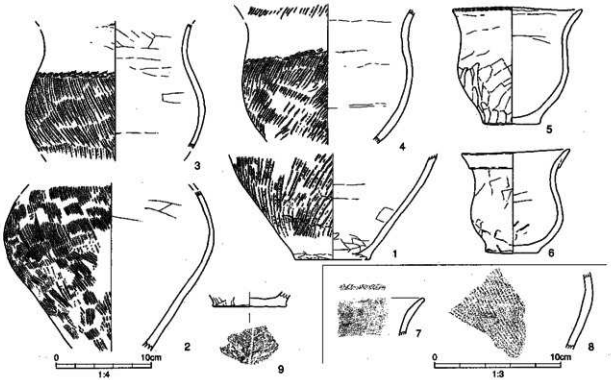


図58　A249（2）

表13　A249遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	－×（79）×（113）　胴部下半は急傾斜ですぼまり底部に至る 外面　胴下半－附加条縄文　下端－ヘラナデ　底部－木葉痕 内面　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	胴部～ 底部	外面スス少量付着
2	弥生 壺	－×－×（179）　胴部は上半が張り急傾斜ですぼまる 外面　頸部と胴部の境に径2ミリ程度の円形刺突　胴上半～下端－附加条縄文　内面　ヘラナデ	暗橙褐 普	砂粒	胴上部 ～ 胴下端	
3	弥生 壺	－×－×（149）　頸部は括れ、やや開き気味に口縁に続くと思われる 胴部は丸みを帯びる 外面　頸部－ナデ　胴上半－結節2段　下半－附加条縄文 内面　頸部～胴下半－ヘラナデ	明橙褐 普	砂粒	頸部～ 胴部	
4	弥生 壺	－×－×（148）　頸部は括れ、口縁は外反するものと思われる　胴部は丸みを帯びる　内面　ヘラナデ 外面　頸部上部－附加条縄文　ナデ　胴部－結節2段　附加条縄文	明褐 普	砂粒	頸部～ 胴部片	
5	弥生 壺	135×57×125　口縁外反　頸部緩やかに括れ、胴中位が張り底部に向けてすぼまる　やや歪む　外面　口縁－口唇押圧　頸部～胴上半－ヘラナデ　下半～下端－ヘラケズリ　底部－木葉痕 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外橙褐～ 暗褐 内暗褐 普	砂粒	完形	内外面スス付着
6	弥生 壺	112×56×110　折り返し口縁　口縁外反　頸部はごく小さくれ、胴上半に膨らみを持つ　外面　口縁－横ナデ　頸部～胴下端－ヘラナデ及びナデ　底部－木葉痕？　内面　口縁～頸部－横ナデ	橙褐 普	砂粒	完形	
7	弥生 壺	－×－×－　口縁外反 外面　口縁－口唇附加条縄文　横ナデ　内面　口縁－横ナデ	橙褐 普	砂粒	口縁片	
8	弥生 壺	－×－×－ 外面　胴部－附加条縄文　内面　胴部－ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒	胴部片	
9	弥生 壺	－×（46）×（16） 外面　胴下端－ヘラケズリ　底部－木葉痕	暗褐 普	砂粒	底部片	内面スス付着

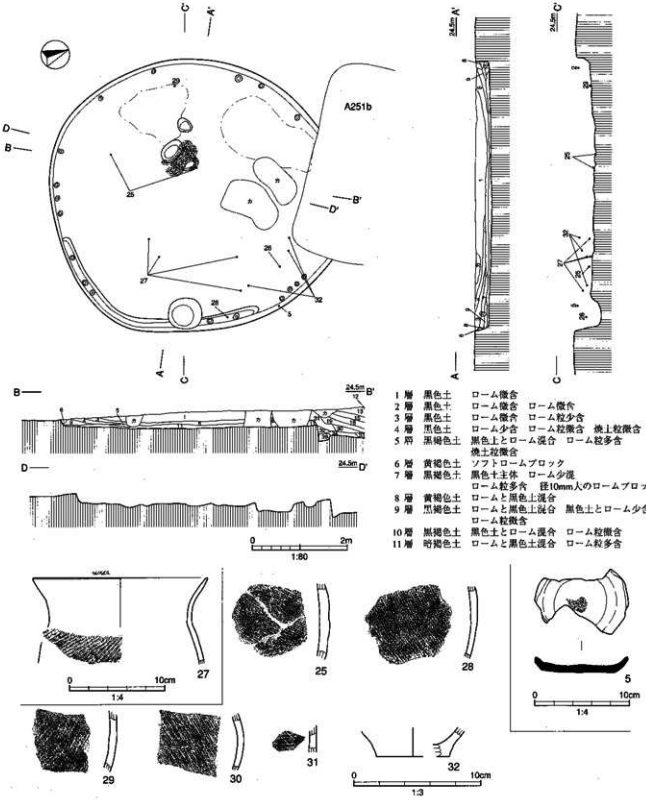


図59　A251a

A251a

検出地区　　K5-10-3g、20-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸(6.00)m×短軸5.76m×壁高0.32m、主軸方位はN-70°-Wを測る。平面形は円形である。ハードロームの上部まで略垂直に掘込み地床とし、全体として軟弱である。ソフトロームとハードロームの境界に床を設けており、そのため床面は凹凸を有している。主柱穴は検出されず、壁柱穴は18基検出した。P1の用途は捉えられなかった。周溝は南側の壁下に巡るだけであった。床面を掘凹めた様な

炉跡は住居跡中央よりやや西側寄りに設けられ、坑底から床面に赤化の強い火床を検出した。覆土は、黒褐色土・黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　覆土中層から上層にかけて点在して出土するが、出土量は極めて少ない。

所　見　A251bにより北側が一部損壊するが、形状・出土遺物から、弥生・後期の所産と捉えた。

表14　A251a遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
5	土製品 不明	長径98×短径75×器高17 底部付近を打ち欠いて円盤形にし、更に破損面を磨いている	灰 良	雲母 長石細粒	底部片	須恵器坏の再生器具
25	弥生 壺	－×－× S字結節２段で区画し、区画内にRL・LR・RL縄文による羽状縄文	褐色 良	砂粒・礫 長石少量	胴部片	南関東系
27	弥生 甕	(184)×－×(90)　頸部径(150) 口唇　附加条縄文を押圧　口縁　無文　頸部　ヘラミガキ 胴部　附加条縄文	暗褐色 良	緻密	胴部片	
28	弥生 甕	－×－× 胴部　外・附加条縄文　内・ハケ目調整	暗褐色 良	緻密	胴部片	
29	弥生 甕	－×－× 胴部　附加条縄文	褐色 良	緻密	胴部片	
30	弥生 甕	－×－× 胴部　附加条縄文	橙褐色 良	緻密	胴部片	
31	弥生 甕	－×－× 胴部　附加条縄文施文後、撚糸文	褐色 良	緻密	胴部片	
32	弥生 甕	－×(77)×(27) 胴部下端はヘラケズリ　底部は木葉痕	褐色 良	緻密	底部片	

A255

検出地区　L5-37-3・4gにて検出した。

遺　構　長軸4.29m×短軸3.68m×壁高0.15m、方位はN-67°-Wを測る。平面形は隅丸方形である。ソフトロームを浅く掘込んだ地床であり、軟弱な床面である。床面にピットは２基検出されたが、P１は目的不明であり、P２は出入口に伴うものと捉えた。壁柱穴は６基検出した。炉跡は住居跡中央から北西壁寄りに、掘込が浅く皿状に設けられていた。坑底や壁に火熱痕は認めたが、赤化した火床は認められなかった。斜面部に立地するため、南壁側が更に浅くなっている。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　住居跡中央から北側で、図示には至らない弥生・甕片や小礫が稀に出土したのみである。

所　見　所属時期の判断すべき資料である出土遺物が極めて少なく判然としないが、竪穴住居跡の形状や覆土から弥生・後期の所産と捉えている。

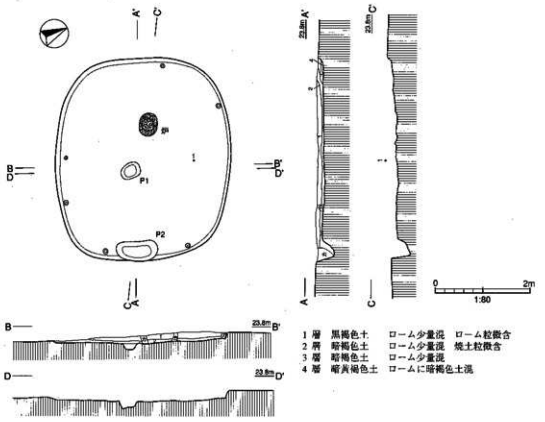


図60　A255

A259

検出地区　L4-85-4g・95-2gにて検出した。

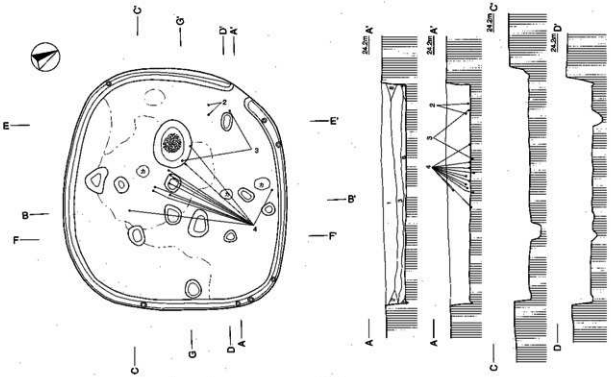
遺　構　長軸5.16m×短軸4.72m×壁高0.44m、主軸方位はN-63°-Wを示している。平面形は隅丸長方形の竪穴住居跡である。床は、ロームを良く踏固めた床で、住居跡の壁際で硬化面を検出し、住居跡中央部では、やや軟弱であった。床面で小穴を多数検出したが、主柱穴としての特定はできなかった。周溝はほぼ全周していた。壁はロームの壁でほぼ垂直に立上がっていた。炉は、住居跡中央やや西側に位置し、地床炉である。覆土は8層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　覆土中から比較的多量に出土した中で、床面直上遺物として弥生土器の良好な資料（2，3，4）を得ることができた。

所　見　出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

表15　A259遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
2	弥生 甕	218×－×（145）　口縁外反　頸部なだらかに括れる 外面　口縁－口唇は附加条縄文、ナデ　頸部～胴部－上下を刺突列で挟み、中に附加条縄文→ナデ→刺突列　附加条縄文 内面　口縁－横ナデ　頸部～胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒 赤色粒	口縁～ 胴部片	
3	弥生 甕	220×－×(77)　口縁外反 外面　口縁－口唇は附加条縄文　横ナデ　頸部～胴部－径2ミリ程の工具による刺突列→附加条縄文→ナデ→刺突列　附加条縄文 内面　口縁－横ナデ　頸部～胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	口縁～ 頸部片	
4	弥生 甕	131×58×129　口縁外反しつつ上端で内湾　頸部括れる　胴部やや下膨れ　底部低い台状　外面　口縁～頸部－附加条縄文施文後ヘラナデしたような痕跡あり　胴上部－結節一段　下半までは附加条縄文　底部－木葉痕　内面　口縁－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	略完形	



1 層　黒褐色土　極少量の暗褐色土が滲むように混入
2 層　暗褐色土　極少量のローム混入
3 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合
焼土少含
4 層　暗褐色土　少量の黒色土が斑状に混合
ローム少含
5 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混合
ローム少含
6 層　暗褐色土　少量の黒色土とロームが粗く混合
7 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体
少量の暗褐色土が滲むように混入
8 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合
ローム極少含

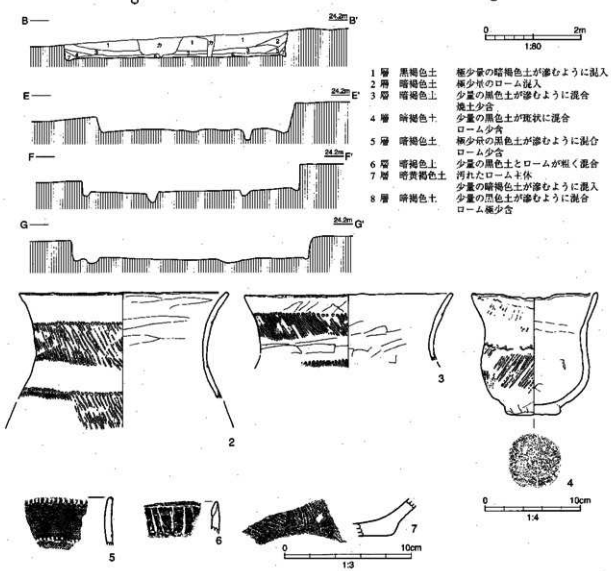


図61　A259（2）

5	弥生 甕	−×−×−　口唇に原体の押圧 外面　口縁−無文　下端に棒状工具による連続刺突で区画し複合口縁的効果を出す　頸部−附加条縄文か？　内面　ミガキ	褐色 良	緻密	口縁片	
6	弥生 甕	−×−×−　口縁やや内湾 口縁部　沈線による区画か	褐色 良	緻密	口縁片	
7	弥生 甕	−×−×−　外面　附加条縄文か？	橙褐 良	緻密	底部片	

A264

検出地区　L5-13-2・4g、14-1・2g、24-2g、25-1gにわたって検出した。

遺　構　長軸7.6m×短軸5.68m×壁高0.66m、主軸方位はN-50°-Wを示している。平面形は隅丸長方形の竪穴住居跡である。ロームを踏み固めた床で、部分的に硬化面を検出し、熱を受け赤化している部分も検出された。床面で小穴を８基検出した。Ｐ１～Ｐ４は主柱穴で、P5は出入口施設に伴うピットと考えられる。また、壁際で検出された壁柱穴に関しては、その多くから炭化材を検出した。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっていた。炉は、住居跡中央やや西側に位置し、地床炉である。覆土は24層に分層され、床面直上から炭化材、焼土を検出していることから人為的な埋め戻しの後、自然堆積に撚る埋没が想定される。

遺　物　床面直上～覆土上層にかけて、多量に出土した。覆土下層において弥生土器と古墳時代前期の土器が、混在して出土していることが注目される。

所　見　出土遺物及び出土状況、遺構の形態等から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。消失住居で、柱穴の配置から建て替えを行っている可能性もある。

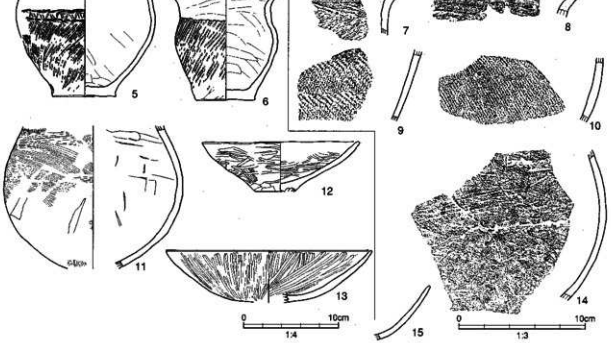
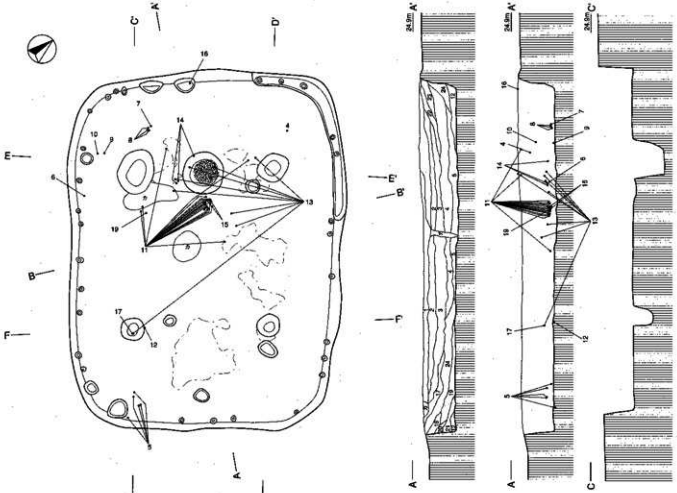
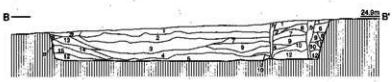
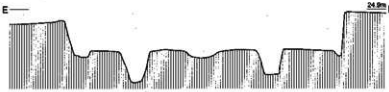


図62　A264







1 層　褐色土　　径1～2mm大のローム粒混入
2 層　暗褐色土　　によいロームをしみ状に混入
　　径1～2mm大のローム粒混入
3 層　黒褐色土　　ローム粒子極少量混入
4 層　褐色土　　暗褐色土にローム粒極少量混入
5 層　明褐色土　　ローム粒極めて多含　径2～3mm大の焼土粒を混入
6 層　暗褐色土　　ローム粒混入
7 層　暗褐色土　　ローム粒混入
8 層　黄褐色土　　ロームブロック多含
9 層　暗黄褐色土　　褐色土を主体にローム粒多く混入
　　によいロームブロックを混入
10 層　暗黄褐色土　　褐色土を主体ににぶいロームブロックをしみ状に混入　ローム粒含
11 層　黄褐色土
12 層　暗黄褐色土　　ロームの小ブロック　ローム粒多含
　　炭化物混入
13 層　褐色土　　ローム粒子少含
14 層　褐色土　　ローム粒、ロームブロックを混入
15 層　暗黄褐色土　　ローム粒多含
16 層　暗褐色土　　褐色土混入
17 層　暗褐色土　　によいロームブロック混入
18 層　褐色土　　ローム粒混入
19 層　褐色土　　ローム粒、によいロームブロック混入
20 層　暗褐色土　　によいロームブロック含
21 層　明褐色土　　によいロームブロック、ローム粒含
22 層　暗褐色土　　褐色土を主体にローム粒を極少量混入
23 層　褐色土　　一部に暗褐色土を混入
24 層　明褐色土　　ローム粒多含

図63　A264（2）

表16　A264遺物観察表　　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
5	弥生 壺	－×67×(116)　胴中位が膨らみ底部に向けてすぼまる 外面　頸部－ナデ　胴上半～下半－附加条縄文 内面　頸部－ナデ　胴上半－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	胴部～ 底部片	
6	弥生 小型壺	124×63×123　　口縁外反 外面　口縁－交互押圧　頸部－ヘラナデ　胴下半－ヘラケズリ 内面　口縁－ナデ　胴下半－ヘラナデ	褐～橙褐 普	砂粒	略完形	外面コゲ、スス付着　黒斑有り
7	弥生 甕	－×－×－ 外面　口唇－刻み目　口縁－無文　胴部－L.L縄文	黒 良	緻密	口縁片	
8	弥生 甕	－×－×－ 外面　口唇－刻み目　口縁－無文	黒 良	緻密	口縁片	no.7と同一個体か？
9	弥生 甕	－×－×－ 外面　胴部－R.L縄文　　内面　胴部－ハケ目調整	褐 良	緻密	胴部片	
10	弥生 甕	－×－×－ 外面　胴部－附加条縄文　　内面　胴部－ハケ目調整	外黒褐 内褐 良	緻密	胴部片	
11	土師器 甕	－×－×(151)　　球胴状を呈する 外面　胴上半－ハケ　下半～下端－ハケ後ヘラナデ 内面　胴下半－ヘラナデ	赤褐～ 橙褐 普	砂粒 白色粒	胴部片	
12	土師器 鉢	165×41×53　　体部下端括れる　体部外傾しつつ口縁でやや上がる底部やや上げ底 外面　口縁－横ナデ　体部－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　口縁－横ナデ　体部－ヘラミガキ	褐 普	砂粒	4/5	スス付着 内面、器面の剥離が顕著
13	土師器 高坏	(216)×－×55　　体部外傾し、口縁広く開く　下端は丸みを帯びる 外面　口縁－横ナデ　体部－ヘラナデ後ヘラミガキ 内面　口縁－横ナデ　体部－ヘラミガキ	橙褐～ 暗褐 普	砂粒	坏部片	
14	古式 土師器 甕	－×－×－ 外面　胴上半－ヘラケズリ　下半ハケ目 内面　胴上半－下半－ハケ目	外褐 内橙褐 普	緻密	胴部片	
15	古式 土師器 高坏	－×－×－ 外面　口縁－縦位のヘラミガキ　　内面　ミガキ	赤褐 良	緻密	坏部片	

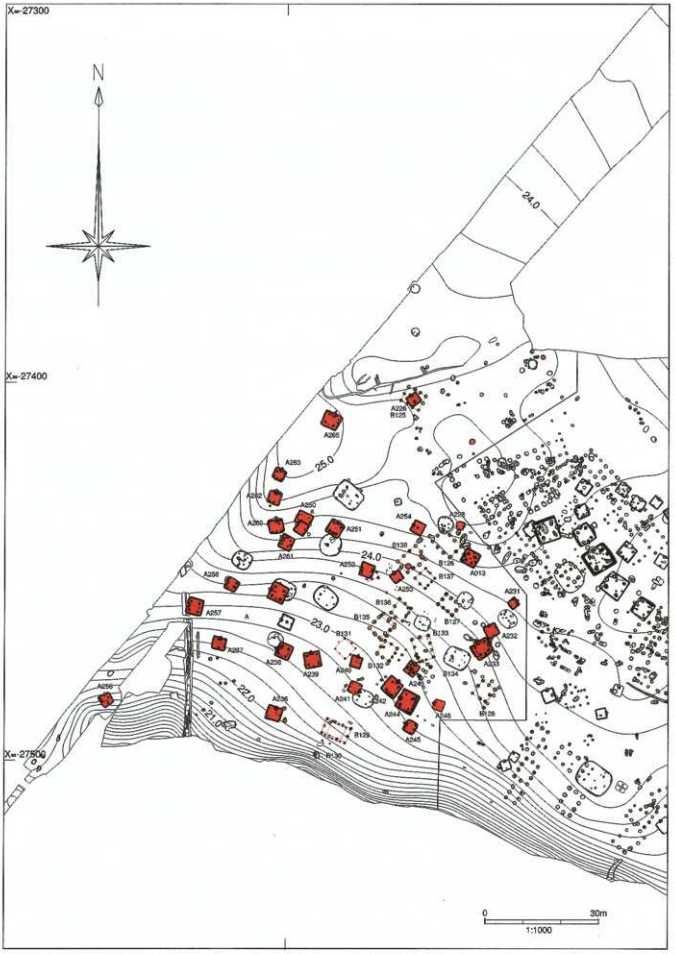


図64　上谷遺跡Ⅴ地区奈良・平安時代遺構配置図

第３節　奈良・平安時代

上谷遺跡Ⅴ地区における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡18棟、土坑36基検出した。当該時期の遺構は調査区の南側の緩斜面に多く所在する傾向が窺え、15調査区西側と３調査区北側には少なかった。また、竪穴住居跡はⅣ地区に比し増加し、掘立柱建物跡は減少している。

遺物は土師器・須恵器を主体として鉄器なども出土しているが、特に、墨書土器は本地区でも出土は多く、集団として「共有する文字」が「西」に主体を移していることが窺われた。また、「長文」を伴う「人面墨書土器」も出土している。

以下、各遺構について報告していきたい。

第１項　竪穴住居跡

今回ここに報告する上谷遺跡Ⅴ地区からは、竪穴住居跡は32軒が検出された。それらは主に台地の緩斜面に営まれ、この傾向が平坦面に多く営まれたⅣ地区と異なりを見せている。しかし基本的には、Ⅳ地区からの集落としての繋がりをもって形成されたものと考えている。

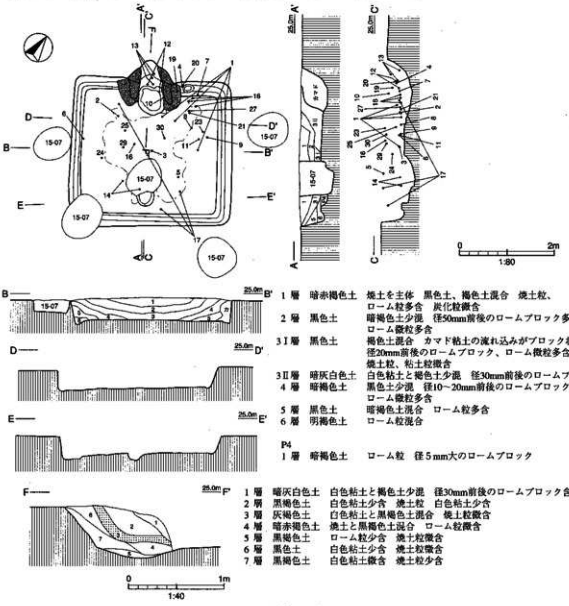


図65　A226

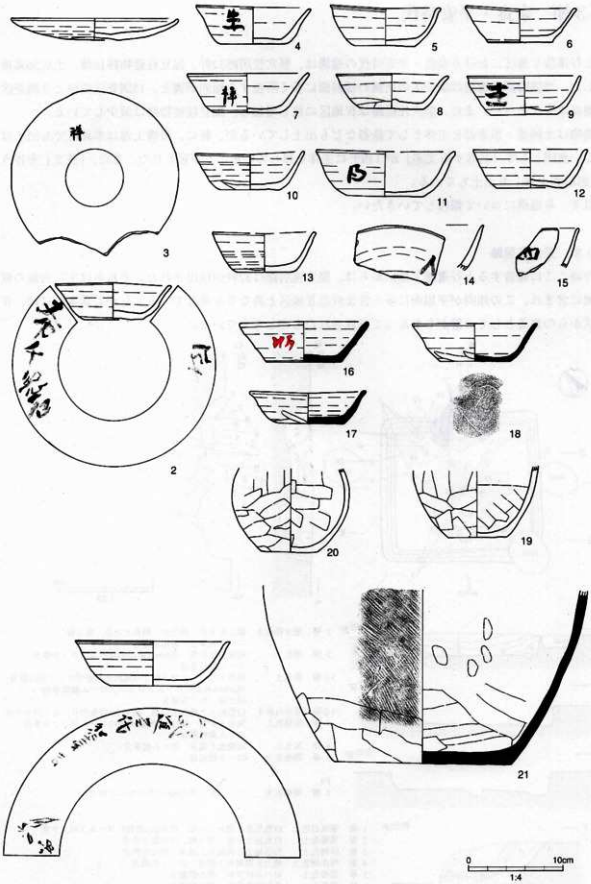


図66 A226（2）

A226

検出地区　L5-41-1～3gにて検出した。

遺　構　主軸3.06横m×横軸3.37m×壁高0.40m、主軸方位はN-37°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。ハードローム上部を床とし、竈前から出入口ピットにかけての住居跡中央に良好な硬化面を認めた。壁は略垂直に立上がっていた。主柱穴は検出されず、竈右袖脇の周溝内に1基のみ壁柱穴と思われるピットを検出した。P1は出入口に伴うものである。周溝は竈袖下まで巡っていた。竈は北西壁中央に設けられ、白色粘土を主体として築いている。袖の内壁は焼土化していた。竈ピット内に部分的に焼土化した坑底が認められ、火床と捉えた。竈ピットと煙道部の間に床面と同じ高さの平坦面がテラス状に残されていた。煙道部は壁をやや幅広く掘込んで、煙道の立上がりは急なものとなっていた。覆土はロームを多含する黒色土を主体として、人為的投入土で埋戻していた。

住居跡中央の覆土上層において、黒褐色土に混合して多量の焼土が検出された。そして焼土堆積後に間をおかずに、再度の埋戻しが行われていた。

遺　物　土師器小片を主体として、須恵器や流込みである縄文早期・撚糸文、条痕文片が出土しているが、住居跡としては出土量は少ない。また、住居跡全体から散在して出土しており、平面的な出土傾向を捉えることはできなかったが、床面直上遺物は少なく、床直上層堆積後に廃棄された様な出土であった。

本住居跡は墨書土器がやや多く、9点の出土をみた。いずれも坏に記されていたが、土師器が8点、須恵器が1点である。1字の墨書土器は「得」「西」「竹」と、この他に「主」「祥」が出土する。また、いずれも土師器・坏であるが、1の紀年銘人面墨書「廣友進召　弘仁十二年十二月／（人面）」と2の人名墨書「丈部千総石女進上／□」も、床から0.05m程高い位置で出土している。

所　見　調査当初には覆土堆積を自然堆積かとも迷った遺構であるが、覆土堆積が不整然なこと、ロームを多含することから人為堆積と捉えなおした住居跡である。出土遺物などから奈良・平安時代の竪穴住居跡と捉えた。覆土上層に検出した焼土は、当初、火の使用か焼土の廃棄か判然としなかったが、覆土を人為的堆積と判断したことから、焼却行為と消火のための投入土と捉えた。

墨書土器であるが、「得」「竹」「西」の3文字は上谷遺跡において地区により主体を占める文字であり、「集団により共有する文字」としての性格を有していた。「得」はⅠ・Ⅱ地区に、「竹」はⅢ・Ⅳ地区に、「西」はⅣ・Ⅴ地区にその主体をおいていた。本住居跡からはこの3文字がともに出土しており、集団が共有する以上の意味があったかもしれない。

また、長文墨書土器であるが、いずれも「延命祈願」を示していると言えよう。2点の出土が、埋置というより廃棄された状態であり、覆土の人為堆積とこの「祈願」が関わりがあったのかは捉えられなかった。また、2点の出土層が同一であり、1の住居跡中央と2の竈前の出土位置から、時間差のない祈願日であったのではないかと想定させるものである。また、1の「廣友」が男性名とすると、この様な土器に記された人名に女性名が多い上谷遺跡では数少ない例となっている。資料の増加を持って再考したい。

表17　A226遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	161×85×46　ロクロ成形 体部下端ヘラケズリ　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ 墨書「廣友進召代弘仁十二年二月／人面」　線刻「田？」	褐色 良	雲母少量 緻密	4/5	墨・体部外面横位／人・正位 線刻・底部

2	土師器 坏	118×61×38　ロクロ成形　口縁部内面の撫れ目立つ 体部下端回転ヘラケズリ　底部　回転糸切り後ヘラケズリ調整） 墨書「丈部千総石女」	褐色 良	緻密	完形	墨書　体部外面 横位
3	土師器 皿	176×54×24　ロクロ成形　盤状に近い器形 体部下端回転ヘラケズリ　底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ	褐色 良	緻密	略完形	墨書「祥」 体部外面　正位
4	土師器 坏	118×70×39　ロクロ成形 体部下端調整無し　底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ	褐色～ 赤褐色 良	石英粒	略完形	墨書「生」 体部外面　正位
5	土師器 坏	119×62×41　ロクロ成形 体部下端回転ヘラケズリ後ナデ　底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ	褐色 良	緻密	略完形	
6	土師器 坏	118×66×41　ロクロ成形　全体的に若干の表面摩耗 体部下端調整無し　底部回転糸切りのみ	淡褐色 良	緻密	完形	
7	土師器 坏	129×69×42　ロクロ成形 体部内面剥離ともミガキ底部内面ミガキ剥落か？　底部回転糸切り後、底部周縁のみ回転ヘラケズリ　体部上半内外面とも暗褐色	赤褐色 良	緻密	完形	墨書「祥」 体部外面　正位
8	土師器 坏	116×65×45　ロクロ成形 体部下端回転ヘラケズリ　底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ	淡褐色 良	赤色粒	略完形	
9	土師器 坏	123×73×42　ロクロ成形　内外面とも表面摩耗大 体部下端回転ヘラケズリ　底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ	淡褐色 良	緻密	略完形	墨書「生」 体部外面　正位
10	土師器 坏	120×64×41　ロクロ成形　体部外面若干摩耗 体部下端回転ヘラケズリ底部回転糸切り後、全体的に回転ヘラケズリ	淡褐色 良	赤色粒	完形	
11	土師器 坏	141×82×48　ロクロ成形体 部下端回転ヘラケズリ底部回転糸切り後、底部周縁向点ヘラケズリ 外面も若干ミガキ	褐色 黒色 良	石英粒	3／4	墨書「得」 体部外面　正位 内黒
12	土師器 坏	(118)×68)×41　ロクロ成形　体部外面若干摩耗 体部下端の調整は遺存度より不明底部回転糸切り後、底部周縁回転ヘラケズリ	淡褐色 良	緻密	1／4	
13	土師器 坏	106×59×43　ロクロ成形 体部下端の調整無し　底部回転糸切り後、全面回転ヘラケズリ（糸切痕殆ど残らず）	暗淡褐色 良	雲母	3／4	
14	土師器 坏	―×―×―　ロクロ成形　体部外面若干ミガキ痕	褐色 黒色 良	緻密	口縁片	墨書「人？」 体部外面 内黒
15	土師器 坏	―×―×―　ロクロ成形　器面に若干の摩耗	褐色 良	緻密	口縁片	墨書「西」 体部外面　正位
16	須恵器 坏	131×76×43　ロクロ成形　器の大きさから全体的に軽量感あり 底部切り後、全面不定方向ヘラケズリ	灰色 不良	白色粒	3／4	朱書「竹」 体部外面　正位
17	須恵器 坏	125×64×35　ロクロ成形 体部下端手持ちヘラケズリ　底部切り離し後、不定方向ヘラケズリ	灰色 不良	白色粒 やや多	3／4	
18	須恵器 坏	129×73×40　ロクロ成形 体部下端手持ちヘラケズリ　底部切り離し後、不定方向ヘラケズリ	暗灰色 普	石英粒	1／6	ヘラ書「□」 底部外面

19	土師器 小型甕	−×63×(76) 胴部　外面タテのヘラケズリ　下半〜下端ヨコのヘラケズリ 内面ヘラナデ	暗褐色 普	長石類	胴部 中位〜 底部	
20	土師器 小型甕	−×62×(88)　底部やや丸み 胴部　外面中位タテのヘラケズリ　中位〜下端ヨコのヘラケズリ 底部　ヘラケズリ	暗褐色 普	石英 長石	胴部〜 底部	
21	須恵器 大型甕	−×165×(184) 胴部　外面　斜のタタキ目　下端ヨコのヘラケズリ 内面　中位当て具痕　下端ヘラナデ	灰色 普	石英 長石 若干	胴部〜 底部	
27	鉄器 刀子	−×−×−			茎子 小片	未掲示 出土報告のみ
28	鉄器 不明	−×−×−　折り曲げ部か？			−	未掲示 出土報告のみ

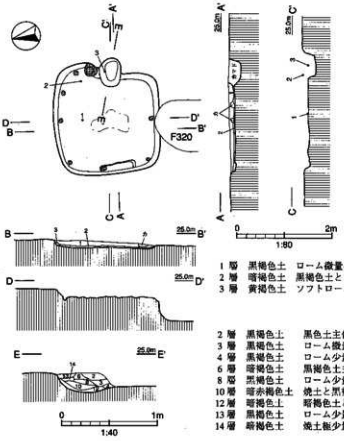


図77　A228

A228

検出地区　L5-44-4gにて検出した。

遺　　構　主軸2.24m×横軸(2.20)m×壁高0.10m、方位はS-80°-Eを測る。平面形は丸みを帯びた隅丸方形である。ソフトロームを浅く掘込んだ地床で、軟弱ではないが硬化しているとも言えなかった。また、床面は凹凸をもつものであった。主柱穴は検出されず、壁柱穴は7基検出した。周溝は、西壁下に短く掘込んでいた。竈は東壁中央に設けられ、白色粘土等で築かれ、内壁は赤化していた。竈ピットは掘込まれるが火床は認められず、火熱痕も殆ど認められなかった。覆土は色調・包含物から捉え、掘

図68　A228

込みが浅いため不明瞭であるが自然堆積と捉えた。

遺　　物　　出土遺物は少なく、土師器片を主体として若干出土している。図示すべき出土資料が少なく、意識的に掲示した。

所　　見　　比較的小規模な竪穴住居跡である。竈ピット内に火床が認められなかったことは、竈内の堆積灰などの掻出しに伴うのか、硬化面のない床面と併せて考えて住居跡の使用期間の短さなのかは捉えられなかった。

表18　A228遺物観察表　　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ	褐 灰	緻密	口縁片	
2	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　口唇つまみ上げ	褐 灰	雲母 砂粒少	口縁片	
3	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形	褐 灰	緻密	胴部片	

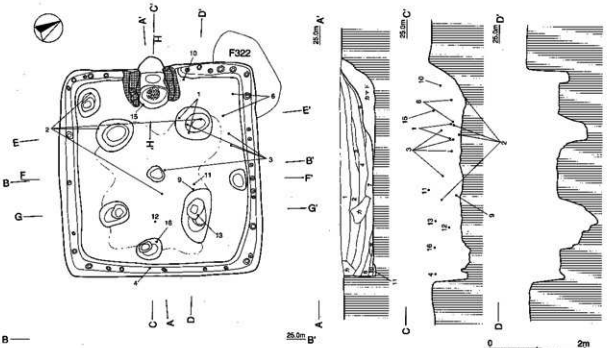
A229

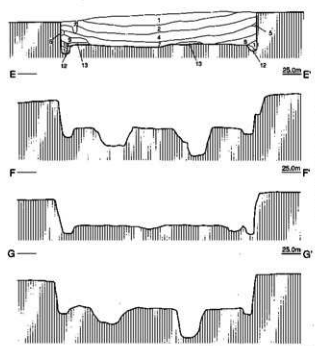
検出地区　　L5-45-3・4g、55-1・2gにて検出した。

遺　　構　　主軸4.36m×横軸4.24m×壁高0.61m、方位はN-59°-Wを測る。平面形は隅丸方形と言うより、方形に近い形状である。ハードロームを深く掘込み地床とし、主柱穴間内に硬化面を認めた。P1～P4は主柱穴であり、P5は出入口に伴うものである。壁柱穴は周溝内に31基検出した。P6は貯蔵穴、P7は出入口に伴うものであろうか。P8には火熱痕が認められた。周溝は竈袖下まで、全周していた。竈は北西壁中央に築かれ、竈袖は白色粘土を主体として混合物の混入は少なかった。袖の内壁は焼土化が進んでいた。壁への掘道部の掘込みはやや浅いもので、火熱痕を残していた。また、天井部は竈内に崩落している。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体とした自然堆積である。なお、床面及び床から0.20m程度の高さに、焼土の散布が認められた。

遺　　物　　土師器・須恵器片を主体として出土遺物は比較的多い。特に、覆土中層から上層にかけての出土が多い傾向が窺えた。

所　　見　　奈良・平安時代の所産と捉えた。主柱穴は床面が大きく開口することから、床面を掘込んで柱材を引抜いたものと判断した。





1 層	黒色土	ローム少量混入　ローム粒微含
2 層	黒褐色土	ローム少量混入　ローム粒少含
3 層	暗灰褐色土	黒褐色土土体に白色粘土少量混入　焼土粒微含
4 層	黒褐色土	ローム少量混入　ローム粒多含 径5mm～10mm大のロームブロック少含
5 層	暗褐色土	黒褐色土とロームの混合
6 層	暗灰褐色土	黒褐色土主体の土に白色粘土が少量混入 焼土粒微含
7 層	黒褐色土	ローム少量混入　ローム粒、径5mm～20mm 大のロームブロック多含
8 層	黒褐色土	ローム少量混入　ローム粒微含
9 層	暗赤褐色土	黒褐色土と焼土の混合　ローム少量混入
10 層	黒褐色土	ローム粒少含
11 層	暗褐色土	黒褐色土とロームの混合
12 層	暗黄褐色土	ローム主体の土に黒褐色土が少量混入
13 層	黄褐色土	人為的に投げ込まれたローム

1 層	暗灰褐色土	白色粘土と黒色土の混合　焼土粒少含
3 層	灰白色土	白色粘土主体の土　黒色土微量混入
5 層	灰褐色土	白色粘土と黒色土の混合　焼土粒微含
6 層	黒色土	黒色土に白色粘土少量が混合
8 層	灰褐色土	白色粘土主体の土に黒色土が少量混入
10 層	暗灰白色土	白色粘土主体の土に黒色土が少量混入 焼土が滲むように少量混合
11 層	黒色土	白色粘土粒、焼土粒微含
12 層	暗灰赤褐色土	白色粘土と焼土と少量の黒色土の混合
14 層	暗灰褐色土	黒色土と白色粘土の混合
16 層	暗灰白色土	白色粘土に少量の黒色土が混合
19 層	暗灰白色土	白色粘土に少量の黒色土が混合　焼土粒少含

図69　A229

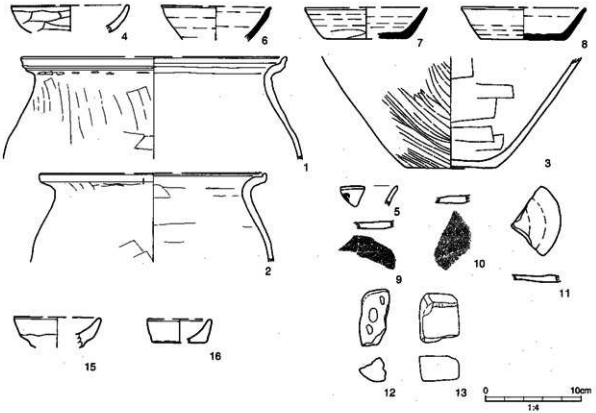


図70　A229（2）

表19　A229遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(278)×－×(109)　口縁外反　上端つまみ上げられる　外面は凹線状に調整される 内外面とも口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	茶褐 良	粗砂粒 雲母	口縁～ 胴部片	常総型
2	土師器 甕	(238)×－×(94)　口縁受け口状　頸部屈曲 外面　口縁～頸部－横ナデ　頸部～胴上半－ナデ及びヘラナデ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	茶褐 普	粗砂粒 雲母	口縁～ 胴部片	常総型
3	土師器 甕	－×92×(117) 外面　胴下半－ヘケズリ後ヘラミガキ 内面　ヘラナデ	橙褐色 良	粗砂粒 雲母	胴部～ 底部	常総型
4	土師器 坏	(122)×－×(28)　ロクロ未使用 外面　口縁－ナデ　体部－手持ちヘラケズリ（全面か？） 内面　ナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁～ 体部	
5	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐色 良	雲母	口縁片	墨書「□」 体部外側
6	須恵器 坏	(112)×－×(32)　ロクロ成形　口縁はつまんだように外反	灰色 良	雲母 長石	口縁～ 体部	
7	須恵器 坏	(131) ×－×(33)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘケズリ	灰色 良	雲母 長石	1／4	
8	須恵器 坏	(130) ×－×(33)　ロクロ成形	灰色 良	雲母 長石	1／6	

9	土師器 坏	−×−×− ロクロ成形	暗褐色 良	長石	底部片	線刻「⋊」 底部外面
10	須恵器 坏	−×−×− ロクロ成形	暗褐色 良	長石	底部片	ヘラ書「□」 底部外面
11	土製品 不明	−×−×− ロクロ成形 土師器付の底部を打欠き、破断面をする	暗褐色 良	長石 赤色粒	1／4	
12	土製品 支脚	長(58)×上径− 指頭の整形痕 遺存少なく全体不明	褐色 普	砂質	1／8	
13	石製品 砥石	長 (52)×幅 40)×厚 27 欠損後も再使用する 砥石端より中央が凹む			1／3？	流紋岩 再生利用
15	手捏 皿形？	(91)×−×(32) 指頭痕 やや粗雑なつくり	暗褐色 普	砂粒 雲母	1／6	
16	手捏 皿形？	(68) ×(56) ×26 指頭痕 底部外面－木葉痕	暗褐色 普	砂粒 雲母	1／8	

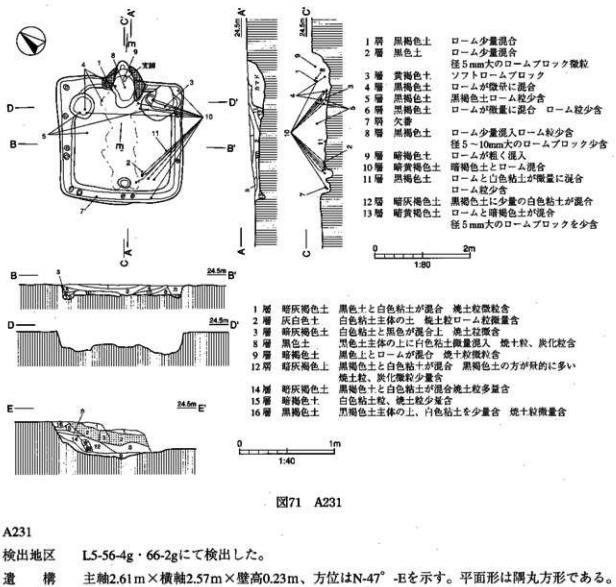


図71 A231

A231

検出地区　L5-56-4g・66-2gにて検出した。

遺　　構　主軸2.61m×横軸2.57m×壁高0.23m、方位はN-47°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。

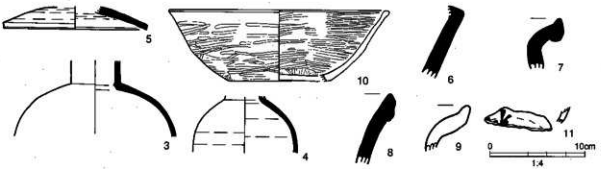


図72　A231（2）

ソフトロームを掘込み地床とし、竈前から対面する出入口方向に帯状に硬化面を認めた。主柱穴は検出されず、壁柱穴10基を周溝内に検出した。P1は出入口に伴う。P2・P3を竈側のコーナーに検出した。周溝は竈ピット内まで全周している。竈は北東壁中央に築かれ、竈袖の内壁が一部焼土化している。竈ピット内に火熱痕を認めたが赤化した火床は検出できなかった。煙道部も火熱痕を認めた。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　土師器片の出土が多いが、住居跡としては中程度の出土量である。出土傾向を特に示すことはできないが、小片が多く器形を復元できる遺物は極端に少なかった。

所　　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。

表20　A231遺物観察表　　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
3	灰釉陶器 水瓶	－×－×(76)　頸部接合部径 54　現状最大径 168　ロクロ成形 全体に丸みを帯びる胴部　肩は張らず胴部に丸みをもって下る	暗灰色 良		頸部～ 肩部	
4	灰釉陶器 水瓶	－×－×(60)　頸部接合部径 42　現状最大径 108　ロクロ成形 3に比し小撮り　肩は張らずに胴部に下る	暗灰色 良		頸部～ 肩部	
5	須恵器 壺	(190)×－×(24)　ロクロ成形	灰色 良		1/2	把手部欠
6	須恵器 壺	－×－×－　ロクロ成形 大きく肩部で屈曲し、頸部に至る	灰色 良	雲母 長石	肩部	
7	須恵器 甕	－×－×－　複合口縁　口縁大きく外反し、口唇部は直立する	灰色 良	雲母 長石	口縁片	
8	須恵器 甕	－×－×－　緩やかに外反する口縁　複合口縁	灰色 良	雲母 長石	口縁片	
9	土師器 甕	－×－×－　口縁外反し、口唇部直立する	暗褐色 良	雲母 赤色粒 長石	口縁片	常総型
10	土師器 鉢	230×10×77　回転台（ロクロ？）口唇部厚みを持ち体部下半丸味を持つ大型の鉢　内面は密に外面は疎らにヘラミガキ 外面　胴下半～下端－ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	橙褐 良	砂粒 赤色粒	1/2	体部外面スス付着
11	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐色 良	雲母 赤色粒	体部片	墨書『竹？』 体部外面　正位 内黒

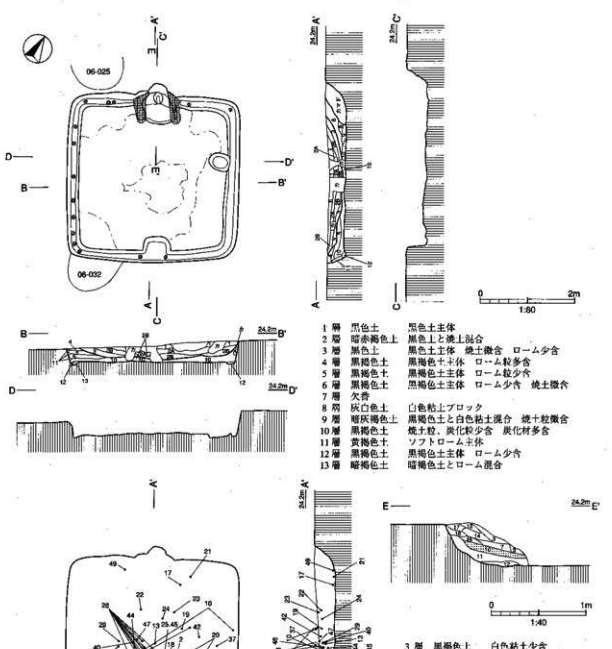


図73　A232

A232

検出地区　L5-57-1～4gに検出した。

遺　構　主軸3.55m×横軸3.60m×壁高0.41m、主軸方位はN-29°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床を基本とするが、一部に黒色土が混入した床となっている。住居跡中央に広く硬化面を認めたが、各コーナー及び東壁側はやや軟弱であった。主柱穴は検出されず、周溝内に壁柱穴が15基検出された。P1は周溝の深さと同じであり、出入口に伴う。P2は用途不明である。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積後、掘込まれ火の使用を伴う行為が行われた後に再度黒褐色土を主

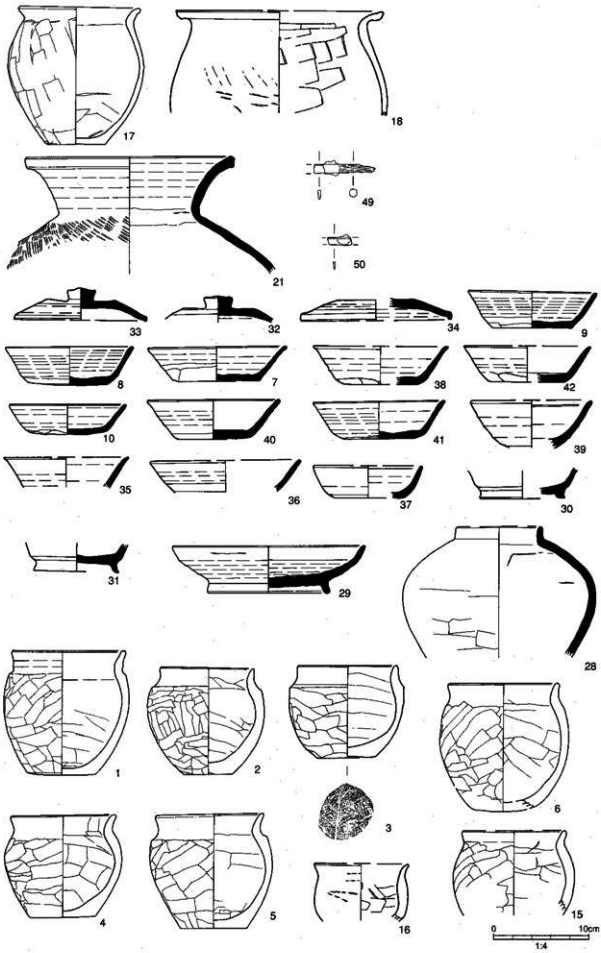

17
18
21
49
50
33
32
34
9
8
7
38
42
10
40
41
39
35
36
37
30
31
29
28
1
2
3
6
4
5
16
15
0
10cm
1:4

図74 A232（2）

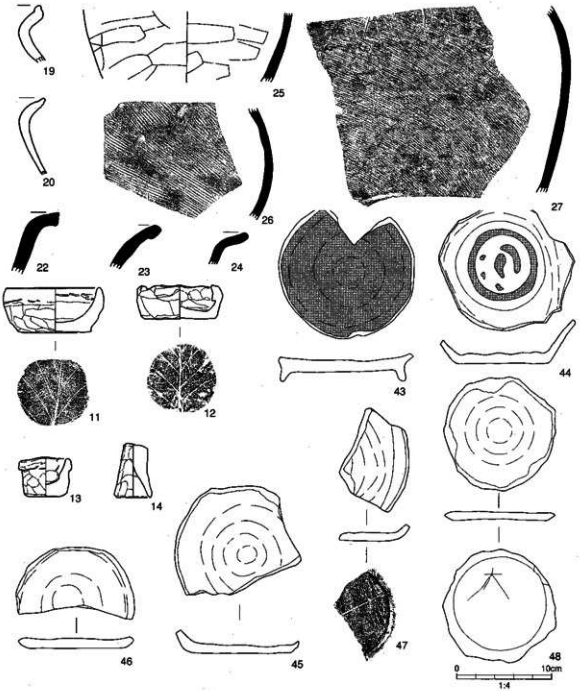


図75　A232（3）

体とした自然堆積による遺構の埋没を示している。床面には壁に周辺に炭化材が検出され、また、覆土中層～上層の住居跡中央から東壁側に0.10m程度の層厚の焼土の堆積が検出されている。

遺　　物　　出土遺物は多い住居跡である。しかし埋没後に掘返された後の堆積層にその主体をおき、土器の廃棄層として捉えられた。

所　　見　　床面からの炭化材の少量出土は、遺構廃棄時の不用材の焼却行為と捉えた。また、掘返しは不用材などの焼却と、遺物の集中出土から遺物廃棄場所として使われたと捉えた。覆土中層～上層の出土遺物は古墳時代後期の遺物であり、床面付近からの出土遺物は奈良・平安時代の遺物と時代の逆転を示すが、床面付近の出土遺物から奈良・平安時代に属する竪穴住居跡と捉えた。周辺に古墳時代後期の竪穴住居跡は検出されておらず、未調査区などにその時代の遺構の広がりがあるかも知れない。

表21　A232遺物観察表　　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型甕	119×72×133　口縁やや直立気味　頸部と胴部の間に稜を持つ　全体に厚手の作り　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－斜位のヘラケズリ　胴下半～下端－横位のヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴下半～下端－横位のヘラナデ	橙褐 良	砂粒	略完形	
2	土師器 小型甕	99×51×114　口縁直立気味　頸部中央に括れを持ち、胴との境に稜を持つ　全体に厚手の作り　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～底部－ヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外橙褐 内褐 良	砂粒	完形	
3	土師器 小型甕	104×61×98　口縁直立　頸部中央でやや括れ、胴部との境に稜を持つ　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下端－ヘラケズリ　底部－木葉痕　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下端－ヘラナデ	橙褐 良	砂粒	略完形	
4	土師器 小型甕	113×70×122　口縁直立気味　頸部緩やかな「く」の字状　全体的に厚手の作り　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下端－ヘラケズリ　底部－木葉痕はヘラケズリに消される 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外橙褐 暗褐 内褐 良	砂粒	完形	
5	土師器 小型甕	113×70×122　口縁やや直立気味　頸部緩やかに括れ胴部との境に稜を持つ　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下端－ヘラケズリ　底部－木葉痕はヘラケズリに消される 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外橙褐～ 暗褐 内褐 良	砂粒	略完形	
6	土師器 小型甕	116×(66)×(132)　口縁やや直立気味　頸部緩やかに括れる　全体的に厚手の作り　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴下半～下端－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	茶褐 良	砂粒	略完形	
7	須恵器 坏	146×91×37　ロクロ成形　器形やや歪みを持つ　体部外傾し口縁やや外反　浅く底部はやや広め 外面　体部下端～ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	灰茶褐 やや黒	砂粒	完形	
8	須恵器 坏	134×83×42　ロクロ成形　体部外傾 外面　体部下端～底部－回転ヘラケズリ	灰茶褐 やや黒	砂粒	完形	
9	須恵器 坏	133×82×40　ロクロ成形　体部外傾 外面　体部下端～底部－回転ヘラケズリ	外灰黒褐 内灰茶褐 やや黒	砂粒	完形	
10	須恵器 坏	122×45×32　ロクロ成形　底部やや丸味を持つ　体部外傾し口縁でやや内湾する　外面　体部下端～底部－回転ヘラケズリ	暗灰 黄	砂粒	完形	
11	土師器 鉢	98×78×48　口縁内湾　底部平らたい　全体的に厚手の作り 外面　口縁－横ナデ　体部－輪積痕を残し調整はほとんどされない　底部－木葉痕　内面　丁寧なナデ調整	暗褐 黄	砂粒 雲母	完形	
12	土師器 鉢	84×75×36　手捏ねによる歪な形の鉢 外面　指頭によるナデまたは押さえ　底部－木葉痕 内面　一部ヘラナデ	橙褐 黄	砂粒	完形	
13	十師器 ミニチュア鉢	51×50×41　手捏ね　歪な浅いコップ状を呈する　指頭によるナデ及び押さえ　外面　底部－木葉痕	橙褐 良	砂粒	完形	
14	土製品 ミニチュア	上径25×下径40×高さ57　台状を呈する　下半は脚状を呈しやや開く　指頭によるナデ及び押さえ			完形	
15	土師器 小型甕	109×－×(90)　口縁直立　頸部緩い「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－斜位のヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	暗褐～ 橙褐 良	砂粒	口縁～ 胴部片	
16	土師器 小型甕	(100)×－×(61)　輪積整形 外面　口縁－ナデ　胴部－指頭によるナデ 内面　口縁－ナデ　胴部－指頭によるナデ	褐褐色～ 黒褐色 良	細砂粒 長石細粒 雲母	口縁～ 胴部片	
17	土師器 小型甕	126×61×147　口縁やや外反　頸部「く」の字状　胴やや上半が張る　底部は平ら　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下半－縦位のヘラケズリ　下端－横位のヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部ヘラナデ	橙褐 黄	砂粒	略完形	

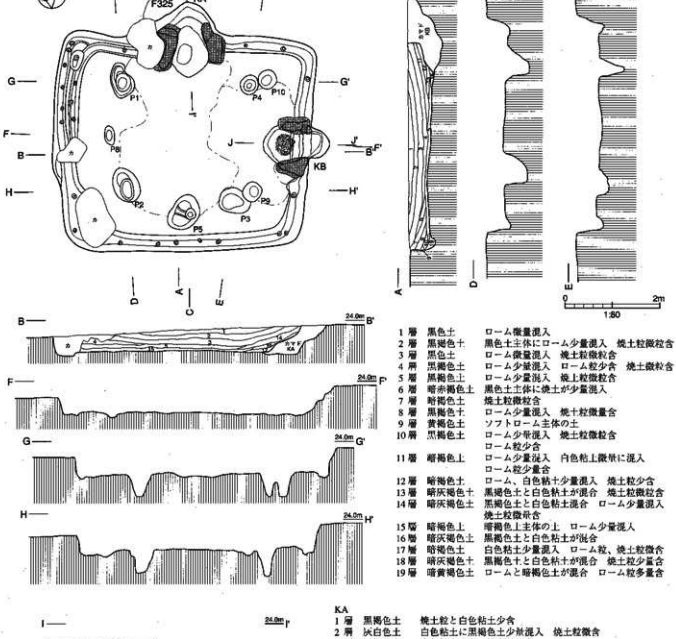
18	土師器 小型壺	(220)×－×(110) 外面　口縁－ナデ　頸部～肩部－ヘラケズリ後、ヘラナデ 内面　口縁－ナデ　頸部～胴部－ヘラナデ	橙褐色 良	細砂・長石・雲母細粒	口縁～胴部上半	
19	土師器 甕	－×－×－　口唇端はつまみ上げる 外面　口縁－ナデ　頸部～胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　口縁－ナデ　頸部以下－ヘラナデ	橙褐色 良	石英・雲母粒・赤色粒	口縁片	常総型
20	土師器 甕	－×－×－　口唇端はつまみ上げる 外面　口縁－ナデ　頸部～胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　口縁－ナデ　頸部以下－ヘラナデ	淡褐色 良	雲母・長石細粒やや緻密	口縁片	常総型
21	須恵器 甕	216×－×(125)　回転台　口縁大きく外反し外側下端に稜を持つ 頸部「く」の字状　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－平行タタキ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ナデ	灰 色	粗砂粒多	口縁～胴部	
22	須恵器 甕	－×－×－　輪積成形 外面　口縁－ナデ　頸部以下－平行タタキ目 内面　口縁－ナデ　頸部以下－回転台等の使用によるナデ	灰色 良・堅緻	白色粒 緻密	口縁片	瓶の可能性？
23	須恵器 甕	－×－×－　口縁は複合 口縁　内外面ともナデ	灰色 良	長石・赤色細粒	口縁片	常陸産
24	須恵器 甕	－×－×－ タタキ目が口縁まで施される	灰色 良	雲母細粒	口縁片	常陸産
25	須恵器 甕	－×－×－ 外面－ヘラケズリ　内面－ヘラナデ	灰色 良	長石・赤色粒やや粗	胴下半	
26	須恵器 甕	－×－×－　胴部－斜位の平行タタキ目	暗灰色 良	雲母・長石細粒	胴部片	常陸産
27	須恵器 甕	－×－×－ 外面－斜位の平行タタキ目 内面－外面タタキ成形後ヘラナデ	灰色 良	雲母・長石細粒	胴中位～下半	内面にスス乃至タール状付着物 常陸産
28	須恵器 短頸壺	(89)×－×(139)　短頸　口縁立ち上がる　胴上半張り急傾斜で底部に向けてすぼまる 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－器面剥離の為不明　胴下半－ヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	灰褐 やや悪	砂粒 雲母	口縁～胴部片	常陸産
29	須恵器 高台付鉢	(203)×30×50　回転台（ロクロ？）体部大きく外傾　口縁との境に稜を持ち口縁やや立ち上がる　高台部短い「ハ」の字状 外面　底部－ヘラ切り後回転ヘラケズリ	灰褐 やや悪	砂粒 雲母	4/5	常陸産 底部、体部外面スス付着
30	須恵器 高台付坏	－×(90)×30)　ロクロ成形　付高台 体部下端　高台接合部関際は回転ヘラケズリ 底部　回転ヘラケズリ後付高台	灰色 良	雲母・長石微細粒 緻密	体部～高台部 1/2	常陸産か？
31	須恵器 高台付坏	－×(90)×－　ロクロ成形　付高台 体部下端　高台接合部関際は回転ヘラケズリ 底部　回転ヘラケズリ後付高台	灰色 良	長石・石英細粒	体部～高台部 1/4	
32	須恵器 蓋	－×(76)×(28)　把手13　ロクロ成形 内外面ともロクロナデ　天蓋部はヘラケズリ 把手は宝珠状	灰色 良	細砂 比較的緻密	把手～天蓋部	
33	須恵器 蓋	(140)×(72)×35　把手30　ロクロ成形 内外面ともロクロナデ　天蓋部外面　回転ヘラケズリ	灰色 良	細砂・長石細粒 緻密	把手～天蓋部	
34	須恵器 蓋	(160)×80)×23)　ロクロ成形 内外面ともにロクロナデ　天蓋部外面　回転ヘラケズリ	灰色 良	長石細粒 比較的緻密	天蓋部	
35	須恵器 坏	(132)×－×(32)　ロクロ成形 体部下端及び底部欠損のため調整など不明	暗灰色 良・堅緻	緻密	口縁～体部	

36	須恵器 坏	(160)×－×(34)　ロクロ成形　体部下端－回転ヘラケズリ	暗灰色 良	緻密	口縁～ 体部片	
37	須恵器 坏	(116)×34×(72)　ロクロ成形　全体的に摩耗目立つ 体部下端　回転ヘラケズリ　底部　回転ヘラケズリ？	淡褐色 良	緻密	口縁～ 底部片	永田・不入 Ⅰ・Ⅱ期に器形 及び技法が近似
38	須恵器 坏	(142)×(80)×40　ロクロ成形 内外面ともロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り	灰色 良	雲母・ 石英細粒	口縁～ 底部片	常陸産
39	須恵器 坏	(128)×－×(51)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ？	灰色 良	緻密	口縁～ 底部片	
40	須恵器 坏	138×80×42　回転台（ロクロ？）体部外傾し上半でやや広く外反 外面　底部－ヘラ切り後ヘラケズリ？	灰褐 普	砂粒 雲母 小石	略完形	常陸産
41	須恵器 坏	138×72×40　ロクロ成形　体部外傾　口縁やや外反 外面　底部－回転ヘラケズリ	外灰黒褐 内灰褐 普	砂粒	3/4	
42	須恵器 坏	(134)×(80)×38　ロクロ成形　ロクロナデは丁寧に行われるためロクロ目は目立たない 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	灰色 良・堅緻	長石細粒	1／4	
43	須恵器 転用硯	長径 118×短径 113×器高21　器厚 10　須恵器高台付坏からの転用 内面の略全面が使用面 (須恵器)　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－ロクロナデ後、付高台	灰色 良	雲母・ 長石細粒 目立つ	5／6	常陸産
44	須恵器 転用硯	長径 109×短径 103×器高 34　器厚 9　須恵器高台付坏からの転用 内面全体が略使用面　底部外面も磨れる　(須恵器)　体部下端－回転ヘラケズリ　底部回転ヘラ切り後、底縁－手持ちヘラケズリ	暗灰色 良	長石 石英 やや粗	転用硯 として 完形	
45	須恵器 転用硯	長径 101×短径 83×器高12　器厚 7　須恵器坏からの転用 内面全面が使用面 (須恵器)　体部下端－ヘラケズリ　底部－静止ヘラケズリ	灰色 良	石英 雲母細粒	2／3	常陸産
46	須恵器 不明	長径 91×短径 －×器高 21　器厚 8 須恵器坏の底部周縁を打欠き整形する　用途不明の土製品	灰色 良	長石 雲母	1／2	
47	須恵器 不明	長径 －×短径 －×器高 21　器厚 6 須恵器坏の底部周縁を打欠き整形する　用途不明の土製品	灰色 良	長石 雲母	2／5	線刻「□」 底部外面
48	土師器 不明	須恵器坏の底部周縁を打欠き整形する　用途不明の土製品			転用品 として 完形	
49	鉄器 刀子	長 (62) ×幅 8×厚 3 6			刃～ 茎子	
50	鉄器 刀子	長 (25) ×幅 8×厚 3			刃部	

A233

検出地区　L5-47-4g、48-3g、57-2g、58-1gにわたって検出した。

遺　構　竈の改替を伴う拡張住居跡であり、ともに平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、一部には黒色土が混入している。KAから主柱穴間内に硬化面を認めた。床は壁際に対して中央がやや凹んでいる。支柱穴は各4基検出した。P1・P2は重複して使用しているが、P3・P4・P9・P10がどちらの竈に伴う柱穴であるか判然としない。



1 層　黒色土　ローム微量混入
2 層　黒褐色土　黒色土主体にローム少量混入　焼土粒微粒含
3 層　黒色土　ローム微量混入　焼土粒微粒含
4 層　黒褐色土　ローム少量混入　ローム粒少含　焼土微粒含
5 層　黒褐色土　ローム少量混入　焼土粒微粒含
6 層　暗赤褐色土　黒色土主体に焼土が少量混入
7 層　暗褐色土　焼土粒微粒含
8 層　黒褐色土　ローム少量混入　焼土粒微量含
9 層　黄褐色土　ソフトローム主体の土
10 層　黒褐色土　ローム少量混入　焼土粒微粒含
ローム粒少含
11 層　暗褐色土　ローム少量混入　白色粘土微量に混入
ローム粒少量含
12 層　暗褐色土　ローム、白色粘土少量混入　焼土粒少含
13 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混合　焼土粒微粒含
14 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土混合　ローム少量混入
焼土粒微量含
15 層　暗褐色土　暗褐色土主体の土　ローム少量混入
16 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混合
17 層　暗褐色土　白色粘土少量混入　ローム粒、焼土粒微含
18 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が混合　焼土粒多量含
19 層　暗黄褐色土　ローム土と暗褐色土が混合　ローム粒多量含

KA
1 層　黒褐色土　焼土粒と白色粘土少含
2 層　灰白色土　白色粘土に黒褐色土少量混入　焼土粒微含
3 層　黒褐色土　□色粘土少含　焼土粒微含
5 層　灰赤褐色土　焼土と白色粘土が混合
7 層　黒褐色土　白色粘土とローム少量混入　焼土粒微含
13 層　灰褐色土　白色粘土主体の土にローム土と黒褐色土少量混入
焼土粒及びローム粒微含
14 層　黒褐色土　白色粘土が微量混入　ローム粒少含
15 層　灰褐色土　黒褐色土と白色粘土混合　焼土粒微含
16 層　黒褐色土　白色粘土粒、焼土粒、ローム粒微含
17 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土混合　焼土粒少含
18 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム土が混合　焼土粒微含
19 層　黄褐色土　ソフトロームブロック

KB
1 層　黒褐色土　白色粘土が少量混入
2 層　黒褐色土　白色粘土を少含　焼土粒微含
4 層　暗灰褐色土　白色粘土と黒褐色土が混合　焼土粒微含
6 層　黒褐色土　白色粘土及び焼土粒少含
8 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が粗く混合
11 層　黒褐色土　白色粘土粒とローム粒少含
13 層　暗赤褐色土　黒褐色土と焼土が粗く混合　白色粘土粒を焼土粒微含
15 層　暗赤褐色土　黒褐色土に焼土が多量混入
16 層　黒褐色土　黒褐色土に焼土が少量混入
17 層　黒褐色土　焼土粒とローム粒少含

図76　A233

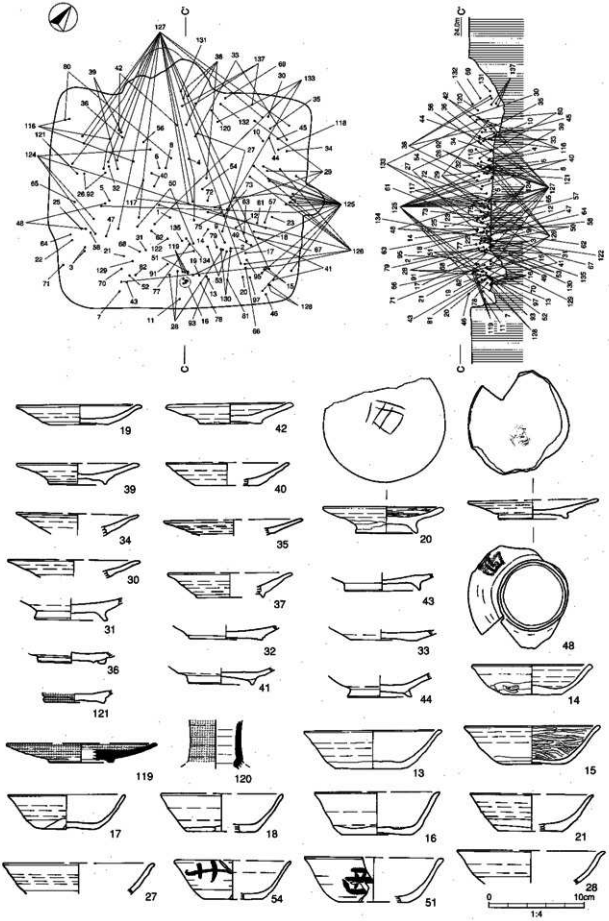


図77 A233（2）

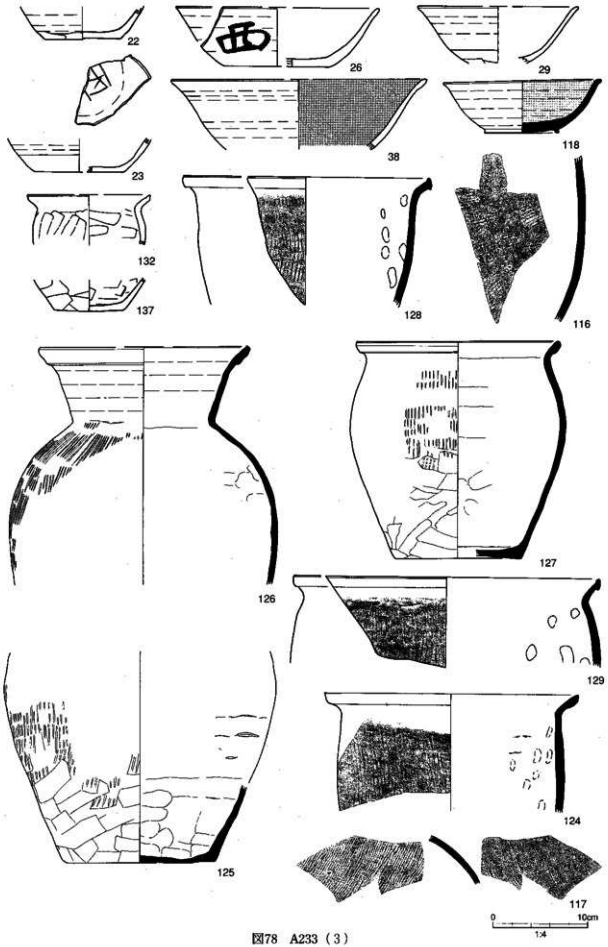

22
26
29
38
118
23
132
137
128
116
126
127
129
125
124
117
0
10cm
1:4

図78　A233（3）

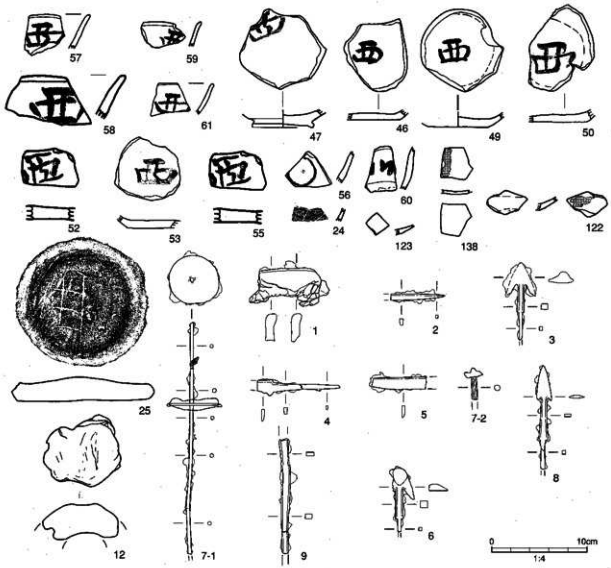


図79　A233（4）

KAに伴う遺構規模は、主軸4.50m×横軸5.38m×壁高0.41m、方位はN-37°-Wを示す。竈は北西壁中央に設けられ、竈袖や天井部は粘土を主体として築き、袖内壁の焼土化は強かった。竈ピットはやや大きく掘込まれるが、赤化した火床は検出できなかった。煙道部は壁を大きく掘込み、煙道の斜面には充填土を認めた。煙道立上がりの下位に火熱痕を認めた。周溝は竈袖下まで掘込まれている。P5は出入口に伴うものと捉えた。

KBに伴う遺構規模は、主軸(5.14)m×横軸(4.16)m×壁高－m、方位はN-55°-Eを示す。竈は北東壁中央に設けられ、KAと同様に粘土を主体として築き、、袖内壁の焼土化は強かった。竈ピットはやや浅く、坑底に赤化の強い火床を検出した。竈内まで周溝は巡り、周溝にかけて火床の広がりを認めた。煙道部下位は火熱痕を認めた。P6は出入口に伴うものと捉えた。

覆土は暗褐色・黒褐色土などの自然堆積である。

遺　物　　遺物の出土は極めて多く、特に土師器片を主体としており須恵器は少なかった。平面的には遺構全体からの出土であるが、垂直分布としては覆土中層～上層が多くなっている。墨書土器片などの出土も多く、墨書18点、線刻3点となっており、文字としては「西」が13点を数えている。

所　見　　住居跡廃絶後の埋没過程の凹みを利用した、不用となった土器片の廃棄場所として使用された様な遺構である。拡張住居跡と捉えたが、竈火床の遺存や周溝の巡り形からKBに伴う住居跡が最終形態ではないかと捉えた。

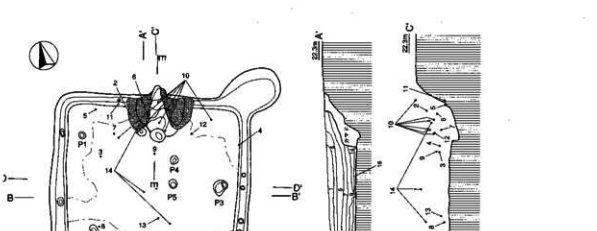
表22　A233遺物観察表　　(単位mm)

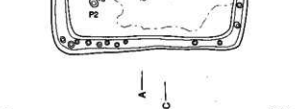
	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄器 不明	長 (28)×幅 60 ×厚 8 幅は内が、厚みのある板状の鉄器			―	
2	鉄器 刀子	長 (56)×幅3 ×厚5 　　2　2 断面が一様ではないことから、刀子の茎子と捉えた			茎子片	
3	鉄器 鏃	長 82×最大幅 32×厚 6			先端部	
4	鉄器 刀子	長 (86)×幅 12×厚 3 　　6　3			刃部～茎子	
5	鉄器 刀子	長 (56)×幅 13×厚 3			刃部片	
6	鉄器 鏃	長 (70)×幅 ―×厚 7 (柄)　　7×　7			先端部	
7-1	鉄器 紡錘車	紡錘部　径 52×厚 2　芯径 3 軸　芯　長 246×径 3 軸芯の両端は欠損する			略完形	
7-2	鉄器 不明	長 (8.5)×幅　頭頂部 18 　　6 一見、ボルト状の形態である。用途不明。			―	
8	鉄器 鏃	長 (108)×最大幅 11×厚 3～4			先端部	
9	鉄器 鏃？	長 (120)×幅 6～8×厚 4 断面形から鏃の柄と判断した。			茎子	3・6・8とは接合せず
12	土製品 羽口	長 (76)×径 ―×厚 32 遺存度が小さく、内径は復元できず	淡褐色 普	砂質	断片	
13	土師器 坏	144×77×41　ロクロ成形　口縁外反 外面　底部回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒 赤色粒 雲母	3／4	外面スス付着
14	土師器 坏	125×62×32　ロクロ成形　口縁外反　口唇部厚みを持つ　底部内面中央が盛り上がる　外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒 雲母	3／4	
15	土師器 坏	142×65×40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	明橙褐 普	砂粒 赤色粒 雲母	1／2	
16	土師器 坏	(132)×75×40　ロクロ成形　底部やや上げ底 外面　口縁－ロクロナデ　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ　　内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	暗褐色 良	長石 赤色粒 雲母細粒	2／5	内黒の可能性有
17	土師器 坏	(124)×66×(36)　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－回転糸切り後、底縁手持ちヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石 赤色粒	2／3	
18	土師器 坏	(130)×(64)×40　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－回転糸切り後、底縁手持ちヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石 赤色粒	2／5	
19	土師器 皿	131×62×21　ロクロ成形　口縁外反　底部やや上げ底 外面　体部下端～底部－回転ヘラケズリ	橙褐 やや悪	砂粒 雲母多	完形	

20	土師器 高台付皿	125×（台部径）65×28　回転台（ロクロ？）口縁やや内湾　口唇部やや厚みを持つ　高台部外端し中央に段を有する 外面　底部－回転ヘラケズリ　内面　縁らにヘラミガキ	橙褐色 普	砂粒 赤色粒 雲母	3/4	線刻「西」 底部内面
21	土師器 坏	(130)×(68)×39　ロクロ成形　内面のロクロナデは極めて丁寧 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後、底縁回転ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母 赤色細粒	口縁～ 底部	
22	土師器 坏	－×(80)×(35)　ロクロ成形　内面のロクロナデは極めて丁寧 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後、底縁回転ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母 赤色細粒	体部～ 底部	
23	土師器 坏	－×(94) ×(35)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　縁形後、丁寧なヘラミガキ	淡褐色 良	細砂 雲母 赤色細粒	体部～ 底部	線刻「西」 底部内面 内黒の可能性有
24	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	橙褐色 良	長石 雲母微粒	体部片	線刻「西？」 体部外面
25	土師器 小甕	底径 75×短径 69×器高（器厚）12 土師器坏の底部周縁を打欠き磨る　土製品として転用するが用途不明 （土師器付としての底径 70）	橙褐色 良	雲母 長石 赤色粒	底部片	線刻「西」 底部内面
26	土師器 坏	(216)×(110)×63　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後、底縁回転ヘラケズリ　内面　底部－整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 長石 赤色粒	1/3	内黒
27	土師器 坏	160×－×33　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　体部－整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	細砂 長石 赤色粒	口縁～ 体部	内黒
28	土師器 坏	156　－×35　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　体部－整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	長石 赤色粒 雲母細粒	口縁～ 体部	内黒
29	土師器 坏	170×－×60　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　体部－整形後、丁寧なヘラミガキ	淡褐色 良	雲母 赤色粒 緻密	口縁～ 体部	内黒
30	土師器 皿	(140)×－×60　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　体部－整形後、丁寧なヘラミガキ	茶褐色 黒褐色 良	長石 赤色細粒	口縁～ 体部	内黒の可能性有
31	土師器 高台付皿	－×78×(24)　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　底部回転ヘラケズリ後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 普	長石 雲母 赤色微粒	高台部	破損面は摩滅 内黒の可能性有
32	土師器 坏	－×(78)×(15)　ロクロ成形 外面　ロクロナデ　底部－回転ヘラケズリ後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 普	長石 雲母 赤色微粒	高台部	内黒の可能性有
33	土師器 高台付皿	－× 71×(12)　ロクロ成形　ロクロナデ　高台剥落 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ後、付高台 内面　長敬後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 顔	雲母 赤色微粒	底部	高台部剥落
34	土師器 皿	－×135×(23)　巻上げ成形後、ロクロ整形 外面　整形後、部分的にヘラミガキ 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	口縁～ 体部	
35	土師器 皿	(146)×－×(16)　ロクロ成形 外面　ロクロナデ 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	口縁～ 体部	内黒の可能性有
36	土師器 高台付皿	－×(72)×(12)　ロクロ成形 外面　体部下端までロクロ整形痕　底部－回転糸切り後、付高台 内面　底部－整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	細砂 赤色微粒	高台部	内黒の可能性？
37	土師器 高台付皿	(132)×(72)×26　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ　底部－切離し後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	茶褐色 良	長石 赤色細粒	口縁～ 高台部	内黒の可能性有
38	土師器 椀	(272)×－×(75)　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ　下端－回転ヘラケズリ 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	長石 雲母微粒	口縁～ 体部	内黒

40	土師器 皿	(130)×(66)×24　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ　下端－回転ヘラケズリ後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	長石 雲母 赤色細粒	1/4	高台部	内黒の可能性有
41	土師器 高台付皿	－×68×(18)　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ　底部－回転糸切り後、付高台 内面整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	長石 雲母 赤色細粒	高台部	内黒の可能性有	
42	土師器 皿	131×67×22　回転台（ロクロ？）口唇内側ぎ状　底部は高台状に やや高さを持つ　外面　底部－回転糸切り	橙褐色 普	砂粒 赤色粒 雲母	4/5		
43	土師器 高台付皿	－×(80)×(17)　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ　底部－回転糸切り後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	茶褐色 良	雲母 長石 赤色微粒	体部～ 底部	内黒の可能性有	
44	土師器 高台付皿	－×(68)×(25)　ロクロ成形　高台は外側に張出し気味 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	長石 赤色微粒 雲母微粒	体部～ 底部	内黒の可能性？	
45	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母 長石 赤色細粒	底部	墨書「西」 底部内面	
46	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後、底縁回転ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母 赤色細粒	底部	墨書「西」 底部内面	
47	土師器 高台付皿	－×64×(19)　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ　底部－回転糸切り後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 普	雲母 長石 赤色微粒	体部～ 底部	墨書「西」 底部内面	
48	土師器 高台付皿	(138)×74×20　ロクロ成形　あるいは高台付坏か？ 外面　体部－ロクロナデ　底部－回転糸切り後、付高台 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 普	雲母 長石 赤色微粒	2/3	墨書「西」 体部外面　正位 内黒の可能性有	
49	土師器 坏	－×　64×(17)　ロクロ成形　ロクロナデ　二次焼成のため赤化 外面　下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	橙褐色 良	雲母 長石 赤色微粒	底部	墨書「西」 底部内面	
50	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	淡褐色 良	雲母微粒 長石 赤色細粒	底部	墨書「西」 底部内面	
51	土師器 坏	(146)×(74)×47　－×－×－ 外面　体部－ロクロナデ　下端－回転ヘラケズリ　底部回転糸切り後、 回転ヘラケズリ　内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 長石 赤色微粒	1/4	墨書「西」 体部外面　正位 内黒の可能性有	
52	土師器 坏	(124)×(64)×41　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後、回転ヘラケズ リ　内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	1/4	墨書「什」 体部外面　正位	
53	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	底部	墨書「西」 底部内面	
54	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　底部－回転ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	橙褐色 普	雲母 赤色微粒	底部	墨書「西」 底部内面	
55	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　底部－回転ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	底部片	墨書「西」 底部内面	
56	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部－ロクロナデ 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	淡褐色 良	雲母微粒 緻密	体部片	墨書「□」 体部外面	
57	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　ロクロナデ 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	口縁片	墨書「西」 体部外面　正位 内黒の可能性有	
58	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　ロクロナデ	橙褐色 良	雲母 赤色微粒	口縁片	墨書「西」 体部外面　正位	

60	土師器 坏	－×－× －　　ロクロ成形　ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　整形後、丁寧なヘラミガキ	橙褐色 良	雲母 長石微粒	口縁片	墨書「竹」 体部外面　正位 内黒の可能性有
61	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形　ロクロナデ	暗褐色 茶褐色 良	雲母微粒	口縁片	墨書「西」 体部外面　正位
116	須恵器 甕	－×－× －　　紐積上げ 外面　斜位の平行タタキ目 内面　当て具痕	橙褐色 良	雲母 赤色粒	胴部	外面全体自然釉 湖西産か？
117	須恵器 甕	－×－× －　　紐積上げ　肩部に自然釉 外面　タテに近い斜位の平行タタキ目　内面　当て具痕（晴海波文）	灰色 極めて 堅緻	白色粒 黒色粒 緻密	胴部	外面一部自然釉 湖西産か？
118	灰釉陶器 高台付椀	167×（台部径）79×56　ロクロ成形　全体に丸みを有し、口縁で外反 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	灰色 堅緻	黒色粒 白色粒	略完形	坏釉はハケ塗 K-14か？
119	灰釉陶器 高台付皿	159×69×20　　ロクロ成形 体部大きく外傾し口縁やや内洲　高台は、低い付け高台	外緑灰～ 灰 内緑灰 良	黒色粒 白色粒	1/2	体部内外面の一 部に釉がかかる
120	灰釉陶器 壺	－×－×(52)　　ロクロ成形　長頸の壺か？ 胴部との境で少し膨らみを持ったあと屈曲する	外緑灰 内灰 良	黒色粒 白色粒	頸部片	
121	緑釉陶器 高台付皿	－×－×－　　ロクロ成形 高台やや上げ底（高台はケズリ出しか？）　素地は柔らかく脆い	乳白色： 緑色混 普	20mmの 小礫混入 緻密	体部～ 底部	
122 ～ 123	緑釉陶器 高台付皿	－×－×－　　ロクロ成形	乳白色： 緑色混 普	20mmの 小礫混入 緻密	体部片	121と同一個体
124	須恵器 甕	(266)×－×－　紐積上げ 外面　口縁－ナデ　胴部－平行タタキ目 内面　口縁－ナデ　胴部－タタキ後ナデ　タタキ整形の当て具痕残	茶褐色 良	長石 赤色粒	口縁～ 胴部	
125	須恵器 甕	－×160×(225)　　胴上半がやや張る　平底 外面　胴下半－平行タタキ　下端－ヘラケズリ 内面　胴下半～下端－ヘラナデ、指頭によるナデ圧痕（輪積痕有り）	外明褐 内灰褐 悪	砂粒 褐	胴部～ 底部片	
126	須恵器 甕	(219)×－×(254)　　外反する折り返し口縁　頸部屈曲　胴上部張る 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半平行タタキ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ、指頭によるナデ圧痕	赤褐 普	砂粒	口縁～ 胴部片	
127	須恵器 甕	(213)×133×231　　口縁外反し外面に稜を持つ　頸部短く緩やかに括 れる　胴上部張り底部に向けなだらかに傾斜 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－平行タタキ　下半～下端－ヘラケ ズリ　　内面　口縁～頸部－横ナデ	灰白 やや悪	砂粒	1/3	
128	須恵器 甑	(130)×　－×(137) 外面　口縁－ナデ　頸部以下－タテのタタキ目 内面　タタキ整形後、回転台使用によるナデ　当て具痕残	灰色 良・堅緻	長石 黒色粒	口縁～ 胴部	
129	須恵器 甕	(161)×－×(96)　　紐積上げ 外面　口縁－ナデ　頸部以下－タテのタタキ目 内面　タタキ整形後、回転台使用によるナデ　当て具痕残	黒灰色 良	長石 赤色細粒	口縁～ 胴部	
130	須恵器 甕	－×　－×－　　紐積上げ 外面　胴部－平行タタキ目 内面　タタキ整形後、回転台使用によるナデ　当て具痕残	黒褐色 普	長石 赤色細粒	口縁～ 胴部	
132	土師器 甕	(128)×　－×(54) 外面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ 内面　口縁－ナデ　胴部－ヘラナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁～ 胴部	
138	緑釉陶器 皿	－×－×－　　ロクロ成形 器面の剥落があるが、本来、内外面にに釉薬がかかっていたと思われる	乳白色 良	小礫混入	体部片	





1 層　暗褐色土　褐色土を少量斑状に混入
2 層　灰褐色土　白色粘土純層
3 層　暗灰褐色土　白色粘土と暗褐色土が混合
4 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が荒く混合　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　黒色土が滲むように混入　ローム微粒少含
6 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったロームが混合
7 層　黒褐色土　黒色土は少量と暗褐色土が混合
ロームの微粒がやや多含
8 層　黒黄褐色土　黒褐色土とロームが混合
9 層　黒褐色土　少量の黒褐色土と暗褐色土が混合
炭の含有は不均一
10 層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームが混合　壁崩壊層
11 層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームが混合　ローム微粒多含
12 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混合ローム微粒多含
13 層　暗褐色土　暗褐色土と少量のロームが混合する
14 層　暗褐色土　黒色土が滲むように極少含　ローム微粒散点
15 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土混合　壁崩壊層
16 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色土均一に混合
17 層　暗黄褐色土　周溝を突き崩めていた土が崩れた物
壁板を引き抜いたときに破崩

1 層　暗褐色土　白色粘土が少量滲むように混合
2 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の白色粘土がほぼ均一に混合
3 層　灰色土　2層中に崩れ込んだ白色粘土のブロック
4 層　暗灰褐色土　暗褐色土と白色土がほぼ均一に混合
5 層　暗褐色土　白色粘土が極少量滲むように混合
6 層　灰褐色土　多量の白色粘土と少量の暗褐色土が混合
7 層　暗褐色土　住居中央からの自然堆積層
8 層　暗褐色土　住居中央からの自然堆積層
9 層　灰色土　きれいな白色粘土の純層　天井を押しつぶした物
10 層　赤灰色土　白色粘土が火熱を受けて赤色化した物とススが混合
11 層　暗灰褐色土　薄った白色粘土と暗褐色土がほぼ均一に混合
12 層　暗黄灰褐色土　薄ったロームと白色粘土少量が均一に混合
13 層　黒灰褐色土　黒色土と薄った白色粘土がほぼ均一に混合

図80　A236

A236

検出地区　L4-99-4gにて検出した。

遺　構　主軸3.44m×横軸4.20m×壁高0.56m、方位はN-14°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし全体的に硬化し、特に、住居跡中央に良好な硬化面を認めた。主柱穴は配置上ではP1・P2が相当するが小規模で柱穴かは判然としなかった。P3は出入口に伴うものであろうか。竈袖下まで全周する周溝内に、壁柱穴を18基検出した。竈は北壁中央に設けられ、粘土を主体として築かれていたが、袖内壁は赤変する程度であった。竈ピット内に火熱をかなり被った痕跡は窺えたが、火床は赤化はしていなかった。煙道部の壁への掘込みは浅く、急傾斜で立上がってる。覆土は暗褐

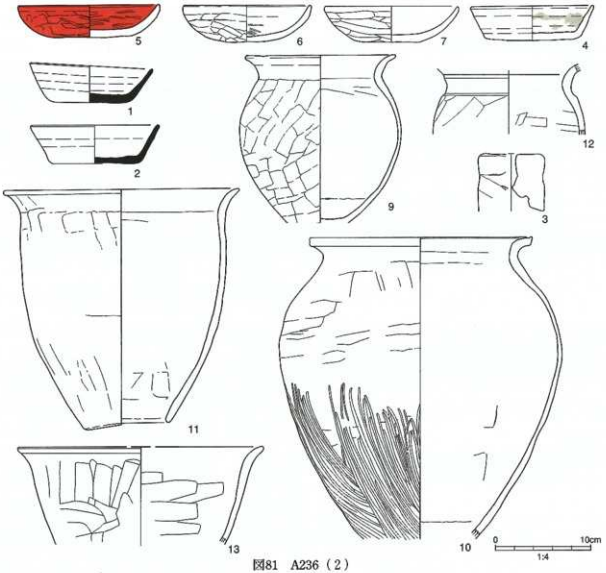


図81　A236（2）

色土・黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　　出土量は住居跡としては少なく、土師器小片が殆どであった。10・11が竈周辺から出土している。

所　見　　出土遺物はやや古い形態を有しているが、奈良・平安時代の所産と捉えた。北東コーナーに突出したピットが設けられているが、本住居跡に伴うかは捉えきれなかった。また、覆土最上層にはD331が営まれていた。

表23　A236遺物観察表　　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	130×82×39　ロクロ成形　箱形的　厚底 外面　底部－回転ヘラ切りによる切り離し	灰 良	雲母細 比較的 緻密	3/2	常陸産　見込面 口唇部よく磨かれている。転用硯の可能性あり
2	須恵器 坏	136×90×41　ロクロ成形　器形は薄手 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－手持ちヘラケズリ	淡褐 良	長石 石英粒 雲母細粒	2/5	常陸産
3	土製品 支脚	上径(70)×下径－×高さ(61)　重量74.4g 外面　指頭による成形の後ヘラ状工具によるナデ	橙褐 普	砂 長石細粒	一部 残存	

4	土師器 坏	128× 36× 99　ロクロ成形　断面逆台形状を呈する　体部下端に小さい結れを持つ　底部ーヘラケズリ	暗橙褐 普	砂粒 赤色粒多 白色粒	4/5	外面スス付着 内面タール状物付着
5	土師器 坏	148× ー× 34　体部外傾　口縁やや内湾　底部やや丸みを帯る　比較的厚手の作り　外面　口縁ー横ナデ　体部～底部ーヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　口縁～体部ー横ナデ後ヘラミガキ　底部ーヘラナデ後ヘラミガキ	橙褐 普	砂粒 雲母	4/5	内外面赤彩 一部スス付着 器面やや摩耗
6	土師器 坏	133× ー× 39　丸底　体部外頓し、口縁やや内湾 外面　口縁ー横ナデ　一部輪積痕　体部ーヘラケズリ 内面　口縁ー横ナデ　体部ーヘラナデ後ヘラミガキ	暗橙褐 普	砂粒	略完形	内外面スス付着
7	土師器 坏	(140)× (60)× 38　丸底で半球形　非ロクロ成形 外面　体部～底部ーヘラケズリ後部分的にヘラミガキ	淡褐（黒斑あり） 良	緻密 (やや細粒目立つ)	1/4	古墳時代後期の須恵器の器形
9	土師器 甕	155× 60× 179　口縁外反　頸部ゆるい「く」の字状　胴やや上半に膨らみを持つ 外面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ーヘラケズリ 内面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ーヘラナデ	暗橙褐 普	砂粒	完形	外面コゲ、スス付着
10	土師器 甕	233× ー× 323　口縁やや受け口状　上端はつまみ上げられる　胴上半が張る　外面　口縁～頸部ー横ナデ　胴上半ーヘラナデ　胴下半ーヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　口縁～頸部ー横ナデ　胴上半ーヘラナデ	外明褐～暗褐 内暗褐 普	粗砂粒 雲母	1/2	常総甕
11	土師器 甑	246× 85× 255　口縁外反　胴中位やや膨らみつつなだらかに底部にいたる　単孔 外面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ーヘラケズリ後ナデか？ 内面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ーヘラナデ	赤褐 普	砂粒	略完形	黒斑有り
12	土師器 甕	ー× ー× (68)　輪積 外面　口縁～頸部ーナデ　胴上半ーヘラケズリ後ヘラナデ	赤褐 良	細粒 長石細粒 緻密	口縁～ 胴上部	古墳時代後期の須恵器を引く器形
13	土師器 甑	260× ー× ー　単孔式 外面　胴部ーヘラケズリ後ヘラナデ　内面　胴部ーヘラナデ	橙褐 良	砂やや目立つ　比較的緻密	口縁～ 胴上部	

A237

検出地区　L4-87-2g、88-1gにて検出した。

遺　構　主軸3.41m×横軸3.80m×壁高0.70m、主軸方位はN-12°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み、ハードローム上部を床面としている。全体が硬化し、特に住居跡中央には良好な硬化面を認めた。主柱穴は検出されず、竈袖下まで全周する周溝内に６基の壁柱穴を検出したが、東壁側のみに認めた。竈は北東壁の中央に設けられ、粘土を主体として築かれていた。竈袖内壁は赤変する範囲が広く捉えられた。竈ピットは掘込まれていないが、焚口部に溝状の掘込みを検出した。火床は赤変するが、赤化には至っていない。煙道部は壁はやや奥深く掘込み、強い傾斜をもって立上がる。天井は上から押潰された様に崩落していた。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　土師器小片を主体として遺構全体から出土しており、床面直上の遺物は少ない傾向が窺えた。また、図示は出来なかったが、竈周辺を除く遺構全域から、玉砂利状の小礫が多量に出土した。覆土上層に比し床面に下がると小礫が僅かに大きくなる傾向が認められ、出土傾向は床面からも多量に出土していた。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。小礫は埋没過程全体で流込んでいることが出土傾向から窺えたが、廃棄なのか屋根の押さえに用いたものか判断的なかった。

A238b

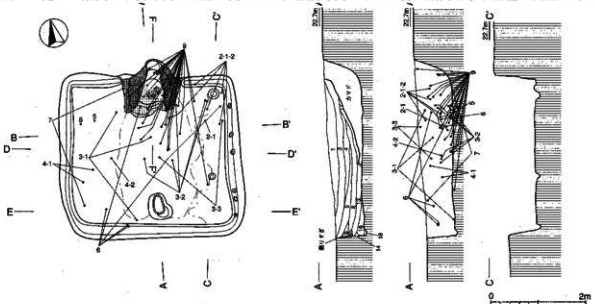
検出地区　L4-97-4g・98-3g・L5-7-2g・8-1gにわたって検出した。

遺　構　A238aと重複する竪穴住居跡である。主軸4.17m×横軸4.17m×壁高0.94m、方位はN-69°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを深く掘込んだ地床であり、住居跡全体に広く硬化面を認めた。主柱穴は４基検出され、竈袖下まで巡る周溝内に10基検出した。主柱穴は柱穴上部が広が

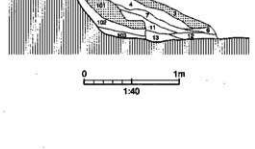
ることから、柱材の引抜きが行われたと捉えた。P5は出入口に伴い、P7は貯蔵穴とも想定された。竈は北西壁中央に設けられ、粘土を主体として築かれていた。竈袖の内壁は焼土化し、床と高低差のない火床は赤化が強かった。煙道部は大きく壁を掘込んで、赤化した範囲が広かった。焚口部に小ピットが掘込まれる竈であった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　　物　　出土遺物は土師器小片を主体とし、住居跡から全体的に散在して出土している。床面上の遺物出土は少なかった。

所　　見　　奈良・平安時代の所産と捉えたが、当該時代でもやや古い傾向を示す土器の出土である。



1 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土混合　ローム微粒少含
2 層　暗褐色土　褐色土少含　ローム微含
3 層　黒褐色土　黒色土と褐色土混合　薄ったローム粒少含
4 層　暗灰褐色土　暗褐色土と薄った白色粘土混合
5 層　暗褐色土　褐色土が少量に斑状含　ローム少含
6 層　暗褐色土　ローム少含
7 層　暗褐色土　薄ったローム少含
8 層　暗褐色上　ローム微粒土ロム少粒やや多含
白色粘土が滲むように混合
9 層　暗褐色土　薄ったロームが斑少量混合
10 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったローム混合　壁崩壊層
11 層　暗褐色土　褐色土混入　ロームが少量滲むように混入
12 層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームと褐色土が斑状に混入
ローム微含
13 層　黒褐色土　黒色土と少量の暗褐色土混合
ローム微含　白色粘土少含
14 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったローム混合
15 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の薄ったローム混合
16 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土がほぼ均一に混合
薄った白色粘土含　ロー ム少含
17 層　暗灰褐色土　暗褐色土と薄った白色粘土混合
18 層　暗褐色土　周溝内の覆土　整板を引き抜いて掘めていた土



1 層　暗褐色土　暗褐色と白色粘土が滲むように均一に混入
3 層　灰褐色土　白色粘土と暗褐色土混合
4 層　暗褐色土　白色粘土が極少含
6 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の黒褐色土混合　白色粘土少含
7 層　暗褐色上　茶褐色土主体　白色粘土少含
11 層　灰褐色土　暗褐色土と少量の白色粘土がほぼ均一に混合
12 層　暗褐色土　暗褐色土主体
13 層　黒褐色土　暗褐色土に炭化粒多含　焼土微粒少含
14 層　暗褐色土　暗褐色土主体
15 層　暗褐色土　薄ったローム少含
18 層　黒色土　黒色土主体
19 層　暗灰褐色土　白色粘土主体　暗褐色土少含
101 層　灰色土　白色粘土ブロック
102 層　黒赤灰色土　白色粘土が火熱を受けて赤色化した物とスス多含
103 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったロームがほぼ均一に混合
104 層　暗黄灰褐色土　薄ったロームと少量の白色粘土がほぼ均一に混合

図82　A237

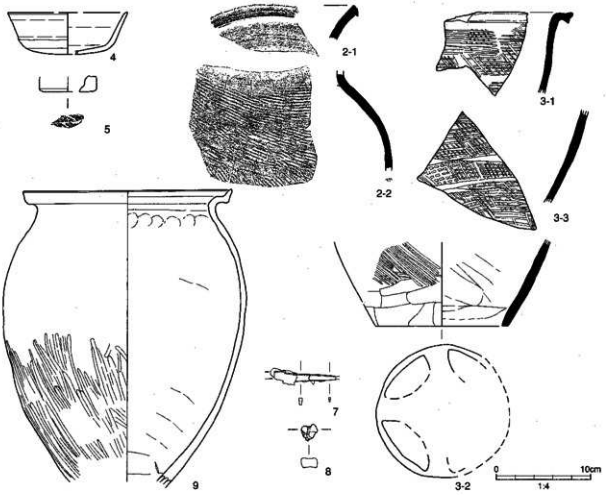
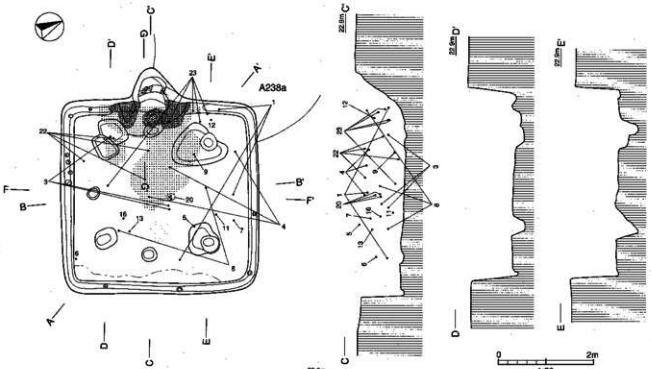


図83　A237（2）

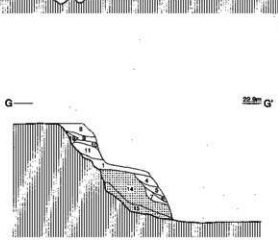
表24　A237遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
2	須恵器 甕	－×　－×－ 口縁は複合口縁　口唇はつまみ上げる 口縁～頸部－内外面ともナデ	灰色 良	雲母 石英	口縁・ 頸部～ 胴部	一部に「磨れ」 転用硯としたか 常陸産
3	須恵器 甑	－×(140)×(92)　口縁は折れ曲がるように外反　口唇は直立 外面　頸部から横位・格子状のタタキ目　胴下半－斜位の平行タタキ目 下端－横位のヘラケズリ　　内面　ヘラナデ	灰褐色 普	石英 白色粒	口縁・ 胴部～ 底部	
4	土師器 坏	(126)×(90)×45　ロクロ成形　やや箱形で、丸底気味　全体ロクロナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－切離し後、手持ちヘラケズリ	茶褐色 良	比較的 緻密	2/5	
5	手捏ね 器形不明	－×(58)×(16)　坏か？ 外面　指頭痕　底部－木葉痕　内面は剥落のため不明	暗褐色 良	砂粒多 長石 赤色粒	底部	
7	鉄器 刀子	長　(64)×　幅　8×厚3 8　2			刃～ 茎子	
8	鉄器 不明	長　8×　幅　8×厚8 何かの部品と思われるが、想定できない			細片	
9	土師器 甕	219×－×(315)　口縁上端つまみ上げる　頸部は大きく屈曲 外面　口縁～頸部－ヨコナデ　胴上半－ヘラナデ　胴下半～下端－ヘラミガキ　　内面口縁～頸部－ヨコナデ　胴－ヘラナデ	橙褐色 不良	粗砂粒多 雲母	3/4	常総型



1 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土の混合　ローム微粒含
2 層	暗褐色土	褐色土が斑状に少量混入
3 層	暗褐色土	焼土微粒微含　ローム微粒含
4 層	暗褐色土	褐色土が少量滲むように混入　白色粘土滲むように含 焼土微粒含　ローム微粒微量含
5 層	暗褐色土	褐色土が均一に混合　ローム微粒多含　焼土微粒、 炭化物微粒少含
6 層	暗灰褐色土	薄った白色粘土が均一に混合　焼土微粒微含
7 層	暗褐色土	褐色土が均一に混合　ローム小粒、ローム微粒含 焼土微粒微含
8 層	暗褐色土	少量の薄ったロームの混合　壁際で黄色が少し強い
9 層	暗褐色土	少量の薄ったロームが均一に混合　ローム微粒微含 焼土微粒含
10 層	暗褐色土	少量の薄ったロームの混合
11 層	暗褐色土	少量の薄ったロームの混合　焼土微粒微含
12 層	暗褐色土	少量の薄ったロームの粘合　若干黄色が強い
13 層	暗褐色土	少量の薄ったロームの混合
14 層	黄色土	ロームブロックもしくは壁の掘りすぎか？
15 層	暗褐色土	極少量の薄ったロームの混合　ローム微粒少含
16 層	暗褐色土	褐色土、極少量の薄った白色粘土混合　焼土微粒多含
17 層	暗褐色土	褐色土の混合　極少量の白色粘土滲むように含む 焼土微粒少含
18 層	暗黄灰褐色土	ロームブロック、白色粘土ブロック、暗褐色土の混合
19 層	灰色土	白色粘土ブロック　カマド天井の一部
20 層	暗灰褐色土	白色粘土の混合　カマド崩壊層
21 層	暗灰褐色土	白色粘土の混合　カマド崩壊層



1 層	暗灰褐色土	白色粘土と混合
4 層	暗褐色土	白色粘土僅かに含む
5 層	暗灰褐色土	暗褐色土と少量の白色粘土の混合
6 層	暗灰褐色土	暗褐色土主体　白色粘土微含
7 層	暗灰褐色土	暗褐色土主体の土に白色粘土混合
8 層	黒褐色土	
9 層	暗褐色土	
10 層	暗褐色土	極少量の薄ったロームの混合
11 層	黒灰色土	黒色土と少量の白色粘土の混合
14 層	灰色土	白色粘土ブロック　天井部崩落したもの
15 層	暗赤灰色土	火熱を受け赤色化した白色粘土 天井部、その内側の崩落したもの
19 層	暗黄褐色土	薄ったローム主体 煙道付近の壁が崩れて流れ込んだもの

図84　A238

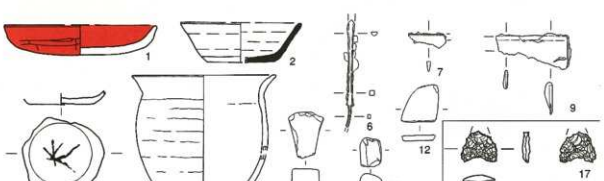


図85　A238（2）

表25　A238遺物観察表

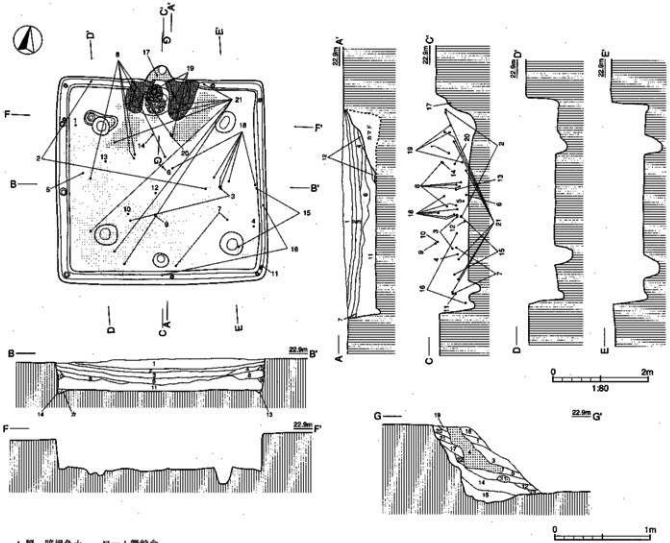
（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(160)×－×(32)　非ロクロ成形　半球型で丸底 外面　口縁ーナデ後部分的にヘラミガキ　体部ーヘラケズリ 内面　丁寧なヘラミガキ	橙褐 良	比較的 緻密	1/3	赤彩
2	須恵器 坏	(127)×(70)×42　ロクロ成形 外面　体部下端ー回転ヘラケズリ　底部ー回転ヘラケズリ	暗灰 良	砂粒 スコリア 雲母 細粒	1/5	
3	土師器 坏	－×66×(14)　ロクロ成形 外面　体部下端ー回転ヘラケズリ　底部ー回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面　剥面荒れている	橙褐 良	雲母微細 粒 緻密	底部	墨書「　」 底部外面
6	鉄器 鏃	長 (116) ×幅6×厚 4 5×　4			茎子	
7	鉄器 刀子	長 (40)×幅 (16)×厚 3			刃部片	
9	鉄器 鎌	長 (80)×幅 (36)×厚 3			刃部片	
12	石製品 砥石	長さ(38)×幅35×厚さ5　重量13.3g 表裏及び両側面に使用痕あり			1/2	砂岩 石包丁転用
13	石製品 砥石	長さ(49)×幅37×厚さ22　重量48.9g 表裏及び両側面6面に使用面で、頭部にも使用した形跡がある			1/2	流紋岩 火熱痕あり
14	石製品 砥石	長さ31×幅23×厚さ16　重量4.2g 自然礫状態の軽石を使用していて、特に際だった使用面は見られない			完形	軽石
17	石器 石鏃	長軸(12)×短軸14×厚さ3　重量0.5g 基部に抉入の無茎鏃（凹基無茎鏃）　両面調整		1/2	黒曜石	
22	土師器 甕	150×－×(130)　口縁外反　口縁部に最大径を持つ　胴上半に極小さい膨らみを持ち下半までは緩やかに、下端は急傾斜ですぼまる 外面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ー輪積痕を残し粘土のひび割れも多く見られる　内面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ーヘラナデー部輪積痕	暗褐 普	砂粒 白色粒	1/3	

A239

検出地区　L5-8-3・4gにて検出した。

遺　構　主軸4.35m×横軸4.40m×壁高0.68m、方位はN-12°-Eを示す。平面形は、方形に近い隅丸方形である。ハードロームまでを掘込んだ地床であり、住居跡中央がやや凹むものの略平坦であり、全



1 層　暗褐色土　　ローム微粒含
2 層　暗褐色土　　極少量の黒色土と混合　ローム小粒、微粒含ロームブロックの大数点混入
3 層　黒色土　　暗褐色土少量混入　ローム微粒少含　ローム小粒微含
4 層　暗褐色土　　ローム微粒多含
5 層　暗褐色土　　極少量の黒色土と混合　薄ったローム極少量含　ローム微粒微含
6 層　黒褐色土　　黒色土と暗褐色土の混合　ローム微粒少含　ローム小粒微含
7 層　暗褐色土　　少量の薄ったロームを滲むように含む　壁、崩壊層と考えられる
8 層　黒褐色土　　黒色土と暗褐色土の混合　ローム微粒多含
9 層　暗褐色土　　壁際にローム微粒、小粒多含　焼土微粒含
10 層　暗褐色土　　極少量の薄ったロームと混合　壁、崩壊層
11 層　暗褐色土　　黒色土　黒褐色土　暗黄褐色土
　　黒色土、暗褐色土、薄ったロームが混合　ローム微粒、ローム小粒少含　炭化物微粒含　床直に焼土範囲あり
12 層　黒灰褐色土　　黒色土と白色粘土の混合　カマドが潰れたときの土で流れ込んだもの、押しつぶされたものと考えて良い。
13 層　暗褐色土　　少量の薄ったロームの混合　微板を抜いたときに崩壊し埋積した土
14 層　暗褐色土　　薄ったロームの混合　13層と同じ性格の土

1 層　暗褐色土　　極少量の白色粘土微粒と混合
3 層　黒褐色土　　黒色土と暗褐色土と極少量の白色粘土と混合
4 層　灰色土　　白色粘土ブロック　天井部分　極少く崩落した天井と考える
5 層　暗褐色土　　少量の白色粘土の混合
11 層　灰色土　　白色粘土ブロック　天井部分の崩落したもの
12 層　暗褐色土　　住居中央からの流れ込み
13 層　暗褐色土　　住居中央からの流れ込み
14 層　暗赤灰褐色土　　火熱を受け暗い赤色に変色した白色粘土が主体
15 層　黒赤灰褐色土　　暗褐色土と14層と炭少量の混合
16 層　暗褐色土　　白色粘土微粒、焼土微粒少含
17 層　黒褐色土　　黒色土と暗褐色土の混合　白色粘土微含
19 層　暗褐色土　　少量の白色粘土の混合
20 層　暗褐色土　　少量の薄ったロームの混合　滲むように僅かに白色粘土を含む
21 層　暗褐色土　　少量の薄ったロームの混合　滲むように僅かに白色粘土を含む
22 層　暗灰褐色土　　暗褐色土と少量の白色粘土の混合

図86　A239

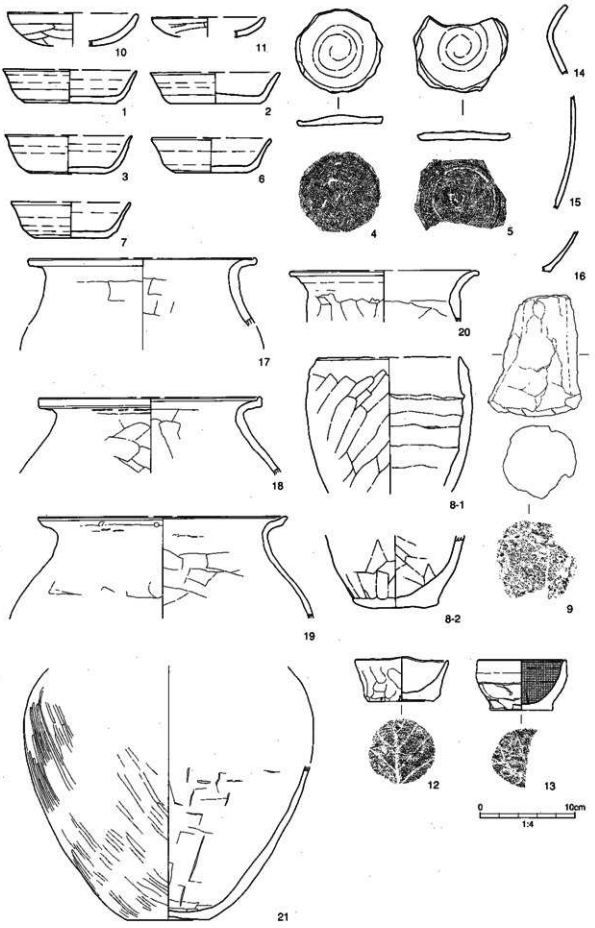


図87 A239（2）

体的に硬化面を認めた。主柱穴は4基検出され、竈袖下まで巡る周溝内に11基の壁柱穴を検出した。P5は出入口に伴うものである。竈は北壁中央に設けられ、粘土を主体として築かれていた。竈袖の内壁の焼土化は殆ど見られなかった。竈ピット坑底には、一部小範囲に赤化が認められ、大半は被熱し赤色硬化する直前の火床が検出された。煙道部の壁への掘込みは浅く、一部は火熱のため赤変していた。覆土は不用材の焼却後の人為的投入土による埋没後、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺構廃絶後に不用材の焼却を行ったのか、住居跡に焼土層がたいせきしている。焼却に対する投入土による消火のためか、投入土中には赤化した所もあった。

遺　　物　　床面からの出土は少なく、覆土下層～上層にかけて出土しているが、住居跡としては少ない。竈内出土の9は、竈ピット坑底より充填して一段高くし、土砂を台座状に築いた上より出土した。しかも、支脚上に土器片を重ねて置いた状態であった。竈の土器の掛け穴から下がる甕の底部との調節のための様でもあった。

所　　見　　竈前には白色粘土が流込んでいた。外部からの投入というより、住居跡の竈天井部の崩落によるものと捉えられた。しかし粘土の下には人為的投入土である覆土1層が確認できたことから、焼却行為後に竈が崩落したものと捉えられた。出土遺物より奈良・平安時代の所産と捉えた。

表26　A239遺物観察表　　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	(140)× (94)× 35　ロクロ成形　箱形的 外面　体部下端－無調整で段がつく　底部－切り離し後手持ちヘラケズリ	暗灰 良	雲母細粒 花崗岩粒	2/3	常陸産 器面荒れている
2	須恵器 坏	(136)× 96× 33　ロクロ成形　箱形的 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り	灰 良	雲母 花崗岩 細粒	2/3	常陸産
3	須恵器 坏	(134)× 72× 40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	灰 良	雲母 花崗岩 細粒	口縁～ 底部	常陸産 土製品（転用） か？
4	須恵器 坏	－× (88)× 10　ロクロ成形　底部の周縁打ち欠きギザギザにする 外面　底部－切り離し後手持ちヘラケズリ	灰 良	雲母 花崗(或 いは石 英)粒	底部 完存	常陸産 土製品（転用） か？
5	須恵器 坏	－× 87× 10　ロクロ成形　底部の周縁打ち欠きギザギザにする 外面　底部－回転ヘラケズリ	青灰 良 緻密	石英粒	底部の 4/5	土製品（転用） か？
6	須恵器 坏	(126)× (76)× 37　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラ切りか？	青灰 良	石英粒	口縁～ 底部	
7	須恵器 坏	(126)× (78)× 38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り	青灰 良 緻密	石英粒	口縁～ 底部	
8	土師器 鉢	(150)× (86)×　輪積 外面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ　底部－木葉痕 内面　口縁－ナデ　胴部－ヘラナデ（輪積痕残す）	茶褐 普	砂 長石スコ リア細粒 粗	2/3	
9	土製品 支脚	長さ129× 幅98× 厚さ78　円錐形を呈する ヘラ及び指頭によるナデ調整　底面－木葉痕	暗褐 普	砂質	完形	
10	土師器 坏	(136)× －× (35)　非ロクロ成形　半球形　丸底 外面　口縁－ナデ　体部－ヘラケズリ　内面　丁寧なミガキ	橙褐 良	緻密	口縁～ 底部	古墳時代後期の 遺制を引く器形

11	土師器 坏	(120)× －× (21)　非ロクロ成形　平球形　丸底 外面　口縁－ナデ　体部－ヘラケズリ　　内面　ナデ後ミガキ	外灰褐 内橙褐 良	緻密	口縁～ 底部	占墳時代後期の 遺制を引く器形
12	手捏ね 坏	97× 70× 47　逆台形状を呈する　体部中位でやや括れる 外面　口縁－横ナデ　体部－指頭によるナデ　底部－木葉痕 内面　丁寧な横ナデ	外茶褐 内暗褐		略完形	
13	手捏ね 坏	(93)× (67)× 53　底部より外傾し、体部上半がやや張る　口縁は立ち上がり気味 外面　口縁－横ナデ　体部－指頭によるナデ　輪積痕を残す　底部－木葉痕　　内面　口縁～体部－横ナデ　底面－ヘラナデ	外暗褐 普	砂粒	1/2	
14	土師器 甕	－× －× －　ごく薄手　口縁部に輪積痕 外面　口縁－ナデ　頸部－横位のヘラケズリ 内面　口縁～ナデ　頸部～胴上半－ヘラナデ	外茶褐 内橙褐 良	細砂 比較的 緻密	口縁片	武蔵型
15	土師器 甕	－× －× －　外面　胴部－ヘラケズリ　　内面　胴部－ヘラナデ	外暗褐 内橙褐 良	細砂 緻密	胴部片	武蔵型
16	土師器 甕	－× －× － 外面　胴上端－斜位のヘラケズリ　　内面　ヘラナデ	外黒褐 内黄褐 良	緻密	胴部～ 底部	武蔵型
17	土師器 甕	(237)× －× (97)　口縁外反し上端はつまみ上げられる 内外面とも口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	外暗褐 内橙褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部片	常総型
18	土師器 甕	(232)× －× (80)　口縁外反し上端はつまみ上げられる　外面凹線状の調整　頸部屈曲 内外面とも口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部片	常総型
19	土師器 甕	(258)× －× (108)　口縁外反し上端はつまみ上げられる　頸部屈曲 内外面とも口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	褐 普	粗砂粒	口縁～ 胴部片	常総型
20	土師器 甕	(198)× －× (54)　口縁外反し、口唇厚みを持つ 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外暗褐 内茶褐 普	砂粒	口縁～ 胴部片	
21	土師器 甕	－× 86× (268)　胴上半が張る 外面　胴上半－ヘラナデ　下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ　底部－木葉痕　　内面　胴部－ヘラナデ	橙褐 并	粗砂粒多	胴部～ 底部	常総型

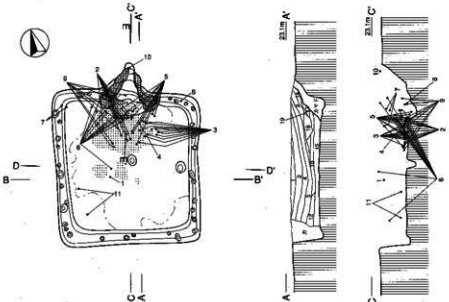
A240

検出地区　L5-18-3・4g、28-1・2gにて検出した。

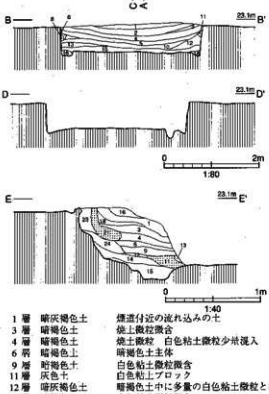
遺　構　主軸3.24m×横軸2.96m×壁高0.52m、方位はN-18°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込んだ地床であり、各コーナーは若干軟弱であるが、住居跡中央は良好な硬化面を認めた。主柱穴は検出されず、竈袖下まで巡る周溝内に32基の壁柱穴を検出した。住居中央にP1、東壁中央の壁際にP2を検出したが、いずれも小規模である。P2は出入口に伴うかは捉えられなかった。竈は北壁中央に設けられ、白色粘土を主体として築いていた。竈袖内壁の焼土化は、僅かな部分に限られていた。楕円形の竈ピットケ掘込まれ、火熱痕は認めたが、赤化した火床はなかった。煙道部は火熱を被り、一部が赤化していた。竈天井部粘土は、住居跡中央に向かって流込んだ状態で検出した。覆土は、暗褐色土・黒色土・黒褐色土を中心とした自然堆積である。

遺　物　床面からの遺物の出土は殆どなく、床直上層の中位からやや纏まって出土している。しかし全体的に散在するものであり、特に出土傾向は窺えなかった。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代に属する竪穴住居跡と捉えたが、当該年代でも古い時期に属する遺構である。



1 層　黒褐色土　ローム微粒、焼土微粒少含
2 層　黒色土　暗褐色土が滲むように混入　ローム微粒少含
3 層　黒褐色土　ローム微粒少含
4 層　黒色土　暗褐色土が少量滲むように混入　ローム微粒多含
焼土粒子少含
5 層　黒色土　暗褐色土が少量滲むように混入
6 層　暗黄褐色土　暗褐色土が少量滲むように混入
7 層　暗褐色土　濁ったロームが滲むように含む　ローム微粒少含
8 層　暗黄褐色土　暗褐色土少含
9 層　黒灰色土　白色粘土多含
10 層　黒色土　暗褐色土が少量滲むように混入　ローム微粒多含
焼土微粒少含
11 層　暗黄褐色土　盛　崩壊層　暗褐色土少含
12 層　暗褐色土　黒色土と少量の濁ったロームが滲むように混入
ローム微粒多含　焼土微粒少含
13 層　黒色土　少量の暗褐色土が滲むように混入　ローム少含
14 層　暗灰褐色土　白色粘土多含
15 層　黒褐色土　火を消すために人間が意図的に投げ込んだ土層
ローム微粒　焼土微粒　灰少含
16 層　暗褐色土　濁ったロームが混合
17 層　暗褐色土　白色粘土が滲むように混入　ローム微粒少含
18 層　灰褐色土　カマドの天井の本体部分　暗褐色土少混
19 層　暗灰褐色土　白色粘土と暗褐色土が混合　白色粘土多含



1 層　暗灰褐色土　焼道付近の流れ込みの土
3 層　暗褐色土　焼土微粒微含
4 層　暗褐色土　焼土微粒　白色粘土微粒少量混入
6 層　暗褐色土　暗褐色土主体
9 層　暗褐色土　白色粘土微粒微含
11 層　灰色土　白色粘土ブロック
12 層　暗灰褐色土　暗褐色土中に多量の白色粘土微粒と白色粘土が赤色化した微粒混合
13 層　暗褐色土　白色粘土微粒微含
14 層　暗赤灰褐色土　暗褐色土微混
15 層　暗黄赤灰褐色土　濁ったロームと14層と少量の暗褐色土が混合
16 層　灰褐色土　暗褐色土と白色粘土混合
18 層　暗灰褐色土　暗褐色土と白色粘土混合
21 層　灰褐色土　白色粘土ブロック
23 層　暗褐色土　暗褐色土主体
24 層　黒色土　焼土粒少含

図88　A240

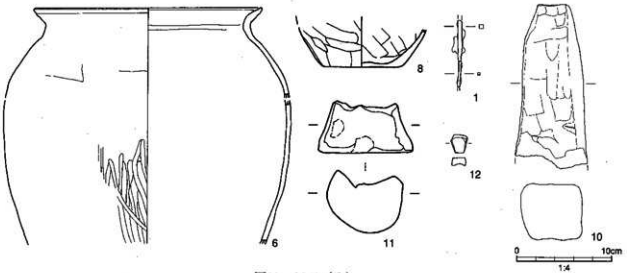


図89　A240（2）

表27　A240遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄器 鏃	長（72）×幅5×厚3	—	—	茎部片	角釘？
2	土師器 坏	160×　－×　41　浅い丸底　体部外傾し口縁やや内湾 外面　口縁－横ナデ　体部－ヘラケズリ 内面　横ナデ後ヘラミガキ	外茶褐 内暗褐 普	砂粒	略完形	
3	土師器 坏	158×　－×　31　浅い丸底　体部外傾 外面　口縁－横ナデ　体部－ヘラケズリ 内面　横ナデ後ヘラミガキ	茶褐 普	砂粒	1/2	
4	手捏ね 坏形	(84)×　(76)×　38 外面　口縁－ナデ　体部－部分的にヘラを用いるが他は指頭痕　底部－木葉痕　内面　ヘラナデ後ナデ	黒褐 普	比較的 緻密	1/3	
5	土師器 小型甕	129×　－×　(114)　口縁外反　胴上半が張る 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	暗赤褐 普	砂粒 白色粒	1/2	被熱による器面の劣化が著しい
6	土師器 甕	(239)×　－×　(251)　口縁外反　上端はつまみ上げられる　外面櫛を持つ　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ　下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　口縁～頸部－横ナデ	暗褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部	
7	土師器 甑	(154)×　－×　(103)　輪積でやや厚手 外面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ後部分的にヘラミガキ 内面　口縁－ナデ　胴部－ヘラナデ	外橙褐 内暗褐 良	比較的 緻密	口縁～ 胴部	あるいは長胴甕か？
8	土師器 甕	－×　86×　(53)　輪積 外面　胴下半～下端－ヘラケズリ後ヘラナデ　底部－ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	茶褐 良	細砂 比較的 緻密	胴下半 ～底部	
9	須恵器 坏	129×　90×　39　逆台形状を呈する 外面　脚部下端－ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	暗灰 普	粗砂粒 小石	4/5	
10	土製品 支脚	長さ(174)×　幅76×　厚さ60 角柱状を呈する　上面は極小さく凹む　ヘラ、指頭により整えられる				
11	土製品 支脚	上部径－×　下部径100×　器高(56)　重量324.0g ヘラや指頭によるナデ	橙褐 普	繊維 粗	1/3	
12	石製品 砥石	長さ(23)×　幅13×　厚さ(8)　重量4.0g 頂部及び表、両側面に使用痕がある			一部	流紋岩 「遺砥」の一部

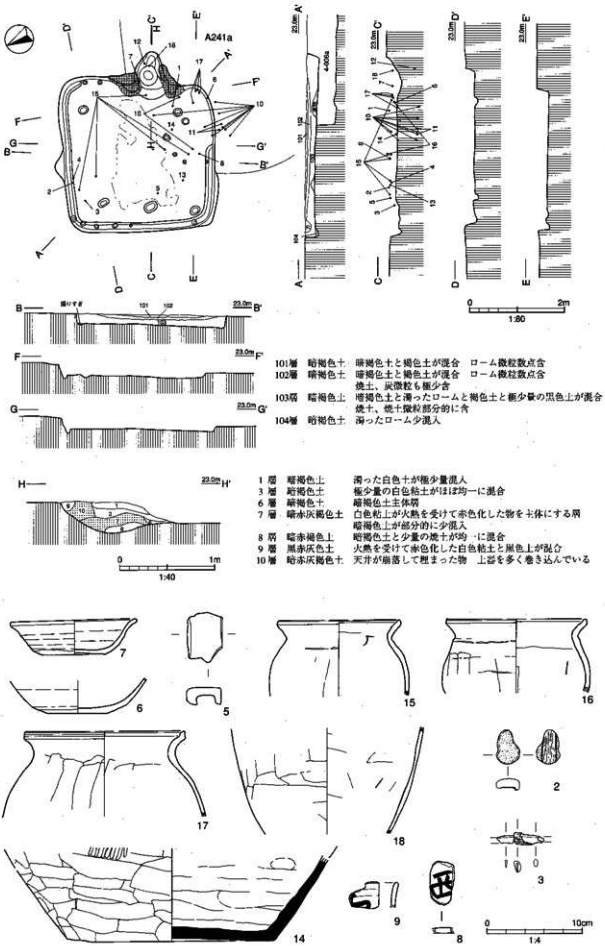

A241a
101層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合　ローム微粒数点含
102層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合　ローム微粒数点含
焼土、炭微粒も極少含
103層　暗褐色土　暗褐色土と薄ったロームと褐色土と極少量の黒色土が混合
焼土、焼土微粒部分的に含
104層　暗褐色土　薄ったローム少混入
1層　暗褐色土　薄った白色土が極少量混入
3層　暗褐色土　極少量の白色粘土がほぼ均一に混合
6層　暗褐色土　暗褐色土主体層
7層　暗赤灰褐色土　白色粘土が火熱を受けて赤色化した物を主体にする層
暗褐色土が部分的に少混入
8層　暗赤褐色土　暗褐色土と少量の焼土が均一に混合
9層　黒赤灰色土　火熱を受けて赤色化した白色粘土と黒色土が混合
10層　暗赤灰褐色土　天井が崩落して埋まった物　上器を多く巻き込んでいる

図90　A241b

A241b

検出地区　L5-18-4g・19-3g・28-2g・29-1gにわたって検出した。

遺　構　主軸3.34m×横軸(3.20)m×深さ0.20m、方位はS-65°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ソフトロームを掘込み地床を基本とするが、一部、黒色土と混合した床面もある。重複部は貼床であるが、住居跡全体の床が硬化し、特に中央部に良好な硬化面を認めた。主柱穴はP1～P4であり、P5は出入口に伴うもの。壁柱穴は竈壁側際と竈に対面する壁際に8基を検出し、その他に1基を認めた。床面には柱穴の他、2基の小規模なピットを検出した。周溝は竈壁と南西壁南半にはなく、他の壁下に巡るのみであった。竈は南東壁中央に設けられ、粘土を主体として築かれていた。竈は全体がピット内に築かれた様な状態であり、煙道部も壁を奥深く掘込み、竈本体の一部に取り込まれた様なものである。全体が火熱痕を残す。火床は捉えられなかった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えられた。

遺　物　土師器小片を主体として点在して出土しており、出土傾向は捉えられなかった。「西」の墨書土器片が2点出土している。

所　見　A241bの覆土を掘込んだ竪穴住居跡であり、出土遺物より奈良・平安時代の所産と捉えた。

表28　A241b遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
2	鉄器 不明	長(36)×幅24×厚10			—	
3	鉄器 刀子	長(48)×幅9×厚2			刃部～茎	
5	土製品 不明	長さ(53)×幅32×厚さ(17)　重量31.9g 外面　きれいに角柱状の面取りを施し、丁寧なミガキを行う 内面　ヘラで外形に沿って角柱状に抉っている	外茶褐 内黒褐 良	緻密	一部 残存	
6	土師器 坏	－×64×(35)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面　ナデ	暗褐 良	細粒　長石目立つ 斑には比較的緻密	体部～底部	
7	土師器 坏	131×65×38　ロクロ成形　口縁外反　厚みを持つ 胴下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り　ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒	2/3	
8	土師器 坏	－×－×－ 外面　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	外橙褐 内淡褐 普	赤色スコリア細粒 緻密	底部片	墨書「西」 底部内面
9	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 良	緻密	口縁片	墨書「　」 体部外面
14	土師器 甕	－×218×(99) 外面　胴下半－一部平行タタキ　ヘラケズリ 内面　胴下半－ヘラナデ及びナデ　指頭痕有り	暗赤褐 良	粗砂粒 赤色粒	胴部～ 底部片	
15	土師器 小型甕	(128)×－×(80)　口縁やや受け口状　頸部「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	口縁～ 胴部片	
16	土師器 小型甕	(146)×－×(78)　口縁受け口状　頸部「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	暗橙褐 普	砂粒	口縁～ 胴部片	
17	土師器 甕	(168)×－×(91)　口縁受け口状　上端はつまみ上げられる　外面は凹線状に調整　頸部屈曲 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	橙褐～ 暗褐 普	砂粒	口縁～ 胴部片	
18	土師器 甕	－×－×(113) 外面　胴下半－縦位のヘラケズリ～横位のヘラケズリ 内面　胴下半－ヘラナデ	茶褐 普	砂粒 白色粒	胴部片	

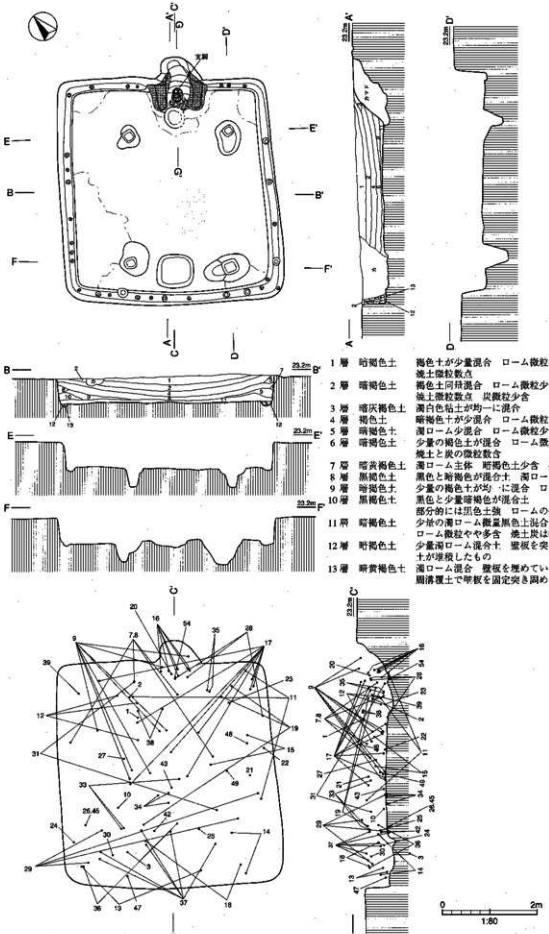
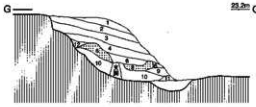

1 層　暗褐色土　褐色土が少量混合　ローム微粒少含
焼土微粒数点
2 層　暗褐色土　褐色土同様混合　ローム微粒少含
焼土微粒数点　炭微粒少含
3 層　暗灰褐色土　淡白色粘土が均一に混合
4 層　褐色土　暗褐色土が少混合　ローム微粒少含
5 層　明褐色土　淡ローム少混合　ローム微粒少含
6 層　暗褐色土　少量の褐色土が混合　ローム微粒多含
焼土と炭の微粒数含
7 層　暗黄褐色土　淡ローム主体　暗褐色土少含　壁、崩壊層
8 層　黒褐色土　黒色と暗褐色が混合す　淡ローム極少含
9 層　暗褐色土　少量の褐色土が均一に混合　ローム微粒少含
10 層　黒褐色土　黒色と少量暗褐色が混合土
部分的には焼色土強　ロームの微粒数点含
11 層　暗褐色土　少量の淡ローム微量黒色土混合
ローム微粒やや多含　焼土炭は微粒数点
12 層　暗褐色土　少量淡ローム混合す　壁板を突き固めていた
土が崩壊したもの
13 層　暗黄褐色土　淡ローム混合　壁板を埋めていた土
周溝覆土で壁板を固定突き固めた
0　2m
1:80

図91　A242



1 層　暗褐色土　白色粘土は滲むように微量混入
2 層　暗褐色土　白色粘土は少量均一に混ざる
3 層　暗褐色土　暗褐色土を主体の層
4 層　暗褐色土　白色粘土を滲むように微かに混入
6 層　暗褐色土　白色粘土は滲むように微かに混入
8 層　暗灰褐色土　白色粘土と火熱を受けて赤色化した物のブロック
9 層　暗褐色土　住居中央側からの流れ込み層
10 層　暗赤褐色土　白色粘土が火熱を受けて赤色化した物が主体
11 層　暗褐色土　住居中央側からの流れ込み層
12 層　暗灰褐色土　暗褐色土と白色粘土が均一に混合

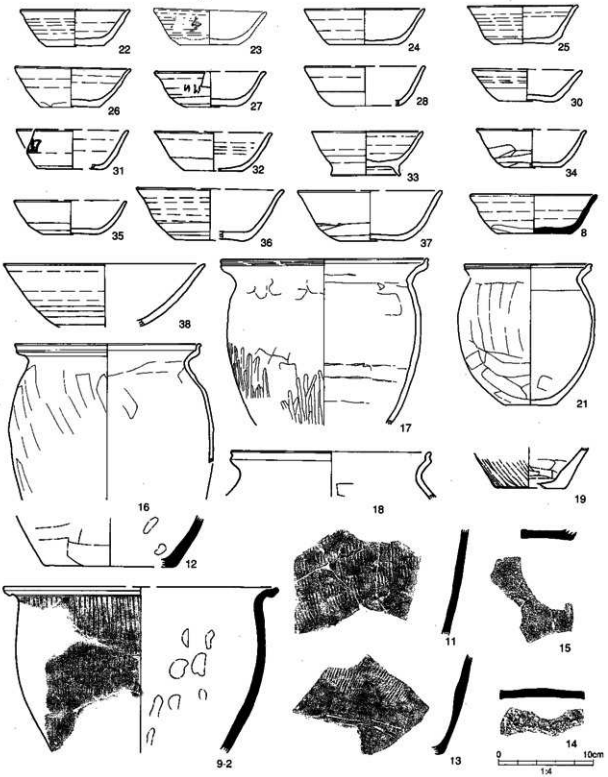


図92　A242（2）

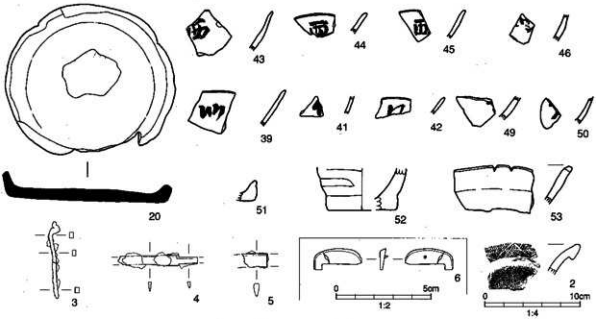


図93　A242（3）

A242

検出地区　L5-28-4g、29-3g・38-2g、39-1gにわたって検出した。

遺　構　主軸4.78m×横軸4.54m×壁高0.56m、方位はN-38°-Eを示し、平面形は方形に近い隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、全体として硬化面を認め、各コーナー付近に、ロームと暗褐色土が混合した床面を検出した。コーナー付近はやや硬化が劣るものであった。主柱穴は4基検出し、竈袖下まで巡る周溝内に30基の壁柱穴を認めた。主柱穴は床面の掘込みが広がることから、柱材の引抜きが行われたと捉えた。P5は出入口に伴うものである。竈は北東壁中央に設けられ、粘土を主体として築かれていた。竈袖内壁は赤化が強かった。煙道部は壁を大きく掘込んでいた。竈ピットは掘込まれていなかった。赤化した火床が検出された。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

なお、住居跡床面の中央に、床面が赤黒く変色する程の強い火熱を被る範囲を捉えた。

遺　物　土師器片を主体として住居跡全体から出土するが、出土量は少ない。鉄滓も出土している。

所　見　出土遺物より奈良・平安時代の所産と捉えた。住居跡中央の火熱痕は、不用材の焼却や火災とは捉えられない強い火力と想定される。その中心から図示はできなかったが、鉄滓が出土していることから、鉄器修繕の小鍛冶とも調査では想定されていた。

表29　A242遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
2	弥生 壺	－×－×－　折り返し口縁　口縁外反 外面　口唇－RL縄文　口縁－LR縄文施文後沈線で鋸歯文を描く　頸部－縦位のヘラミガキ　内面　ヘラミガキ	褐 良	緻密	口縁片	南関東系
3	鉄器 不明	長 (82)×幅6×厚4 棒状の鉄器であるが、全体的に平たいものとなる。釘か？			－	
4	鉄器 刀子	長(84)×幅10×厚2 (茎子部) 6　6			刃部～ 茎子	
5	鉄器 刀子	長(25)×幅14×厚5			刃部片	

6	銅製品 丸鞆	長 50 幅－厚 4			断片	
8	須恵器 坏	(133)×77×42　ロクロ成形　体部上半括れる　口唇厚みを持つ 外面　体部下端～底部－ヘラケズリ	暗茶褐 悪	砂粒 赤色粒	2/3	
9-2	須恵器 甕	(288)×－×(176) 外面　口縁－ナデ　胴部－平行タタキ目　棒状工具によるナデ 内面　口縁－ナデ　胴部－当具痕　ナデ	灰 良	長石 赤色スコリア細粒 やや粗	口縁～ 胴部	
11	須恵器 甕	－×－×－ 外面　平行タタキ目　ヘラケズリ　内面　ナデ	橙褐 良	長石 石英粒 やや粗	胴部片	
12	須恵器 甕	－×(140)×(52) 外面　胴下半－ヘラケズリ 内面　ナデ	灰 良	赤色スコリア細粒 やや雑	胴下半 ～底部	
13	須恵器 甕	－×－×－ 外面　胴下半－平行タタキ目　下端－ヘラケズリ 内面　ナデ	灰 良	長石 石英粒 やや粗	胴下半 ～底部	
14	須恵器 甑	－×－×－　五孔式　鉄製工具で孔を抉る	灰 良	長石 石英粒 やや雑	底部片	
15	須恵器 甑	－×－×－　鉄製工具（刀子）で孔を抉る 外面　胴下端－ヘラケズリ	暗灰 良		底部片	箆書「×□」 底部外面
16	土師器 甕	(195)×－×(165)　口縁外反　上端つまみ上げられる　外面凹線状に調整　頸部「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケズリ後ナデ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	暗褐～ 橙褐 普	粗砂粒	口縁～ 胴部片	
17	土師器 甕	(218)×－×(176)　口縁やや受け口状　上端はつまみ上げられ外面凹線状に調整　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケズリ後ナデ　胴下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴下半－ヘラナデ　下半－輪積痕	茶褐～ 橙褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部片	
18	土師器 甕	(211)×－×(48)　口縁端部つまみ上げ 外面　口縁－ナデ　頸部以下ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　口縁－ナデ　以下はヘラナデ	淡褐 良	細砂長石 石英 雲母粒	口縁～ 頸部	
20	土製品 転用硯	最大径180　中央付近に磨れ（使用面）あり	茶褐 良	砂 雲母粒	完存	須恵器転用
21	土師器 小型甕	134×56×150　口縁上端つまみ上げられる　外面凹線状に調整　頸部「く」の字状　胴やや上半に膨らみを持ち小さめの底部に続く 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ　下半－横位のヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	暗茶褐～ 橙褐 普	砂粒多	4/5	
22	土師器 坏	114×60×39　ロクロ成形　体部外傾　口縁わずかに外反　全体的に厚手の作り 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	明橙褐 良	砂粒	完形	
23	土師器 坏	118×62×39　ロクロ成形　体部外傾　全体的にやや厚手の作り 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	明橙 やや悪	砂粒 赤色粒	略完形	墨書「□□」 体部外面
24	土師器 坏	125×71×38　ロクロ成形　逆台形状を呈し　口縁やや内側ぎ状 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	明橙褐 普	砂粒 雲母	完形	
25	土師器 坏	(115)×62×41　ロクロ成形　口縁外反し、外面稜を持つ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙 良	砂粒 雲母	1/2	
26	土師器 坏	120×62×43　ロクロ成形　ホみを持つ小さめの底部より体部直線的に開く　外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	明橙褐 やや悪	砂粒 雲母	4/5	

27	土師器 坏	(117)×(57)×37　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	1/3	墨書「竹」 体部外面正位
28	土師器 坏	(128)×(72)×42　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁～ 底部	
30	土師器 坏	(116)×(60)×34　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	1/4	
31	土師器 坏	(118)×(62)×42　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	淡褐 普	雲母少量	1/4	墨書「　」 体部外面正位
32	土師器 坏	(124)×(62)×41　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	外褐 内黒褐 普	雲母 砂粒少量	1/4	
33	土師器 高台付坏	(116)×74×46　ロクロ成形　体部丸みを持ち緩やかに立ち上がる高台部「ハ」の字状を呈し、下端は外反 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒 赤色粒	2/3	
34	土師器 坏	(116)×(64)×40　ロクロ成形 外面　体部下半～下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後手持ちヘラケズリ　内面　ヘラミガキ	外褐 内黒 良	雲母微量 緻密	1/4	内黒
35	土師器 坏	(118)×58×36　ロクロ成形 外面　体部下半～下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後手持ちヘラケズリ　内面　ヘラミガキ	外淡褐 内黒 良	緻密	1/2	内黒
36	土師器 坏	(156)×(74)×55　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ	外褐 内黒良	緻密	1/4	内黒
37	土師器 坏	(153)×67×53　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面　丁寧なミガキ	褐 良	緻密	2/3	内黒の可能性大
38	土師器 坏	(212)×－×(67)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　丁寧なヘラミガキ	橙褐 良	緻密	口縁～ 体部	
39	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「竹」 体部外面正位
41	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	体部片	墨書「竹」 体部外面
42	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
43	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「西」 体部外面正位
44	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「西」 体部外面正位
45	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	外褐 内淡褐 普	緻密	口縁片	墨書「西」 体部外面正位
46	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	体部片	墨書「　」 体部外面

49	土師器 坏	−×−×−　　ロクロ成形 外面　体部下端−ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ	外褐 内黒 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 内黒
50	土師器 坏	−×−×−　　ロクロ成形	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
51	手捏ね 坏？	−×−×22　　口縁ナデ	暗褐 普	赤色スコ リア少	1/4	
52	手捏ね 坏？	−×(72)×(45)　輪積 外面　輪積痕を残す　底部−木葉痕 内面　ナデ	暗褐 普	緻密	体部～ 底部	
53	土製品 不明	−×−×−　　ロクロ成形　口唇に二ヶ所キザミあり	赤褐 良	砂粒少	完存？	坏転用

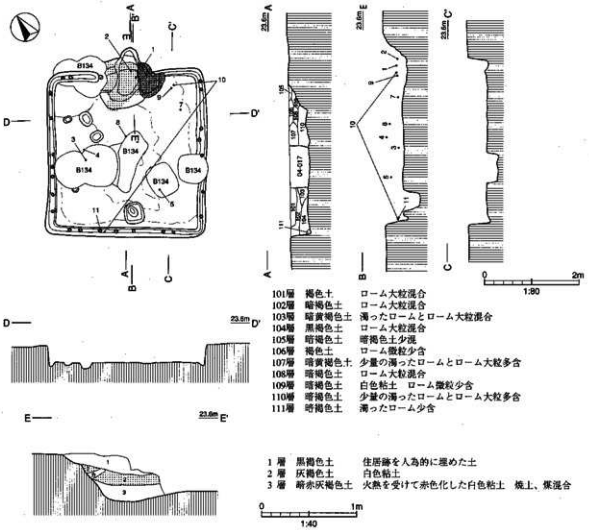


図94　A243

A243

検出地区　L5-38-1～4gにて検出した。

遺　構　主軸3.52m×短軸3.30m×壁高0.41m、方位はN-35°-Eを示し、平面形は方形に近い隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、住居跡全体に良好な硬化面を認めた。ただ、コーナー付近

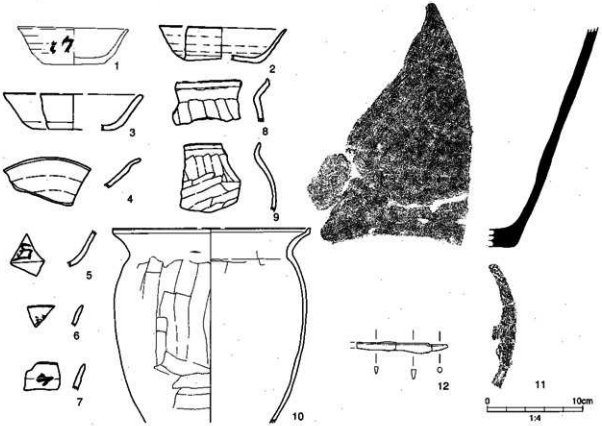


図95　A243（2）

はやや低くなり、硬化は弱くなっていた。遺構の重複が著しく、主柱穴は不明である。竈袖下まで巡る周溝内に24基の壁柱穴を検出した。P4は出入口に伴うものである。竈は北東壁中央に設けられ、竈ピットは広く掘込まれ、そのピット上に設けられた様な竈である。袖は粘土を主体として築かれ、内壁の一部は焼土化していた。火床は強い火熱痕を認めるが、赤化はしていない。壁を掘込み煙道部を設け、煙道上部にテラス状の段差を有していた。また、煙道下部にも小範囲に赤変する箇所を認めた。竈は遺構重複により損壊を被り左袖が失われていたが、天井部も人為的に壊されたと捉えられ、竈前に白色粘土の流入が認められた。覆土は、暗褐色土・黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　　掘立柱建物跡と重複しておりそのために失われたとしても、住居跡としては出土遺物は少なかった。

所　　見　　墨書土器片の「西」1点、「竹」2点が出土し、上谷遺跡で「特徴ある文字」が混在する住居跡である。出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。

表30　A243遺物観察表　　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	115×　62×　41　　ロクロ成形　口縁外反 外面　体部下端～底部ー回転ヘラケズリ	橙褐 やや悪	砂粒 赤色粒 雲母	略完形	墨書「竹」 体部外面
2	土師器 坏	(134)×　72×　36　　ロクロ成形 外面　体部下端ー回転ヘラケズリ　底部ー回転糸切り	暗褐 良	雲母 赤色スコリア細粒 緻密	1/4	
3	土師器 坏	(148)×　80×　38　　ロクロ成形 外面　体部下端ー回転ヘラケズリ	橙褐 良	雲母 赤色スコリア細粒 緻密	1/5	

4	土師器 皿	−× −× − 外面　部分的にヘラミガキ　内面　極めて丁寧なヘラミガキ	橙褐 良 やや軟質	雲母 スコリア 微粒 緻密	口縁～ 体部	内黒 （可能性高い）
5	土師器 坏	−× −× −　ロクロ成形　外面　体部下端−ヘラケズリ	淡褐 良	雲母長石 スコリア 微細粒 緻密	体部片	墨書「直」 体部外面正位
6	土師器 坏	−× −× −　ロクロ成形	淡褐 良	雲母長石 スコリア 微細粒 緻密	口縁片	墨書「　」 体部外面正位
7	土師器 坏	−× −× −　内面　軽くミガキあり	橙褐 良	雲母 スコリア 細粒 緻密	口縁片	墨書「　」 体部外面正位
8	土師器 小形甕	−× −× −　口唇つまみ上げ気味 外面　口縁−ナデ　胴部−ヘラケズリ 内面　口縁−ナデ　頸部以下ヘラナデ	茶褐 良	長石細粒 比較的 緻密	口縁～ 胴上部	
9	土師器 小形甕	−× −× −　薄手で胴部は球状に膨らむ　口唇つまみ上げ気味 外面　口縁−ナデ　頸部以下はヘラケズリ 内面　口縁−ナデ　以下はヘラナデ	外茶褐 内黒褐 良	長石　ス コリア細 粒　比較 的緻密	口縁～ 胴上部	
10	土師器 甕	(208)× −× (205)　口縁やや受け口状　上端ほつまみ上げられる 頸部「く」の字状　外面　口縁～頸部−横ナデ　胴上半−縦位のヘラケズリ　下半−横位のヘラケズリ 内面　口縁～頸部−横ナデ　胴部−ヘラナデ	橙褐 黄	砂粒 赤色粒	口縁～ 胴部	
11	須恵器 甑	−× −× −　粗作り→タタキ成形　底部5五孔式 外面　胴部−平行タタキ目　下半−ヘラケズリ 内面　ナデ　当具痕	暗褐 良	長石 スコリア 細粒 やや粗	胴上部 ～底部	
12	鉄製品 刀子	長(96)×幅 9×厚 4 柄（茎子）は丸味を有する			刃部～ 茎子	

A244

検出地区　L5-29-3・4g、39-1・2gにて検出した。

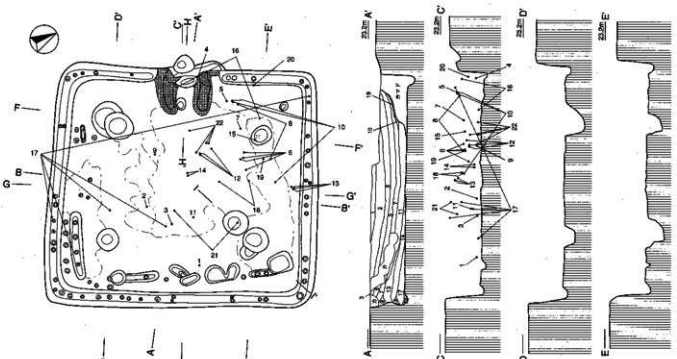
遺　構　拡張された竪穴住居跡で、いずれも横軸の長い平面形は方形に近い隅丸方形であり、ハードロームを掘込み地床としている。

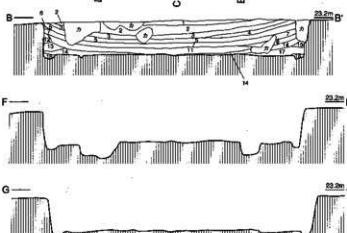
A224aは拡張後の住居跡であり、主軸5.04m×横軸5.61m×壁高0.65m、方位はN-63°-Wを示している。床には竈間円ら主柱穴間内に硬化面を認めた。主柱穴はP１・P５・P11・P14の４基と捉えた。竈内まで巡る周溝内に、38基の壁柱穴を認めた。竈は北西壁中央に粘土を主体として設けられ、煙道部の天井は一部遺存していた。焚き口に相当する箇所に小ピットが掘込まれるが、竈内は床と同レベルを基本としている。袖内壁などの焼土化範囲は広く、周溝と小ピットの間に赤化の強い火床を検出した。覆土は、暗褐色土・黒褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

A224bは周溝の一部のみの検出したことから想定した拡張以前の住居跡であり、規模・方位とも不明瞭である。周溝の一部のみの検出から、平面規模はA244aに比し小規模で、床面はA224aより若干高かったものと思われる。主柱穴はP２・P５・P12と捉え、４基目は不明である。壁柱穴を周溝の内外に検出したが、基数は不明である。竈は検出されず、遺構配置上では拡張時に失われた可能性があるが、火床等の痕跡も残していない。覆土は捉えられなかった。

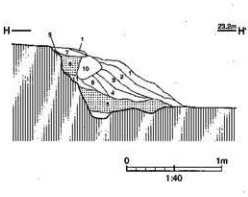
遺　物　基本的にA224aに伴うものである。竈周辺からの出土は多く、住居跡中央から南東壁側は少ない傾向が窺えた。

所　見　出土遺物より奈良・平安時代の所産と捉えた。拡張住居跡と捉えたが、不明瞭な拡張である。南西壁側にてA224aとA224bの周溝の間に壁柱穴状の小ピット列を検出したが、これらはA224bの壁柱穴とは捉えられず、２度の拡張も窺わせるが判然としなかった。





1 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土が混合する土　ローム微粒多含
2 層	暗褐色土	暗褐色土中に少量の褐色土が斑状に混合 ローム微粒多含
3 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土がほぼ同量混合　ローム微粒多含
4 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混合　ローム微粒多含
5 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土が混合　ローム微粒多含
6 層	暗黄褐色土	濁ったローム土と暗褐色土が混合　壁崩壊層
7 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の褐色土が混合　ローム微粒少含 濁ったローム土が極少量
8 層	暗褐色土	褐色土がほぼ均一に混合ローム微粒 ローム微粒少含　焼土微粒数点
9 層	暗黄褐色土	濁ったローム土と暗褐色土が混合　壁崩壊層
10 層	暗黄褐色	白色粘土が極少量滲むように含
11 層	黒色土	暗褐色土と濁ったローム土が極少量滲むように含 ローム微粒数点含
12 層	暗黄褐色土	濁ったローム土が主体　壁崩壊層
13 層	暗褐色土	少量の褐色土が均一に混合　ローム微粒数点含
14 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混合 ローム微粒を数点含
15 層	暗褐色土	少量の濁ったローム土が均一に混合　壁崩壊層
16 層	暗黄褐色土	濁ったローム土と暗褐色土が均一に混合　壁崩壊層
17 層	暗褐色土	褐色土と少量の濁ったローム土がほぼ均一に混合 ローム微粒数点含
18 層	暗黄褐色土	濁ったローム土と暗褐色土が混合 壁版を突き固めていた土と考えられる
19 層	暗黄褐色土	濁ったローム土と暗褐色土混合 カマドの崩落に伴うと形成された層



1 層	黒色土	黒色土が主体になる層
2 層	暗褐色土	白色粘土は滲むように部分的に混入
3 層	暗褐色土	白色粘土は滲むように混入
4 層	暗褐色土	暗褐色土と少量の白色粘土が混合
5 層	暗灰褐色土	天井が崩落し白色粘土と暗褐色土が並く混合
6 層	暗灰褐色土	暗褐色土と少量の白色粘土が均一に混合
7 層	暗灰褐色土	暗褐色土と白色粘土が均一に混合
8 層	暗灰褐色土	濁った白色粘土が主体になる土 煙道付近の白色土が崩れて煙道を塞いだものと考えられる
9 層	暗黄褐色土	濁ったローム土と暗褐色土
10 層	灰色土	白色粘土ブロック　天井本体
11 層	暗褐色土	暗褐色土と焼土やスス極少量の白色粘土が混合

図96　A244

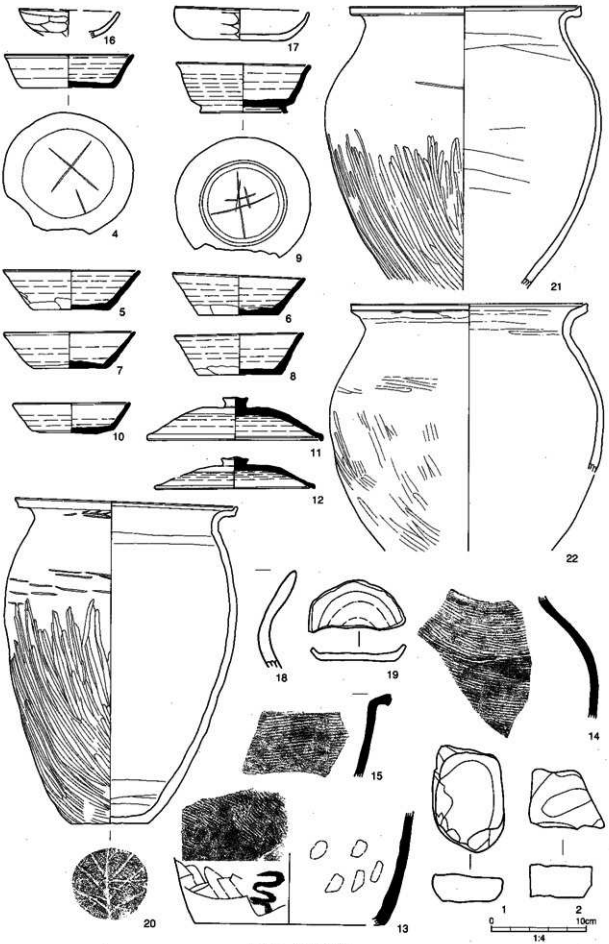
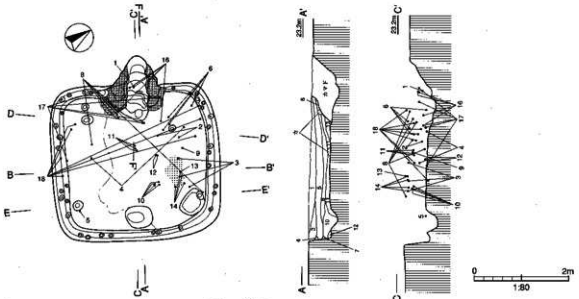


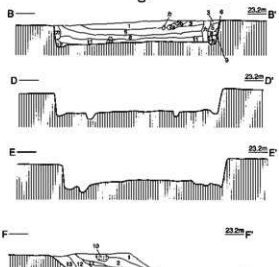
図97 A244（2）

表31　A244遺物観察表　　（単位mm）

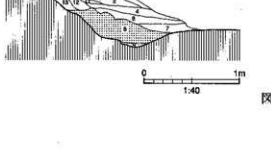
	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 台石	長さ107×　幅74×　厚さ30　重量370.0g　　表裏両面に使用面			完存	砂岩 金床石か
2	石器 台石	長さ60×　幅65×　厚さ32　重量325.0g 礫を打ち割った面を使用面とする。鉛の付着が見られる			1/2	ホルンフェルス か？ 金床石
4	須恵器 坏	135×　96×　36　　ロクロ成形　逆台形状を呈し、底部広く、器高浅い 外面　体部下端ーヘラケズリ　底部ーヘラケズリ	灰白 悪	砂粒	略完形	線刻「×」 底部外面 常陸産
5	須恵器 坏	142×　80×　42　　ロクロ成形　　体部直線的に開く 外面　体部下端ーヘラケズリ　底部ーヘラケズリ	灰褐 普	砂粒	1/2	常陸産
6	須恵器 坏	138×　84×　46　　ロクロ成形　器形歪みを持つ　体部中位で括れる 口縁やや内湾気味 外面　体部下端ーヘラケズリ　底部ーヘラケズリ	灰褐 やや悪	粗砂粒多	4/5	常陸産
7	須恵器 坏	137×　77×　38　　ロクロ成形　体部外傾　口縁やや立ち上がる 外面　体部下端ーヘラケズリ　底部ーヘラ切り後ヘラケズリ	外暗灰 内灰褐 やや悪	砂粒 褐色粒	1/2	常陸産
8	須恵器 坏	134×　87×　44　　ロクロ成形　口縁外反　口唇やや厚みを持つ 外面　体部下端ーヘラケズリ　底部ーヘラ切り後ヘラケズリ	灰褐 普	粗砂粒多	3/4	常陸産
9	須恵器 高台付坏	139×　92×　54　　ロクロ成形　体部直線的に立ち上がり口縁外反　下端に稜を持つ　高台部短い「ハ」の字状 外面　底部ー回転ヘラケズリ	外暗灰褐 内灰茶褐 普	砂粒	3/4	線刻「□」 底部外面 常陸産
10	須恵器 坏	122×　85×　33　　ロクロ成形　体部下半に括れを持つ　口縁内湾 外面　底部ー回転糸切り後回転ヘラケズリ	青灰 良	砂粒 石英	1/2	
11	須恵器 蓋	(185)×　つまみ径25×　46　　ロクロ成形　口縁部折れる　内面内屈 つまみ中央端部より僅かに突出する 外面　天蓋部ー回転ヘラケズリ	灰褐 良	砂粒 石英	1/4	常陸産
12	須恵器 蓋	(170)×　つまみ径28×　34　　ロクロ成形　口縁短いかえりを持つ　宝珠形を呈するつまみは中央が突出する 外面　天蓋部ー回転ヘラケズリ	灰褐 普	粗砂粒 石英	3/4	常陸産
13	須恵器 甕	ーx　(200)×(122) 外面　胴部ータタキ目　下半ヘラケズリ　　内面　当具痕　ナデ	灰 良	雲母 石英細粒 やや緻密	胴下半 ～底部	墨書「□」 胴部外面 常陸産
14	須恵器 甕	ーx　ーx　ー 外面　胴部ー平行タタキ目　　内面　当具痕　ナデ	灰 良	雲母 石英細粒 やや緻密	頸部～ 胴上部	常陸産
15	須恵器 甕	ーx　ーx　ー 外面　口縁ーナデ　胴部ー平行タタキ目　　内面　ナデ	灰 良	微量の 雲母 長石細粒	口縁～ 胴上部	甑の可能性あり
16	土師器 坏	(106)×　ーx　(29)　　非ロクロ成形　半球形で丸底 外面　口縁ーナデ　体部ーヘラケズリ後ヘラナデ 内面　ヘラミガキ	暗赤褐 良	比較的 緻密	口縁～ 底部	内外面赤彩 古墳時代の造制 を引く器形
17	土師器 坏	141×　96×　33　　非ロクロ成形　半球形気味で丸底 外面　体部ーヘラケズリ後部分的にヘラミガキ 内面　丁寧なヘラミガキ	淡褐 良	緻密	口縁～ 底部	
18	土師器 坏	ーx　ーx　ー　　薄手 外面　ナデ　ヘラケズリ　　内面　ナデ　ヘラナデ	橙褐 良	細砂赤色 スコリア 細粒比較 的緻密	口縁片	武蔵形

19	土製品 転用硯	長径100× 短径(46)× 器高17 内外面にススまたは墨付着 使用面（磨れ）が顕著	灰 良	雲母 石英細粒	1/2	須恵器坏転用 （常陸産）
20	土師器 甕	233× 81× 347 口縁外反 下端つまみ上げられ、外面は凹線状に調整 胴上半が張る 外面 口縁～頸部－横ナデ 胴上半－ヘラナデ 下半～下端－ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部－木葉痕 内面 口縁～頸部－横ナデ 胴部－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒 雲母	略完形	常総型
21	土師器 甕	245× －× (299) 口縁と端つまみ上げられ、外面は凹線状に調整 胴上半が張る 広口で頸が太く短め 外面 口縁～頸部－横ナデ 胴上半－ヘラナデ 下半～下端－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁～頸部－横ナデ 胴部－ヘラナデ	褐 件	粗砂粒 雲母	口縁～ 胴部	常総型
22	土師器 甕	249× －× (262) 口縁外反 上端つまみ上げられ、外面は凹線状に調整 頸部「く」の字状 胴上半に膨らみを持つ 外面 口縁～頸部－横ナデ 胴上半－ヘラナデ 下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁～頸部－横ナデ 胴上半－ヘラナデ	明褐 普	砂粒 雲母	口縁～ 胴部	常総型





1 層 黒褐色土 ローム微粒数点含
2a 層 灰色土 暗褐色土少混
2b 層 暗灰黒色土 薄った白色粘土と暗褐色土が均一に混合
3 層 暗褐色土 少量の暗褐色土と褐色土が均一に混合
4 層 暗黄褐色土 薄ったロームと暗褐色土が混合 壁崩壊層
5 層 黒褐色土 褐色土が少量滲むように混入 ローム微粒微含
6 層 暗褐色土 薄ったローム少量滲む様に混入 壁崩壊層
7 層 暗褐色土 薄ったロームと暗褐色土が混合 壁崩壊層
8 層 暗褐色土 褐色土が滲むように少含
9 層 暗黄褐色土 薄ったロームと暗褐色土が混合
10 層 黒褐色土 暗褐色土が少量滲むように混入
11 層 暗褐色土 少量の薄ったロームが滲むように混入
12 層 暗黒褐色土 黒色土と少量の薄ったロームが滲むように混合
13 層 暗灰褐色土 薄った白色粘土と暗褐色土が均一に混合



1 層 暗褐色土 白色粘土はわずかに滲むように混入
2 層 暗灰褐色土 暗褐色土と白色粘土が均一に混合
4 層 暗褐色土 褐色土とわずかな白色粘土が均一に混合
6 層 暗褐色土 褐色土とわずかな白色粘土が均一に混合
7 層 暗褐色土 暗褐色土主体
8 層 暗赤灰褐色土 赤色化した白色粘土と少量の暗褐色土が混合
9 層 暗黄褐色土 ロームと暗褐色土が均一に混合
10 層 灰色土 暗褐色土が少量滲むように混入
11 層 暗灰褐色土 少量の薄ったロームが滲むように混入
12 層 灰褐色土 白色粘土ブロック
13 層 暗灰褐色土 煉と暗褐色土と少量の白色粘土が均一に混合

図98 A245

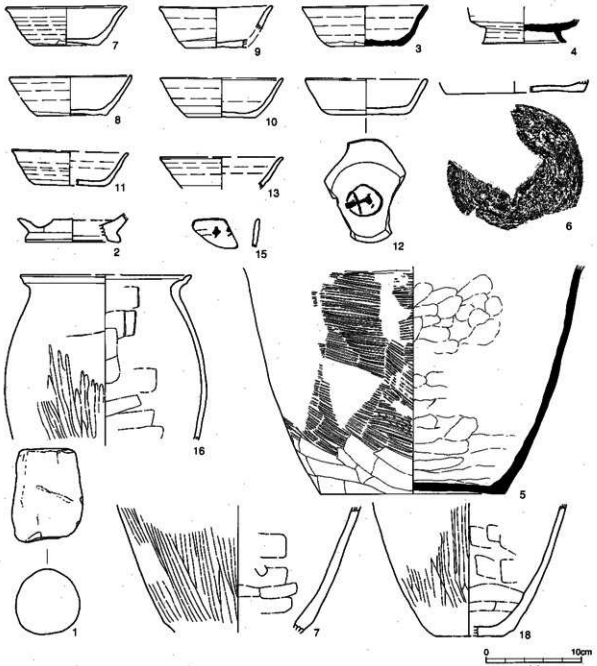


図99　A245（2）

A245

検出地区　L5-89-2g、90-1gにて検出した。

遺　構　主軸3.29m×横軸3.51m×壁高0.41m、方位はN-58°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、全体に硬化し、特に竈前から出入口にかけて良好な硬化面を認めた。主柱穴は不明瞭であり、P1～P4であろうか。竈袖下まで巡る周溝内に33基の壁柱穴を認めた。P5は出入口に伴うものである。竈は北西壁中央に粘土を主体として設けられ、袖内壁に焼土化したところもあった。煙道は壁を大きく掘込み、竈ピットの煙道寄りに赤化の強い火床を検出した。また、袖上に白色粘土ブロックを充填し、更に置いた様に斜めの状態で検出している。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

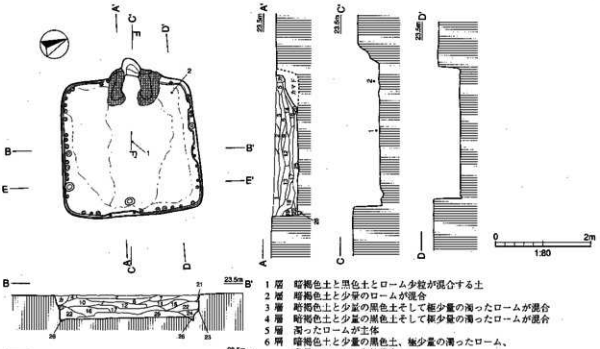
遺　物　特記する出土傾向は窺えず、住居跡全体から散在して出土している。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。竈袖上の粘土ブロックは天井部の一部と見られた。人為的な竈損壊とそれに係わる充填・埋置と考えられたが、その目的は捉えられなかった。

表32　A245遺物観察表

(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 支脚	上部径55×　下部径－×　器高(99)　重量320.0g 断面は略円形　指頭などによる成形痕あり	淡褐 普	緻密	2/5	
2	灰釉陶器 水瓶	－×（100)×（29）　ロクロ成形 外面　胴下端－回転ヘラケズリ　底部－切り離し後付け高台	暗灰 良	黒色粒 緻密	底部片	内外面に自然釉
3	須恵器 坏	(130)×　71×　43　　ロクロ成形　体部半ばで括れる　口縁外反 外面　体部下端～底部－ヘラケズリ	灰褐 普	砂粒 褐色粒	1/2	
4	須恵器 高台付坏	－×　88×（38）　ロクロ成形　高台部「ハ」の字状　下端やや外反 歪み有り	灰 良	粗砂粒	底部片	
5	須恵器 甕	－×　194×（242）　輪積　頸部外反　胴部緩やかな傾斜を持つ　底部は広め　バケツ状　　内面　ヘラナデ及び指頭圧痕 外面　頸部－ナデ　胴上半～下半－平行タタキ　下端－ヘラケズリ	外暗灰 内灰褐 普	粗砂粒 石英	頸部～ 底部	常陸産
6	須恵器 甕	－×（146)×（12）　外面　胴下端－ヘラケズリ　　内面　ナデ	灰 良	石英 長石粒 やや粗	胴下半 ～底部	
7	土師器 坏	125×　66×　42　　ロクロ成形　逆台形状を呈する　口縁外反　上げ底 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒 赤色粒	完形	
8	土師器 坏	(128)×　72×　42　　ロクロ成形　逆台形状を呈し、口唇やや内削ぎ状 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒 雲母	2/3	
9	土師器 坏	118×　65×　44　　ロクロ成形　口縁外反 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗橙褐 普	砂粒 赤色粒	2/3	内面上半スス付着
10	土師器 坏	(128)×　70×　42　　ロクロ成形　口縁外反 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒 雲母 赤色粒	1/2	
11	土師器 坏	(123)×（75)×　36　　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐 良	雲母微粒 緻密	2/5	
12	土師器 坏	(128)×　79×　38　　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐 良	雲母微粒 緻密	2/5	墨書「□」 底部外面
13	土師器 坏	(130)×　－×（33）　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	淡褐 良	雲母　赤色スコリア微細粒 緻密	口縁～ 体部	
15	土師器 甕	－×　－×　－　　ロクロ成形	淡褐 良	緻密	口縁片	墨書「竹」 体部外面正位
16	土師器 甕	(180)×　－×（174） 外面　口縁－ナデ　胴上半－ヘラケズリ後ヘラナデ　下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　ヘラナデ	茶褐 良	雲母 石英細粒	口縁～ 胴下半	常総型
17	土師器 甕	－×　－×　－ 外面　胴部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　　内面　ヘラナデ	茶褐 良	雲母 長石粒 やや粗	胴下半 ～下端	常総型
18	土師器 甕	－×（70)×（140） 外面　底部－木葉痕 内面　胴部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　底部－ヘラケズリ	茶褐 良	雲母 長石粒	胴下半 ～底部	常総型



1 層　暗黄褐色土　ローム と黒色土 が混合する土
2 層　暗褐色土と少量のローム が混合
3 層　暗褐色土と少量の黒色土 そして極少量の 焼 ったローム が混合
4 層　暗褐色土と少量の黒色土 そして極少量の 焼 ったローム が混合
5 層　焼 ったローム が主体
6 層　暗褐色土と少量の黒色土、極少量の 焼 ったローム、多量のローム の大粒混合
7 層　暗褐色土と少量の黒色土 そして 散点 のローム の少粒混合
8 層　焼 ったローム と少量の褐色土、ローム の少粒混合
9 層　黒色土と暗褐色土と散点のローム 人粒が混合
10 層　焼 ったローム が主体　ローム の大粒が散点混合　暗褐色土極少量混入
11 層　黒色土と暗褐色土が混合　ローム少粒少混入
12 層　焼 ったローム が主体　暗褐色土　ローム少粒少混入
13 層　焼 ったローム と極少量の黒色土と極少量の暗褐色土が混合　ローム大粒や中粒も多含
14 層　暗褐色土と少量のローム が混合　ローム の中粒少含　白色粘土も少量部分的に混入　範囲的には少
15 層　焼 ったローム と少量の暗褐色土が混合　ローム大粒多含
16 層　焼 ったローム が主体になる層　暗褐色土が極少量混入
17 層　暗褐色土と少林の黒色土 そして少量の焼 ったローム が混合　ローム大粒、中粒多含
18 層　焼 ったローム が主体になる上　ローム の大粒多含　暗褐色土は極少量混入
19 層　暗褐色土と少量の焼 ったローム が混合　ローム少粒や微粒多含
20 層　焼 ったローム が主体となる　ローム の大粒多含　暗褐色土や白色粘土は滲むように少し混入
21 層　暗黄褐色土　焼 ったローム と暗褐色土が混合　色調はかなり黄色が強い
22 層　暗褐色土　焼 ったローム が滲むように少混
23 層　暗黄褐色土　ローム が主体となる層で 間層 層
24 層　暗赤褐色土　暗褐色土が主体で 焼土化 が滲むように含　消火層
25 層　暗褐色土　人が投げ込んだ物である　部分的に白色粘土ブロックを混入　ローム大粒を含
26 層　暗黄褐色土　焼 ったローム と少量の暗褐色土が混合

1 層　暗黄褐色土　ローム と褐色土 が荒く混合
2 層　暗褐色土　ローム と暗褐色土 が荒く混合
3 層　黒赤灰褐色土　焼 った白色粘土とそれが赤色化した物と煤などが粗く混合
4 層　暗赤灰褐色土　焼 ったローム と少量の白色粘土が均一に混合　煙道付近の土が流れ込んだ自然堆積層

図100　A246

A246

検出地区　L5-89-3・4g、99-1・2gにて検出した。

遺　構　主軸2.89m×横軸2.86m×壁高0.52m、方位はN-70°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。ハードローム を掘込み地床とし、全体的に硬化するが、竈から出入口戸にかけて帯状に良好な硬化面補認めた。また、北壁・南壁側はハードローム 上部を床としていた。主柱穴は検出されず、竈袖下まで巡る北緯周溝の内外に、壁に沿う様に40基の壁柱穴を認めた。竈は北西壁中央に粘土を主体として設けられ、竈内は床と同一の高さであった。袖内壁にのみ焼土化が窺えたが、火床も強い火熱痕を認めたが、赤化にまでは至っていない。煙道部は壁を細く掘込んでいた。覆土は暗褐色土・黒褐色土をを主体として、人為堆積と捉えた。

遺　物　投入土には殆ど遺物の包含が無く、出土遺物は極端に少ない。

所　見　出土遺物より奈良・平安時代の所産と捉えたが、時期的には古い遺構である。人為的埋戻しにより埋没した竪穴住居跡である。出土遺物の極端な少なさは廃棄場所としてより、地形の平坦面化を意識していたかもしれない。また、出土遺物の少なさは遺構廃絶後の時間差のない埋戻しと捉えた。

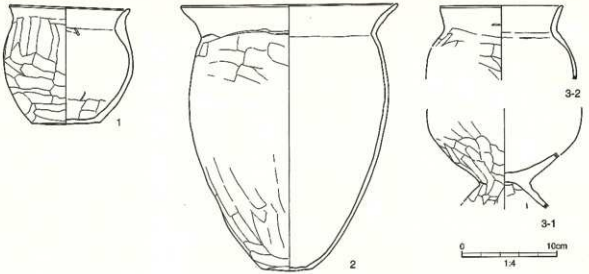


図101　A246（2）

表33　A246遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型甕	124×71×128　口縁やや外反　頸部緩やかな「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ 下半～下端－横位、縦位のヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	茶褐 普	砂粒	完形	
2	土師器 甕	228×52×282　口縁外反　頸部「く」の字状　胴上半わずかに膨らみ小さい底部へ続く　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－横位のヘラケズリ　下半－縦位のヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ	橙褐 普	砂粒	略完形	外面スス及びコゲ付着 武蔵型
3-1	土師器 甕	－×(126)×－　胴部丸みを持つ 外面　胴下半～脚部－ヘラケズリ　内面　ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	胴部～脚部片	内外面スス付着 武蔵型

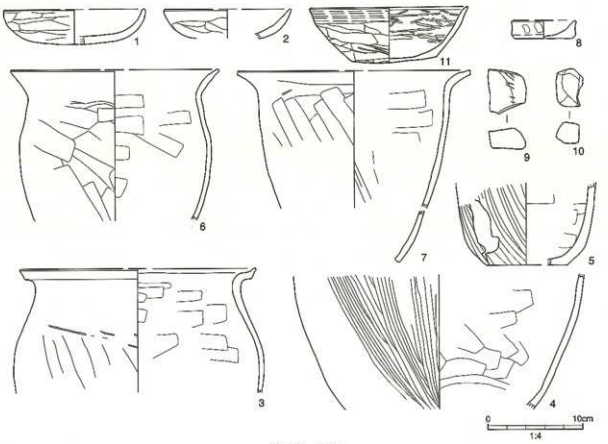
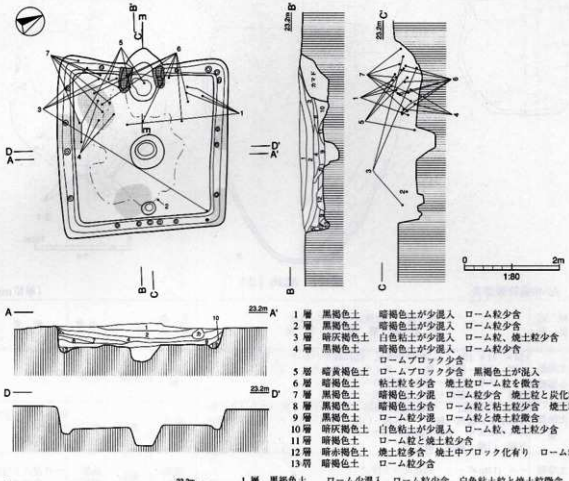


図102　A247



1 層　黒褐色土　暗褐色土が少混入　ローム粒少含
2 層　黒褐色土　暗褐色土が少混入　ローム粒少含
3 層　暗灰褐色土　白色粘土が少混入　ローム粒、焼土粒少含
4 層　黒褐色土　暗褐色土が少混入　ローム粒少含
ロームブロック少含
5 層　暗黄褐色土　ロームブロック少含　黒褐色土が混入
6 層　暗褐色土　粘土粒を少含　焼土粒ローム粒を微含
7 層　黒褐色土　暗褐色土少混　ローム粒少含　焼土粒と炭化粒微含
8 層　黒褐色土　暗褐色土少含　ローム粒と粘土粒少含　焼土粒微含
9 層　黒褐色土　ローム粒少混　ローム粒と焼土粒微含
10 層　暗灰褐色土　白色粘土が少混入　ローム粒、焼土粒少含
11 層　暗褐色土　ローム粒と焼土粒少含
12 層　暗赤褐色土　焼土粒多含　焼土中ブロック化有り　ローム粒微含
13 層　暗褐色土　ローム粒少含

1 層　黒褐色土　ローム少混入　ローム粒少含　白色粘土粒と焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム少混入　ローム粒及び白色粘土粒少含　焼土粒少含
3 層　暗灰褐色土　黒色粘土と白色粘土が混合　ローム粒微含　焼土粒少含
4 層　黒褐色土　ロームと焼土が微含　焼土粒少含
5 層　暗灰褐色土　黒色粘土と白色粘土が混合　焼土とローム粒少含
6 層　暗赤褐色土　黒色粘土と白色粘土と焼土が混合　ローム粒少含
11 層　灰赤褐色土　白色粘土を主体として焼土が多含
12 層　黒褐色土　黒色土を主体としたローム粒と白色粘土粒と焼土粒微含
13 層　暗黄褐色土　ロームを主体とした黒色土が少混　白色粘土粒と焼土粒微含
14 層　黒褐色土　黒色土を主体としたローム少混　ローム粒少含

図103　A247（2）

A247

検出地区　L4-97-3・4g、L5-7-1・2gにて検出した。

遺　構　主軸3.56m×短軸3.56m×壁高0.44m、方位はN-62°-Wを示している。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし全体に硬化するが、竈前から出入口にかけて良好な硬化面を認めた。床面にピットを2基検出したが、柱穴は不明である。竈袖下まで巡る周溝内に、18基の壁柱穴を認めた。P2は出入口に伴うものである。P1は掘込みは垂直であり、床面上では広くなっている。床面から0.70m程深く、覆土下層は突固められていた。柱材が引抜かれた柱穴と捉えられたが、主柱穴かは判断できなかった。竈は北西壁中央に粘土と黒色土が混合して設けられ、竈ピット内に火熱痕の火床を検出した。煙道部は壁をやや幅広く掘込み、煙道下部は火熱痕を認めた。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　竪穴住居跡としては比較的多く出土し、覆土中層～上層の出土が多く、土師器の小片が殆どである。住居跡南東側は少なく、南西側に多い傾向が窺えた。

所　見　出土遺物より奈良・平安時代の所産と捉えた。竈材に粘土と黒色土が混合する状況が、混和剤としての黒色土より他の竈の再利用とも考えられた。

表34　A247遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	150×　－×　37　非ロクロ成形　半球型　丸底 外面　ナデ　ヘラケズリ後ヘラナデ　内面　丁寧なヘラミガキ	暗茶褐 良	緻密	1/4	古墳時代後期の遺制を引く器形
2	土師器 坏	134×　－×　31　非ロクロ成形　半球型　丸底 外面　ナデ　ヘラケズリ後ヘラナデ　内面　丁寧なヘラミガキ	外茶褐 内橙褐 良	細砂 赤色スコリア細粒	1/4	古墳時代後期の遺制を引く器形
3	土師器 甕	(250)×　－×　(132)　口縁端部つまみ上げ 外面　口縁～頸部－ナデ　胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ　指頭痕	褐 良	スコリア 石英 雲母細粒 粗	口縁～ 胴上部	常総型
4	土師器 甕	－×　－×　－ 外面　ヘラケズリ後ヘラナデ　内面　ヘラケズリ後ヘラナデ	淡褐 良	石英 雲母細粒 やや粗	胴下半	常総型
5	土師器 甕	－×　(85)×　(87) 外面　ヘラケズリ後ヘラナデ　底部－木葉痕 内面　ヘラケズリ後ヘラナデ	茶褐 良	石英 雲母細粒 比較的 緻密	胴下半 ～底部	常総型
6	土師器 甕	(220)×　－×　(160)　口縁外反 外面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ後部分的にヘラナデ 内面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ	褐 良	細砂 長石細粒 緻密	口縁～ 胴中位	武蔵形
7	土師器 瓶	(246)×　－×　146　輪積み　口縁端部つまみ上げ 外面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ、部分的にヘラナデ 内面　口縁－ナデ　胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ	橙褐 良	長石 赤色スコリア細粒 緻密	口縁～ 底部	
8	手捏ね 皿形	(68)×　(60)×　19 外面　指頭による成形及び整形後ナデ　底部－木葉痕 内面　指ナデ	橙褐 普	長石細粒 比較的 緻密	1/4	
9	石製品 砥石	長さ45×　幅39×　厚さ22　重量56g　六面全て使用面　角柱状の「置き砥（石）」が欠損後再生されたもの。側面の一つに溝状の使用痕があることから「刀子」等の砥石として使用されたと思われる			完形	
10	石製品 砥石	長さ40×　幅25×　厚さ23　重量6g 天然素材をそのまま用いているるので不定形　ほぼ全面を使用			完形	軽石
11	土師器 坏	165×　90×　59　体部外傾し口縁でやや立ち上がる　口唇部やや尖る 底部丸みを持つ　外面　口縁－横ナデ　体部～底部－ヘラケズリ後疎らにヘラミガキ　内面　口縁－横ナデ後疎らにヘラミガキ　体部－ヘラナデ後疎らにヘラミガキ	橙褐 普	砂粒	2/3	

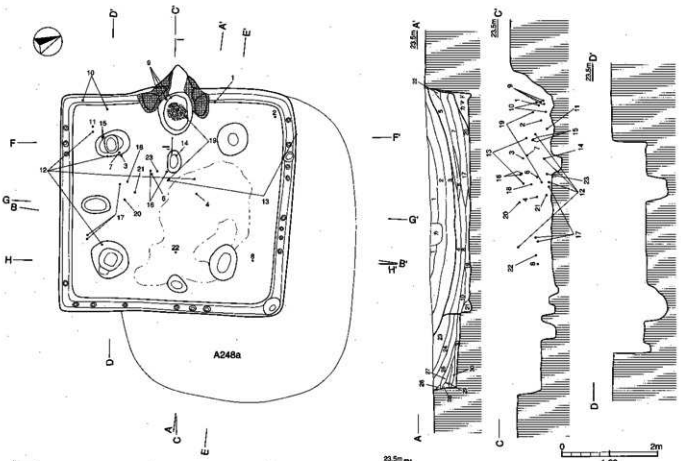
A248b

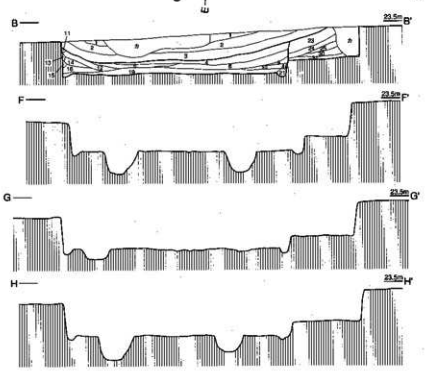
検出地区　L4-96-3・4g、L5-6-1・2gにて検出した。

遺　構　主軸6.32m×横軸4.86m×壁高0.96m、方位はN-65°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを深く掘込み地床とし、全体的に硬化面を認めるが、P4から住居跡中央にかけてやや軟弱となっている。主柱穴はP1～P4であり、竈袖下まで巡る周溝内に20基の壁柱穴を認めた。P5は出入口に伴うものである。竈は北西壁中央に粘土を極めて多く用いて設けられ、ソデは下部のみの遺存であるが、煙道部まで粘土が貼られたものである。袖内壁は焼土化するが、煙道部貼付の粘土の方が赤化している。竈ピット内に強く赤化した火床を検出した。覆土は黒褐色土を主体として自然堆積であった。

遺　物　遺構規模に比して遺物の出土量は少なかった。住居跡全体から散在して出土し、出土傾向は特に捉えられなかった。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。竈内の焼土化が強く残ることから、使用期間の長い竪穴住居跡と捉えている。





1 層	黒褐色土	ローム少含
2 層	黒褐色土	ローム少含　ローム粒多含
3 層	黒褐色土	ローム微量　径5mm大の ロームブロック微含
4 層	黒色土	ローム、ローム粒微含
5 層	黒褐色土	白色粘土　焼土粒少含
6 層	黒色土	炭化材多含　白色粘土多含
7 層	灰褐色土	白色粘土と黒褐色土混合 焼土　ローム少含　炭化材微含
8 層	黒色土	ローム少含　ローム多含 径12mm大のロームブロック微含
9 層	黒色土	ローム少含
10 層	黒色土	ローム少含
11 層	暗黄褐色土	ローム主体　黒褐色土少混含
12 層	黒褐色土	ローム混合　炭化材　粘土微含
13 層	暗黄褐色土	ローム主体
14 層	黒褐色土	ローム混合　炭化粒　白色粘土微含
15 層	暗黄褐色土	ローム主体
16 層	黒褐色土	ローム微含　白色粘土少含 炭化材　炭化粒微含
17 層	暗灰褐色土	黒褐色土と白色粘土が混合 焼土粒　炭化材微含
18 層	暗黄褐色土	ローム少含
19 層	黒褐色土	ローム少含　炭化材　焼土少含
20 層	暗灰褐色土	焼土粒　炭化材少含
21 層	黒褐色土	ローム少混　ローム微含
22 層	暗灰褐色土	黒褐色土と灰褐色土が混合 焼土粒　炭化粒微含
23 層	黒色土	ローム微含
24 層	黒色土	ローム微含
25 層	黒褐色土	ローム少含　ローム粒微含
26 層	明褐色土	ローム少含 径10mm大のロームブロック多含
27 層	黒褐色土	ローム少含　炭化材微含
28 層	黄褐色土	ハードロームブロック
29 層	黒褐色土	ローム微含
30 層	黒褐色土	ローム微含　炭化材微含
31 層	暗褐色土	ローム微含　焼土粒微含

図104　A248b

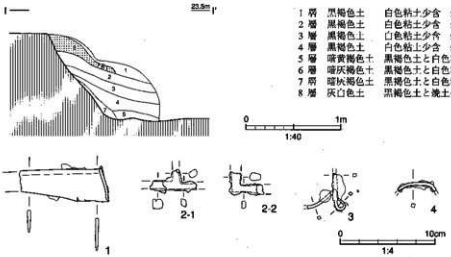
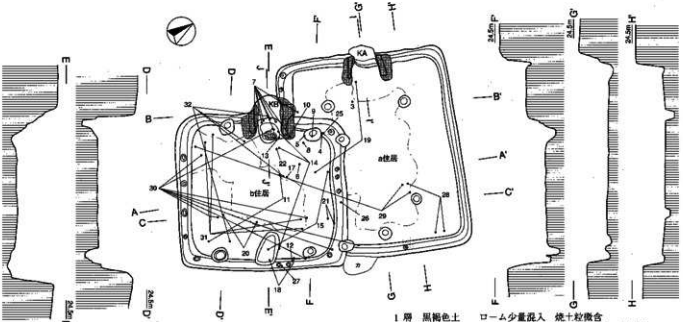


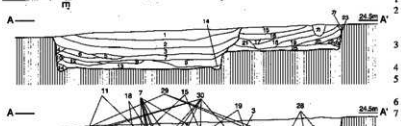
図105 A248b（2）

表35 A248b遺物観察表

(単位mm)

	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄器 鎌	長 (92)×幅 24～34×厚 3 刃部の幅が一様ではなく、研減り、または使減りの印象			刃部	
2	鉄器 不明	2-1 長 (48)×幅10×厚 5 2-2 長 (34)×幅 7×厚 4～7 L字状及び凸状の形を有する。組合わせの止金具か？			－	
3	鉄器 不明	長 －×幅 －×厚 3 折れ曲がるために長径を計測できず。形状から、鏃の茎子か？			－	
4	鉄器 不明	長 (40)×幅 －×厚 3 弧状の遺存。輪掛け具の一部か？			－	





1 層　黒褐色土　ローム少量混入　焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム少量混入　ローム粒多含　焼土粒、白色粘土粒、径10～20mm大のロームブロック少含
3 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒少含　白色粘土粒、焼土微含
4 層　暗黄褐色土　ローム主体　黒褐色土混入
5 層　灰褐色土　白色粘土主体　黒褐色土混入　焼土粒、炭化粒少含
6 層　黒褐色土　ローム混合　焼土粒、炭化粒少含
7 層　黒褐色土　ローム少量混入　粘土、炭化粒、焼土粒少含　ローム粒微含
9 層　黒褐色土　ローム微量混　ローム粒、粘土粒、炭化粒少含
10 層　暗黄褐色土　ローム主体　黒褐色土少量混
11 層　欠番
12 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒、炭化粒少含　径10mm大のロームブロック少含
13 層　黒褐色土　ローム少量混　炭化粒多含　焼土粒少含　ローム粒微含
14 層　暗褐色土　ローム混合　焼土粒、炭化粒少含
15 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒少含　白色粘土、炭化粒微含　径10mm大のロームブロック微含
16 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒多含　炭化粒微含　径10mm大のロームブロック少含
17 層　黒色土　ローム少量混　ローム粒多含　炭化粒微含　径10mm大のロームブロック多含
18 層　黒色土　ローム少量混　ローム粒多含　炭化粒微含　径10～20mm大のロームブロック少含
19 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒多含　径10～20mm大のロームブロック多含
20 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒少含
21 層　暗褐色土　黒色土混合　ローム少含　ローム粒多含　径10～30mm大のロームブロック多含
22 層　暗褐色土
23 層　暗黄褐色土　ローム主体　暗褐色土少量混
24 層　暗褐色土　ローム混合　ローム粒多含　径10～30mm大のロームブロック多含
25 層　暗褐色土　ローム混合　径10mm大のロームブロック少含　ローム粒多含炭化粒、焼土粒、白色粘土粒微含
26 層　暗黄褐色土　ローム混合

4 層　暗灰褐色土　白色粘土と黒褐色土が混合　焼土粒微含
5 層　黒褐色土　白色粘土少含　焼土粒微含
6 層　灰褐色土　白色粘土主体　黒褐色土混

1 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土混合　焼土微含
2 層　灰白色土　白色粘土主体　黒色土少含　焼土微含
3 層　灰褐色土　白色粘土主体　黒色土少含　焼土少含
4 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土混合　焼土粒、ローム少含
6 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土混合　焼土粒微含　径10mm大のロームブロック少含
7 層　暗赤褐色土　焼土と黒褐色土混合　炭化粒微含
9 層　暗灰褐色土　白色粘土と黒褐色土混合　焼土粒少含　径5～10mm大のロームブロック少含
10 層　黒褐色土　白色粘土少量混　焼土粒少含
13 層　暗褐色土
14 層　黒色土
20 層　暗黄褐色土　ロームと黒色土混合　白色粘土少量混　焼土粒少含
21 層　赤褐色土　ハードロームが火熱を受け赤色焼土化した焼土層

図106　A250a,b

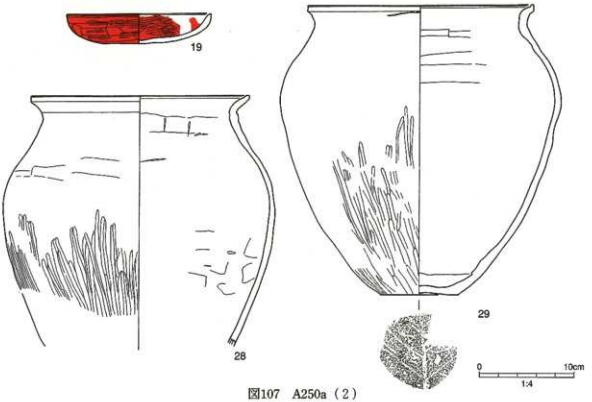


図107　A250a（2）

A250a

検出地区　L5-4-1～4gにて検出した。

遺　構　長軸4.32m×短軸(3.72)m×壁高0.48m、方位はN-64°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、住居跡中央に硬化面を認める。主柱穴は4基所在したと考えられるが、A250bとの重複のため、P2に相当する柱穴は失われている。P5は出入口に伴うものである。竈内まで全周する周溝内に点在して3基の壁柱穴を認めた。竈は北西壁中央に粘土を主体として設けられ、竈内と床の高さに差はなかった。覆土は暗褐色土・黒色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　出土遺物は極端に少なかった。

所　見　A250bによって住居跡の南東の一部を失い、遺物の出土にも影響を被っている。19より奈良・平安時代の所産と捉えたが、時期としてはやや古いものとなる。

表36　A250a遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
19	土師器 坏	152×　－×　32　口縁やや外傾　丸底の浅い坏 外面　口縁－横ナデ後ヘラミガキ　体部～底部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　ヘラミガキ	橙褐 普	砂粒多	略完形	内外面赤彩
28	土師器 甕	228×　－×　(267)　口縁立ち上がり外面は凹線状の調整　頸部「く」の字状　胴上半が張る　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ及びナデ　下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　口縁－頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴上半	常総型
29	土師器 甕	(238)×　82×　(307)　口縁やや受け口状　端はつまみ上げられ外面は凹線状の調整　頸部ゆるやかな「く」の字状　胴上半が張る 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ナデ　下半－下端－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　口縁－頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外暗褐 内橙褐 普	粗砂粒 金雲母	1/3	常総型 底部－木葉痕

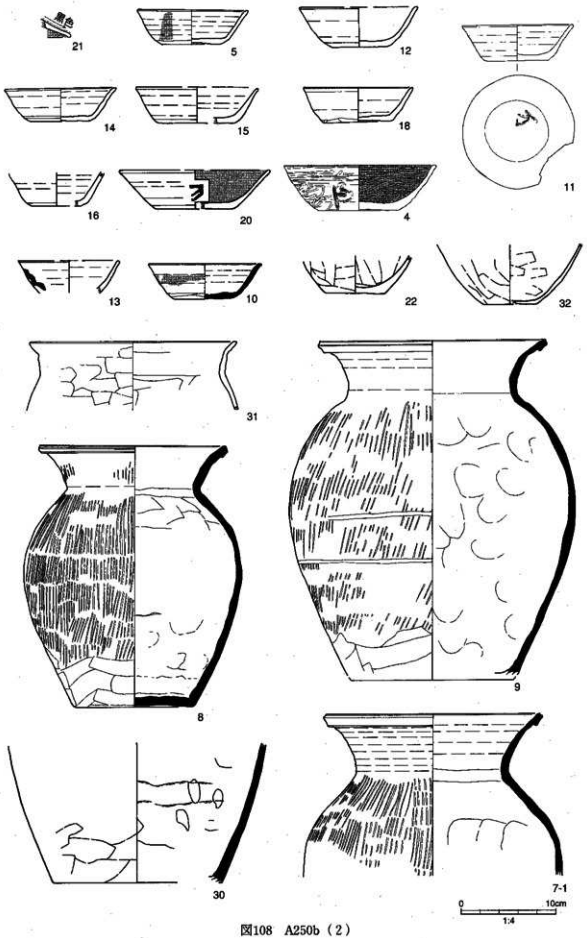


図108 A250b（2）

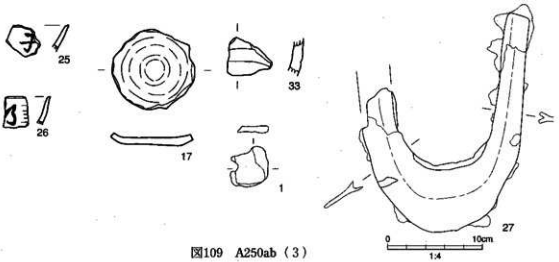


図109　A250ab（3）

A250b

遺　構　　長軸3.29m×短軸3.56m×壁高0.88m、方位はN-59°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを深く掘込み、深さはA250aの柱穴より深い。床はハードロームの地床で、竈前から住居跡中央に硬化した床面を認めた。主柱穴はP6～P9，P11・P12は支柱穴は支柱穴である。P10は出入口に伴うものである。縁と袖下まで巡る周溝内に12基の壁柱穴を認めた。竈は北西壁中央に粘土を主体として設けられ、竈ピット内に赤化した火床を検出した。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積であるが、A250aとの重複部に覆土の崩れが認められた。

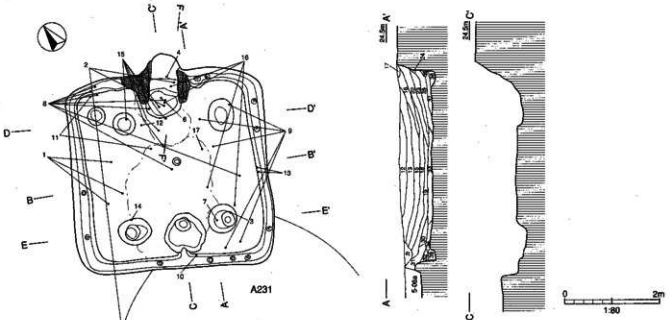
遺　物　　全体から散在して出土しており、出土傾向を示すことはできなかった。「万」の文字の墨書土器２点が出土している。また、「得」とみられる墨書片も出土した。

所　見　　A250aとの先後関係は、覆土よりA250a→A250bと捉えられた。なお、床面には炭化材の散布がみられ、遺構廃絶時に不用材の焼却を行った住居跡と判断された。

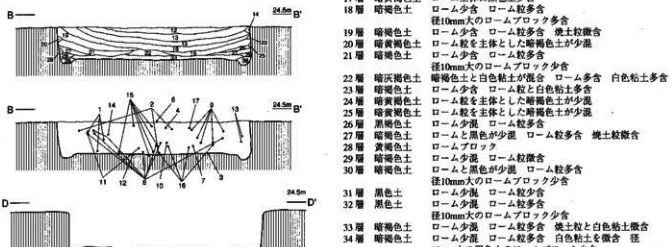
表37　A250b遺物観察表　　（単位ｍｍ）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石製品 紡錘車	上部径－×下部径－×器高24　重量5.0g 比較的良く研磨されている	暗褐		断片	滑石 火熱受けている
4	土師器 坏	158×84×48　ロクロ成形　体部外傾し中央部にやや括れを持つ 内面は密に、外面は疎らにヘラミガキ　外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐 普	砂粒	完形	墨書「得」 体部外面正位 内黒
5	土師器 坏	116×63×37　ロクロ成形　断面逆台形状　体部下端はやや丸味を持つ　外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	茶褐 普	砂粒	完形	外面スス？ター ル？付着
6	須恵器 鉢	301×104×163　底部より直線的に開き、口縁は折れ面がるように外反　体部はごく厚手の作り　外面　口縁－横ナデ　体部上半～下半－縦位のヘラケズリ　下端－横位のヘラケズリ 内面　口縁－横ナデ　体部－ヘラナデ　輪積痕	赤褐 やや悪	砂粒 白色粒	3/4	器面剥離 磨耗多い
7	須恵器 甕	(224)×－×(173)　ロクロ成形　外反する複合口縁　外面に稜を持つ　頸部は「く」の字状　肩部はなだらかな傾斜を持つ 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－平行タタキ 内面　口縁－横ナデ　胴部－ヘラナデ及びナデ	灰黒褐 普	砂粒 白色粒	口縁～ 胴部	
8	須恵器 甕	197×126×278　口縁外反　外面に稜を持つ　頸部屈曲　胴上半が張り急傾斜で底部へつながる　外面　口縁－横ナデ　頸部－平行タタキ後横ナデ　胴上半～下半－平行タタキ　下端－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部～ヘラナデ及びナデ	灰茶褐 普	粗砂粒多 小石 雲母	略完形	
9	須恵器 甕	(239)×(170)×(361)　外反する複合口縁、外面に稜　胴上半が張る 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下半－平行タタキ　下端～ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部～ヘラナデ及びナデ　指頭痕	茶褐～ 黒褐 普	砂粒	1/3	
10	須恵器 坏	118×61×48　ロクロ成形　断面逆台形状　口縁外反 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り	黒褐～ 茶褐 普	砂粒	完形	外面スス？付着

11	土師器 坏	115× 68× 38　ロクロ成形　断面逆台形状　体部中央に括れを持つ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	外明褐 内橙褐 普	砂粒 雲母	略完形	墨書「万」 底部外面
12	土師器 坏	126× 60× 42　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 良	雲母微細粒 緻密	1/4	
13	土師器 坏	(108)× －× (35)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	橙褐 良	長石 赤色スコリア細粒 緻密	口縁～ 体部	墨書「□」 体部外面
14	土師器 坏	116× 64× 35　ロクロ成形　口縁外反　体部下端やや丸味を持つ 薄手の作りである　外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	茶褐 良	砂粒 赤色粒	4/5	
15	土師器 坏	(130)× (80)× 38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 良	雲母 赤色スコリア微細粒　緻密	1/4	
16	土師器 坏	－× (52)× (35)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	明褐 良 堅緻	長石赤色スコリア細粒　比較的緻密	口縁～ 底部	
17	土師器 坏	－× 64× 13　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 良	雲母 赤色スコリア細粒 緻密	底部	周縁を打ち欠く 土製品か？
18	土師器 坏	114× 73× 38　ロクロ成形　体部外傾し下半に丸味を持つ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒	略完形	
20	土師器 坏	(160)× (84)× 42　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　部分的にヘラミガキ　底部－回転ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　丁寧なヘラミガキ	外淡褐 内黒 良	雲母細粒 緻密	1/4	墨書「万」 体部外面正位 内黒
21	土師器 坏	－× －× －　ロクロ成形　内外面ともナデ	黒 良	長石 赤色スコリア	口縁片	
22	土師器 小型甕	－× 64× (38)　輪積 外面　胴部－ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ 内面　胴部－ヘラケズリ後ヘラナデ	外茶褐 内橙褐 良	長石 スコリア細粒　比較的緻密	胴下半 ～底部	
23	土師器 坏	－× －× －　ロクロ成形	橙褐 良	雲母微細粒 緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 写真掲載のみ
24	土師器 坏	－× －× －　ロクロ成形	淡褐 良	雲母微細粒 緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 写真掲載のみ
25	土師器 坏	－× －× －　ロクロ成形	淡褐 良	緻密	口縁片	墨書「　」 体部外面正位
26	土師器 坏	－× －× －　ロクロ成形	淡褐 良	雲母微細粒 緻密	口縁片	墨書「得」 体部外面正位
27	鉄器 鏃先	長(156)×幅46×厚 3			1/3	
30	須恵器 甕	－× (178)× (146) 外面　胴下半－平行タタキ目　下端－ヘラケズリ	外赤灰 内暗灰 良	雲母 石英細粒 やや粗	胴下半	常陸産
31	土師器 甕	(216)× －× (73)　頸部立ち上がり　口縁外反 外面　口縁－横ナデ　頸部－ヘラナデ及びナデ　胴上半－ヘラケズリ 内面　口縁－横ナデ　頸部－胴上半－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	口縁～ 胴上半	武蔵型
32	土師器 甕	－× (56)× (63)　ごく薄手 外面　胴部－斜位を主とするヘラケズリ　底部－ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	外黒褐 内橙褐 良	黒色粒 赤色細粒 比較的緻密	胴下半 ～底部	武蔵型
33	手捏ね 坏形か？	－× －× －　輪積　内外面とも指ナデ	橙褐 良	長石 スコリア 細粒 やや粗	胴部片	



12層　黒褐色土　黒色土主体　ローム少含　ローム粒多含　焼土粒微含
13層　黒褐色土　黒色土主体　ローム少混　ローム粒多含
14層　黄褐色土　ロームと黒色土混合
15層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒多含
16層　暗灰褐色土　暗褐色土と白色粘土が混合　ローム少含　ローム粒多含　白色粘土多含
17層　暗黄褐色土　ローム主体に黒色土少含
18層　暗褐色土　ローム少含　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック多含
19層　暗褐色土　ローム少含　ローム粒多含　焼土粒微含
20層　暗黄褐色土　ローム粒を主体とした暗褐色土が少混
21層　暗褐色土　ローム少含　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック少含
22層　暗灰褐色土　暗褐色土と白色粘土が混合　ローム多含　白色粘土多含
23層　暗褐色土　ローム少含　ローム粒と白色粘土多含
24層　暗黄褐色土　ローム粒を主体とした暗褐色土が少混
25層　暗黄褐色土　ローム粒を主体とした暗褐色土が少混
26層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
27層　暗褐色土　ロームと黒色が少混　ローム粒多含　焼土粒微含
28層　黄褐色土　ロームブロック
29層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒微含
30層　暗褐色土　ロームと黒色が少混　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック少含
31層　黒色土　ローム少混　ローム粒少含
32層　黒色土　ローム少混　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック少含
33層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒多含　焼土粒と白色粘土微含
34層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒多含　白色粘土を微含　径10mm大の黒色土のロームブロック少含
35層　暗灰褐色土　白色粘土が混合　ローム微含　白色粘土多含　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック微含
36層　灰褐色土　白色粘土主体にロームが少混　ローム粒微含
37層　暗褐色土　ローム少混　白色粘土多含　ローム粒少含　焼土粒微含
38層　暗褐色土　ローム混合　ローム粒少含
39層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合



1層　黒褐色土　白色粘土少混　焼土粒微含
2層　黒褐色土　白色粘土微混　焼土粒微含
3層　暗灰褐色土　黒褐色土主体　白色粘土混合　焼土粒微含
4層　黒褐色土　白色粘土微混　焼土粒微含
5層　暗赤褐色土　白色粘土と黒褐色土と焼土混合
7層　暗黄褐色土　ローム主体で白色粘土と黒褐色土少混　焼土少含
8層　黒褐色土　白色粘土微混　焼土粒微含
10層　暗灰褐色土　白色粘土と黒褐色土混合　炭化粒少含
12層　暗灰褐色土　白色粘土と黒褐色土混合　炭化粒少含
13層　黒褐色土　炭化粒と粘土粗く混合　焼土粒微含
15層　暗黄褐色土　ローム主体の土に黒褐色土少混

図110　A251b

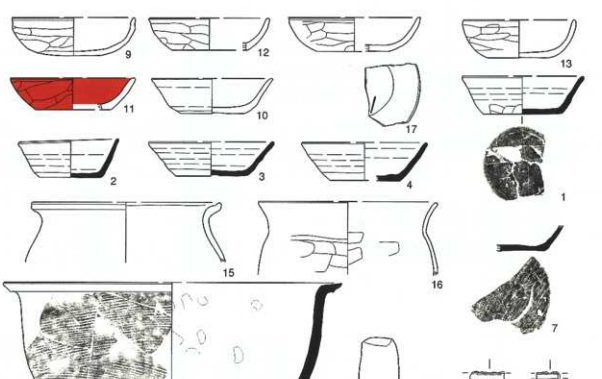


図111　A251b（2）

A251b

検出地区　　L5-14-2・4g、15-1・3gにて検出した。

遺　　構　　長軸4.15m×短軸4.08m×壁高0.65m、方位はN-31°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、竈前から出入口に帯状に良好な硬化面を認めた。主柱穴は4基検出し、竈袖下まで巡る周溝内に11基の壁柱穴を認めた。P5は出入口に伴うものである。竈は北東壁の中央に粘土を主体として築かれ、袖は地山のロームを掘残して基礎とし、その上に白色粘土のみで積上げていた。ないへきはの焼土化は強く、竈ピット坑底は火熱痕を認めるが赤化は確認できなかった。これを火床と捉えている。煙道部は壁を幅広く掘込んでおり、煙道中位以下は火熱痕が認められた。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　　物　　土師器の小片が多いが、住居跡としては出土は多くない。特に出土傾向を捉えることはできなかった。

所　　見　　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えたが、古い時期に相当する。

表38　A251b遺物観察表　　（単位mm）

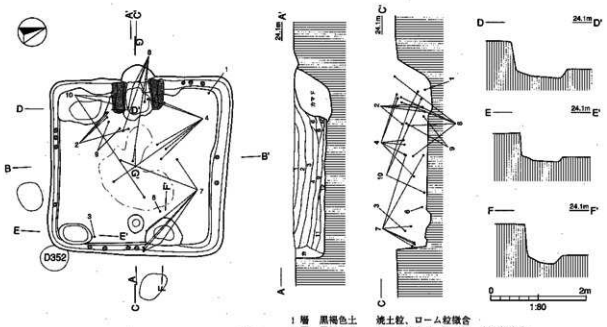
	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	(128)×80×40　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ	灰 良	雲母 花崗岩粒 やや粗	2/3	線刻「　」 底部外面
2	須恵器 坏	105×66×39　ロクロ成形　小形でやや箱形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	暗灰 良	雲母細粒 石英粒 やや粗	3/4	常陸産

3	須恵器 坏	(133)× 74× 36　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－切り離し後静止ヘラケズリ	灰 良	長石 雲母細粒 比較的 緻密	1/4	常陸産
4	須恵器 坏	(134)× (75)× 40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラケズリ	灰 良	雲母 長石 石英細粒 やや粗	1/4	常陸産
7	須恵器 坏	－× －× －　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り	灰 良	雲母 長石微細 粒 緻密	体部～ 底部	線刻「□」 底部外面
8	須恵器 甕	(356)× －× (170) 外面　口縁－ナデ　胴上半－平行タタキ目　下半－ヘラケズリ 内面　口縁－ナデ　胴部－ナデ　当具痕	暗灰 良	雲母 長石 石英細粒 やや粗	口縁～ 胴下半	
9	土師器 坏	(130)× 60× 41　非ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　体部～底部－ヘラケズリ後部分的にヘラミガキ 内面　ナデ後やや雑なヘラミガキ	橙褐 良	長石赤色 スコリア 細粒　比 較的緻密	1/3	
10	土師器 坏	(128)× 67× 37　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	橙褐 良	長石赤色 スコリア 粒　比較 的緻密	1/3	
11	土師器 坏	(132)× (80)× 34　非ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　体部－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	暗茶褐 良	長石 スコリア 細粒 緻密	口縁～ 底部	内外面赤彩
12	土師器 坏	(128)× (80)× 34　非ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　体部－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	茶褐 良	長石 スコリア 細粒 緻密	口縁～ 底部	
13	土師器 坏	(120)× (65)× 40　非ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　体部－ヘラケズリ後部分的にヘラミガキ 内面　ナデ後ヘラミガキ	茶褐 良	長石 スコリア 微細粒 緻密	1/4	
14	手捏ね 坏形か？	－× －× －　内外面とも指ナデ	暗褐 普	雲母	体部片	
15	土師器 甕	(200)× －× (63)　口縁端部はつまみ上げ 外面　口縁－ナデ　頸部以下ヘラケズリ後ナデ 内面　口縁－ナデ、以下ヘラナデ	橙褐 良	雲母長石 石英粒 比較的 緻密	口縁～ 胴上部	常総型
16	土師器 甕	(190)× －× (77)　ごく薄手 外面　口縁－ナデ　胴上部－ヘラケズリ 内面　口縁－ナデ　胴上部－ヘラナデ	橙褐 良	細砂長石 赤色スコ リア細粒 やや粗	口縁～ 胴上部	武蔵型
17	土師器 坏	(140)× (72)× 36　非ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　体部－ヘラケズリ　内面　ナデ後ヘラミガキ	暗茶褐 良	赤色スコ リア粒 概ね緻密	1/5	墨書「□」 底部外面
18	鉄器 刀子	長(36＋22)×幅8×厚3～4			茎子	
24	土製品 支脚	長さ(61)× 幅(42)× 厚み(22)　重量62.9g　小形で細身	灰褐 良	砂 赤色スコ リア やや粗	1/6	

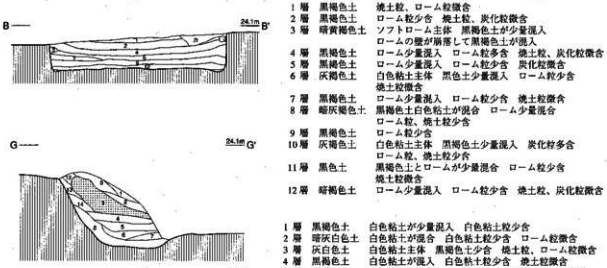
A252

検出地区　L5-15-4g・16-3g、25-2g、26-1gにて検出した。

遺　構　長軸3.72m×短軸3.69m×壁高0.65m、方位はN-72°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを掘込み地床とし、全体として硬化しているが、住居跡中央の小範囲に特に良好な硬化面を認めた。主柱穴は検出されず、竈袖下まで巡る周溝内に13基の壁柱穴を認めた。P4は出入口に伴うものである。南壁の2コーナーとP4脇の壁下に1基のピットを検出したが、用途不明である。竈は西壁中央に設けられ、天井・袖とも白色粘土を極めて多量に用いて築いていた。袖の内壁は部分的に焼土化し、竈ピットの掘込みははっきりしており、ピット内に火熱痕のみの火床を検出した。煙道部はやや



1 層　黒褐色土　焼土粒、ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含　焼土粒、炭化粒微含
3 層　暗黄褐色土　ソフトローム主体　黒褐色土が少量混入
ロームの壁が崩落して黒褐色土が混入
4 層　黒褐色土　ローム少量混入　ローム粒多含　焼土粒、炭化粒微含
5 層　黒褐色土　ローム少量混入　ローム粒少含　炭化粒微含
6 層　灰褐色土　白色粘土主体　黒色土少量混入　ローム粒少含
焼土粒微含
7 層　黒褐色土　ローム少量混入　ローム粒少含　焼土粒微含
8 層　暗灰褐色土　黒褐色土白色粘土が混合　ローム少量混合
ローム粒、焼土粒少含
9 層　黒褐色土　ローム粒少含
10 層　灰褐色土　白色粘土主体　黒褐色土少量混入　炭化粒多含
ローム粒、焼土粒少含
11 層　黒色土　黒褐色土とロームが少量混合　ローム粒少含
焼土粒微含
12 層　暗褐色土　ローム少量混入　ローム粒少含　焼土粒、炭化粒微含



1 層　黒褐色土　白色粘土が少量混入　白色粘土粒少含
2 層　暗灰白色土　白色粘土が混合　白色粘土粒少含　ローム粒微含
3 層　灰白色土　白色粘土主体　黒褐色土少含　焼土粒、ローム粒微含
4 層　黒褐色土　白色粘土が混入　白色粘土粒少含　焼土粒微含
5 層　灰褐色土　白色粘土に黒褐色土が混合　ローム粒、焼土粒少含
6 層　灰赤褐色土　天井裏の焼土と流れ込んできた黒褐色土が混合
7 層　黒色土　ローム粒と焼土粒が微量に混合
8 層　黒色土　ローム粒と焼土粒が混合
9 層　黒褐色土　ローム粒と白色粘土粒を微含
12 層　黒褐色土　白色粘土が微量混合　焼土粒微含
13 層　暗灰褐色土　白色粘土が少量混合　焼土粒、ローム粒微含
14 層　黒色土　白色粘土、焼土が少量混合　炭化粒、ローム粒微含

図112　A252

幅広く壁を掘込み、煙道下部には火熱痕が認められた。火床及び煙道部の火熱痕は、赤変もしていなかった。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積と捉えた。

遺　物　竪穴住居跡の竈と出入口の中軸線から北側に遺物が多量に出土しているが、南側は少ない。また覆土中層～上層に多く、本住居跡の出土傾向として捉えることができた。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えられた。当該時代でもやや古い時期となる住居跡である。P1～P3については、調査時に貯蔵穴の可能性も想定していた。壁際に所在する柱穴とも併せて検討したが、その用途を捉えることはできなかった。

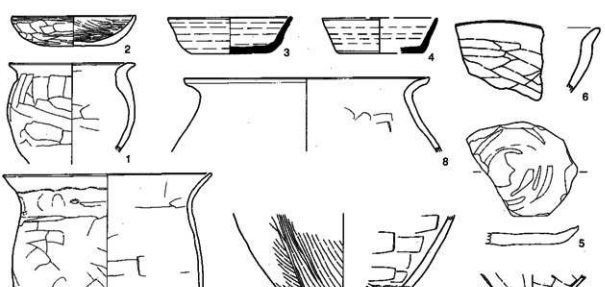
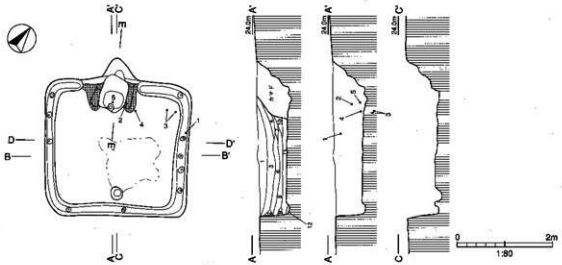


図113　A252（2）

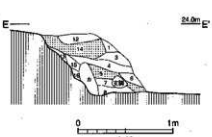
表39　A252遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小形甕	130×　－×（107）　口縁大きく外反　頸部「く」の字状　胴部丸味を持つ　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下半ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	外褐～暗褐 内暗褐 普	砂粒 赤色粒	口縁～胴部	
2	土師器 坏	128×　－×　32　口縁やや内湾　丸底の浅い坏 外面　口縁－横ナデ後ヘラミガキ　体部～底部－ヘラケズリ　一部ヘラミガキ 内面　口縁－横ナデ後ヘラミガキ　体部－ヘラナデ後ヘラミガキ	外明褐 内茶褐 普	砂粒 白色粒	略完形	
3	須恵器 坏	129×　82×　38　ロクロ成形　体部外傾し中央でやや括れる　下端は丸味を帯びる 外面　底部－手持ちヘラケズリ	青灰 普	粗砂粒多 小石多	2/3	
4	須恵器 坏	(120)×（90)×　37　ロクロ成形　箱形気味 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	灰 良 堅緻	雲母微細粒 比較的緻密	1/3	
5	土製品 転用硯	長径(74)×　短径(72)×　器高16　ロクロ成形 見込み面を使用面とする	灰 良	石英 雲母細粒 やや粗	2/3	須恵器坏の転用品（常陸産）
6	土師器 鉢	－×　－×　－　輪積 外面　口縁－ナデ後ヘラミガキ　胴部－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　口縁－ナデ後部分的にヘラミガキ　胴部－ヘラナデ	外黒褐 内茶褐 良	長石　ス コリア細粒　比較的緻密	口縁～胴部	
7	土師器 甕	－×（74)×（113) 外面　胴部－ヘラケズリ後ヘラミガキ　底部－木葉痕 内面　ヘラナデ	外暗茶褐 内茶褐 良	石英 雲母細粒 やや粗	胴下半～底部	常総型
8	土師器 甕	(258)×　－×（80)　口縁外反　上端はつまみ上げられる　頸は「く」の字状　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	褐 普	粗砂粒多	口縁～胴上半	常総型
9	土師器 甕	－×（66)×（30)　ごく薄手 外面　胴部－斜位のヘラケズリ　底部－ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	暗褐 良	細砂 やや粗	胴下半～底部	武蔵型
10	土師器 甕	(218)×　－×（170)　口縁外反　頸部はゆるやかな「く」の字状 外面　口縁－横ナデ　頸部－ナデ及び指頭圧痕　胴上半－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒	口縁～胴部	武蔵形 内面スス付着



1 層　暗褐色土　ローム粒多含　ロームブロック少含
2 層　暗褐色土　黒色土が少混　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　ローム粒多含　ロームブロック少含
4 層　暗灰褐色土　白色粘土多含　ローム粒少含　炭化粒と焼土粒微含
5 層　暗褐色土　黒色土が少混　ローム粒少含
6 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含　炭化粒と焼土粒微含
7 層　暗褐色土　白色粘土少含　ローム粒少含　焼土粒微含
8 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含　焼土粒少含
9 層　暗褐色土　黒色土が少混　ローム粒少含
10 層　暗灰褐色土　白色粘土多含　ローム粒少含　炭化粒と焼土粒微含
11 層　暗褐色土　ロームが極少混　ローム粒と粘土粒微含
12 層　黒褐色土　ロームが極少混
13 層　暗褐色土　ロームが少混　ロームブロック少含



1 層　暗褐色土　白色粘土少混　ローム粒と白色粘土粒少含
3 層　暗灰褐色土　白色粘土と黒色粘土が混合　ローム粒少含　焼土粒微含
4 層　黒褐色土　白色粘土少混　ローム粒と焼土粒が少含
5 層　灰褐色土　白色粘土主体　黒褐色土少混　ローム粒と焼土粒が微含
6 層　黒褐色土　白色粘土とロームが微混　ローム粒と焼土粒と炭化粒が微含
7 層　黒褐色土　白色粘土少混　ローム粒と焼土粒が少含
8 層　暗赤褐色土　白色粘土と黒色粘土及び焼土が混合
12 層　黒色土　白色粘土粒少含　ローム粒と焼土粒が少含
13 層　暗黄褐色土　ロームと黒色土が混合
14 層　灰褐色土　白色粘土主体　焼土粒とローム粒少含
15 層　黒褐色土　ロームと黒色土が混入　ローム粒と粘土粒少含
16 層　黒褐色土　ロームと黒色土が混合　ローム粒と焼土粒が微含

図114　A253

A253

検出地区　L5-26-3g、36-1gにて検出した。

遺　構　長軸2.88m×短軸3.00m×壁高0.56m、方位はN-52°-Wを示す。平面形は隅丸長方形である。ハードロームを掘込み地床とし、全体的に硬化はするが、住居跡中央から出入口にかけて良好な硬化面を認めた。主柱穴は検出されず、竈袖下まで巡る周溝内に10基の壁柱穴を認めた。他の住居跡に比して壁柱穴は径あるものとなっていた。P 1 は出入口に伴うものである。竈は北西壁中央に、白色粘土を極めて多量に用いて築かれていた。袖内壁は焼土化している。竈ピットは掘込まれず、火熱痕のみの火床を検出した。煙道部は中間にテラスを設け、上部は垂直から急傾斜で立ち上がっている。煙道下部には火熱痕は認められなかった。覆土は、暗褐色土・黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　全体的に点在し、出土遺物は少なかった。5 の支脚は、火床の0.05m上から横倒して出土した。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。

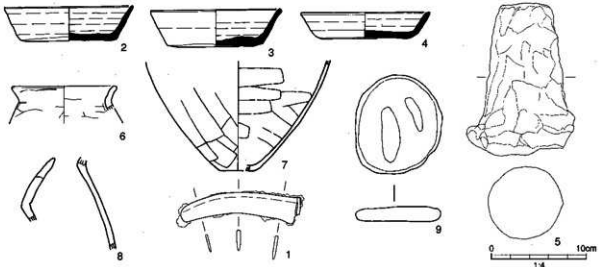


図115　A253（2）

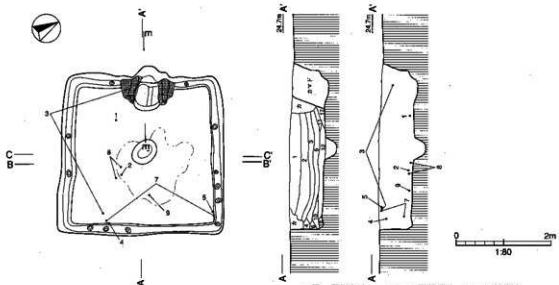
表40　A253遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄器 鎌	長(122)×幅18～25×厚2～3			刃部	
2	須恵器 坏	134×95×36　ロクロ成形　断面逆台形状　広めの底部の浅い坏 外面　体部下端－ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	灰白 悪	砂粒 黒色粒	略完形	常陸産
3	須恵器 坏	138×101×39　ロクロ成形　断面逆台形状　口縁やや外反 外面　底部－ヘラ切り後手持ちヘラケズリ	外灰黒褐 ～灰白 内灰白 悪	砂粒 石英	略完形	常陸産
4	須恵器 坏	135×93×28　ロクロ成形　断面逆台形状　広い底部の浅い坏 外面　底部－ヘラ切り後手持ちヘラケズリ	灰茶褐 やや悪	砂粒 小石	4/5	常陸産 器面の磨耗顕著
5	土製品 支脚	上部径53×下部径114×器高162　重量1280g 円錐状を呈する　上面は平坦に整えられる ヘラなどによる調整がされる			完形	
6	土師器 小形甕	108×－×(40)　口縁外反　頸部「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケナデ	茶褐 普	砂粒	口縁～ 胴上半	
7	土師器 甕	－×(40)×(116)　ごく薄手 外面　斜位（右下がり）をキとするヘラケズリ 内面　ヘラナデ	外灰褐 内橙褐 良	長石赤色 スコリア 細粒　比 較的緻密	胴下半 ～底部	武蔵型
8	土師器 甕	－×－×－ 外面　口縁－ナデ　頸部以下は乾燥が進んだ時点のヘラケズリ 内面　ヘラナデ	橙褐 良	長石スコ リア細粒 比較的 緻密	口縁～ 胴部	武蔵型
9	石器 不明	長径80×短径68×器厚12　重量93.1g 表裏面に使用面あり　側面は敲打痕あり			完形	砂岩

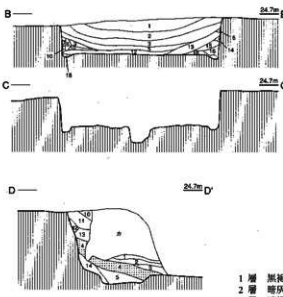
A254

検出地区　L5-34-2・4g、35-3gにて検出した。

遺　構　長軸3.42m×短軸3.40m×壁高0.72m、方位はN-27°-Wを示す。平面方は隅丸長方形である。竈と対面する南東壁が幅を有し、やや台形状ともなっている。ハードロームを掘込み地床とし、全体的に硬化するが、住居跡中央に小範囲であるが、極めて良好な硬化面を認めた。主柱穴は検出されず、



1 層　黒褐色土　　ローム微量混入　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　　ローム少量混入　ローム粒多含
3 層　黒褐色土　　ローム微量混入　ローム粒、炭化粒微含
4 層　暗黄褐色土　ローム主体　黒褐色土少量混入
5 層　黒褐色土　　ローム少量混入　ローム粒、炭化粒少含
6 層　暗黄褐色土　ローム主体　黒褐色土少量混入
7 層　暗褐色土　　ローム少量混入　粘土粒、炭化粒微含
8 層　黄褐色土　　ロームブロック　壁が崩落したもの
9 層　暗褐色土　　ロームと黒褐色土が微量混合　ローム粒、粘土粒、炭化粒微含



10 層　暗褐色土　　ロームと黒褐色土が少量混合　ローム粒、粘土粒、炭化粒微含
11 層　暗灰褐色土　黒褐色土に多量の白色粘土が混合　ローム粒、粘土粒少含
12 層　暗褐色土　　多量のローム混合　ローム粒、粘土粒、焼土粒、炭化粒微含
13 層　茶褐色土　　多量のローム混合　ローム粒多含　炭化粒少含
14 層　暗黄褐色土　ローム主体　黒褐色土少量混入
15 層　黒褐色土　　ローム粒多含　焼土粒少含
16 層　黒褐色土　　ローム粒多含　炭化粒少含
17 層　灰褐色土　　白色粘土主体　黒褐色土が少量混入　焼土粒、ローム粒少含
18 層　暗褐色土　　暗褐色土とローム同量混合　焼土粒、炭化粒微含

1 層　黒褐色土　　ロームと白色粘土が微量に混入　ローム粒焼土粒微含
2 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土が粗く混合　焼土粒少含
3 層　暗褐色土　　黒褐色土主体の土に多量のローム混入　焼土粒、白色粘土粒微含
4 層　暗灰褐色土　白色粘土主体の土に　黒褐色土少量混入　焼土粒微含　天井
5 層　黒褐色土　　黒褐色土と白色粘土が粗く混合　焼土粒多含
11 層　黒褐色土　　ロームと白色粘土が微量に混入　粘土粒微含
12 層　暗褐色土　　ロームと黒褐色土の混合　白色粘土少含
13 層　暗灰褐色土　ロームと黒褐色土と白色粘土の混合　焼土粒微含
14 層　暗灰褐色土　黒褐色土と白色粘土の混合　ローム粒、焼土粒微含

図116　A254

竈袖下まで巡る周溝内に12基壁柱穴を認めた。床の中央には略垂直に掘込まれたP1を検出したが、覆土はロームを主体とする突固められたものであった。竈は北西壁中央に白色粘土を主体として築かれ、竈袖内壁は焼土化していた。竈ピットが設けられ、坑底は火熱痕を認めたが、赤化した火床は検出されなかった。煙道部は壁を奥行きはないが、幅広く掘込まれていた。火熱痕は認められなかった。

遺　物　　全体的に出土量は住居跡としては少ないが、住居跡中央から南側に出土の主体を占めている住居跡北側の竈側では土師器小片がわずかに出土するのみである。

所　見　　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。

図117　A254（2）

表41　A254遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　下半～底部－磨れている 内面　ナデ　体部下半～底部－使用面	灰 良 堅緻	黒色粒 緻密	体部～ 底部	転用硯
2	須恵器 坏	135×80×36　ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　底部－静止ヘラ切り 内面　口縁－ナデ	暗灰 良	石英 雲母細粒 やや粗	1/2	線刻「□」 底部外面
3	須恵器 坏	(144)×(90)×40　ロクロ成形 外面　口縁－ナデ　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り 内面　ナデ	暗褐 良 堅緻	雲母微細 粒 緻密	2/3	
4	須恵器 甕	(250)×(114)×127 外面　口縁－ナデ　胴部－平行タタキ　胴下半－ヘラケズリ 内面　口縁－ナデ　以下はヘラナデ	灰 良	石英 雲母細粒 やや粗	1/4	常陸産
5	須恵器 甕	－×－×－ 外面　胴部－平行タタキ 内面　胴部－当具痕	灰 良	石英 雲母細粒 やや粗	胴部片	常陸産

6	須恵器 長頸壺	(100)× －× (21)　ロクロ成形 内外面ともナデ（口縁部に自然釉付着？）	灰 良 緊緻	黒色粒 緻密	口縁片	
7	土師器 甕	(260)× －× (100)　口縁端部つまみ上げ 外面　口縁ーナデ　頸部以下ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　口縁ーナデ　以下はヘラナデ	外灰 内茶褐 良	石英雲母 赤色スコ リア細粒 やや粗	口縁～ 胴上部	常総型
8	土師器 甕	(214)× 100× 321　口縁外反　上端つまみ上げられる　頸部「く」の字状　外面凹線状に調整　胴上半が張る　外面　口縁～頸部ー横ナデ　胴上半ーヘラナデ　下半～下端ヘラケズリ後ヘラミガキ　底部ー木葉痕　内面　口縁～頸部ー横ナデ　胴部ーヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒多	3/4	常総型
9	土製品 支脚	上部径40×　下部径－×　器高(175)　重量460g 円錐形を呈し、上面は平坦に整えられる ヘラによるケズリ及びナデ調整される			略完形	
10	石器 不明	長さ77×　幅65×　厚み15　重量22.1g 表裏、及び側面に使用面あり			完形	軽石

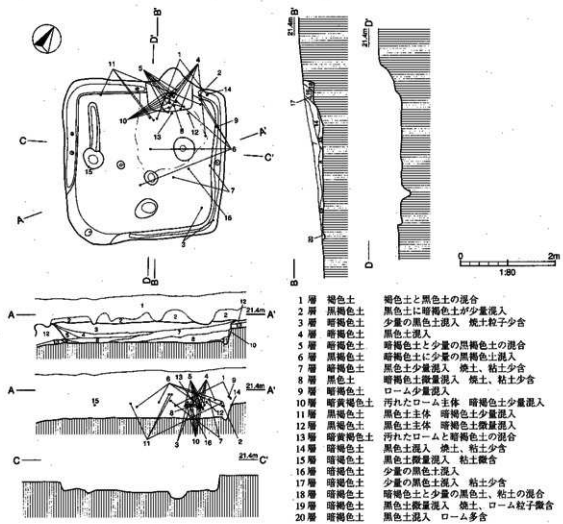


図118　A256

A256

検出地区　L4-5-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸3.4m×短軸3.4m×壁高0.4m、主軸方位はN-30°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。床はロームを良く踏み固めた床で、住居壁際で硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を5基検出した。P１、２は柱穴、P３は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は、ほぼ全周する。壁

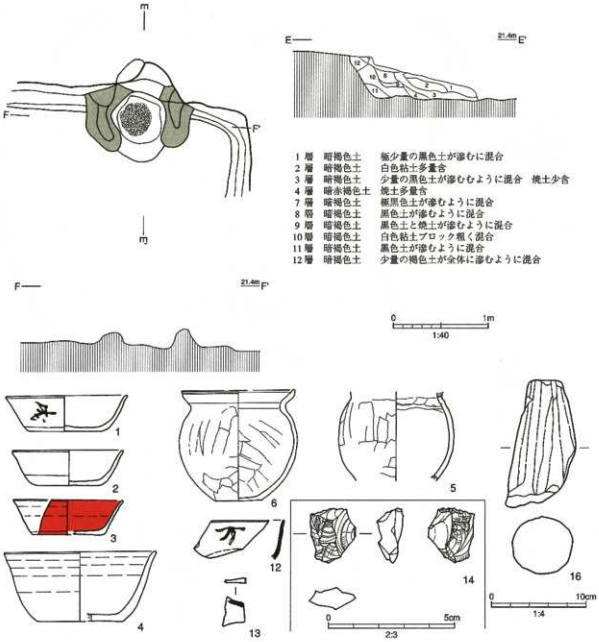


図119　A256（2）

はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は、北壁やや東よりに築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込んで煙道とし、立ち上がりは急である。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部に関しては平面、断面ともに明瞭に検出できる部分がなく、恐らくは破壊されたものと思われる。覆土は20層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　覆土下層から上層にかけて多量に出土した。赤色塗彩の土師器坏、墨書土器「万」等が出土している。

所　見　出土遺物から奈良～平安時代の住居跡と判断した。周溝、ピットの配置から建て替えが行われたと考えられる。

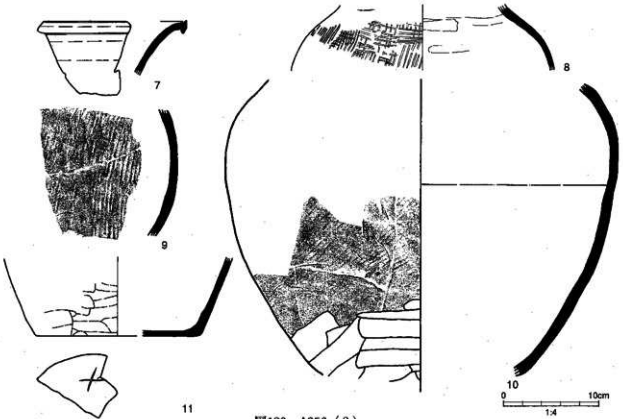


図120　A256（3）

42表　A256遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	123×72×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	完形	
2	土師器 坏	115×67×37　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	暗橙褐 普	緻密	略完形	口縁内面スス付着　灯明皿か？
3	土師器 坏	(116)×(76)×37　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	外褐 内赤褐	緻密	口縁～底部	赤彩
4	土師器 坏	158×91×75　ロクロ成形 底部より直線的に立ち上がり口縁やや外反 底部－回転ヘラケズリ　内外面とも器面の摩耗が進む	暗赤褐 普	砂粒 白色粒	3/4	
5	土師器 小型甕	－×－×（94）　球胴状　外面　頸部－横ナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ　胴下半－横位のヘラケズリ 内面　頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ　頸部と胴部の境に輪積痕	暗赤褐 普	砂粒 白色粒	1/3	
6	土師器 小型甕	（119）×(50)×117　球胴状　口縁外反し上端つまみ上げられる　外面は凹線状に調整　頸部は「く」の字状　外面　口縁～頸部－ヨコナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ　胴下半～下端－縦位のヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半～下端－ヘラナデ	外暗茶褐 内茶褐 やや悪	砂粒 赤色粒	1/3	
7	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形	灰 良	緻密	口縁片	
8	須恵器 甕	－×－×（69）　肩部なだらかに傾斜する 外面　頸部－横ナデ　胴部上半－平行タタキ　内面－ナデ	暗灰 普	粗砂粒 石英	胴部片	
9	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　タタキ目　内面　指頭痕	灰 良	石英 長石少	胴部片	

10	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　胴上半－タタキ目　下半－ヘラケズリ	橙褐 良	緻密	胴部片	
11	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　胴部下半～下端－ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	灰 良	緻密	胴部～ 底部	箆書「⊠」 底部外面
12	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	橙褐 普	緻密	口縁片	墨書「万」 体部外面正位
13	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	橙褐 普	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面
14	土製品 支脚	上部径35×下部径－×器高(134)　重量415g 断面は楕円形の円筒状	淡褐 悪	粗		
16	石器 剥片	長軸22×短軸18×厚さ9　重量2.9g　　小型の不定形剥片 明瞭な加工痕、使用痕は認められない			完形	黒曜石

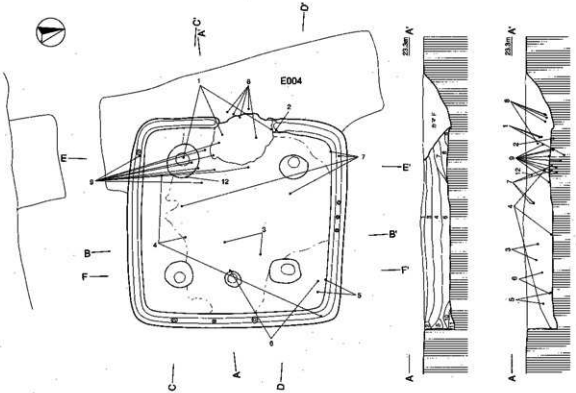
A257

検出地区　L4-76-2・4g、77-1・2gにて検出した。

遺　構　長軸4.5m×短軸4.6m×壁高0.64m、主軸方位はN-75°-Wを示している。平面形は方形で典型的な4本柱の住居跡である。床はロームを良く踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面が広範囲に広がる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は西壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込んで煙道としていたものと思われるが、溝と重複しているため、詳細は不明。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができ、土層の観察から竈は自然崩壊したものと考えられる。覆土は16層に分層され、自然堆積による想定される。

遺　物　床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。須恵器の出土が目立つ。刀子が1点出土した。

所　見　出土遺物から奈良～平安時代の住居跡と判断した。



1 層　暗褐色土　褐色土が斑状に混合
2 層　暗黄褐色土　ロームが斑状に混合
3 層　暗褐色土　黒色土が全体的に滲むように混合
4 層　暗褐色土　黒色土が全体的に滲むように混合
ローム粒子と径10mm大のローム
ブロック少含
5 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体
6 層　暗褐色土　少量の黒色土とロームが全体的に
滲むように混合
7 層　暗褐色土　少量の褐色土が全体的に
滲むように混合
8 層　暗褐色土　少量のロームと褐色土が
滲むように混合
9 層　暗褐色土　少量の黒色土と白色粘土が粗く混合
10 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合
ローム少含
11 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体　少量の暗褐色土
が滲むように混合
12 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合
13 層　暗褐色土　黒色土が滲むように混合
14 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混合
15 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体
16 層　暗褐色土　黒色土が滲むように混合
径5mmのロームブロックが粗く混合

0　2m
1:80

図121　A257

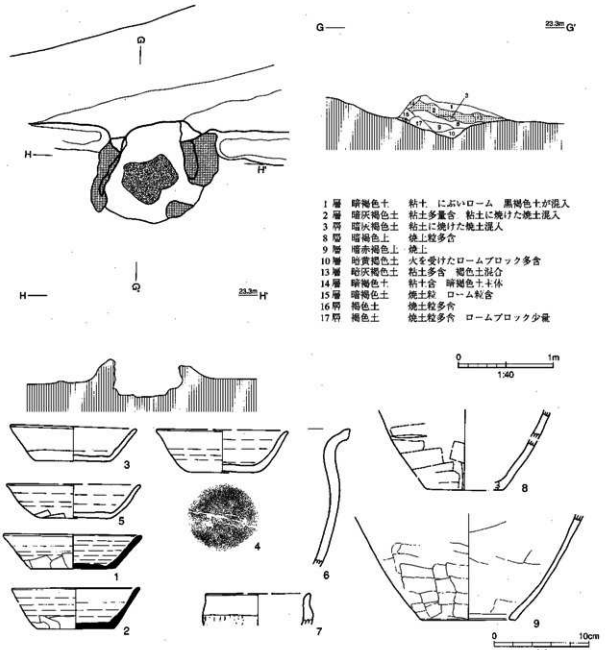


図122　A257（2）

表43　A257遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	143×88×38　回転台（ロクロ？）体部外傾　口縁やや内湾　底部内面、体部との境がくぼみ、中央やや盛り上がる 外面　体部下端ーヘラケズリ　底部ーヘラケズリ	灰白 悪	砂粒 雲母	略完形	
2	須恵器 坏	133×80×44　回転台（ロクロ？）　口縁外反　口唇内削ぎ状　底部内面、体部との境がくぼむ	灰茶褐 やや悪	粗砂粒 雲母多	2/3	
3	須恵器 坏	132×80×36　ロクロ成形 外面　胴部下端ーヘラケズリ　底部ー回転ヘラケズリ	暗褐色 良	緻密	3/4	
4	須恵器 坏	ー×ー×ー　ロクロ成形 外面　底部ー静止ヘラ切り	灰白色 良	緻密	口縁～ 底部片	墨書　「□」 底部外面

5	須恵器 坏	(140)×75×35　ロクロ成形 外面　底部下端－手持ちヘラケズリ　底部－静止ヘラケズリ	灰色 普	砂粒	底部片	
6	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形	外灰色 内褐色 普	長石・石英・砂粒	口縁片	
7	土師器 鉢	110×－×－　ロクロ成形 外面　口縁－ナデ	外褐色 内黒色 良	緻密	口縁片	
8	土師器 甕	－×(80)×(83)　ロクロ成形 外面　胴部下端－横位のヘラケズリ	外暗褐色 内褐色 普	砂礫少量含む	胴部片	
9	土師器 甑	－×99×113　単孔の甑 外面　胴部下半－ナデ　　胴部下端－ヘラケズリ 内面　胴部下半－ヘラナデ	茶褐 普	粗砂粒 雲母多	胴部～ 底部片	

A258

検出地区　　L4-86-1～4gにて検出した。

遺　　構　　長軸3.6m×短軸3.4m×壁高0.46m、主軸方位はN-65°-Wを示している。平面形は隅丸方形の住居跡である。床はロームを良く踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を５基検出した。Ｐ１、２、３は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は西壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込んで煙道とし、立ち上がりはなだらかである。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができ、土層の観察から竈は自然崩壊したものと考えられる。覆土は18層に分層された。床面直上～覆土下層にかけて多量の焼土、粘土等を検出していることから人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

遺　　物　　床面直上～覆土下層にかけて多量に出土した。墨書土器が多数出土し、中でも住居東壁側の床面直上～覆土下層で長文の墨書土器が２点（29・40）出土している（「丈部申万」、「丈部角万呂」）。また、覆土上層からは、金属製品も出土している。

所　　見　　出土遺物から奈良～平安時代の住居跡と判断した。

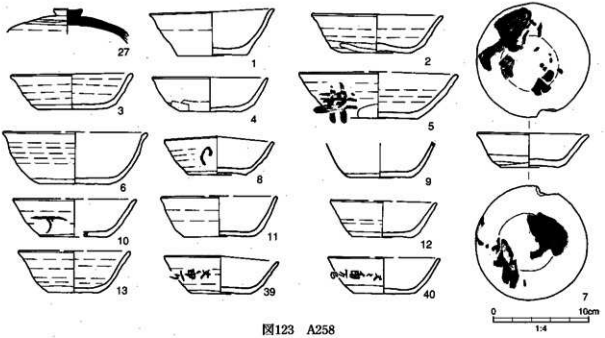
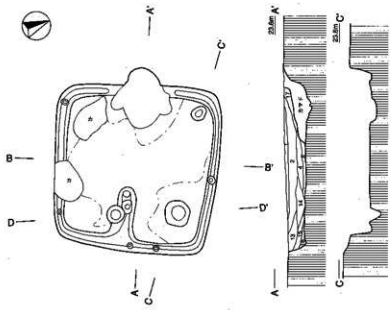
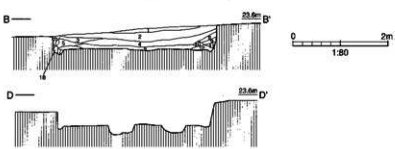
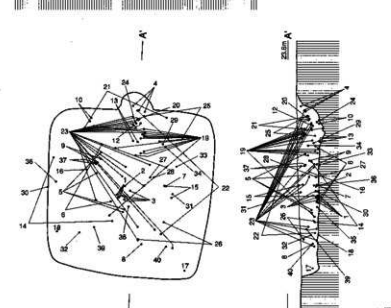


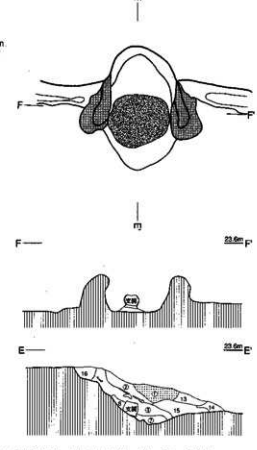
図123　A258



1 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合
2 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合　ローム少含
3 層　暗褐色土　多量の黒色土が滲むように混合　ローム多含
4 層　黒褐色土　多量の暗褐色土が滲むように混合
径20mm大のロームが少含
5 層　暗褐色土　少量の黒色土
6 層　暗赤褐色土　少量の黒色土　焼土少含
7 層　暗褐色土　少量の黒色土焼土に少含　ローム多含
8 層　暗褐色土　少量の黒色土滲むように少含　ローム多含
9 層　暗褐色土　少量の黒色土粗く混合　ローム多含
10 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体　暗褐色土滲むように少含
11 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体　ロームブロックが粗く混合
12 層　暗褐色土　黒色土が全体に滲むように混合
ロームブロック含
13 層　暗褐色土　黒色土が全体に滲むように混合　ローム少含
14 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合　ローム多含
15 層　暗赤褐色土　黒色土と焼土が滲むように混合
16 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合　ローム少含
17 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混合　白色粘土
ロームブロック含
18 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体







6 層　暗茶褐色土　焼土粒子主体　焼土ブロック混入
13 層　暗褐色土　砂状粘土粒子多含
14 層　暗茶褐色土　焼土粒子焼土ブロック多混入
15 層　黒褐色土　にぶいローム・焼土粒子混入　炭化物も一部見
16 層　褐色土　ローム・焼土粒子多含

＊3層が焚口から煙道に至る部分であろう
①・②層がカマドの天井部であろう　粘土は砂を多く含んだものである
②層は燃焼室であるが、比較的良好に焼けている

図124　A258（2）

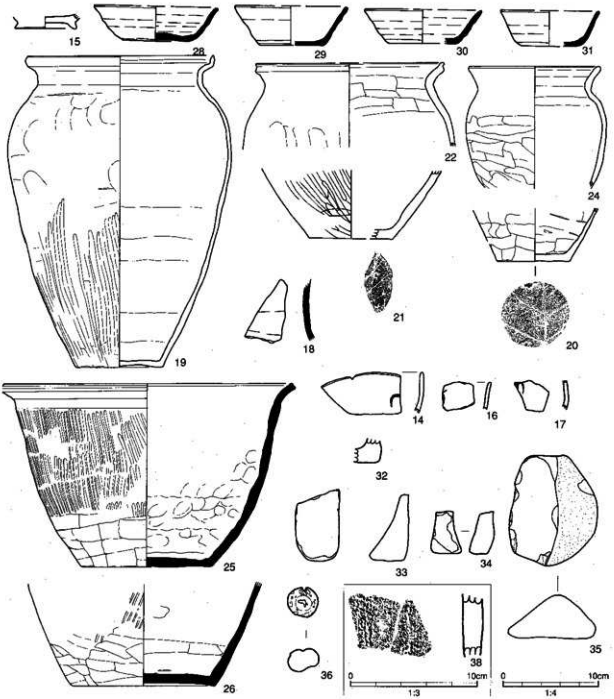


図125　A258（3）

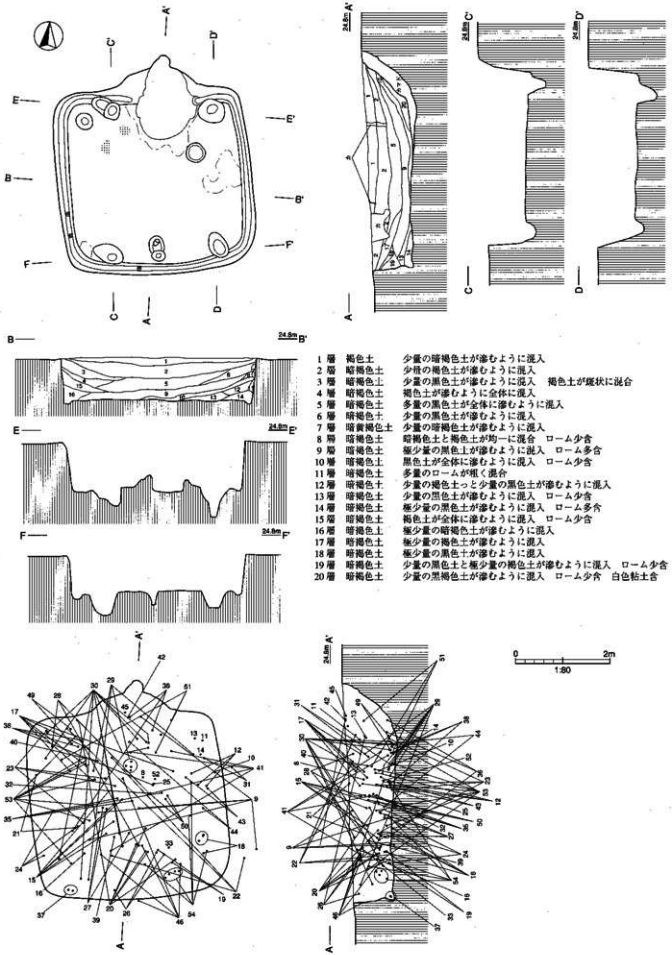
表44　A258遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	133×74×47　ロクロ成形　外面　底部－回転糸切り	橙褐 香	緻密	略完形	
2	土師器 坏	139×75×40　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り	橙褐 普	緻密	完形	
3	土師器 坏	129×73×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	橙褐 普	緻密	4/5	

4	土師器 坏	121×64×36　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	橙褐 普	緻密	略完形	
5	土師器 坏	(168)×85×49　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	外淡褐 内黒 良	緻密	1/2	墨書「□」 体部外面 内黒
6	土師器 坏	(153)×75×55　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面　ミガキ	外褐 内黒 普	緻密	1/5	内黒
7	土師器 坏	117×60×36　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り　回転ヘラケズリ	褐 普	雲母微 緻密	略完形	内外面にスス状 炭化物付着　口 縁欠損　灯明皿 として使用か？
8	土師器 坏	116×60×40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ			完形	墨書「□」 体部外面
9	土師器 坏	－×65×(36)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	淡褐 良	緻密	体部～ 底部	
10	土師器 坏	(130)×(70)×40　ロクロ成形 外面　底部－回転糸切り ヘラケズリ	淡褐 普	緻密	1/4	墨書「□」 体部外面
11	土師器 坏	(122)×(74)×43　ロクロ成形 外面　底部－回転糸切り 回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	口縁～ 底部	
12	土師器 坏	(112)×(64)×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	口縁～ 底部	
13	土師器 坏	(113)×(55)×44　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	橙褐 普	緻密	口縁～ 底部	
14	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
15	土師器 高台付坏	－×64×(12)　ロクロ成形 内面　底部－ミガキ	外褐 内黒褐 普	緻密	底部片	内黒
16	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
17	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 内面　ミガキ	外褐 内黒 良	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 内黒
18	土師器 高坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 良	緻密	脚部片	
19	土師器 甕	195×90×330　口縁受け口状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ　胴下半～下端－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒 雲母	3/4	
20	土師器 甕	－×77×(56) 外面　胴下端－ヘラケズリ　底部－木葉痕 内面　胴下端－ヘラナデ　底部－一部輪積痕あり	橙褐 普	粗砂粒多 石英	胴部～ 底部片	
21	土師器 甕	－×－×－　輪積 外面　胴下半－縦位のヘラケズリ　底部－木葉痕	橙褐 普	砂粒 赤色スコ リア	胴部～ 底部	

22	土師器 甕	(199) ×－×(89)　口縁受け口状　上端つまみ上げられ外面凹線状に調整　内外面とも口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒 雲母	口縁～ 胴部片	
24	土師器 甕	138×－×(129)　口縁外反　口唇肥厚する　頸部緩やかな「く」の字状　外面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒少	4/5	
25	須恵器 甕	302×135×195　最大径を口縁に持つ鉢型　口縁下端稜を有する　上端はつまみ上げられた三角状を呈する 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－平行タタキ　下端－ヘラケズリ内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ナデ　指頭圧痕　輪積痕あり	灰褐 悪	粗砂粒多	3/4	
26	土師器 甕	－×(150)×(111) 外面　胴下半－平行タタキ　下端－ヘラケズリ　内面　ヘラナデ	灰茶褐 良	砂粒 白色粒	胴部～ 底部片	
27	須恵器 蓋	－×つまみ径29×－　ロクロ成形　外面　ヘラケズリ調整	灰 良	砂粒少	体部片	常陸産
28	須恵器 坏	(130)×70×37　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ 底部－回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ	暗灰 普	緻密	1/3	転用硯か？
29	須恵器 坏	(120)×(68)×42　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ 底部－回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ	暗灰 良	砂粒少	1/2	
30	須恵器 坏	(124)×(72)×36　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	灰褐 良		口縁～ 底部	
31	須恵器 坏	(104)×(60)×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	灰褐 普	緻密	口縁～ 底部	
32	手捏ね 坏	－×－×(22)　外面　底部－木葉痕	褐 普		底部片	
33	石製品 砥石	長さ76×幅46×厚さ40　重量129.7g				流紋岩製
34	石製品 砥石	長さ45×幅33×厚さ26　重量38.6g				
35	石製品 砥石	長さ117×幅93×厚さ45　重量650.0g				
36	軽石	長さ22×幅33×厚さ23　重量7.3g 細く深い削痕が数カ所にあり、砥石として使用か？				
37	鉄器 釘	長軸64×短軸6.0×厚さ5.5　重量4.9g 4.5　4.5				
38	縄文 深鉢	－×－×－			胴部片	撚糸文
39	土師器 坏	120×62×39　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	2/3	墨書 「丈部申万」 体部外面正位
40	土師器 坏	(118)×63×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	1/2	墨書 「丈部角万呂」 体部外面横位



1 層　褐色土　少量の暗褐色土が滲むように混入
2 層　暗褐色土　少量の褐色土が滲むように混入
3 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　褐色土が斑状に混合
4 層　暗褐色土　褐色土が滲むように全体に混入
5 層　暗褐色土　多量の黒色土が全体に滲むように混入
6 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入
7 層　暗黄褐色土　少量の暗褐色土が滲むように混入
8 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が均一に混合　ローム少含
9 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入　ローム多含
10 層　暗褐色土　黒色土が全体に滲むように混入　ローム少含
11 層　暗褐色土　多量のロームが粗く混合
12 層　暗褐色土　少量の褐色土っと少量の黒色土が滲むように混入
13 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　ローム少含
14 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入　ローム多含
15 層　暗褐色土　褐色土が全体に滲むように混入　ローム少含
16 層　暗褐色土　極少量の暗褐色土が滲むように混入
17 層　暗褐色土　極少量の褐色土が滲むように混入
18 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入
19 層　暗褐色土　少量の黒色土と極少量の褐色土が滲むように混入　ローム少含
20 層　暗褐色土　少量の黒褐色土が滲むように混入　ローム少含　白色粘土含

図126　A260

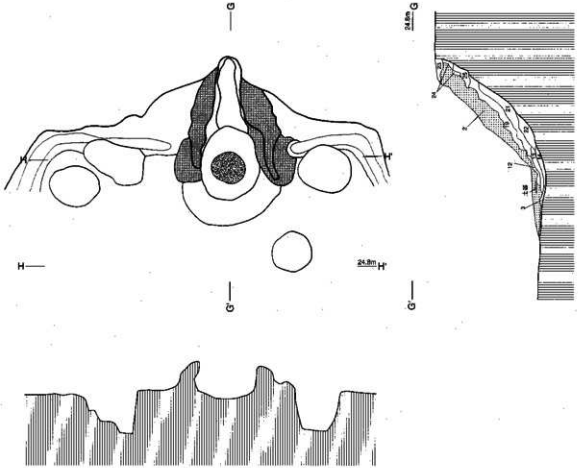


図127　A260（2）

A260

検出地区　L4-94-4gにて検出した。

遺　構　長軸4.0m×短軸4.1m×壁高0.94m、主軸方位はN-7°-Wを示している。平面形は隅丸方形の住居跡で、深い。床はロームを良く踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を７基検出した。Ｐ１～４は柱穴、Ｐ５は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込み煙道とし、立ち上がりは比較的急傾斜である。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができた。床面直上～覆土下層にかけて粘土が散っていたことから、竈は壊されたものと考えられる。覆土は20層に分層され、床面直上～覆土下層にかけて焼土、粘土等を検出していることから人為的な埋め戻しが想定される。

遺　物　床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。墨書土器が多数出土し、中でも住居南壁側覆土上層で長文の墨書土器（46）が出土し人面墨書土器である。同様に住居中央覆土中層で須恵器の長文墨書が出土している（25）ている。また、覆土中から金属製品も出土している。

所　見　出土遺物から奈良時代の住居跡と判断した。出土遺物の様相はA260と類似している。覆土上層の遺物と下層の遺物が接合していることから埋め戻しは一気に行われたものと考えられる。

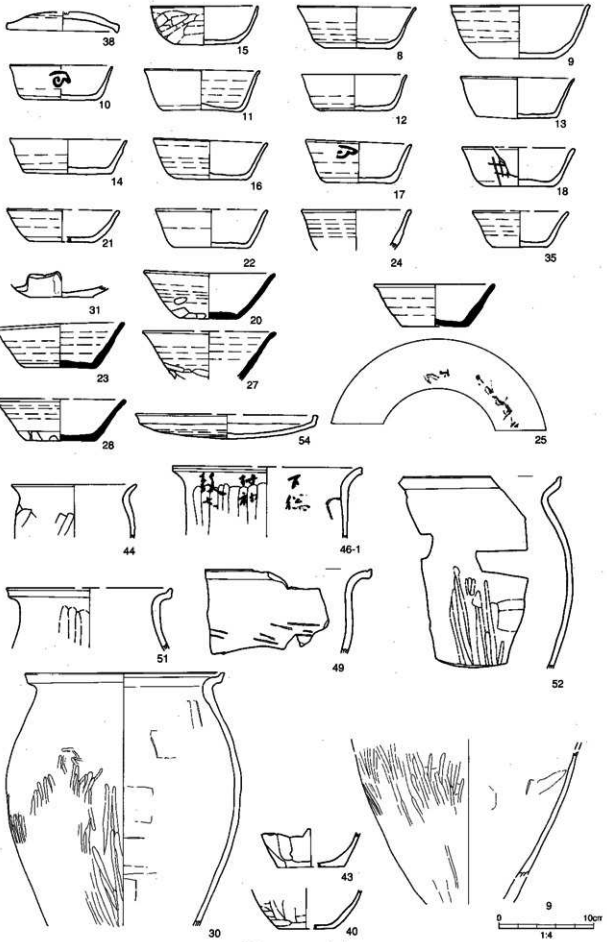

38
15
8
9
10
11
12
13
14
16
17
18
21
22
24
35
31
20
23
27
25
28
54
44
46-1
51
49
52
30
43
40
9
0
10cm
1:4

図128 A260（3）

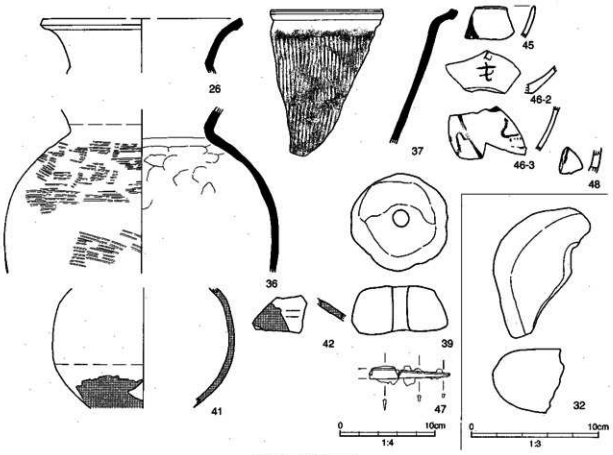


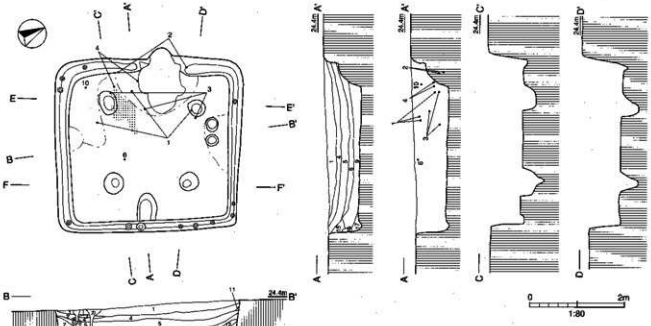
図129　A260（4）

表45　A260遺物観察表　（単位mm）

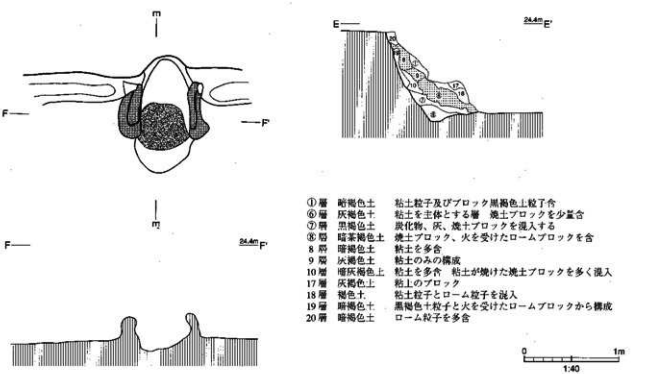
	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
8	土師器 坏	126×71×44　ロクロ成形　一部に輪積痕 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	褐色 普	緻密	略完形	
9	土師器 坏	143×83×57　ロクロ成形　整形後、ヘラナデ 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	赤褐色 普	緻密	略完形	内黒 底部器面荒れる
10	土師器 坏	107×75×37　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	褐色 普	赤色粒 緻密	完形	
11	土師器 坏	122×83×43　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部ヘラケズリ	褐色 普	緻密	1／2	
12	土師器 坏	110×71×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り後、回転ヘラケズリ	褐色 普	緻密	2／3	
13	土師器 坏	120×85×44　ロクロ成形 全体的なナデ　底部－回転ヘラ切り	橙褐色 普	緻密	4／5	
14	土師器 坏	122×93×37　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切りご、底縁手持ちヘラケズリ	淡褐色 普	雲母 石英 炭石	略完形	
15	土師器 坏	113×69×41　ロクロ成形　ヘケズリにより丸みを持つが、底部は略平底 外面　LJ縁－ナデ　体部～底部全体として手持ちヘラケズリ 内面　ヘラミガキ	橙褐色 普	緻密	1／2	

16	土師器 坏	121×74×42　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止ヘケズリ	橙褐色 普	緻密	2／3		
17	土師器 坏	113×70×44　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	褐色 普	緻密	3／4	墨書「得」 体部外面横位	
18	土師器 坏	120×74×41　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	淡褐色 良	緻密	2／3	ヘラ描「□」 体部外面横位	
20	須恵器 坏	139×61×48　ロクロ成形　底部は上げ底気味 外面　口縁－ナデ　体部下端－底部ヘケズリ　底部－静止ヘケズリ	灰色 普	砂粒多	略完形		
21	土師器 坏	(118)×(70)×34 ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	淡褐色 普	緻密	1／3		
22	土師器 坏	(118)×(80)×40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	橙褐色 普	緻密	1／4		
23	須恵器 坏	137×76×46　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	灰褐色 普	砂粒多 石英・長石・雲母	略完形		
24	土師器 坏	(116)×－×(43)　ロクロ成形	橙褐色 普	緻密	口縁～ 体部		
25	須恵器 坏	128×68×45　　ロクロ成形 底部－静止ヘラ切り	灰色 良	雲母 石英 長石	完形	墨書「□□□□ □／□□」 体部外面　横位	
26	須恵器 小型甕	(207)×－×(58)　ロクロ成形	暗灰色 普	砂粒少	口縁片		
27	須恵器 坏	(140)×－×(51)　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ	灰色 良	砂粒少	1／2		
28	須恵器 坏	(138)×(74)×44　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－静止ヘケズリ	灰色 良	砂粒多	1／3		
30	土師器 甕	(207)　×－×(269)　　口縁上端つまみ上げられる　胴上半に最大径を持つ 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ナデ　下半～下端－ヘラケズリ後ヘラナデ　　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒多	2／3	常総甕	
31	土師器 坏	－×68×(27) 外面　底部－回転糸切り　内面　体部－ヘラミガキ	褐色 普	砂粒少	底部片	墨書「□」 体部外面	
32	石器 磨石	長径－×幅－×厚34　重量119.5g 側面に磨り痕			1／3		
35	須恵器 坏	(102)×58×38　ロクロ形 口縁－ナデ	橙褐色 普	緻密	口縁～ 底部片		
36	須恵器 甕	－×－×(177)　　頸部「く」の字状　胴部丸みを持つ 外面　頸部－横ナデ　胴上半－平行タタキ 内面　頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ及びナデ　指頭圧痕多数あり	灰白 悪	白色粒 褐色粒	頸部～ 胴部片	常陸系	
37	須恵器 甕	－X－X－ 胴部～頸部に開く器形　口縁屈曲して外反し口唇は直立 口縁直下からタテの平行タタキ目	暗灰色 良	雲母 長石	口縁～ 胴部		

38	土師器 蓋	116×－×20　ロクロ成形　把手を欠く 天蓋部はヘラケズリ	暗褐色 普	緻密	1／3	
39	石製品 紡錘車	上径51×下径38×厚23　軸孔0.9			完形	
40	土師器 小型甕	－×(60)×(41)　ロクロ成形 外面　胴下半－タテのヘラケズリ　下端－ヨコのヘラケズリ	暗褐色～ 橙褐色 普	緻密	胴下半 ～底部	
41	灰釉陶器 水瓶？	－×－×(127)　現状最大径186　ロクロ成形 胴部は丸みを有し、肩部の張りは遺存の中では認められない	灰色 良	緻密	胴部片	
42	灰釉陶器 短頸壺	－×－×－　ロクロ成形 内外面にロクロ巻上げ痕　外面に一部釉薬残	赤灰色 灰色 良	緻密	肩部片	
43	土師器 小型甕	－×(70)×(35)　ロクロ成形 外面　胴中位～下半－幅のあるタテのヘラケズリ　下端－ヨコノヘケズリだが不明瞭　底部－中央にヘラケズリ痕	橙褐色 普	緻密	胴下半 ～底部	
44	土師器 小型甕	(132)×－×(57)　ロクロ成形　頸部肥厚し内寄し、口縁外反 外面　口縁～頸部－ナデ　胴部－斜のヘラケズリ	暗褐色 普	緻密	口縁～ 胴部片	
45	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	暗褐色 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
46	土師器 甕	(198)×－×(74)　頸部からタテのヘラケズリ 口縁直下から3行にわたり墨書　46-2,-3も同一個体であり、人面か？ 墨書「ド絵／村神／□□」	暗褐色 普	緻密	口縁～ 胴部	
47	鉄器 刀子	長 85×幅 11 ×厚 6.5 14　8			刃部片	
48	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐色 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
49	土師器 甕	－×－×－ 外面　胴上半－ヘラナデ　下半－細かなヘラミガキ	褐色 普	砂粒少	胴部片	常総型
51	土師器 甕	(174)×－×(63) 頸部肥厚し、口縁は大きく外に屈曲する　口唇はつまみ上げによる直立 胴部外面－ヘラケズリ	褐色 普	砂粒少	口縁～ 胴部	
52	土師器 甕	－×－×－　口縁は屈曲し、口唇はつまみ上げるが、やや外にひらく 外面　頸部～胴上半－ヘラナデ　胴中位以下－タテ～斜の細かなヘラミガキ	褐色 普	砂粒 長石 石英	口縁～ 胴部	常総型
54	土師器 壺	(190)×－×26　ロクロ成形　丸底であり、口縁は直立 外面　口縁～頸部はヨコナデ　成形後、体部～底部にかけて回転ヘラケズリ	橙褐色 普	黄色粒	略完形	



1 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　黒色土を主体に少量の暗褐色土が滲むように混入
4 層　暗褐色土　暗褐色土を主体に極少量の黒色土が滲むように混入　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入　径10mmのローム粒多含
6 層　暗黄褐色土　暗褐色土を主体でロームを多含　径10mm程度のローム粒多含
7 層　暗褐色土　少量の褐色土を滲むように混入　少量の黒色土を滲むように混入
径10mm程度のローム粒少含
8 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入　ローム粒少含
9 層　黒褐色土　黒色土を主体に暗褐色土と白色粘土が荒く混入　ローム斑状に混入
10 層　暗黄褐色土　暗褐色土を主体に汚れたロームを全体に滲むように混入
11 層　暗黄褐色土　汚れたロームを主体に少量の暗褐色土が滲むように混入
12 層　暗褐色土　少量の黒色土とロームが荒く混合
13 層　暗褐色土　少量のロームが滲むように混入　ロームブロックを少含
14 層　暗褐色土　極少量のロームを滲むように混入
15 層　暗褐色土　少量の褐色土が滲むように混入　ローム少含
16 層　暗黄褐色土　汚れたロームを主体に少量の暗褐色土が滲むように混入
17 層　暗褐色土　多量のロームが滲むように混入



①層　暗褐色土　粘土粒子及びブロック黒褐色土粒子含
⑥層　灰褐色土　粘土を主体とする層　焼土ブロックを少量含
⑦層　黒褐色土　炭化物、灰、焼土ブロックを混入する
⑧層　暗茶褐色土　焼土ブロック、火を受けたロームブロックを含
8 層　暗褐色土　粘土を多含
9 層　灰褐色土　粘土のみの構成
10 層　暗灰褐色土　粘土を多含　粘土が焼けた焼土ブロックを多く混入
17 層　灰褐色土　粘土のブロック
18 層　褐色土　粘土粒子とローム粒子を混入
19 層　暗褐色土　黒褐色土粒子と火を受けたロームブロックから構成
20 層　暗褐色土　ローム粒子を多含

図130　A261

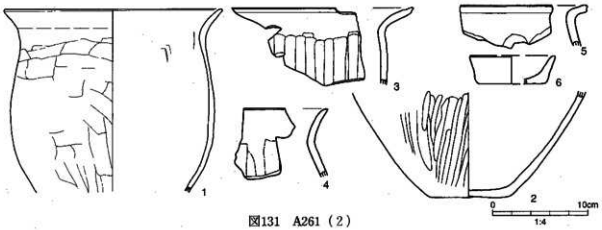


図131　A261（2）

A261

検出地区　　L4-95-3g、L5-5-1gにわたって検出した。

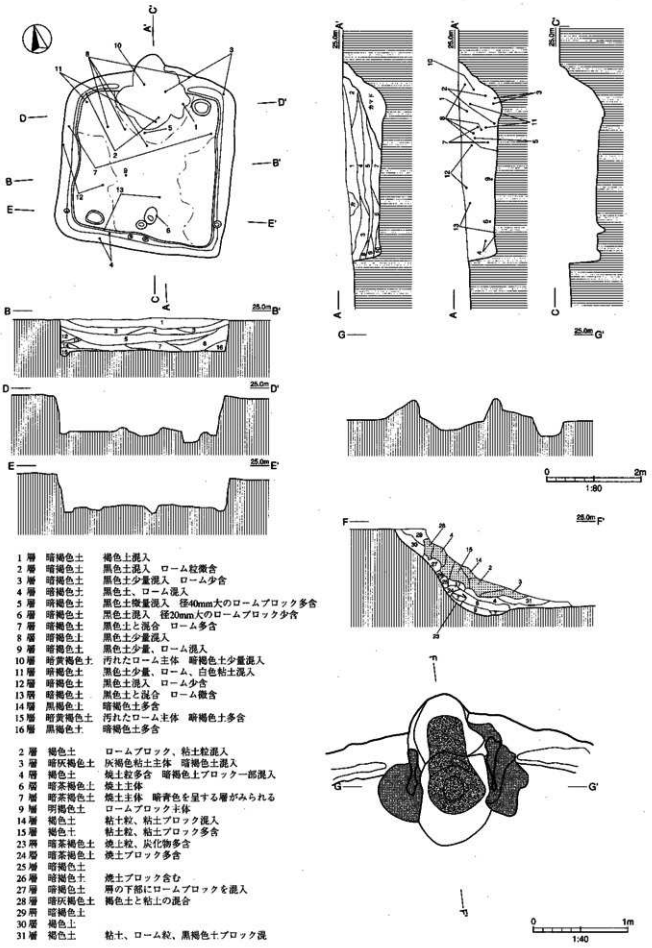
遺　　構　　長軸3.66m×短軸3.92m×壁高0.68m、主軸方位はN-62°-Wを示している。平面形は隅丸方形の住居跡である。床はロームを良く踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を7基検出した。Ｐ１～４は柱穴、Ｐ５は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は西壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込んで煙道とし、立ち上がりは比較的急傾斜である。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができた。床面直上～覆土下層にかけて粘土が散っていたことから、竈は壊されたものと考えられる。覆土は17層に分層され、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　　覆土下層～上層にかけて多量に出土した。

所　　見　　出土遺物から奈良～平安時代の住居跡と判断した。常総型の甕に混ざり、武蔵型の甕が出土していることが注目される。

表46　A261遺物観察表　　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	228×－×（194）口縁外反　口縁部に最大径を持つ　頸部は緩く括れ 胴部の膨らみも小さい 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラケズリ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒多	口縁～ 胴部片	武蔵型
2	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　胴上半－ヘラケズリ　底部－木葉痕	暗褐 普	砂粒 石英 長石 雲母少	胴下半 ～底部	常総型
3	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　外面　胴上半－ヘラケズリ	褐 普	砂粒少	口縁～ 胴上半	常総型
4	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形外面　胴上半－ヘラケズリ	褐 普	砂粒少	口縁～ 胴上半	
5	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	砂粒少	口縁片	常総型
6	手捏ね	(90)×(70)×30　外面　底部－木葉痕	褐 普	緻密	体部～ 底部	



1 層　暗褐色土　　褐色土混入
2 層　暗褐色土　　黒色土混入　ローム粒微含
3 層　暗褐色土　　黒色土少量混入　ローム少含
4 層　暗褐色土　　黒色土、ローム混入
5 層　暗褐色土　　黒色土微量混入　径40mm大のロームブロック多含
6 層　暗褐色土　　黒色土混入　径20mm大のロームブロック少含
7 層　暗褐色土　　黒色土と混合　ローム多含
8 層　暗褐色土　　黒色土少量混入
9 層　暗褐色土　　黒色土少量、ローム混入
10 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体　暗褐色土少量混入
11 層　暗褐色土　　黒色土少量、ローム、白色粘土混入
12 層　暗褐色土　　黒色土混入　ローム少含
13 層　暗褐色土　　黒色土と混合　ローム微含
14 層　黒褐色土　　暗褐色土多含
15 層　暗黄褐色土　汚れたローム主体　暗褐色土多含
16 層　黒褐色土　　暗褐色土多含

2 層　褐色土　　ロームブロック、粘土粒混入
3 層　暗灰褐色土　灰褐色粘土主体　暗褐色土混入
4 層　褐色土　　焼土粒多含　暗褐色土ブロック一部混入
6 層　暗茶褐色土　焼土主体
7 層　暗茶褐色土　焼土主体　暗青色を呈する層がみられる
9 層　明褐色土　　ロームブロック主体
14 層　褐色土　　粘土粒、粘土ブロック混入
15 層　褐色土　　粘土粒、粘土ブロック多含
23 層　暗茶褐色土　焼土粒、炭化物多含
24 層　暗茶褐色土　焼土ブロック多含
25 層　暗褐色土
26 層　暗褐色土　　焼土ブロック含む
27 層　暗褐色土　　層の下部にロームブロックを混入
28 層　暗灰褐色土　褐色土と粘土の混合
29 層　暗褐色土
30 層　褐色土
31 層　褐色土　　粘土、ローム粒、黒褐色土ブロック混

図132　A262

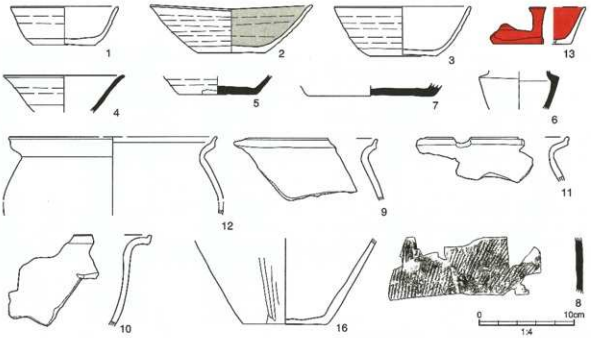


図133　A262（2）

A262

検出地区　L4-3-4g、4-3gにて検出した。

遺　構　長軸3.8m×短軸3.4m×壁高0.68m、主軸方位はN-15°-Eを示している。平面形は隅丸方形の住居跡で竈側はやや胴張りの感がある。床はロームを良く踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を4基検出した。P1は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込み煙道とし、立ち上がりは、なだらかであった。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができた。土層の観察から竈は自然崩壊したものと考えられる。覆土は31層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺　物　床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。

所　見　出土遺物から奈良～平安時代の住居跡と判断した。A260同様、覆土上層の遺物と下層の遺物が接合していることから埋め戻しは一気に行われたと考えられる。

表47　A262遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(114)×66×41　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－静止糸切り後手持ちヘラケズリ	褐 普	緻密	口縁～底部	
2	土師器 坏	(172)×72×51　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　内外面とも丁寧なミガキ	外暗褐 内黒 良	緻密	1/4	内黒
3	土師器 坏	(114)×68×52.5　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面　体部－丁寧なミガキ	外褐 内赤褐 良	緻密	口縁～底部片	内面赤彩か？
4	須恵器 坏	(128)×－×(39)　ロクロ成形	灰 良	砂粒少	口縁片	
5	須恵器 坏	－×82×(20)　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－回転ヘラ切り	灰 良	緻密	底部片	

6	須恵器 長頸壺？	－×－×(41)　最大径(82)	良	緻密	頸部～ 胴部	
7	須恵器 甕	－×(134)×(11)　ロクロ成形 外面　底部－回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ	灰 青	白色砂粒 少	底部片	常陸産 転用硯
8	須恵器 壺	－×－×－　ロクロ成形	外黒 内暗褐 青	緻密	胴部片	
9	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　口縁つまみ上げ	褐 青	雲母少	口縁片	常総型
10	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　口唇つまみ上げ	褐 青	雲母少	口縁片	常総型
11	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　口唇つまみ上げ	褐 青	砂粒少	口縁片	常総型
12	土師器 甕	(220)×－×(83)　ロクロ成形　口唇つまみ上げ	橙褐 青	雲母少	口縁～ 胴上半	常総型
13	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－手持ちヘラケズリ	赤褐 良	緻密	口縁～ 底部	赤彩
14 -1	鉄器 片子？	長軸41.5×短軸9×厚さ4　重量44g				
14 -2		長軸18×短軸6.5×厚さ4　重量36.4g 7.0　3 7.0　4				
15	石器 石刃	長軸38×短軸19×厚さ7　重量5.8g　剥長剥片を素材として一側縁に加工痕			完形	黒曜石
16	土師器 甕	－×(90)×(91) 外面　胴下半－縦位のヘラケズリ　底部－木葉痕	外黒褐 内褐 青	雲母 砂粒少	胴部～ 底部	

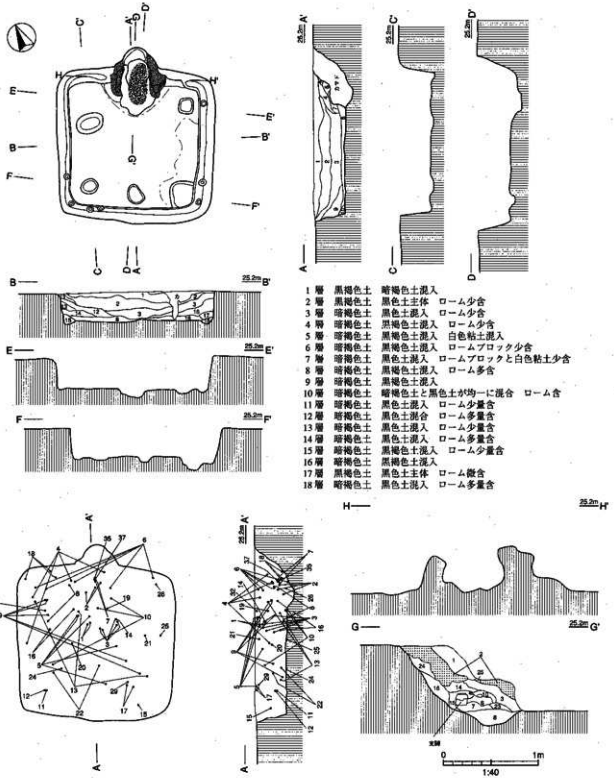
A263

検出地区　L4-93-4gにて検出した。

遺　構　長軸3.34m×短軸3.32m×壁高0.64m、主軸方位はN-29°-Eを示している。平面形は隅丸方形の住居跡で、竈側はやや胴が張りの感がある。床はロームを良く踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を４基検出した。Ｐ１～４は柱穴、Ｐ５は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込み煙道とし、立ち上がりは、比較的急傾斜であった。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができた。土層の観察から竈は自然崩壊したものと考えられる。覆土は18層に分層された。覆土下層でロームを多く含む土層が多く、全体的な土層観察から人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと想定される。

遺　物　床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。墨書土器が多数出土し、その中で「西」の出土が目立つ。また、覆土中から金属製品も出土した。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断した。



1 層　暗褐色土　ローム粒混入
2 層　灰褐色土　粘土主体
3 層　暗灰褐色土　褐色土に粘土混入
6 層　明褐色土　火を受けた3～5mmのローム粒含
7 層　暗茶褐色土　火を受けたローム粒と1～3mmのロー
8 層　暗灰褐色土　粘土主体　ローム粒　焼土粒
10 層　褐色土　焼土　ローム　粘土混入

14 層　暗灰褐色土　粘土多含　粘土粒子多含
15 層　暗茶褐色土　焼土粒多含　焼土小ブロック混入
16 層　暗褐色土　粘土粒　ロームブロック多含
23 層　暗褐色土　焼土粒子　炭化物を混入
24 層　褐色土　粘土多含　黒褐色土ブロック混入
25 層　暗褐色土　粘土少含

図134　A263

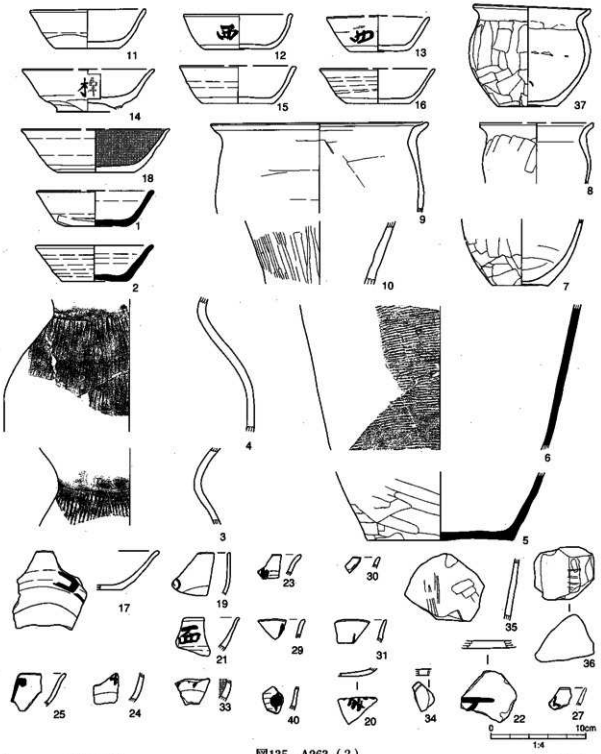


図135　A263（2）

表48　A263遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	(123)×74×38　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－静止ヘラ切り	黒 良	砂粒	1/2	
2	須恵器 坏	124×70×38　ロクロ成形	灰 良	緻密	略完形	
4	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　胴上半－タタキ目	黒褐 良	緻密	頸部～ 胴上半	no.3と同一個体と思われる

5	須恵器 甕	−×154×(73)　ロクロ成形 外面　胴部下端−ヘラケズリ	暗黄褐 普	緻密	砂粒 雲母少	胴部～ 底部	
6	須恵器 甕	−×−×−　ロクロ成形 外面　胴部−横方向のタタキ目	黒褐 普	砂粒 雲母少	胴部片		
7	土師器 小型甕	−×60×(70) 外面　胴下半−縦位のヘラケズリ　ド端−斜位のヘラケズリ 内面　胴部−ヘラナデ	外暗褐 内橙褐 普	砂粒 白色粒	胴部～ 底部片	転用支脚	
8	土師器 小型甕	(120)×−×(64)　ロクロ成形 外面　胴上半−ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	口縁～ 胴部		
9	土師器 甕	(229)×−×96　口縁やや外傾 内外面とも　口縁～頸部−横ナデ　胴上半−ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部		
10	土師器 甕	−×−×−　外面　胴上半−ヘラケズリ	暗褐 普	雲母 砂粒少	胴下半		
11	土師器 坏	122×66×41　ロクロ成形 外面　体部ド端−回転ヘラケズリ 底部−回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐 普	緻密	完形		
12	土師器 坏	115×68×37　ロクロ成形 外面　体部下端−回転ヘラケズリ 底部−回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐 普	緻密	完形	墨書「西」 体部外面正位	
13	土師器 坏	(108)×60×38　ロクロ成形 外面　体部下端−回転ヘラケズリ 底部−回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 良	緻密	3/4	墨書「西」 体部外面正位	
14	土師器 高台付坏	(139)×台部径(64)×45　ロクロ成形 外面　体部下端−回転ヘラケズリ　内面　ミガキ	褐 普	緻密	1/2	墨書「□」 体部外面	
15	土師器 坏	(123)×(76)×40　ロクロ成形 外面　体部ド端−回転ヘラケズリ 底部−回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	1/3		
16	土師器 坏	(122)×(66)×37　ロクロ成形 外面　体部下端−回転ヘラケズリ 底部−回転糸切り後回転ヘラケズリ	外橙褐 内淡褐 普	緻密	1/4		
17	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形 外面　体部下端−手持ちヘラケズリ 底部−回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	口縁～ 底部片	墨書「□」 体部外面	
18	土師器 坏	(155)×80×46　ロクロ成形 外面　体部下端−回転ヘラケズリ　底部−回転ヘラケズリ 内面　ミガキ	外褐 内黒 良	緻密	1/2	内黒	
19	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形　外面　体部下端−ヘラケズリ	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面	
20	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形 外面　体部ド端−手持ちヘラケズリ　底部−手持ちヘラケズリ	橙褐 普	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面	
21	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「西」 体部外面正位	
22	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形　外面　底部−手持ちヘラケズリ	褐 普	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面	
23	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面正位	
24	土師器 坏	−×−×−　ロクロ成形　外面　体部下端−ヘラケズリ	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面	

25	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
27	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
29	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	橙褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
30	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
31	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	淡褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面
33	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　内面　体部下端－ヘラミガキ	外褐 内黒 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 内黒
34	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形　外面　底部－回転糸切り	褐 普	緻密	底部片	筆書「□」 底部外面
35	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　外面　胴部－ヘラケズリ	暗褐 普	砂粒少	胴部片	
36	石製品 紡錘	長さ55×幅63×厚み45　重量182.0g				
37	土師器 小型甕	123×62×108　口縁は短く立ち上がる　頸部「く」の字状　胴部やや上半に膨らみを持つ 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ　下半－斜位のヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒少 赤色粒	完形	転用支脚
38	鉄器 ？	長軸23.0×短軸14.5×厚さ4.0　重量1.7 g				
40	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
41	緑釉陶器	－×－×－　ロクロ成形	乳白 良	緻密		

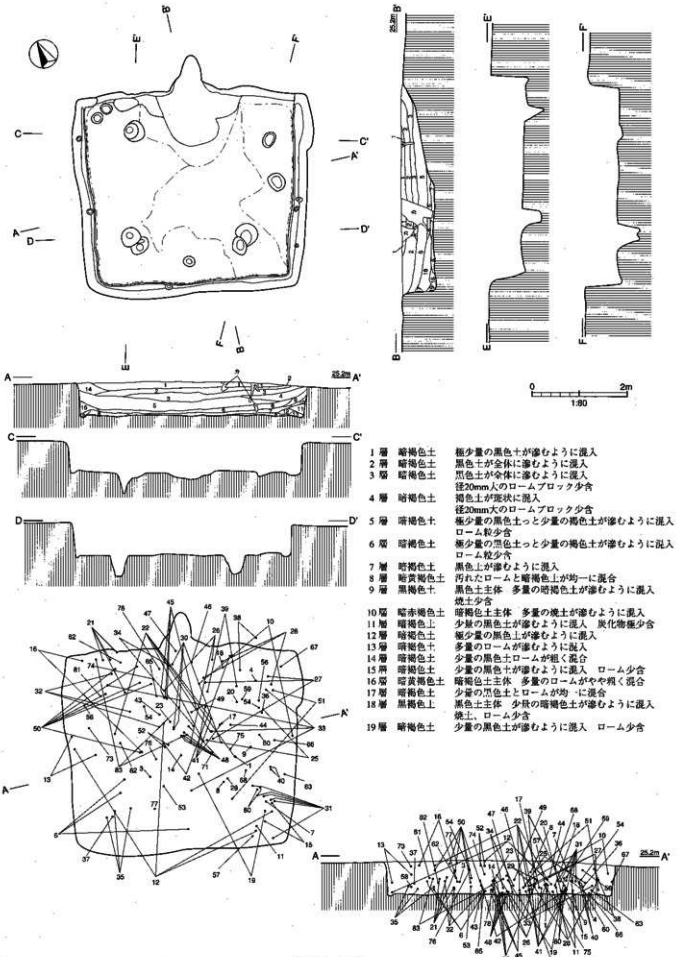
A263（3-002）

検出地区　L4-93-3・4gにて検出した。

遺　構　長軸3.34m×短軸3.32m×壁高0.64m、主軸方位はN-29°-Eを示している。平面形は隅丸方形の住居跡で、竈側はやや胴張りの感がある。床はロームを良く踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。床面にて小穴を４基検出した。Ｐ１～４は柱穴、Ｐ５は出入口施設に伴うピットと考えられる。周溝は全周する。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で築かれ、両袖とも検出できた。壁を掘り込み煙道とし、立ち上がりは、比較的急傾斜であった。燃焼部では良好な火床を検出することが出来た。天井部は断面で明瞭に捉えることができた。土層の観察から竈は自然崩壊したものと考えられる。覆土は18層に分層された。覆土下層でロームを多く含む土層が多く、全体的な土層観察から人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと想定される。

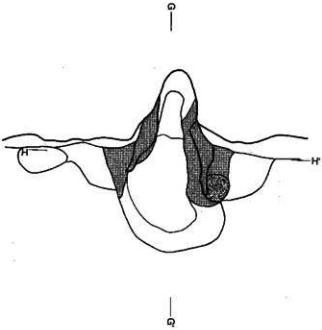
遺　物　床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。墨書土器が多数出土し、その中で「西」の出土が目立つ。また、覆土中から金属製品も出土した。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断した



1 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入
2 層　暗褐色土　黒色土が全体に滲むように混入
3 層　暗褐色土　黒色土が全体に滲むように混入
径20mm大のロームブロック少含
4 層　暗褐色土　褐色土が斑状に混入
径20mm大のロームブロック少含
5 層　暗褐色土　極少量の黒色土っと少量の褐色土が滲むように混入
ローム粒少含
6 層　暗褐色土　極少量の黒色土っと少量の褐色土が滲むように混入
ローム粒少含
7 層　暗褐色土　黒色土が滲むように混入
8 層　暗黄褐色土　汚れたロームと暗褐色土が均一に混合
9 層　黒褐色土　黒色土主体　多量の暗褐色土が滲むように混入
焼土少含
10 層　暗赤褐色土　暗褐色土主体　多量の焼土が滲むように混入
11 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　炭化物極少含
12 層　暗褐色土　極少量の黒色土が滲むように混入
13 層　暗褐色土　多量のロームが滲むように混入
14 層　暗褐色土　少量の黒色土ロームが粗く混合
15 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　ローム少含
16 層　暗黄褐色土　暗褐色土主体　多量のロームがやや粗く混合
17 層　暗褐色土　少量の黒色土とローム均一に混合
18 層　黒褐色土　黒色土主体　少量の暗褐色土が滲むように混入
焼土、ローム少含
19 層　暗褐色土　少量の黒色土が滲むように混入　ローム少含

図136　A265



1 層　暗褐色土　粘土多含
3 層　灰褐色土　粘土主体
6 層　暗褐色土　焼土粒、炭化粒少含
7 層　暗茶褐色土　焼土主体
8 層　黒褐色土　炭化物多含
9 層　暗灰褐色土　褐色十主体　軟土多含　焼土粒少含
10 層　褐色土　焼土粒、火熱を受けたロームブロック混入
20 層　暗褐色土　多量の粘土、少量の焼十粒混入
25 層　暗赤褐色土　焼土主体
26 層　暗褐色土　炭化物含
27 層　暗褐色土　粘土少含
28 層　暗黄褐色土
36 層　暗褐色土　粘土、焼土粒少含
37 層　暗褐色土
38 層　暗茶褐色土　焼十主体　褐色土少量混入
39 層　暗褐色土　焼土混入

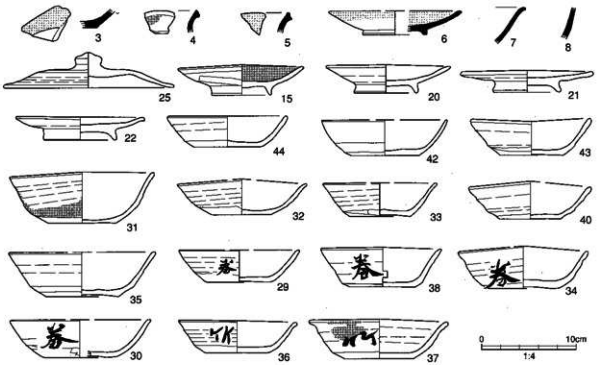


図137　A265（2）

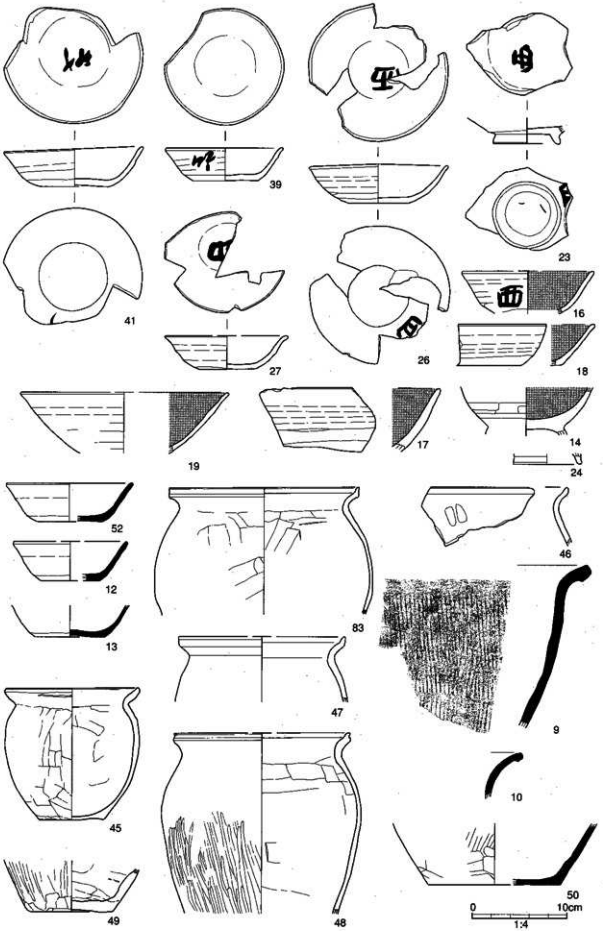

39
23
41
16
27
26
18
19
17
14
24
52
46
12
83
13
47
9
45
10
49
48
50
0
10cm
1:4

図138 A265（3）

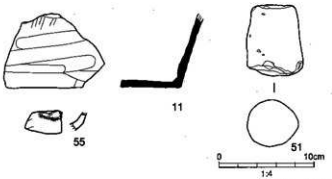


図139　A265（4）

表49　A265遺物観察表

（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 剥片	長軸16×短軸15×厚さ4　重量0.7g 小型の不定形剥片　明瞭な加工痕、使用痕は認められない			完形	黒曜石
2	石器 剥片	長軸24×短軸31×厚さ6　重量3.1g 不定形剥片の一辺に使用痕			完形	黒曜石
3	褐釉陶器 皿	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ	乳白色 良	緻密	体部～ 底部片	
4	灰釉陶器 水瓶	－×－×－　ロクロ成形	外暗赤褐 内灰褐 良	緻密	口縁片	
5	灰釉陶器 水瓶	－×－×－　ロクロ成形	灰 良	緻密	口縁片	
6	灰釉陶器 高台付皿	(140)×(68)×25　ロクロ成形 外面　体部－赤彩部分あり	灰褐 良	緻密	1/4	
7	灰釉陶器 高台付碗	－×－×－　ロクロ成形	外灰 内緑灰 良	緻密	口縁片	
8	灰釉陶器 不明	－×－×－　ロクロ成形	灰 良	緻密	体部片	
9	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　胴上半－タタキ	暗灰 良	緻密	口縁～ 胴上半	
10	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形	灰色 良	緻密	口縁片	
11	須恵器 甕	－×－×－　ロクロ成形 外面　胴下半－タタキ　下端－ヘラケズリ	暗灰 良	砂粒多	胴下半 ～底部	
12	須恵器 坏	－×－×－　ロクロ成形	暗灰 良	砂粒少	1/4	
13	須恵器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ	灰褐 良	緻密	体部～ 底部	
14	土師器 高台付碗	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部－ヘラケズリ　内面　ヘラミガキ	赤褐色 普		体部～ 底部	内黒

15	土師器 高台付皿	132×63×32　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　内面　ヘラミガキ	外 褐 内黒褐 良	緻密	略完形	内黒
16	土師器 高台付坏	(140)×－×(45)　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　内面　ヘラミガキ	外褐 内黒 良	緻密	口縁～ 体部	墨書「西」 体部外面正位 内黒
17	土師器 高台付坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	外橙褐 内黒 良	緻密	口縁片	内黒
18	土師器 高台付坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	外橙褐 内黒 良	緻密	口縁片	
19	土師器 (高台付) 碗	(220)×－×(65)　ロクロ成形 外面　底部－ヘラケズリ　内面　ヘラミガキ	外褐 内黒 良	緻密	口縁～ 底部	内黒
20	土師器 高台付皿	131×68×31　ロクロ成形 内面　丁寧なヘラミガキ	褐 良	緻密	略完形	
21	土師器 高台付皿	(140)×70×23　ロクロ成形 内面　ヘラミガキ	橙褐 良	緻密	1/4	
22	土師器 高台付皿	136×76×25　ロクロ成形 内面　ヘラミガキ	橙褐 良	緻密	4/5	
23	土師器 高台付碗 ?	－×台部径71×(28)　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　内面　ミガキ	褐 普	緻密	体部～ 高台部	墨書「□」体部 外面正位 「西」体部内面
24	土師器 高台付碗 ?	－×台部径(72)×(11)　ロクロ成形	橙褐 良	緻密	高台部 片	
25	土師器 蓋	(178)×つまみ径28×37　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　内面　ミガキ	褐 良	緻密	体部片	
26	土師器 坏	147×64×41　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ	褐 良	緻密	1/2	墨書「西」体部 外面正位 「西」体部内面
27	土師器 坏	(130)×58×36　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	1/2	墨書「□」 底部内面
28	土師器 坏	(118)×60×34　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	外橙褐 内淡褐 普	緻密	口縁～ 底部	
29	土師器 坏	(127)×70×34　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	1/4	墨書「券」 体部外面正位
30	土師器 坏	(147)×(75)×40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	1/4	墨書「券」 体部外面正位
31	土師器 坏	151×72×54　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面　丁寧なヘラミガキ	褐 普	緻密	略完形	体部外面スス付 着
32	土師器 坏	(136)×(62)×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	1/4	

33	土師器 坏	(120)×(64)×36　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－回転糸切り　手持ちヘラケズリ	橙褐 普	雲母 赤色スコリア少	1/3	
34	土師器 坏	(136)×72×(45)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	橙褐 普	砂粒少	略完形	墨書「券」 体部外面正位
35	土師器 坏	124×67×34　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	橙褐 普	雲母 砂粒少	口縁～ 底部	
36	土師器 坏	124×67×34　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	外橙褐 内淡褐 普	赤色スコリア少	完形	墨書「竹」 体部外面正位
37	土師器 坏	147×73×42　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り 内面　ヘラミガキ	褐 普	緻密 雲母少	完形	墨書「竹」 体部外面正位 体部外面スス付着
38	土師器 坏	127×70×42　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り	橙褐 普	雲母少	略完形	墨書「券」 体部外面正位
39	土師器 坏	124×68×35　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ 内面に墨の跡多数有り、口縁の一部が割れていることから硯あるいは筆置きのような使用が考えられる	褐 普	緻密	略完形	墨書「竹」 体部外面正位
40	土師器 坏	(130)×66×40　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 普	雲母少	1/3	
41	土師器 坏	142×72×43　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	淡褐 并	緻密	1/2	墨書 「口」体部外面 「竹」体部内面
42	土師器 坏	(132)×70×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐 普	緻密	口縁～ 底部	
43	土師器 坏	227×66×38　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転糸切り　回転ヘラケズリ	橙褐 普	雲母少	3/4	
44	土師器 坏	(126)×(70)×33　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	褐 普	緻密	1/3	
45	土師器 小型甕	(140)×67×140　口縁外反し外面に稜を持つ　頸部屈曲 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴上半－縦位のヘラケズリ　下半－斜位のヘラケズリ　内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	砂粒 白色粒	1/2	口縁内面被熱によるヒビ割れあり
46	土師器 甕	－×－×－　ロクロ成形　口唇つまみ上げ	褐 并	砂粒少	口縁片	常総型
47	土師器 甕	(176)×－×(69)　ロクロ成形　口唇つまみ上げ	褐 普	砂粒多	口縁～ 胴上部	常総型
48	土師器 甕	(184)×－×(192)　口縁上端つまみ上げられ外側に屈曲　下端に稜を持つ　頸部緩やかな「く」の字状 外面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面　口縁～頸部－横ナデ　胴部－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部片	常総型
49	土師器 甕	－×88×(55)　平底 外面　胴下半－ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　胴下半－ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒 雲母	底部片	常総型
50	須恵器 甕	－×(140)×65　ロクロ成形 外面　胴中位－タタキ　下半－ヘラケズリ	灰褐 良	緻密	胴下半 ～底部	
51	土製品 支脚	上部径43×下部径－×器高(70)　重量167.1g	淡褐 黒	粗	上半部	

52	須恵器 坏	(134)×68×41　　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　底部－回転ヘラケズリ	暗赤褐 良	緻密	1/6	
53	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 外面　体部下端－手持ちヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	橙褐 普	緻密	底部片	墨書「□」 体部外面 未掲示
54	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
55	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面
57	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 内面　ヘラミガキ	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 未掲示
58	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 内面　ヘラミガキ	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 未掲示
59	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
61	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 外面　底部－回転糸切り	褐 普	緻密	底部片	墨書「□」 底部外面 未掲示
63	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面正位 未掲示
64	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
65	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
66	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　　内面　体部－ヘラミガキ	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 未掲示
67	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	褐 普	緻密	口縁片	墨書「神」 体部外面正位 未掲示
68	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	褐 普	緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 未掲示
69	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	橙褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面正位 未掲示
70	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	淡褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
71	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 内面　体部－ヘラミガキ	淡褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
72	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形 外面　体部下端－ヘラケズリ　底部－ヘラケズリ	淡褐 普	緻密	口縁片	線刻「□」 体部外面 未掲示
73	土師器 坏	－×－×－　　ロクロ成形	淡褐 普	緻密	体部～ 底部	墨書「□」 体部外面 未掲示

75	土師器 坏	−×−×−　　ロクロ成形	橙褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面 未掲示
77	土師器 坏	−×−×−　　ロクロ成形 外面　体部下端−ヘラケズリ	外橙褐 内淡褐 普	緻密	底部片	墨書「□」 体部内面 未掲示
78	土師器 坏	−×−×−　　ロクロ成形	橙褐 普	緻密	口縁片	墨書「□」 体部外面正位 未掲示
79	鉄器 紡錘車	長軸109.0×短軸3.5×厚さ3.5　重量24.7g 3.5　3.5 5.5　5.5				
80	鉄器 鉄鏃	長軸144.5×短軸14.0×厚さ6.0　重量13.8g 4.5　4.0 5.0　5.0 3.0　3.0				
81	鉄器 釘？	長軸67.0×短軸5.0×厚さ5.0　重量6.9g 4.5　5.0				
82	鉄器 鎌	長軸58.0×短軸15.5×厚さ13.3　重量18.0g 9.5　3.0				
83	土師器 甕	(199)×−×(134)　　口縁上端つまみ上げられ、外面は凹線状の調整 内外面とも口縁～頸部−横ナデ　胴上半−ヘラナデ	橙褐 普	粗砂粒多	口縁～ 胴部片	

第２項　掘立柱建物跡

上谷遺跡Ⅴ地区では18棟の掘立柱建物跡を検出した。先に報告したⅣ地区に比して棟数としては極端に減少するが、引続き掘立柱建物跡がやや多く建てられた地区である。Ⅳ地区では掘立柱建物跡の重複も著しかったが、本地区では単独の建物跡が多く性格を異にしているかも知れない。また、本地区では緩斜面部に建てられた建物跡が多く、平坦面に建てられたⅣ地区とは異なっていた。

以下に、掘立柱建物跡を報告していくこととする。

B125

検出地区　　L5-31-1～4gにて検出した。

遺　　構　　２×３間の掘立柱建物跡である。長軸5.38m×短軸4.08m、長軸方位はN-63°-Wを示す。幅のある建物跡で、がっしりした感を与える。柱痕は検出されず、整然とした覆土堆積のため、柱を埋込んだラインを外しているかも知れない。整然とした覆土堆積から、柱材は引抜かれてないと考えられる。四隅の柱穴の掘込みはやや深く、中間の柱穴は浅い傾向を示していた。覆土は暗褐色土・黒褐色土・黒色土をそれぞれ主体としており、柱穴によって異なりを示していた。

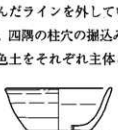


図140　B125

遺　　物　　覆土の充填による流込みによる、縄文早期・条痕文片が出土遺物の主体を占める。土師器小片も若干の出土を見ている。墨書土器片「万？」が出土しているが、これも流込みと捉えた。

所　　見　　上谷遺跡の掘立柱建物跡の基本形となる、２×３間の建物跡である。周辺の遺構状況から、奈良・平安時代の所産と捉えた。A226とP５で重複しており、先後関係はA226→B125と捉えられた。また、A226は人為的に埋戻された住居跡であるが、この重複から本建物跡のためであったと思われる。

P11は住居跡の調査で検出されたピットである。住居跡に伴わず本建物跡に含めたが、軸線が重ならず、別個の土坑として扱うべきかも知れない。

また、出土した墨書土器の文字が「万」であれば、上谷遺跡Ⅰ・Ⅱ地区に特徴的な文字であり、距離的に隔たりの大きな本地区との関わりが想定されよう。

表50　B125遺物観察表　（単位ｍｍ）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(114)×(64)×45　ロクロ成形　比較的薄手 外面　体部下端－回転ヘラケズリ　内面　ナデ 底部　回転糸切り→底縁・回転ヘラケズリ	橙褐 良	雲母長石 類赤色粒 緻密	1/3	全体に２次焼成を被る
2	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 内面　丁寧なヘラミガキ	外　橙 良	雲母 長石類微 細粒 緻密	体部片	墨書「□」 体部外面 内黒

B126

検出地区　L5-35-3g、44-2g、45-1～4gにて検出した。

遺　構　２×３間の掘立柱建物跡である。長軸6.56m×短軸4.20m×、長軸方位はN-39°-Wを示す。柱痕は柱穴全てに検出され、柱材は立腐れと判断した。柱穴の掘込みは0.56～0.80mであり、全体として掘込みはしっかりとしたものであった。黒褐色土・黒色土を主体として突固められた覆土であり、柱穴によって覆土に若干の異なりを示している。

遺　物　縄文早期・撚糸文、条痕文、弥生後期、土師器・須恵器片がやや多く出土する。その主体は縄文早期・条痕文片であるが、いずれも覆土充填による流込みと捉えた。

所　見　B125に比し長軸が長く、細身の印象を与える建物跡である。周辺の遺構状況から奈良・平安時代の所産と捉えた。弥生後期のA227と重複するが、B125の様に掘立柱建物跡を建てるべく竪穴住居跡の埋戻しは行われていなかった。

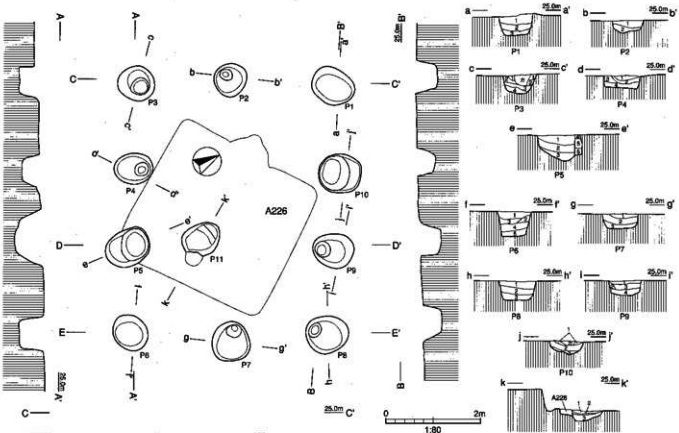
B127

検出地区　L5-46-2・4g、47-1・2gにて検出した。

遺　構　２×３間の掘立柱建物跡である。長軸4.76m×短軸3.28m、長軸方位はN-52°-Wを示す。柱痕は９基で検出され、P２・P４は柱痕の一部が確認できたものの柱痕覆土の乱れから柱材の引抜きが行われ、他の柱穴は立腐れと判断した。柱穴の掘込みは0.45～0.65mであり、比較的均一な深さとなっていた。覆土は柱穴により異なりはあるものの、黒褐色土・黒色土を主体とした突固められた人為的な充填土である。

遺　物　縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器の各小片が出土している。縄文早期・条痕文片が主体を占めるが、これらは覆土充填時の流込みととらえた。

所　見　周辺の遺構状況から奈良・平安時代の所産と捉えた。２×３間の建物跡であるが、遺構規模は他に比し小さい。弥生後期のA226とP８・P９において重複する。



P1
1 層　黒色土　　ロームブロックとローム微粒多含
2 層　黒色土　　径50mm前後のロームブロック含　ローム微粒少含
3 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土とロームブロック含
　　ローム微粒少含

P2
1 層　黒色土　ローム微粒含
2 層　黒色土　褐色土混入　ローム粒、ロームブロック含

P3
1 層　暗褐色土　黒色土主体の上に暗褐色土混入　ローム微粒多含
2 層　暗褐色土　黒色土主体の土に暗褐色土、径30mm前後の
　　ロームブロック含　ローム微粒含
3 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土混入　ローム微粒少含
4 層　褐色土　　黒色土混入　径10mm前後のロームブロック、
　　ローム微粒含

P4
1 層　黒色土　　少量の褐色土混入　ローム粒多含
2 層　暗黄褐色土　黒色土主体の土に径30～50mm前後のロームブロック多含む
3 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土混入　ローム粒多含
4 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土混入　ローム粒含

P5
1 層　黒色土　　少量の褐色土混入　径50mm前後のロームブロック、ローム微粒含
2 層　黒色土　　暗褐色土混入　ローム粒含　焼土粒微含
3 層　黒色土　　褐色土混入　ロームブロック含
4 層　暗褐色土　黒色土主体の土に暗褐色土が混入　ローム微粒含
5 層　暗褐色土　黒色土主体の土に暗褐色土が混入　ローム微粒、ロームブロック含
6 層　暗褐色土　褐色土主体の土に暗色土が混入　ローム微粒多含

P6
1 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土が混入　ローム微粒、ロームブロック含
2 層　黒色土　　黒色土主体の土に径10mm前後のロームブロック含
3 層　黒色土　　黒色土主体の土に暗褐色土が混入　ローム微粒少含
4 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土が混入　ローム微粒、
　　径30mm前後のロームブロック多含
5 層　暗褐色土　黒色土主体の土に褐色土が混入　ローム微粒、
　　径30mm前後のロームブロック多含

P7
1 層　暗褐色土　黒色土が混入　ローム粒含
2 層　暗褐色土　黒色土が混入　ローム粒、
　　径30mm前後のロームブロック多含
3 層　黒褐色土　黒色土主体の土に褐色土が混入　ローム微粒、
　　ローム微粒、径30mm前後のロームブロック多含

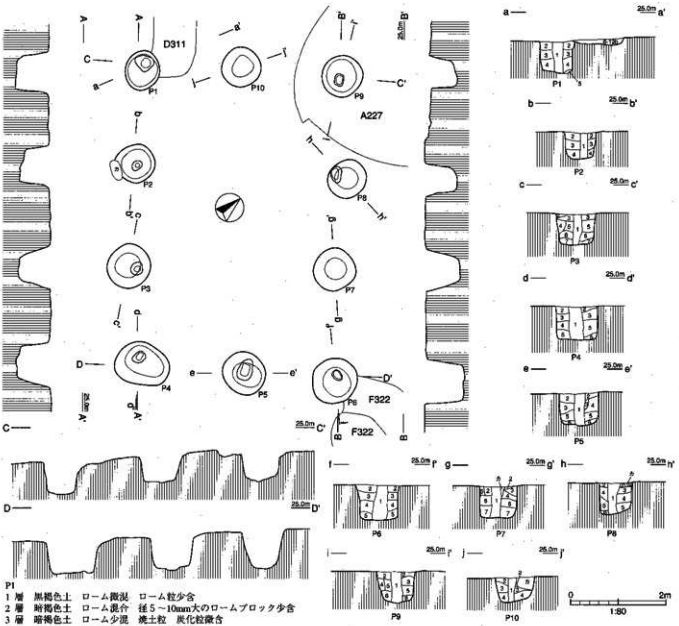
P8
1 層　黒色土　　褐色土が混入　ローム微粒含　焼土粒、
　　炭化粒微含
2 層　黒色土　　褐色土が混入　ローム微粒含
3 層　褐色土　　黒色土が混入ロー.ム微粒、ロームブロック含

P9
1 層　暗褐色土　黒色土が混入　ローム微粒少含
2 層　暗褐色土　黒色土が混入　ローム微粒含
3 層　褐色土　　黒色土が少量混入　径20mm前後の
　　ロームブロック含
4 層　黒色土　　少量の褐色土が混入　径20mm前後の
　　ロームブロック含

P10
1 層　暗褐色土　黒色土主体の上に褐色土が混入　ローム微粒含
2 層　褐色土　　黒色土が少量混入　ローム微粒多含
3 層　黒色土　　褐色土が少量混入　ローム微粒含

P11
1 層　黒褐色土　焼土粒　ローム粒多含　白色粘土を少含
2 層　暗灰褐色土　焼土粒　ローム粒少含　白色粘土を多含
3 層　灰褐色土　白色粘土と黒褐色土混合　ローム粒多含

図141　B125（2）



P1
1 層　黒褐色土　ローム微混　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム混合　径5～10mm大のロームブロック少含
3 層　暗褐色土　ローム少混　焼土粒　炭化粒微含
4 層　黒褐色土　ローム微混　ローム粒少含
5 層　黒色土　径10mm大のロームブロック少含

P2
1 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　黒褐色土少混
3 層　暗褐色土　黒褐色土混合　ローム粒多含
4 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含

P3
1 層　黒色土　ローム微混　ローム粒少含
2 層　黄褐色土　黒色土微混
3 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒　炭化粒少含
4 層　暗褐色土　黒褐色土少混
5 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
径5～20mm大のロームブロック少含
6 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒微含
7 層　暗褐色土　ローム混合　ローム粒多含

P4
1 層　黒褐色土　ローム少混　炭化粒少含
2 層　暗褐色土　径5～10mm大のロームブロック少含
3 層　黒色土　ローム少混
4 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
5 層　暗黄褐色土　ローム土暗褐色土堆く混合
6 層　黒色土　ローム粒多含

P5
1 層　黒色土　ローム少混　粘土粒少含
2 層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒少含
3 層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒少含　径5～10mm大のロームブロック少含
4 層　黒黄褐色土　黒褐色土少混
5 層　黒褐色土　ローム少混　径5～10mm大のロームブロック少含
6 層　黒黄褐色土　ローム土暗褐色土混合

P6
1 層　黒色土　ローム少混　粘土粒多含
2 層　黒色土　ローム少混　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含5～20mm大のロームブロック少含
4 層　黒色土　ローム少混　ローム粒多含　径5～30mm大のロームブロック少含
5 層　暗褐色土　ローム微含

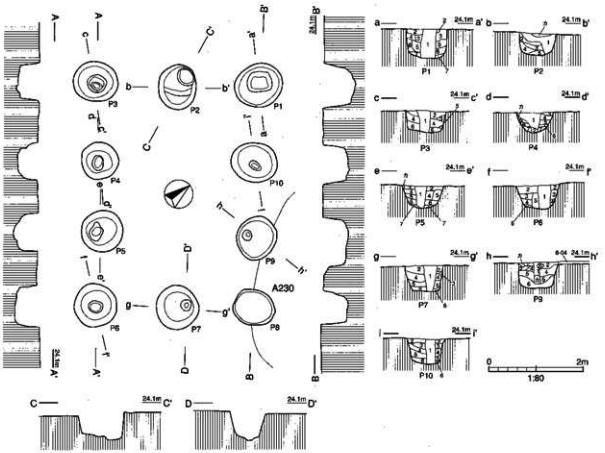
P7
1 層　黒色土　ローム微混　ローム粒少含　径5mm大のローム微含
2 層　黒褐色土　ローム混合　ローム粒多含
3 層　黄褐色土　黒色土微混
4 層　黒褐色土　ローム粒く混合　ローム粒少含　径5mm大のローム多含
5 層　黒色土　ローム少混　ローム粒微含
6 層　黒色土　ローム少混　ローム粒多含　径5～30mm大のロームブロック多含
7 層　黒褐色土　ローム粗く混合　ローム粒、径5～20mm大のロームブロック多含

P8
1 層　黒色土　ローム少混
2 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
3 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
4 層　黒色土　ローム微混　ローム粒少含
5 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
6 層　暗褐色土　ローム粒微含

P9
1 層　黒色土　ローム微混　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
4 層　暗褐色土　ローム混合
5 層　黒褐色土　ローム微混　ローム粒少含
6 層　黒褐色土　ローム粒少混　ローム粒径5～20mm大のロームブロック少含

P10
1 層　黒褐色土　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　ローム粒微含
4 層　暗褐色土　ローム混合　ローム粒多含

図142　B126



P1
1 層　黒褐色土　ローム微含
2 層　黒褐色土　ローム少含
3 層　暗褐色土　黒色土とローム混合　ローム多含
4 層　黒色土　ローム粒少混　径10mm大のロームブロック少含
5 層　黒色土　ローム粒少含　径5mm大のロームブロック少含
6 層　黒褐色土　黒色土混合　ローム少含
7 層　暗褐色土　ローム主体　黒色土少混

P2
1 層　暗褐色土　ロームと黒色土が混合
径10mm～20mm大のロームブロック少含
2 層　黒色土　ローム粒多含
3 層　黒褐色土　ローム粒多含
4 層　黒色土　ローム粒多含
5 層　暗黄褐色土　黒色土少混

P3
1 層　黒褐色土　ローム粒少含
2 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
3 層　黒色土　ローム粒微含
4 層　黒褐色土　ローム少含　ローム粒多含
5 層　黒色土　ローム粒微含
6 層　黒褐色土　ローム粒微含

P4
1 層　黒褐色土　黒色土とローム混合
径5mm大のロームブロック多含
2 層　暗褐色土　径5mm大のロームブロック少含
3 層　黒色土　ローム粒含
4 層　黒褐色土　黒色土少量　ローム混合
5 層　暗褐色土　黒色土とローム混合
6 層　黒褐色土　黒色土とローム混合
7 層　暗褐色土　黒色土とローム少混

P5
1 層　黒褐色土　黒褐色土主体　ローム微粒含
2 層　黒褐色土　黒褐色土主体　ローム少量混
3 層　黒色土　ローム粒微含
4 層　黒褐色土　黒色土主体　ローム粒少含
5 層　黒色土　黒色土主体　ローム粒多含
6 層　黄褐色土　ローム主体
7 層　黄褐色土　ソフトローム

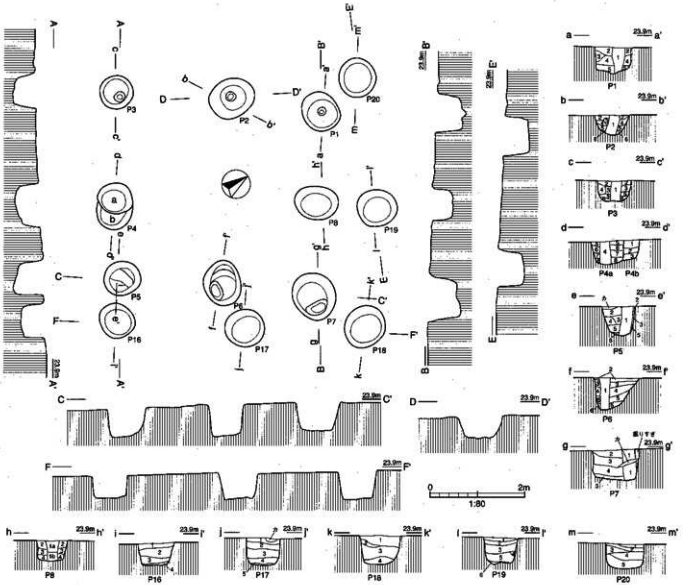
P6
1 層　黒褐色土　ローム粒微含
2 層　黒色土　ローム粒微含
3 層　黒褐色土　ローム混合
4 層　黒褐色土　黒色土とローム混合
5 層　黒褐色土　黒褐色土主体
6 層　黒褐色土　黒色土にローム少混

P7
1 層　黒褐色土　ローム微含
2 層　黒色土　ローム微含
3 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
4 層　黒色土　黒色土主体
5 層　暗褐色土　黒色土ローム混合
6 層　暗黄褐色土　ローム主体

P9
1 層　黒褐色土　ローム微粒含
2 層　黒褐色土　ローム少量混入
3 層　暗褐色土　ローム、黒色土が混合
4 層　黒褐色土　黒色土主体　ローム粒多量含
5 層　暗褐色土　ロームと黒色土混合　径5mm大の
ロームブロック少含
6 層　黒色土　ローム粒多含　径5mm大のロームブロックを多含

P10
1 層　黒褐色土　黒色土主体　ロームが少混
2 層　黒色土　ローム粒微含
3 層　黒褐色土　ロームが少混
4 層　黒色土　ローム微含
5 層　黒色土　ローム粒微含
6 層　黒色土　黒色土主体土

図143　B127



P1
1 層　黒色土　炭化粒多含　細かな炭化材混合　ローム粒多含
2 層　暗褐色土　ローム粒　径5mm大のロームブロック多含
3 層　黒褐色土　ロームが粒く混合　径5mm大のロームブロック多含
4 層　黒褐色土　ローム混合　ローム粒少含
5 層　黒褐色土　ローム微混　ローム粒少含径5mm大のロームブロック少含

P2
1 層　黒褐色土　ローム微混　炭化粒　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム粒少含
3 層　黒色土　ローム粒少含
4 層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒多含
5 層　黒褐色土　ローム微混　ローム粒多含
6 層　黒褐色土　ローム微混

P3
1 層　黒褐色土　ローム微混　炭化粒　ローム粒微含
2 層　暗褐色土　ローム粒多含
3 層　暗褐色土　ローム粒多含
4 層　黒色土　ローム粒少含
5 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
6 層　黒褐色土　ローム粒微含

P4
1 層　黒黄褐色土　ローム粒く混合
2 層　暗褐色土　ローム粒く混合
3 層　暗褐色土　ローム粒く混合　2層より黒褐色土の量が多い
4 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒微含
5 層　暗褐色土　ローム少混　ローム粒多含
6 層　黒黄褐色土　暗褐色土少混
7 層　暗黄褐色土　暗褐色土　黒色土少混
8 層　暗褐色土　ローム粒少含

P5
1 層　暗灰褐色土　白色粘土少混　炭化粒少含
2 層　黒褐色土　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　ローム粒少含　炭化粒微含
4 層　暗褐色土　ローム粒微含
5 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
6 層　暗黄褐色土　ローム暗く混合

P6
1 層　灰褐色土　ローム微混　炭化粒　ローム粒少含
2 層　黒黄褐色土　ローム粒く混合
3 層　暗褐色土　ローム粒少含
4 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒多含
5 層　暗褐色土　ローム微混　ローム粒多含
6 層　暗褐色土　ローム微混

P7
1 層　黒色土　炭化粒　10mm位の炭化材多混　焼土粒少含
2 層　暗黄褐色土　径20～30mm大のロームブロック多混
3 層　暗褐色土　径20～30mm大のロームブロック少混
4 層　暗褐色土　ローム少混　径20～30mm大のロームブロック少含
5 層　黄褐色土　暗褐色土少混

P8
1 層　黒色土　炭化粒　10mm位の炭化材多含
2 層　黒褐色土　炭化粒少混
3 層　暗褐色土　ローム粒多含　焼土粒少含
4 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
5 層　黒褐色土　ローム粒微含

図144　B128ab

P16
1 層　暗黄褐色土　ローム粗く混合
2 層　暗褐色土　　ローム少混　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　　暗褐色土少混　ローム粒少含
4 層　暗褐色土　　ローム粗く混合

P17
1 層　暗褐色土　黒色土少混　ローム粒多含
2 層　黒褐色土　ローム少混
3 層　黒褐色土　ローム少混　径5～10mm大のロームブロック多含
4 層　黄褐色土　黒色土少混　ロームブロック多含
5 層　暗褐色土　黒色土粗く混合

P18
1 層　黄褐色土　黒色十少混　径10～30mm大のロームブロック多含
2 層　暗褐色土　ローム粗く混合
3 層　黒褐色土　ローム少混　径5～30mm大のロームブロック少含
4 層　暗褐色土　ロームと黒色土粗く混合

P19
1 層　暗褐色土　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ローム粒微含
3 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒微含
4 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
5 層　暗褐色土　ロームと暗褐色土粗く混合
6 層　暗黄褐色土　黒色土少混

P20
1 層　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土粗く混合　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ローム少混　黒色土微含
3 層　黒褐色土　ローム粒少含
4 層　黒褐色土　ローム少混　ローム粒少含
　　径10mm大のロームブロック少含
5 層　暗黄褐色土　黒色土と暗褐色土粗く混合

図145　B128ab（2）

B128a・b

検出地区　L5-49-3g、58-2g、59-1～3gに

遺　構　B128aは２×２間の建物跡で、長軸4.20m×短軸4.12m、長軸方位はN-38°-Eを示す。本遺構の柱穴はP１～P８であり、柱痕は全ての柱穴で検出し、柱材は立腐れと捉えた。柱穴の掘込みの深さは0.44～0.68mで、北東側柱列が深い傾向が窺えた。覆土は黒褐色土を主体としていた。

B128bは２×２間の建物跡で、長軸5.66m×短軸5.16m、長軸方位はN-36°-Eを示す。本建物跡の柱穴はP16～P20・P２～P４であり、P２・P３はA128aと兼用し、P４はP４bが柱穴配置上で捉えた。柱痕はP８のみで検出したが、他の柱穴は整然とした覆土であり、柱材は立腐れと想定した。掘込みは0.46～0.60mと比較的均一であった。覆土は黒褐色土・暗褐色土のを主体としていた。

遺　物　ともに土師器・須恵器片などが出土するが、縄文早期・条痕文片が主体を占める。

所　見　２棟の重複した掘立柱建物跡である。柱穴配置上でP４aをB128aとした。この場合、先後関係はB128a→B128bとなる。当初は拡張と考えていたが、建物跡の縮小ということになり、時期の移動があるかも知れない。

B129

検出地区　L5-10-3g、19-2g、20-1～4gに

遺　構　２×３間の掘立柱建物跡で、長軸6.78m×短軸4.00m、長軸方位はN-66°-Wを示す。柱痕は全ての柱穴で検出し、柱材は基本的に立腐れと捉えたが、P５・P８の柱痕覆土の上部が広がるため、柱材の掘返しによる引抜きの可能性も否定できなかった。柱穴の掘込みは0.32～0.68mであり、P１・P・３・P６・P８と四隅が0.51～0.68mと深かく、中間の柱穴は0.32～0.44mと浅くなる傾向が窺えた。覆土は暗褐色土・褐色土などを主体に、柱材を建てるための充填覆土であり、突固められていた。

遺　物　土師器・須恵器片などが出土するが、縄文早期・条痕文片が主体を占める。

所　見　細身の掘立柱建物跡である。建物跡規模の割に柱穴規模が小さく、深さも浅い遺構である。

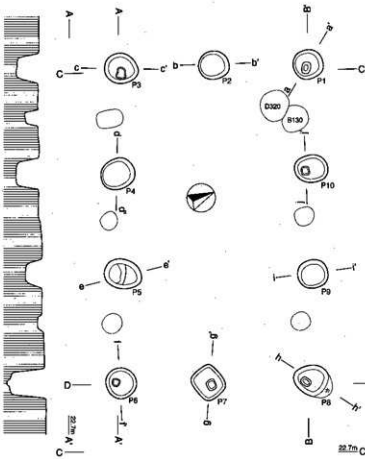
B130

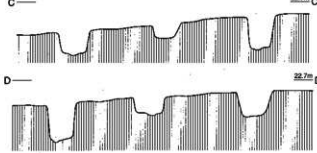
検出地区　L5-11-1～3gにて検出した。

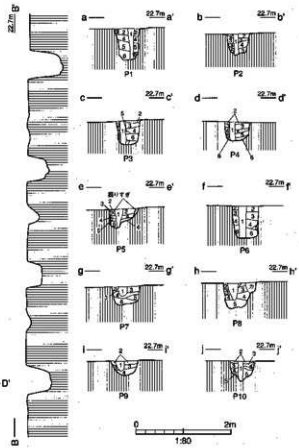
遺　構　１×２間の掘立柱建物跡であり、長軸4.32m×短軸3.98m、長軸方位はN-67°-Wを示す。柱痕はP１・P２・P６で検出されたが、他は不明である。柱材の立腐れと引抜きが混在したかも知れない。掘込みは浅く0.11～0.27mであり、均一化している。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とした充填土である。

遺　物　土師器・須恵器片などが出土する。縄文早期・条痕文片が主体とを占めるが、覆土充填による流込みである。

所　見　B129の側柱の支柱穴の様子も窺えたが、柱間軸線から若干外れる為、単独の建物跡と捉えた。建直しとしても先後関係は不明である。







P1
1 層　暗褐色土　　暗褐色土主体
2 層　黒色土　　湧ったローム少含
3 層　暗黄褐色土　湧ったローム主体
4 層　黒色土　　湧ったローム少含
5 層　暗黄褐色土　湧ったローム と暗褐色土が混合
6 層　暗褐色土　　少量の湧ったローム と暗褐色土が混合

P2
1 層　暗褐色土　暗褐色土主体
2 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合
3 層　暗褐色土　湧ったローム と黒褐色土が混合
4 層　黒色土　　湧ったローム少含
5 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の湧ったローム が混合

P3
1 層　暗褐色土　　暗褐色土主体
2 層　褐色土　　湧ったローム と暗褐色土が混合
3 層　暗褐色土　褐色土少含
4 層　黒色土　　暗褐色土が混合
5 層　黒褐色土　白色粘土ブロック　大井が崩落
6 層　暗黄褐色土　湧ったローム と暗褐色土が混合
7 層　暗褐色土　湧ったローム と暗褐色土が混合

P4
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
2 層　褐色土　　褐色土とローム が混合
3 層　暗黄褐色土　湧ったローム と少量の暗褐色土が混合
4 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の湧ったローム が混合
5 層　暗褐色土　湧ったローム が極少量滲むように含
6 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の湧ったローム が混合

P5
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
2 層　暗褐色土　少量の黒色土が混合
3 層　暗黄褐色土　湧ったローム が主体　少量の暗褐色土を混入
4 層　暗褐色土　暗褐色土主体　湧ったローム を少混入
5 層　黄色土　　湧ったローム主体
6 層　暗褐色土　暗褐色土が主体　湧ったローム が少含

P6
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
2 層　褐色土　　褐色土と少量の湧ったローム が混合
3 層　暗褐色土　少量のローム が混合
4 層　暗褐色土　湧ったローム が少量滲むように混入
5 層　黒褐色土　湧ったローム が少量混入
6 層　黄褐色土　湧ったローム と暗褐色土が混合
　　部分的にローム の小ブロックが混入

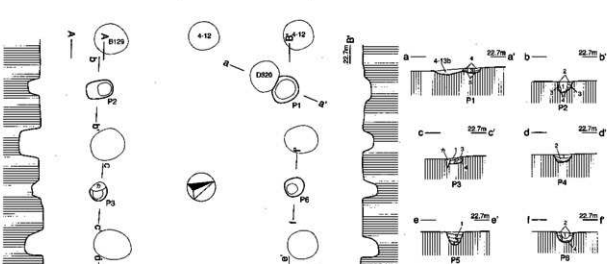
P7
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
2 層　褐色土　　褐色土主体
3 層　黒褐色土　黒褐色土主体
4 層　暗黄褐色土　湧ったローム と少量の暗黄褐色土が混合
5 層　暗褐色土　湧ったローム と暗褐色土が混合　色調は暗い
6 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の湧ったローム が混合

P8
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
2 層　褐色土　　褐色土主体
3 層　褐色土　　少量の暗褐色土を混合
4 層　黒褐色土　黒褐色土と湧ったローム混合
　　部分的にローム の小ブロックを混入
5 層　黒色土　　湧ったローム少混入

P9
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
2 層　暗褐色土　少量の黒色土が混合　ローム微粒含
3 層　暗褐色土　少量の湧ったローム が混合　ローム微粒含
4 層　暗褐色土　少量の黒色土が混合

P10
1 層　暗褐色土　柱痕　褐色土主体
2 層　暗黄褐色土　湧ったローム と少量の暗褐色土が混合
3 層　黒色土　　湧ったローム が少量混入
4 層　暗黄色土　湧ったローム が主体　暗褐色土が少量混入
5 層　黒色土　　湧ったローム 極少混入

図146　B129



B130

P1
3 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土主体
4 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合
5 層　暗黄褐色土　濁ったロームと少量の暗褐色土が混合

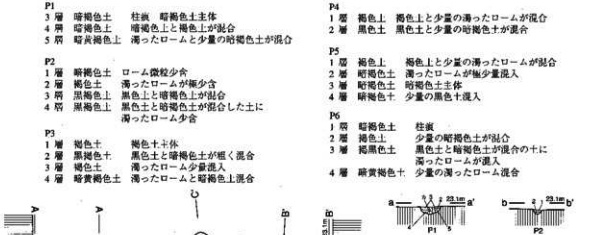
P2
1 層　暗褐色土　ローム微粒少含
2 層　褐色土　濁ったロームが極少
3 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混合
4 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混合した土に濁ったローム少含

P3
1 層　褐色土　褐色土主体
2 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が粗く混合
3 層　褐色土　濁ったローム少量混入
4 層　暗黄褐色土　濁ったロームと暗褐色土混合

P4
1 層　褐色土　褐色土と少量の濁ったロームが混合
2 層　黒色土　黒色土と少量の暗褐色土が混合

P5
1 層　褐色土　褐色土と少量の濁ったロームが混合
2 層　暗褐色土　濁ったロームが極少量混入
3 層　暗褐色土　暗褐色土主体
4 層　暗褐色土　少量の黒色土混入

P6
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　褐色土　少量の暗褐色土が混合
3 層　褐黒色土　黒色土と暗褐色土が混合の土に濁ったロームが混入
4 層　暗黄褐色土　少量の濁ったローム混合

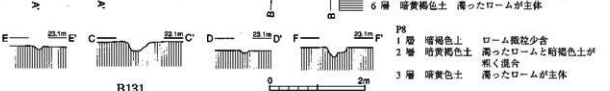


P1
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　黒黄色土　黒色土と濁ったロームが粗く混合
3 層　黒褐色土　黒色土と少量の暗褐色土の混合
4 層　暗褐色土　濁ったロームが少量混入
5 層　暗黄褐色土　濁ったロームと少量の暗褐色土混合

P2
1 層　黒色土
2 層　暗黄色土　濁ったロームが主体

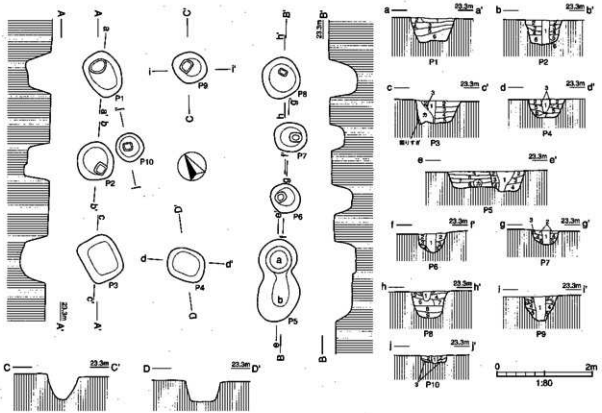
P5
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　少量の黒色土が混合
3 層　暗褐色土　少量の濁ったロームが混合
4 層　暗黄褐色土　濁ったロームと少量の暗褐色土が粗く混合
5 層　暗褐色土　少量の濁ったロームが混入
6 層　暗黄褐色土　濁ったロームが主体

P8
1 層　暗褐色土　ローム微粒少含
2 層　暗黄褐色土　濁ったロームと暗褐色土が粗く混合
3 層　暗黄色土　濁ったロームが主体



B131

図147　B130・B131



P1
1 層　暗褐色土
2 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが粗く混合
3 層　暗褐色土　ローム微粒少含
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームが粗く混合
5 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混合し、湧ったロームが粗く混合　ローム微粒多含　ローム小粒微含
6 層　暗褐色土　湧ったロームが粗く混合　ローム小粒微含

P2
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　湧ったロームが混合　ローム微粒多含
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームが粗く混合
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土と多量の湧ったロームが粗く混合
5 層　暗褐色土　湧ったロームが少量混入
6 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームが粗く混合

P-3
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　黒褐色土　暗褐色土と少量の湧ったロームが混合
ローム微粒多含
3 層　黒褐色土　黒色土と湧ったロームが混合　ローム微粒少含
4 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが混合
5 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが混合　ローム微粒少含

P4
1 層　暗褐色土
2 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが混合　ローム微粒少含
3 層　暗褐色土
4 層　暗黄褐色土　湧ったロームと少量の暗褐色土が混合
ロームの大きな固まり含む
5 層　黒黄色土　黒色土と湧ったロームが粗く混合
6 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が粗く混合
7 層　暗黄色土　湧ったローム主体　暗褐色土少量混入
ロームの大きな固まり含む

P5
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　少量の黒色土が混合
3 層　暗褐色土
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームと極少量の黒色土が混合
5 層　暗褐色土
6 層　暗褐色土　少量の褐色土が混合
7 層　暗褐色土　極少量の湧ったロームが混合
8 層　暗黄色土　湧ったローム主体　暗褐色土少含

P6
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　極少量の湧ったロームが混合
3 層　暗黄褐色土　湧ったロームが粗く混合
4 層　暗黄色土　湧ったロームが主体　暗褐色土が極少量混入

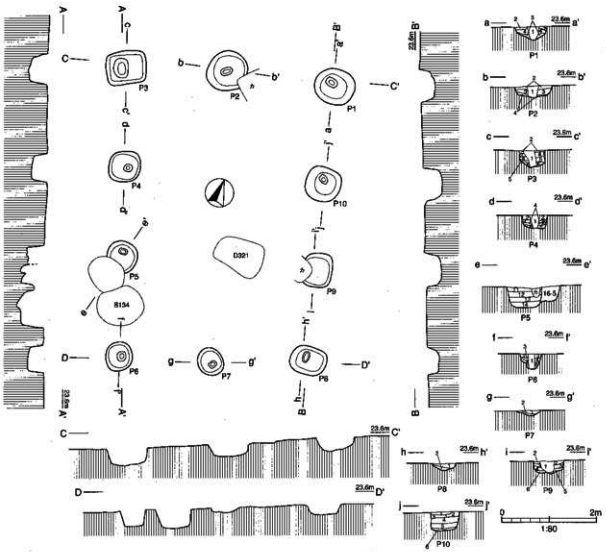
P7
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　極少量の湧ったロームが混合
3 層　暗黄色土　湧ったロームが主体　暗褐色土が少量混入
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームが粗く混合
5 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の湧ったロームが混合
6 層　暗黄色土　湧ったロームが主体　暗褐色土が極少量混入

P8
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗黄褐色土　少量の暗褐色土と湧ったロームが混合
3 層　暗褐色土　ローム微粒混入
4 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の湧ったロームが混合
5 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームブロックが混合
6 層　暗褐色土　湧ったロームが少量混入
7 層　暗黄褐色土　湧ったロームが粗く混合
8 層　暗褐色土
9 層　暗褐色土　極少量の湧ったロームが混合

P9
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗黄褐色土　少量の湧ったロームが滲むように混合
3 層　暗黄色土　湧ったロームが主体　暗褐色土が少量混入
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームが粗く混合
5 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが粗く混合

P10
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　少量のロームが混合　人為的に埋めたもの
3 層　暗褐色土　ロームが混合　人為的に埋めたもの

図148　B132



P1

1 層	暗褐色土	柱痕　黒色土小混入
2 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混合
3 層	黒黄褐色土	黒色土と濁ったロームがやや粗く混合
4 層	黒褐色土	黒色土と濁ったロームが混合
5 層	黒黄色土	黒色土と濁ったロームが少し粗く混合

P2

1 層	暗褐色土	柱痕　暗褐色土が主体の土に少し滲むように濁ったロームが含
2 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混合　部分的に少し濁ったロームが含
3 層	黒褐色土	黒褐色土と濁ったロームが少し粗く混合
4 層	暗黄色土	濁ったロームが主体の土に暗褐色土を混合

P3

1 層	暗褐色土	柱痕　暗褐色土中に濁ったロームが少し粗く混入
2 層	暗褐色土	暗褐色土主体の層
3 層	褐色土	褐色土と少量の濁ったローム混合
4 層	暗褐色土	暗褐色土と濁ったロームが少し粗く混合
5 層	暗褐色土	暗褐色土と濁ったローム混合
6 層	暗黄褐色土	濁ったロームが混合　ローム小粒少含

P4

1 層	暗褐色土	柱痕　暗褐色土が主体の層に濁ったロームが混入
2 層	黒色土	黒色土が主体の土に暗褐色土が混入
3 層	黒褐色土	黒色土と濁ったローム少量が滲むように混合
4 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土そして極少量の濁ったロームが混合
5 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体になる土
6 層	暗黄褐色土	暗黄褐色土と濁ったロームがやや粗く混合

P5

1 層	暗褐色土	柱痕　暗褐色土が主体の土　濁ったロームを少量混入
2 層	黒褐色土	黒色土に濁ったロームが混合　黒色土の量は極少量
3 層	黒褐色土	黒色土と少量の濁ったロームと少量の暗褐色土が混合
4 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土が混合
5 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体　暗褐色土は微含
6 層	暗黄褐色土	暗褐色土と濁ったロームが混合

P6

1 層	暗褐色土	柱痕　暗褐色土が主体の土
2 層	暗褐色土	濁ったロームが少含
3 層	暗褐色土	少量のロームを混合
4 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体の土 暗褐色土が少含
5 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体の土 暗褐色土が少含
6 層	暗褐色土	濁ったロームが混合

P7

1 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土が混合
2 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体になる土

P8

1 層	暗褐色土	暗褐色土と褐色土が混合
2 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体の土

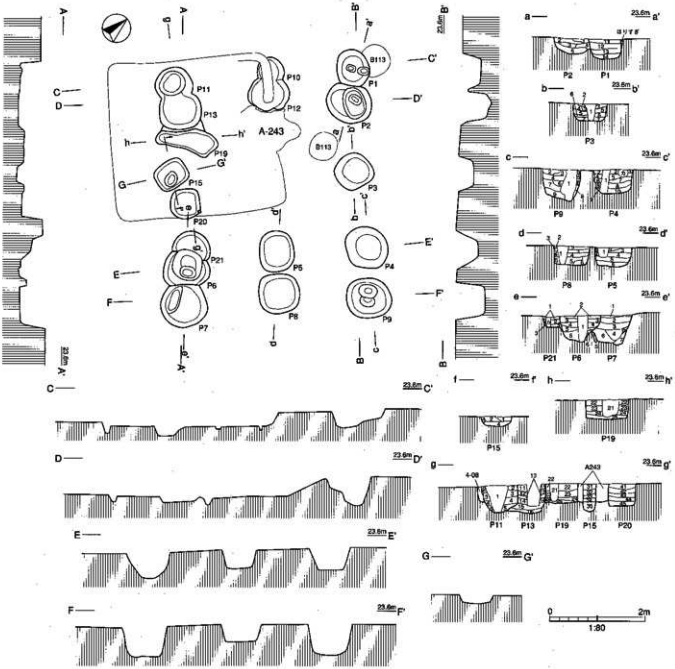
P9

1 層	暗褐色土	柱痕　少しボロボロとした土
2 層	暗褐色土	少量の濁ったロームを混合
3 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土とそして少量の 濁ったロームが混合
4 層	暗黄褐色土	暗黄褐色土と少量の濁った ロームが混合
5 層	暗褐色土	暗褐色土と少量のロームが混合
6 層	暗黄褐色土	濁ったロームが主体になる土で 少量の暗褐色土が混入

P10

1 層	暗褐色土	少量の濁ったロームが混合
2 層	暗褐色土	少量の濁ったロームが混合
3 層	暗褐色土	黒色土と暗褐色土が混合
4 層	暗黄褐色土	黒褐色土と暗褐色土少量が混合
5 層	黒褐色土	黒色土と暗褐色土極少量が混合
6 層	黒黄褐色土	黒色土と暗褐色土と濁った ロームが混合

図149　B133



P1
11 層　暗褐色土　湧ったロームが少量混入
12 層　暗褐色土　少量の黒色土と極少量の湧ったローム混合
13 層　暗黄褐色土　湧ったローム多量と暗褐色土少量が混合
14 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが混合

P2
1 層　黒褐色土　黒褐色土と極少量の湧ったロームが混合
2 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土そして極少量の湧ったロームが混合
3 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が混合　暗褐色土の色調が強い
4 層　黒黄褐色土　黒褐色土と少量の湧ったロームが混合
5 層　暗黄褐色土　湧ったロームとロームの大粒、小粒が混合　暗褐色土極少量含

P3
1 層　暗褐色土　黒色土や褐色土が少混入
2 層　褐色土　褐色土と少量の暗褐色土が混合
3 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が混合
4 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土と極少量の黒色土が混合
5 層　黒黄褐色土　黒色土と湧ったローム少量が混合
6 層　暗黄褐色土　湧ったローム少量と暗褐色土が混合
7 層　暗黄褐色土　湧ったローム少量と暗褐色土が混合

P4
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　少量の褐色土が混合　ローム微粒少含
3 層　暗黄褐色土　湧ったロームと暗褐色土が混合
4 層　黒褐色土　暗褐色土が少量混入
5 層　暗褐色土　ローム微粒少含
6 層　暗褐色土　ローム微粒少量混入
7 層　暗褐色土　ロームの少粒がやや多含
8 層　暗褐色土　極少量の湧ったロームが混入
9 層　黒色土　ローム微粒が数点含
10 層　暗黄色土　湧ったローム土体となる土　暗褐色土が極少量混入

P5
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　湧ったロームが混合
3 層　暗黄褐色土　黒色土と湧ったロームが混合　ローム小粒少含
4 層　暗黄褐色土　暗褐色土と湧ったロームが堅く混合
5 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが混合　ローム小粒数点
6 層　暗褐色土　少量の湧ったロームが混合

図150　B134a,b

P6
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗褐色土　褐色土が小量混入
3 層　暗褐色土　褐色土が混合　ローム小粒数点含
4 層　暗褐色土　ローム微粒多含
5 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の薄ったローム混合　ローム大粒
6 層　暗褐色土　少量の薄ったロームが混合　ローム小粒少含

P7
1 層　暗褐色土　ローム微粒少量含
2 層　黒褐色土　炭色土と暗褐色土が混合
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームの塊とローム大粒、中粒が粗く混合
4 層　黒黄褐色土　黒色土と薄ったロームが混合　ロームの大粒やロームの塊が混入
5 層　暗黄褐色土　ロームの塊と暗褐色土が粗く混合
6 層　暗黄褐色土　ロームの大粒、ロームの塊、ローム中粒、暗褐色土そして薄ったロームが粗く混合
7 層　暗黒褐色土　薄ったロームの主体になる土　掘りすぎの可能性あり

P8
1 層　暗褐色土　柱痕
2 層　暗黄褐色土　薄ったロームが粗く混合
3 層　暗褐色土　ローム微粒が少含
4 層　暗褐色土　薄ったロームが極少量混入
5 層　暗黄褐色土　多量の薄ったロームが粗く混合　ローム小粒少含
6 層　暗褐色土　少量の薄ったロームが混入

P9
1 層　暗褐色土　柱痕　暗褐色土と褐色土が混合
2 層　暗褐色土　少量の薄ったロームが混合
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったローム大量が混合　ローム小粒少含
4 層　暗褐色土　少狀の薄ったロームが混合　ローム小粒少含
5 層　暗黄褐色土　薄ったロームと少量の黒褐色土
6 層　暗黄色土　薄ったロームが主体　少量の暗褐色土が混入　ローム小粒少含
7 層　暗褐色土　少狀の薄ったローム と少量の黒色土と極微点点のローム大粒が粗く混合
8 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったロームが混合
9 層　黒黄褐色土　黒色土と薄ったローム、ロームの大粒が粗く混合

P11
1 層　暗褐色土　柱痕　少量の薄ったロームが混入
2 層　暗褐色土　ローム微粒少含
3 層　暗褐色土　ロームの大粒混合
4 層　暗褐色土　ローム微粒、ローム小粒含
5 層　暗褐色土　ローム小粒含

P13
11 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合　ローム微粒少含
12 層　暗褐色土　ローム微粒多含
13 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の黒色土が混合　ローム微粒少含
14 層　暗褐色土　ローム微粒多含
15 層　暗褐色土　暗褐色土とロームの小粒、微粒が混合
16 層　暗黄褐色土　薄ったロームと暗褐色が混合　ローム小粒少含

P15
1 層　暗褐色土　暗褐色土が主体に薄ったロームが極少量混入
2 層　暗褐色土　少量の薄ったロームがやや粗く混合
3 層　暗黄褐色土　ロームの大粒と暗褐色土が粗く混合
4 層　暗褐色土　薄ったロームが混合
31 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合
32 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の薄ったロームとローム微粒が混合
33 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混合　ローム微粒少含
34 層　暗褐色土　少量の薄ったロームが混合　ローム小粒少含
35 層　P15の下場で盤に近い状態　層ではなく盤の部分と思ってよい

P19
21 層　暗褐色土　柱痕　ローム微粒少含
22 層　褐色土　暗褐色土混入
23 層　暗褐色土　薄ったローム少含　ローム小粒少含
24 層　暗褐色土　ローム微粒、小粒少含
25 層　暗黄褐色土　暗褐色土と薄ったロームが混合　ローム小粒少含

P20
41 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土が混合
42 層　暗褐色土　ローム微粒多含
43 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の黒色土が混合　ローム微粒少含
44 層　暗褐色土　ローム小粒、ローム微粒少含
45 層　暗褐色土　暗褐色土と少量の薄ったローム混合　ローム小粒少含

P21
1 層　暗褐色土　暗褐色土が主体
2 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム粒が粗く混合
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが混合

図151　B134a,b（2）

B131

検出地区　L5-18-2・4g、19-1・2gにて検出した。

遺　構　2×2間の掘立柱建物跡である。長軸3.74m×短軸3.74m、長軸方位はN-42°-Wを示す。柱痕はP1・P5で検出された。掘込みは極めて浅く、0.07～0.22mである。覆土は暗褐色土などを主体としている。

遺　物　土師器・須恵器片などが出土する。縄文早期・条痕文片が主体とを占める。

所　見　柱穴規模は小さな建物跡である。P2が外側に突出するが、本建物跡と捉えた。

B132

検出地区　L5-27-4g、28-1・2gにて検出した。

遺　構　2×2間の掘立柱建物跡であるが、南東側柱列のみ中間柱が2基となっている。長軸4.24m×短軸3.92m、方位はN-33°-Eを示す。柱痕はP1とP5bを除いて検出した。掘込みは浅く0.28～0.56mであり、P4・P5a・P6・P7・P10は浅かった。覆土は暗褐色土・暗黄褐色土を主体としたものである。

遺　物　土師器・須恵器片などが出土する。縄文早期・条痕文片が主体とを占める。

所　見　基本的には2間四方であるが、南東側柱列のみ3間となる変則的な掘立柱建物跡である。上谷遺跡にはⅡ地区を中心として多い柱穴配置例となっているが、住居としての建物跡なのか、倉庫跡なのか判断に迷う遺構である。

B133

検出地区　L5-37-2・4g、38-1・2gにて検出した。

遺　構　2×3間の掘立柱建物跡である。長軸6.01×短軸4.16m、長軸方位はN-19°-Wを示し、南側に対して北側が開く建物跡である。柱痕はP5・P7・P10を除き、検出された。掘込みは0.27～0.37mと全体的に浅く、柱穴規模が大きいP1～3も深さに変化はなかった。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体としたものである。

遺　物　土師器・須恵器片などが出土する。縄文早期・条痕文片が主体とを占める。

所　見　長軸方向が長く、細身の建物跡であり、建物跡規模に対して柱穴が浅いものとなっていた。

B134a,b

検出地区　L5-18-2～4gにて検出した。

遺　構　2軒の重複した掘立柱建物跡である。また、A243と重複する。

B134aは2×2間の掘立柱建物跡である。長軸4.16m×短軸3.84m、長軸方位はN-46°-Wを示す。本建物跡に属する柱穴は、P2・12・13・20・7・8・9の7基と捉えた。掘込みは0.33～0.62mと深さが一様ではなかった。A243と重複する柱穴の掘込みが深い傾向を示している。覆土はロームを包含する充填土であった。

B134bは2×3間の掘立柱建物跡である。長軸3.84m×短軸3.84m、方位はN-44°-Wを示す。本建物跡に属する柱穴は、P1・10・11・15・5・6・4・3・19・20の10基と捉えたが、P15・19ははずれるかも知れない。掘込みの深さは0.28～0.60mと柱穴による差は大きい。やはりB134aと同様にA243との重複部に配された柱穴が、掘込みの深い傾向を示していた。覆土はロームを包含する充填度である。

遺　物　土師器・須恵器の小片が出土するが、掲示できるものはなかった。

所　見　2棟ともA243と重複し、特に住居跡との重複部で更に柱穴が切合っており、柱穴の配置が不明瞭となる掘立柱建物跡である。それぞれ北東側柱の中間柱穴が判然としなかったが、P3をB134aに属するものと柱間距離より判断したが、両者兼用したかも知れない。

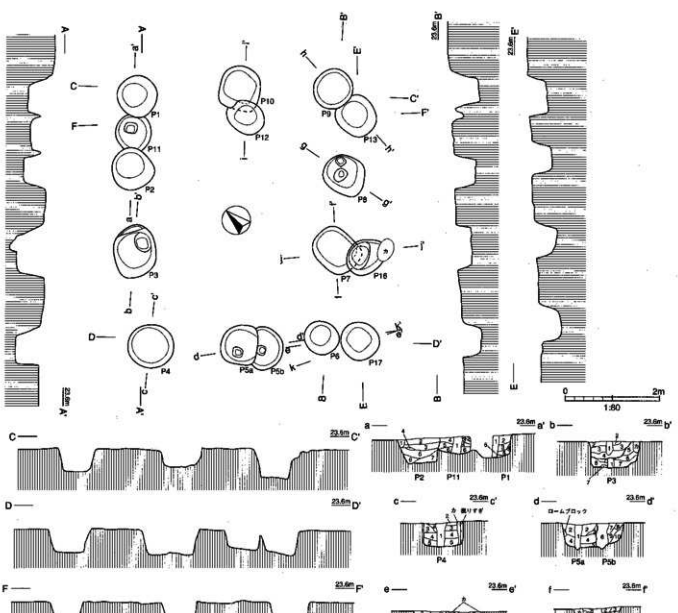
また、竪穴住居跡を含めた先後関係は、A243→B134a→B134bと覆土の重複から判断した。P19土師器やはり覆土から、B134bより古いものと捉えられた。

表51　B134a,b遺物観察表　(単位mm)

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(120)×－×(34)　ロクロ成形 外面　体部下端－回転ヘラケズリ	淡褐 良	比較的 緻密	口縁片	
2	土師器 坏	(140)×－×(40)　ロクロ成形	淡褐 良	雲母微細 粒	口縁片	
3	土師器 坏	(132)×－×(28)　ロクロ成形	淡褐 良	雲母 赤色スコ リア微細 粒　緻密	口縁片	
4	土師器 坏	－×－×－　ロクロ成形 外面　底部－回転ヘラケズリ	淡褐 良	雲母微細 粒 緻密	底部片	

B135a・b

検出地区　L5-27-1～4gにて検出した。



P1
1 層　黒色土　　ローム粒を少量含
2 層　暗褐色土　　ロームが微量に混合　ローム粒多含
3 層　黒褐色土　　ロームが混合ローム粒を多量に含
4 層　黒褐色土　　ローム粒微含
5 層　暗褐色土　　ロームが少量混合　ローム粒微含
6 層　暗黄褐色土　ロームと黒色土が混合　ローム粒を多含

P2
1 層　黒色土　　ロームが少量混合　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　　ロームが少量混合　ローム粒微含
　　径10mm大のロームブロックを少量含
3 層　黒色土　　ロームが少量混合　ローム粒を多含
　　径10mm大のロームブロックを少量含
4 層　黄褐色土　　ロームを主体に黒色土を少量混合
5 層　黒色土　　ロームが少量混入　ローム粒多含
6 層　黒褐色土　　ロームと黒色土が混合　ローム粒を多含
　　径10mm大のロームブロックを微量に含
7 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を多含

P3
1 層　黒色土　　ローム粒微含
2 層　黒色土　　ローム粒を少含　径10mm大のロームブロックを微含
3 層　黒色土　　ローム粒少含　径10mm大のロームブロックを少含
4 層　黒褐色　　黒色土主体とした土　ローム粒を少量含　ローム粒を多量に含
5 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を多含
　　径10mm大のロームブロックを微粒
6 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒少含
　　径10mm大のロームブロックを少量含
7 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を微粒含
　　径10～30mm大のロームブロックを多量含
8 層　黒褐色土　黒色土主体に少量混合　ローム粒を微粒含

図152　B135a,b

P4
1 層　黒色土　ロームの微粒が混合　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　黒色土にロームが少量混合　ローム粒微含
径10mm大のロームブロックを微量含
3 層　黒褐色土　ロームが少量混合　ローム粒を少含
径10mm大のロームブロックを微含
4 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を多含
径10mm～20mm大のロームブロック少含
5 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を少含
径10mm～20mm大のロームブロックを少含

P5
1 層　黒色土　ローム粒を微含
2 層　暗褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　黒色土主体にロームが少量混入　ローム粒を微含
4 層　黒褐色土　黒色土主体にロームが少量混入　ローム粒を微含
径10mm～20mm大のロームブロック少含
5 層　黒褐色土　黒色土主体にロームが少量混入　ローム粒少含
6 層　黒色土　黒色土主体にロームが微量混入　ローム粒微量
7 層　黒褐色土　黒色土主体にロームが少量混入　ローム粒を少含
8 層　黒褐色土　ロームが少量混入
9 層　暗褐色土　黒色土とロームが粗く混合
10 層　黄褐色土　ロームを主体に黒色土が微量に混合

P6
1 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームが微量に混合　微量に含
2 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を微含
3 層　黒褐色土　ロームと黒色土が混合　ローム粒を少含
4 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームが少量混入

P7
1 層　黒褐色土　黒色土とロームが微量に混入　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　黒色土とロームが少量混入　ローム粒を少量含
3 層　暗褐色土　ロームと黒色土が混合　ローム粒を多量に含
4 層　ローム　ソフトロームのブロック
5 層　暗褐色土　ロームと少量の黒色土を混合　ローム粒少含
径10mm大のロームブロック微含
6 層　暗黄褐色土　ロームと少量の黒色土が混合　焼土粒を微含

P8
1 層　黒色土　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ロームが少量混合　ローム粒を微含
3 層　黄褐色土　ソフトロームのブロック
4 層　黒褐色土　黒色土主体としロームが少量混入　ローム粒少量含
径10mm大のロームブロックも少量含
5 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合
6 層　黒色土　黒色土を主体としロームが少量混合　ローム粒微含
径10mm大のロームブロックを少含
7 層　黒色土　ロームが少量混合　ローム粒を多量に含
径10mm～30mm大のロームブロック少量含

P9
1 層　黒褐色土　黒色土と少量のロームが混合　ローム粒、焼土粒微含
2 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のロームが混合　ローム粒少含
径10mm大のロームブロックを多含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒多含
径10mm大のロームブロックも多量含
4 層　黒褐色土　黒色土と少量のロームが混合　ローム粒微含
5 層　黒色土　ローム粒少含
6 層　黒褐色土　黒色土を主体に少量のロームが混合　ローム粒微含　焼土粒少含

P10
1 層　黒褐色土　黒色土とロームが微量に混入　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　黒色土主体にロームが少量混入　ローム粒含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームが混入　ローム粒微含
4 層　黒色土　ロームが少量混合　ローム粒を少含
径10mm大のロームブロック微含
5 層　黒褐色土　ロームが少量混合　ローム粒、焼土粒も少含

P11
1 層　黒色土　ローム粒を微含
2 層　黒褐色土　ローム少量混入　ローム粒微含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒微含
4 層　黒褐色土　黒色土を主体としロームが少量混合　ローム粒微含
5 層　暗褐色土　ロームが少量混入
6 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームが少量混合　ローム粒少含

P12
1 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームが少量混合
2 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームが少量混合
ローム粒、焼土粒を少含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒、焼土粒を少含
4 層　暗褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒微含
径10mm大のロームブロックも微含
5 層　黄褐色土　ソフトロームブロック
6 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒微含
7 層　暗褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒を少含、
焼土粒を微含

P13
1 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームの微粒が混合
ローム粒も微含
2 層　黒褐色土　黒色土を主体としロームが少量混合　ローム粒少含
焼土粒を微粒含
3 層　暗褐色土　ロームと黒色土が混合　ローム粒を微含
径10mm大のロームブロックを微含
4 層　黒褐色土　黒色土を主体にロームが少量混合　ローム粒を少含
5 層　暗褐色土　ロームと黒色土が混合　ローム粒を多含
径10mm大のロームブロック微含

P16
2 層　暗褐色土　ロームが混合　焼土粒を微含
3 層　暗褐色土　基本的に2層と同じ　色調的に第2層より明るい
4 層　暗褐色土　暗褐色土と黒褐色土が混合　ローム粒を多量に含

P17
1 層　黒褐色土　ローム微量混入
2 層　暗褐色土　ロームを主体に黒褐色が少量混合
3 層　黒色土　黒色土主体　ロームが微量に混合
4 層　黒褐色土　ロームが少量混入

図153　B135a,b（2）

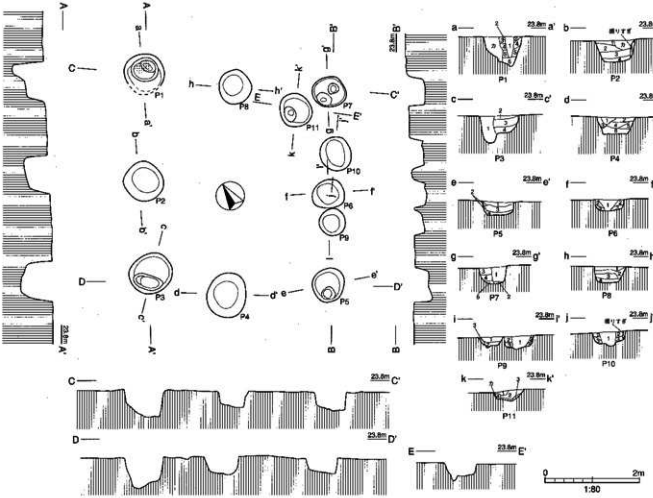
遺　構　2棟の重複した掘立柱建物跡である。

B135aは2×2間の掘立柱建物跡である。長軸4.88m×短軸(4.24)m、長軸方位はN-42°-Eを示す。本建物跡に配される柱穴はP11～P13・P16・P17・P5b・P3・P4と捉えた。P3・P4はB135aに再利用されていた。柱痕はP11～P13・P17・P5bに検出された。掘込みは0.38～0.60mであるが、全体的に平均化したものである。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体としていた。

B135bは2×3間の掘立柱建物跡である。、長軸5.52m×短軸4.16m、長軸方位はN-47°-Eを示す。本建物跡に配される柱穴はP1～P10であり、P5はP5aが相当する。柱痕は全ての柱穴で検出した。掘込みは0.29～0.58mであるが、平均化していた。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体としていた。

遺　物　「西」の墨書土器片が多く出土している。埋置か流込みかは捉えられなかった。

所　見　重複する柱穴からは先後関係を殆ど捉えられず、P2・P11の覆土からかろうじてB135a→B135bと判断した。



P1
1 層　灰褐色土　　白色粘土と黒褐色土混合
2 層　黒褐色土　　黒色土主体　白色粘土　ローム微量含
3 層　暗褐色土　　ロームと黒褐色土混合　径10～20mm大のロームブロック少含
4 層　黒褐色土　　黒褐色土主体　ローム少混合
5 層　黒褐色土　　黒褐色土主体　ローム粒微含
6 層　黒褐色土　　黒褐色土主体　ローム少量含

P2
1 層　黒色土　　ローム粒微含
2 層　黒色土　　ローム少量混　径5～30mm大のロームブロック多含
3 層　黒褐色土　ローム少量混
4 層　暗褐色土　黒褐色土とローム混合

P3
1 層　黒褐色土　径5mm大のロームブロック少含
2 層　黒褐色土　ローム少含
3 層　黒褐色土　ローム少含　焼土粒微含
4 層　黒褐色土　ローム少含

P4
1 層　黒色土　　ローム少含
2 層　黒褐色土　　ローム少含
3 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合
4 層　黒褐色土　黒色土とローム混合　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　　ロームと黒褐色土混合　径5mm大のロームブロック少含
6 層　暗褐色土　　ロームと黒褐色土混合　ローム粒多含

P5
1 層　黒褐色土　黒色土主体　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　黒褐色土とローム混合
3 層　黒色土　　ローム粒多含
4 層　黒褐色土　ローム粒多含

P6
1 層　黒色土　　ローム微含
2 層　黒褐色土　ローム少含
3 層　暗褐色土　黒色土とローム混合　ローム粒少含

P7
1 層　黒色土　　ローム混入　ローム粒少含
2 層　黄褐色土　ハードローム
3 層　黒色土　　ローム粒少含
4 層　黒色土　　ローム微含　ローム粒少含
5 層　黒褐色土　ロームが粗く混入

P8
1 層　黒色土　　ローム粒微含
2 層　黒褐色土　ローム少含
3 層　黒色土　　ローム微含　径5mm大のロームブロック少含
4 層　黒色土　　ローム微含　径5mm大のロームブロック少含

P9
1 層　黒褐色土　黒色土とロームが粗く混合
2 層　暗褐色土　暗褐色土主体の土
3 層　暗黄褐色土　ローム主体の土に黒色土が少混

P10
1 層　黒褐色土　ローム少含　ローム粒、焼土粒微含
2 層　暗褐色土　ロームと黒褐色土混合
3 層　暗褐色土　ロームと黒褐色土混合　焼土粒微含

P11
1 層　黒褐色土　ローム少含　ローム微含
2 層　黒褐色土　ローム少含　ローム多含
3 層　暗褐色土　ロームと黒褐色土混合
4 層　暗黄褐色土　ローム主体　黒褐色土少含

図154　B136

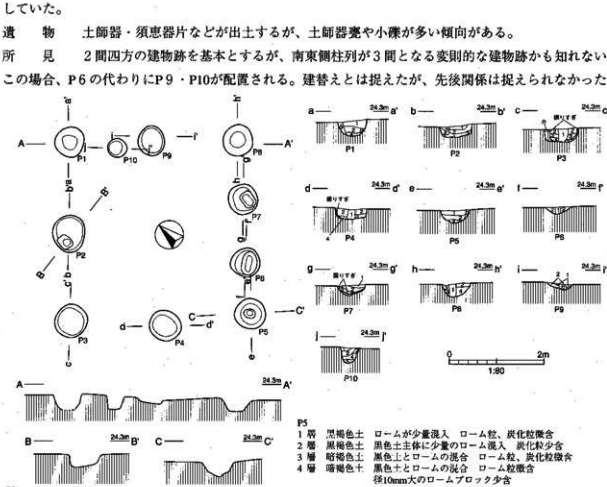
B136

検出地区　L5-26-4g・27-3g・36-2g・37-1gにわたって検出した。

遺　構　2×2間の掘立柱建物跡と捉えた。長軸4.40m×短軸3.80m、長軸方位はN-34°-Eを示している。柱痕はP1・P3・P6・P7・P10にて検出した。掘込みはP1～P3が深く0.50～0.68m、他は0.18～0.36mであった。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体としていたが、P1の柱痕内に白色粘土が混合していた。

遺　物　土師器・須恵器片などが出土するが、土師器甕や小礫が多い傾向がある。

所　見　2間四方の建物跡を基本とするが、南東側柱列が3間となる変則的な建物跡かも知れない。この場合、P6の代わりにP9・P10が配置される。建替えとは捉えたが、先後関係は捉えられなかった。



P1
1 層　黒褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒少含
2 層　黒色土　ローム少量混入　ローム粒少含
3 層　黒色土　ローム少量混入　ローム粒少含
4 層　暗褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒少含
径10mm大のロームブロック微含
5 層　暗黄褐色土　ローム主体に少量の黒色土混入　ローム粒少含

P2
1 層　黒褐色土　黒色土と少量のロームの混合　焼土粒微含
2 層　黒褐色土　黒色土と少量のロームの混合　ローム粒、
径10～20mm大のロームブロック微含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒微含
径10～20mm大のロームブロック少含
4 層　褐色土　ロームの土体に少量の暗褐色土の混入
ローム粒微含

P3
1 層　黒色土　ロームが微妙に混合　柱痕
2 層　黒色土　ローム粒少含係
3 層　暗色土　ロームが微妙に混合　ローム粒微含
径10mm大のロームブロック散点
4 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のローム混入　ローム粒微含

P4
1 層　黒色土　ローム粒が微妙に混合
2 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のローム混入　ローム粒少含
3 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のローム混入　ローム粒微含
径10mm大のロームブロック散点含
4 層　暗黄褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒微含

P5
1 層　黒褐色土　ロームが少量混入　ローム粒、炭化粒微含
2 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のローム混入　炭化粒少含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒、炭化粒微含
4 層　暗褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒微含
径10mm大のロームブロック少含

P6
1 層　黒色土　ローム粒、炭化粒微含
2 層　暗褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒微含

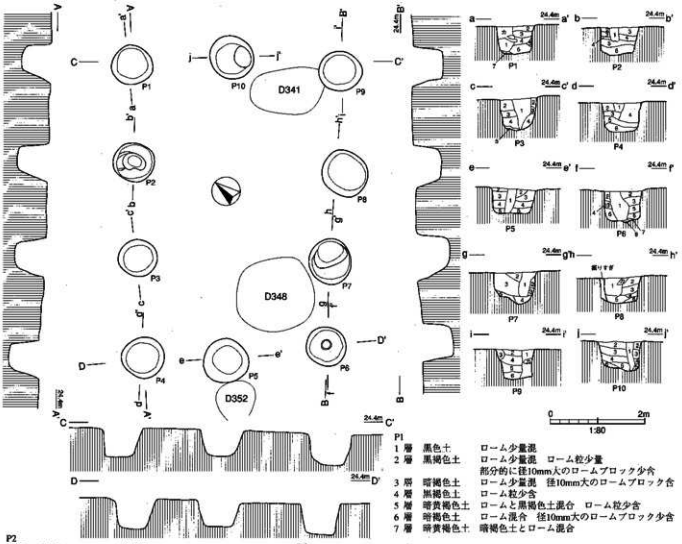
P7
1 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のロームの混入　ローム粒少含
2 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のロームの混入　ローム粒微含
焼土粒微含
3 層　暗褐色土　黒色土とロームの混合　ローム粒少含　焼土粒微含

P8
1 層　黒色土　ロームが微量に混入
2 層　暗黄褐色土　ローム主体に少量の黒色土が混入
ローム粒多含　径10～20mm大のロームブロック少含
3 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のロームが混入　ローム粒少含
4 層　黒褐色土　黒色土主体に少量のロームの混入　ローム粒少含
径10～30mm大のロームブロック散点含

P9
1 層　黒褐色土　黒色土に少量のロームが混入　ローム粒少含
2 層　暗褐色土　ロームと黒色土の混合　焼土粒微含

P10
1 層　黒褐色土　黒色土主体の土に少量のロームが混入　ローム粒微含
2 層　黒色土　微量のロームが混入　ローム粒微含
3 層　黄褐色土　ローム主体に微量の黒色土が混入
4 層　黒色土　微量のロームが混入
5 層　黒色土　微量のロームが混入

図155　B137



P1
1 層　黒色土　　ローム少量混
2 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒少量
3 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒多量
　　部分的に径10mm大のローブロック少含
4 層　暗褐色土　ローム少量混　径10mm大のロームブロック含
4 層　黒褐色土　ローム粒少含
5 層　暗黄褐色土　ロームと黒褐色土混合　ローム粒少含
6 層　暗褐色土　ローム混合　径10mm大のロームブロック少含
7 層　暗黄褐色土　暗褐色土とローム混合

P2
1 層　黒色土　　ローム少量混
2 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒多量
3 層　暗褐色土　ローム少量混　径10～20mm大の
　　ロームブロック少量含
4 層　黒褐色土　黒色土主体　ローム粒多量
　　径10～20mm大のロームブロック多含
5 層　暗黄褐色土　黒色土主体　ロームブロック多量
　　径10～20mm大のロームブロック
6 層　黒褐色土　黒色土とロームが少量混
　　径10mm大のロームブロック少含

P3
1 層　暗褐色土　褐色土と少量のロームが混合　ローム粒多含
　　径10mm大のロームブロック少含
2 層　黒黄褐色土　ローム主体の土に黒色土少量
　　径10～30mm大のロームブロック多含
3 層　黒褐色土　ローム少量混　径10～30mm大の
　　ロームブロック多量含
4 層　暗黄褐色土　ロームと黒褐色土混合　ローム粒多量
　　径10～50mm大のロームブロック多含
5 層　黒褐色土　黒色土主体　ロームブロック多量
　　径10～20mm大のロームブロック

P4
1 層　黒色土　　ローム微量含
2 層　暗褐色土　ロームと黒色土混合　ローム粒多量
3 層　暗褐色土　黒色土とローム少量混　ローム粒多量含
　　径10mm大のロームブロック少含
4 層　黄褐色土　ローム主体　径10mm大のロームブロック微含
5 層　黒色土　　ローム少含　径10mm大のロームブロック少含
6 層　黒褐色土　黒色土とロームが混合　ローム粒多量
　　径10mm大のロームブロック少含

P5
1 層　黒色土　　黒色土とローム微量含
2 層　黒褐色土　ローム少含　径10mm大のロームブロック少含
3 層　黒褐色土　黒褐色土とローム混合　ローム粒多含
　　径10～20mm大のロームブロック少含
4 層　黒色土　　ローム少含　ローム粒多含　径10～30mm大のロームブロック少含
5 層　黒褐色土　ローム混合　径10mm大のロームブロック少含　ローム粒微量

P6
1 層　黒褐色土　ローム少含　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック少含
2 層　黒色土　　ローム少含　ローム粒少量
3 層　黒色土　　ローム少含　ローム粒多含　径10mm大のロームブロック少含
4 層　黄褐色土　ロームブロック
5 層　暗褐色土　黒色土褐色土とローム混合　ローム粒少含
6 層　黒色土　　ローム少量混　ローム粒少含
7 層　暗黄褐色土　ロームと黒色土褐色土混合
8 層　黒色土　　ローム粒少含

P7
1 層　黒褐色土　ローム少量含　ローム粒多量
2 層　黒褐色土　ローム少含　ローム粒少量　径10～20mm大のロームブロック少含
3 層　黒褐色土　ローム少含　ローム粒多含　径10～30mm大のロームブロック多含
4 層　黒褐色土　ローム混合　径10～20mm大のロームブロック少含
5 層　暗褐色土　ロームと黒色土褐色土混合　径10～30mm大のロームブロック多量

P8
1 層　黒色土　　ローム少量含　ローム粒多量　径10mm大のロームブロック少含
2 層　黒褐色土　ローム混合　ローム粒少含　焼土粒微含
3 層　黒褐色土　ローム微含　ローム粒少含
4 層　暗褐色土　ロームと黒色土褐色土混合　径10mm大のロームブロック少含
5 層　暗褐色土　黒色土ローム混合　径10～20mm大のロームブロック少含　ローム粒多含
6 層　黒色土　　ローム、ローム粒微含

P9
1 層　黒色土　　ローム少量含　炭化材微含
2 層　黒褐色土　ローム混合　ローム粒少含　径10mm大のロームブロック少含
3 層　黒褐色土　ローム混合　ローム粒多含
4 層　黒褐色土　ローム少量混合　と粒量　径10mm大のロームブロック少含
5 層　黒色土　　ローム少量混　ローム粒多量　径10mm大のロームブロック少量
6 層　黒色土　　ローム粒少含　径10mm大のロームブロック少量

P10
1 層　黒色土　　ローム微量　炭化材微含
2 層　黒色土　　ローム微量　ローム粒微含
3 層　黒褐色土　ローム少量含　ローム粒微含
4 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒多含
5 層　黒色土　　ローム少量混　ローム粒少量
6 層　暗褐色土　ローム混合　径10mm大のロームブロック微含

図156　B138

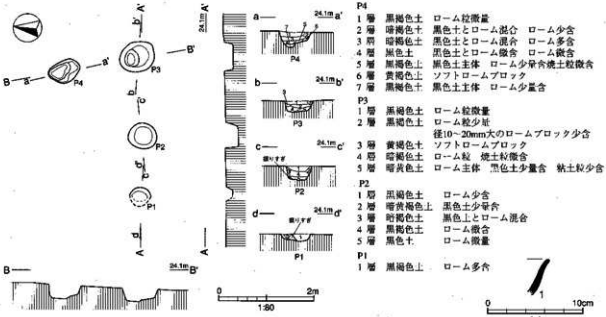


図157 B139

B137

検出地区　L5-35-4g、36-1・3gにて検出した。

遺　構　基本は２×３間の掘立柱建物跡であるが、南東側柱列は中間柱穴が２基となり、変則的な建物跡である。長軸3.96m×短軸3.36m、長軸方位はN-42°-Eを示す。柱痕はP３・P４・P６・P８で検出した。全体的に掘込みは極めて浅く、0.08～0.33mと平均化している。覆土は、黒褐色土・黒色土を主体としていた。

遺　物　土師器・須恵器片が主体を占めるが、出土遺物は少ない。

所　見　南東側柱列のみ３間となる、変則的な掘立柱建物跡である。上谷遺跡の特徴的な建物跡であるが、本建物跡の場合、倉庫跡とするには柱穴の掘込みの深さがなく、倉庫としたか住居としたのか判断に迷う遺構である。

B138

検出地区　L5-35-1～4gにて検出した。

遺　構　２×３間の掘立柱建物跡である。長軸6.08m×短軸4.16m、長軸方位はN-49°-Eを示す。柱穴は全体的に掘込みは0.49～0.68mと深い。柱痕は全ての柱穴で検出されたが、P２・P４・P７・P８は柱痕が覆土中で留まっており、柱穴の深さが柱材の埋込みの深さではなかった。覆土は、黒褐色土・暗褐色土・暗褐色土・黒色土を主体としていた。

遺　物　土師器・須恵器片を主体としている。

所　見　各柱穴の規模が大きく、掘込みも深い建物跡である。やや南西側柱列に比し、北東側柱列が開く建物跡である。

B139

検出地区　L5-35-1～4gにて検出した。

遺　構　４基の柱穴のみを検出した、遺構規模が捉えられない建物跡である。柱痕は検出できなかったが、P３の覆土の乱雑さから柱材は引抜枯れたものと捉えた。柱穴の掘込みはむ全体的に浅く、0.18～0.35mである。覆土は黒色土・黒褐色土を主体としていた。

遺　物　須恵器・坏片１片のみ出土であった。

所　見　検出柱穴数が少なく、遺構規模が捉えられない。南東側柱列は、P１の柱穴規模や掘込みが浅いことから中間柱と想定でき、２間以上の建物跡と考えられるが、判断できなかった。

上谷遺跡Ⅴ地区掘立柱建物跡一覧

遺構番号	検出区	間数 長軸	間数 短軸	主軸方位	柱穴規模（長軸×短軸×深さ）	備考
B125	L5-35-1～4	2×3	5.38	N- 63°-W	4.08	P1 0.92×0.73×0.44　P2 0.67×0.53×0.28 P3 0.76×0.67×0.38　P4 0.82×0.66×0.36 P5 0.97×0.78×0.56　P6 0.80×0.64×0.56	柱痕検出されず
B126	L5-35-3 44-2 45-1 ～4	2×3	6.56	N- 39°-W	4.20	P1 0.84×0.73×0.64　P2 0.88×0.82×0.60 P3 0.90×0.89×0.72　P4 1.10×0.91×0.72 P5 0.92×0.88×0.68　P6 1.00×0.92×0.80 P7 0.88×0.86×0.72　P8 0.84×0.76×0.68 P9 0.88×0.86×0.52～0.80　P10 0.86×0.86×0.56	全柱穴にて柱痕を確認
B127	L5-46-2・4 47-1・2	2×3	4.76	N -52°-W	3.28	P1 1.01×0.91×0.65　P2 0.95×0.74×0.46 P3 0.93×0.84×0.45　P4 0.76×0.76×0.48 P5 0.88×0.88×0.46　P6 0.90×0.90×0.51 P7 0.94×0.90×0.54　P8 0.86×0.76×0.62 P9 0.92×0.81×0.56　P10 0.95×0.82×0.54	P2・8にて柱痕未検出
B128a	L5- 49-3 58-2 59-1 ～3	2×2	4.20	N- 38°-E	4.12	P1 0.86×0.75×0.56　P2 0.96×0.81×0.42 P3 0.77×0.70×0.44　P4a 0.67×(0.66)×0.48 P5 0.72×0.72×0.61　P6 0.96×0.74×0.68 P7 1.01×0.88×0.66　P8 0.92×0.70×0.44	全柱穴にて柱痕を確認
		先後関係・B128b ・B128a				
B128b	L5- 49-3 58-2 59-1 ～3	2×2	5.36	N- 83°-E	5.16	P16 0.76×0.70×0.46　P17 0.81×0.80×0.58 P18 0.91×0.82×0.61　P19 0.83×0.79×0..60 P20 082×0.80×0.51　P2 (B128aと兼用) P3 (B128aと兼用)　P4b (0.34)×0.72×0.41	柱痕検出されず
B129	L5-10-3 19-2 20-1 ～4	2×3	6.78	N- 66°-W	4.00	P1 0.67×0.62×0.66　P2 0.63×0.61×0.41 P3 0.72×0.63×0.51　P4 0.72×0.65×0.40 P5 0.80×0.63×0.40　P6 0.65×0.65×0.68 P7 0.68×0.61×0.36　P8 0.72×0.65×0.34 P9 0.64×0.61×0.32　P1 0.68×0.59×0.44	全柱穴で柱痕を確認
B130	L5- 10-3 19-2 20-1 ～4	2×1	4.32	N- 67°-W	3.98	P1 0.61×0.54×0.11　P2 0.56×0.39×0.22 P3 (0.56)×0.53×0.18　P4 0.43×0.39×0.16 P5 0.41×0.39×0.27　P6 0.47×0.39×0.21	P1・2・6にて柱痕を確認
B131	L5-18-2・4 19-1・2	2×2	3.74	N- 42°-W	3.74	P1 0.55×0.47×0.16　P2 0.22×0.16×0.07 P3 0.38×0.32×0.10　P4 0.22×0.20×0.06 P5 0.51×0.47×0.22　P6 0.55×0.40×0.21 P7 0.46×0.36×0.16　P8 0.46×0.46×0.20	P1・5にて柱痕を確認
		柱間距離・4.52×4.18				
B132	L5- 27-4 28-1 ～2	2×2	4.24	N- 33°-E	3.92	P1 0.95×0.72×0.54　P2 0.80×0.76×0.54 P3 0.96×0.78×0.54　P4 0.96×0.78×0.54 P5a (0.76)×0.82×0.46　P5b (1.00)×0.88×0.36 P6 0.64×0.60×0.40　P7 0.66×0.58×0.28 P8 0.81×0.76×0.56　P9 0.71×0.64×0.50	P1を除いて柱痕検出 覆土は比較的突固められていた
B133	L5-37-2・4 38-1・2	2×3	6.01	N- 19°-W	4.16	P1 0.86×0.74×0.28　P2 (0.86)×0.86×0.27 P3 0.84×0.72×0.36　P4 0.64×0.61×0.29 P5 0.68×(0.60)×0.36　P6 0.58×0.56×0.32 P7 0.60×0.52×0.27　P8 0.76×0.58×0.28 P9 0.72×(0.60)×0.34　P10 0.74×0.72×0.37	P1～4・6・9にて 柱痕を確認
B134a	L5-18-2～4	2×2	4.16	N- 46°-W	3.84	P2 0.96×0.84×0.61　P12 0.84×－×(0.33) P13 0.88×0.74×0.55　P20 0.64×0.62×0.60 P7 0.94×0.94×0.56　P8 0.88×0.84×0.38 P9 0.87×0.84×0.62　P3 (兼用)	P8・9・13にて柱痕を確認

上谷遺跡V地区掘立柱建物跡一覧

遺構番号	検出区	間数 長軸	間数 短軸	主軸方位	柱穴規模（長軸×短軸×深さ）	備考
B134b	L5-18-2～4	2×2	3.84	N- 44°-W	P1 0.82×0.68×0.38 P10 (0.48)×0.56×0.28 P11 (0.74)×0.76×0.47 P15 0.68×0.58×0.60 P6 0.98× －×0.58 P5 0.86×0.72×0.42 P4 0.96×0.86×0.46 P3 0.76×0.72×0.28 P19 1.30×0.48×0.54 P20 0.64×0.62×0.60	P3～6・11・19にて 柱痕を確認した P19・20は遺漏するか。また片側3間となるか？
B135a	L5-27-1～4	2×2	4.88	N -42°-E	P1 (0.88)×0.74×0.38 P3下 1.08×0.90×0.60 P4 （欠用） P5b 0.89× －×0.54 P17 0.80×0.76×0.44 P16 (0.88)×0.72×0.42 P13 (0.80)×0.78×0.56 P12 (0.82)×0.66×0.44	P4・12・13にて柱痕を確認
B135b	L5-27-1～4	2×3	5.52	N- 47°-E	P1 0.84×0.82×0.37 P2 0.88×0.84×0.52 P3a 0.88× －×0.36 P4 0.96×0.92×0.50 P5a 0.82×0.70×0.48 P6 0.72×0.64×0.36 P7 1.00×0.80×0.29 P8 0.92×0.80×0.42 P9 0.84×0.79×0.58 P10 0.90×0.84×0.36	P1～4・8・10にて 柱痕を確認
B136	L5-26-4 27-3 30-2 37-1	2×2	4.40	N- 34°-E	P1 (0.88)×0.80×0.68 P2 0.84×0.76×0.50 P3 0.88×0.82×0.66 P4 0.94×0.82×0.36 P5 0.58×0.68×0.36 P6 0.66×0.62×0.28 P9 0.56×0.54×0.18 P10 0.63×0.60×0.24	P1・3・7・9・10にて 柱痕を確認
B137	L5-35-4 36-1 3	2×3	3.96	N- 42°-E	P1 0.63×0.61×0.28 P2 0.69×0.68×0.26 P3 0.68×0.68×0.26 P4 0.68×0.62×0.22 P5 0.68×0.62×0.29 P6 0.64×0.59×0.16 P7 0.64×0.60×0.20 P8 0.66×0.62×0.28 P9 0.63×0.56×0.08 P10 0.38×0.38×0.33	P3・4・6・8にて 柱痕を確認P10F P10は柱穴配置上から遺漏
B138	L5-35-1～4	2×3	6.08	N- 49°-E	P1 0.82×0.82×0.65 P2 0.84×0.81×0.68 P3 0.80×0.78×0.63 P4 0.89×0.84×0.64 P5 0.91×0.89×0.59 P6 0.86×0.79×0.66 P7 0.98×0.84×0.66 P8 0.98×0.88×0.56 P9 0.84×0.84×0.64 P10 0.94×0.87×0.49	全柱穴にて柱痕を確認
B139	L5-35-1～4	(2)×－	－	－	P1 0.42× －×0.18 P2 0.59×0.52×0.35 P3 0.79×0.62×0.20 P4 0.66×0.44×0.29	柱痕は確認できなかった

第3項　土　坑

上谷遺跡Ⅴ地区においては、奈良・平安時代の土坑を28基検出した。Ⅴ地区の奈良・平安時代の土坑の遺構分布としては、Ⅴ地区に散在しており、特に集中する調査地点はなかった。また、掘立柱建物跡の柱穴ではあろうかと想定される柱穴のうち、淡土で検出したものも土坑と扱っているものもある。

土坑が設けられた目的も殆どが捉えられず、また、奈良・平安時代とした土坑のうち時代が動くものもあるかも知れない。

D287

検出地区　L5-51-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.95m×短軸0.92m×深さ0.16m、方位は形状から計測はしなかった。平面形は略円形である。ソフトロームを浅く掘込み、断面形は皿状の土坑である。坑底に、硬化面などは認められなかった。覆土は色調・包含物で捉え2層に分層し、自然堆積であった。

遺　物　掲示すべき遺物は出土しなかった。

所　見　覆土などから、奈良・平安時代の所産と捉えた。

D298

検出地区　L5-42-4g、52-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.62m×短軸1.51m×深さ0.15m、方位はN-43°-Eを示す。平面形は不整円形である。ソフトロームを掘凹めた、断面形は皿状の土抗である。坑底に硬化面などは認められなかった。遺構確認面において焼土を認めた。覆土は黒色土の自然堆積と捉えた。

遺　物　土師器・須恵器の各小片が若干出土している。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。焼土層は土坑の埋没過程における火の使用であり、本遺構とは直接的な関わりをもたない。しかし坑底との差があまりなく、時間的な経過は少ないと捉えている。

表53　D298遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(140)×(70)×37　ロクロ成形 外面　ナデ　底部ー回転糸切り 内面　ナデ	橙褐 良	長石 スコリア 細粒比 較的緻密	1/3	
2	須恵器 甕	ー×ー×ー 外面　格子目タタキ後ヘラケズリ 内面　ヘラナデ　当具痕	外黒褐 内茶褐 良　緊緻	雲母長石 赤色スコ リア細粒 概ね緻密	胴部片	

D317

検出地区　L5-58-2gにて検出した。

遺　構　長軸0.49m×短軸0.37m×深さ0.29m、方位はN-39°-Eを示す。平面形は略円形であり、小規模な土坑である。ソフトロームを略垂直に掘込み、一見、柱穴の様である。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺　物　土師器・坏の小片が出土したのみである。

所　見　遺物・覆土から奈良・平安時代の所産と捉えた。

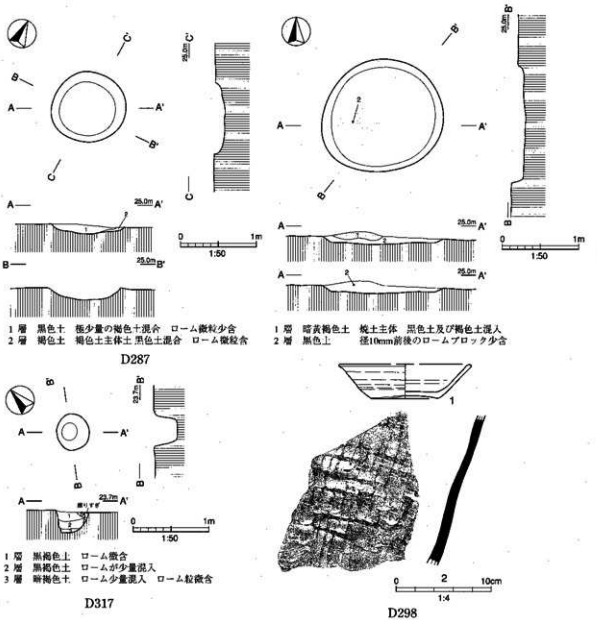


図158　D287・D298・D317

D318

検出地区　L5-48-4gにて検出した。

遺　構　長軸(1.12)m×短軸0.76m×深さ0.40m、方位はN-90°を示す。平面形は長楕円形である。ハードロームまで掘込み、坑底は凹凸を有しており、壁は略垂直に立上がっている。覆土は黒褐色土を主体として、ロームの多寡で主に分層したが、堆積の乱雑さから人為堆積と捉えた。

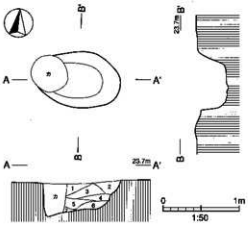
遺　物　須恵器・胴部小片が出土するのみであった。

所　見　覆土の色調などから奈良・平安時代の所産と捉えた。西壁側に攪乱が入込み覆土の状況が一部判然としないが、遺構廃絶後の人為堆積というより、柱穴の充填土が柱材の引抜きにより乱雑となった様な堆積状態である。

D321

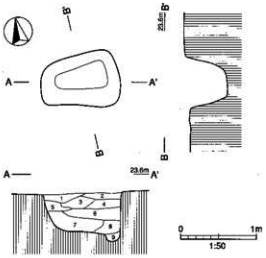
検出地区　L5-38-3gにて検出した。

遺　構　長軸1.03m×短軸0.69m×深さ0.52m、方位はN-90°を示す。平面形は台形状である。B133の柱穴群内に所在する土坑である。ハードロームまで深く掘込み、坑底は平坦であり、壁は略垂直に立



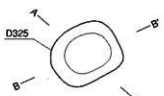
1 層　黒褐色土　ローム微粒含
2 層　暗褐色土　ロームと黒褐色土が根く混合
3 層　黒色土　ローム粒多含
4 層　黒褐色土　ローム粒多含
5 層　黒色土　ローム粒少含
6 層　黄褐色土　多量のロームブロックが集合した層
7 層　黒褐色土　ローム粒少含

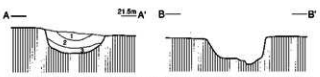
D318



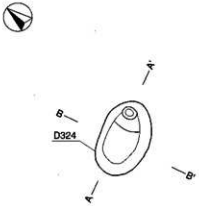
1 層　暗褐色土　暗褐色土と濁ったロームが混合　ローム大粒少含
2 層　黒色土　黒色土と少量の暗褐色土が混合
3 層　黒色土　濁ったロームが極少量含　暗褐色土も滲むように少量含
4 層　黒褐色土　黒色土と暗褐色土が混合　濁ったロームも部分的に含
5 層　暗黄色土　濁ったロームとロームブロックが粗く混合
6 層　暗褐色土　褐色土が極少量混合
7 層　暗褐色土　濁ったロームとロームブロックとロームが根く混合
大粒のローム多含
8 層　暗褐色土　少量の黒色土が混合　ローム大粒少含
9 層　暗黄褐色土　濁ったロームを主体の層

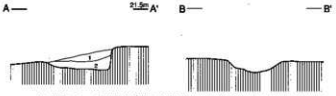
D321



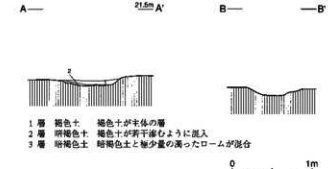


1 層　暗褐色土　暗褐色土が主体になる土　若干濁ったロームが滲むように混入
2 層　暗黄褐色土　濁ったロームが主体となる　若干暗褐色土が混合





1 層　褐色土　暗褐色土と褐色土がほぼ均一に混合
2 層　暗褐色土　暗褐色土が主体の層



1 層　褐色土　褐色土が主体の層
2 層　暗褐色土　褐色土が若干滲むように混入
3 層　暗褐色土　暗褐色土と極少量の濁ったロームが混合

図159　D318・D321・D323・D324・D325

上がっている。覆土はろーむを　多含する暗褐色土・黒褐色土・黒色土を主体とするが、覆土堆積の乱雑さから人為堆積と捉えた。

遺　　物　　縄文時代から奈良・平安時代までの遺物が出土している。土師器片が主体を占めるが、出土遺物は多くはない。

所　　見　　覆土の色調や出土遺物から、奈良・平安時代の所産と捉えた。B133に関連するものとも考えられたが、判然とせず、土坑として分離した。覆土は乱雑であり、一見、柱穴の覆土に近似するが、遺構規模の大きさから柱穴とは捉えなかった。

D323

検出地区　　L4-79-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.73m×短軸(0.34)m×深さ0.11m、方位はN-72°-Wを示す。平面形は楕円形である。ソフトロームを掘凹めただけの土坑である。坑底はやや凹凸を有し、壁はやや斜めに立上がっている。覆土は暗褐色土を主体とし、自然堆積と捉えた。

遺　　物　　出土遺物は無かった。

所　　見　　覆土より奈良・平安時代の所産としたが、判然としない遺構でもある。D324・D325と近接し、3基が直線的配置された土坑である。D324と遺構規模は異なるが、掘込みや覆土が近似してもいる。

D324

検出地区　　L4-79-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.01m×短軸0.66m×深さ0.25m、方位はN-72°-Wを示す。平面形は楕円形である。ソフトロームを掘込んだ土坑であるが、斜面部に位置し西側の壁は殆ど検出されなかった。坑底はやや丸みや凹凸を有する。東壁は垂直に、南・北壁は緩く立上がっていた。覆土は暗褐色土を主体として、自然堆積と捉えた。

遺　　物　　土師器の小片が、稀に出土するのみである。

所　　見　　覆土より奈良・平安時代の所産としたが、判然としない遺構でもある。西側にD323、東北側にD325と近接している。D323と遺構規模は異なるが、掘込みや覆土が近似してもいる。

D325

検出地区　　L4-89-1・2gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.89m×短軸0.74m×深さ0.27m、方位はN-68°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。ソフトロームを垂直に近く掘込み、坑底は全体として平坦である。覆土は暗褐色土を主体とし、自然堆積である。

遺　　物　　土師器の小片が出土するが、稀である。

所　　見　　覆土などより奈良・平安時代の所産と捉えた。D324が南西側に隣接し、覆土も維持するが、坑底の状態が異なり、遺構の性格を異にするかもしれない。

D326

検出地区　　L4-88-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.77m×短軸0.74m×深さ0.52m、方位はN-5°-Eを示す。平面形は略円形である。ハードロームまで柱穴状に掘込んだ土坑である。覆土は捉えられなかった。

遺　　物　　土師器の小片が稀に出土している。

所　　見　　出土遺物や覆土から奈良・平安時代の所産と捉えた。覆土が捉えられなかったため、判然としないが、単独の掘立柱の可能性がある遺構である。D327と隣接している。

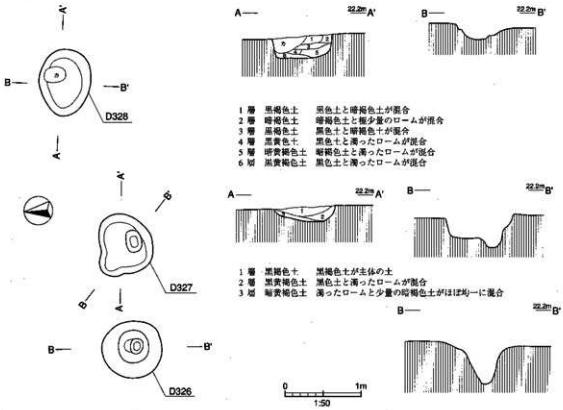


図160　D326・D327・D328

D327

検出地区　L4-88-2gにて検出した。

遺　構　長軸0.81m×短軸0.62m×深さ0.26m、方位はN-64°-Eを示す。平面形は不整楕円形となっている。ソフトロームを垂直に近い状態で掘込み、やや丸みを帯びた坑底である。東壁中央に更に小ピットを掘込んでいた。覆土は基調により3層に分そうし、自然堆積と捉えた。

遺　物　縄文中期・加曽利Eと土師器の小片が出土したが、稀である。

所　見　D326を西側に、D328を東側にそれぞれ隣接する土坑である。出土遺物や覆土から奈良・平安時代と捉えたが、用途は不明である。坑底の壁際に掘込まれた小ピットを含めて考えると、柱穴と捉えるかも知れない。

D328

検出地区　L4-88-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.86m×短軸0.67m×深さ0.21m、方位はN-82°-Wを示す。平面形は卵形となっている。ソフトロームを斜めに掘込み、丸みを有した坑底となっている。覆土は黒色土を中心にロームを包含した人為堆積である。

遺　物　土師器の小片が、稀に出土する。

所　見　覆土堆積の乱雑さから人為堆積と捉えたが、柱材を引抜いた様な堆積状態である。D326・D327とともに柱穴と類似する点があり、断面形に異なりを示すが、同一の掘立柱建物跡の柱穴も否定できない遺構である。

D329

検出地区　L4-88-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.02m×短軸0.96m×深さ0.56m、方位はN-65°-Eを示す。平面形は楕円形である。ソフトロームを掘込み、坑底の東西の各壁際に更に小ピットを2基掘込んでいる。このため坑底に凹凸を

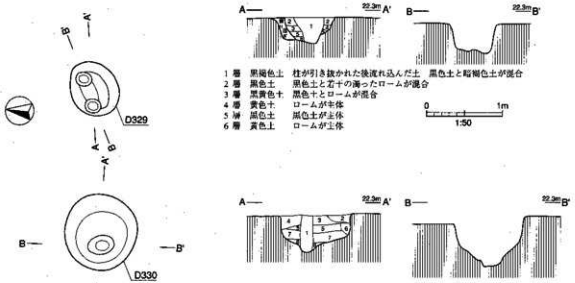


図161　D329・D330

生じている。覆土には柱痕を検出し、掘立柱として捉えられた。

遺　　物　　土師器の小片が、稀に出土する。

所　　見　　出土遺物や覆土から奈良・平安時代の所産と捉えた。柱痕覆土の上部が大きく開くことから、柱材は脇を掘込んだ後の引抜きと判断した。

D330

検出地区　　L4-88-1gにて検出した。

遺　　構　　長軸0.72m×短軸0.62m×深さ0.41m、方位はN-64°-Eを示す。平面形は略円形である。坑底中央に更に小ピットが掘込まれ、覆土から柱材が置かれたピットと考えられた。坑底は壁からやや丸みをもって下るが、壁の立上がりは略垂直で壁の崩落はみられなかった。覆土は暗褐色土・褐色土を主体とした人為堆積で、充填土である。

遺　　物　　土師器の小片が、稀に出土する。

所　　見　　遺物や覆土から奈良・平安時代の所産と捉えた。柱痕と覆土の整然とした堆積から、柱材は立腐れと判断した。隣接するD329とともに掘立柱建物跡の柱穴と想定したが、同一の建物跡の柱穴かは捉えられなかった。

D333

検出地区　　L4-99-4g、L5-9-2gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.52m×短軸0.95m×深さ0.49m、方位はN-1°-Wを示す。平面形は小判形である。ハードロームを掘込んだやや凹凸のある坑底であり、壁の立上がりは垂直に近くなっている。覆土はロームブロックを多含した埋土であり、人為的投入土によって埋没している。

遺　　物　　縄文早期・撚糸文や土師器の各小片が、稀に出土している。

所　　見　　ロームブロックを多含し、掘込んだ直後に埋戻した様な覆土である。用途は不明である。周辺の遺構状況から奈良・平安時代の所産と捉えたが、時代の移動があるかも知れない。

D335

検出地区　　L5-28-4gにて検出した。

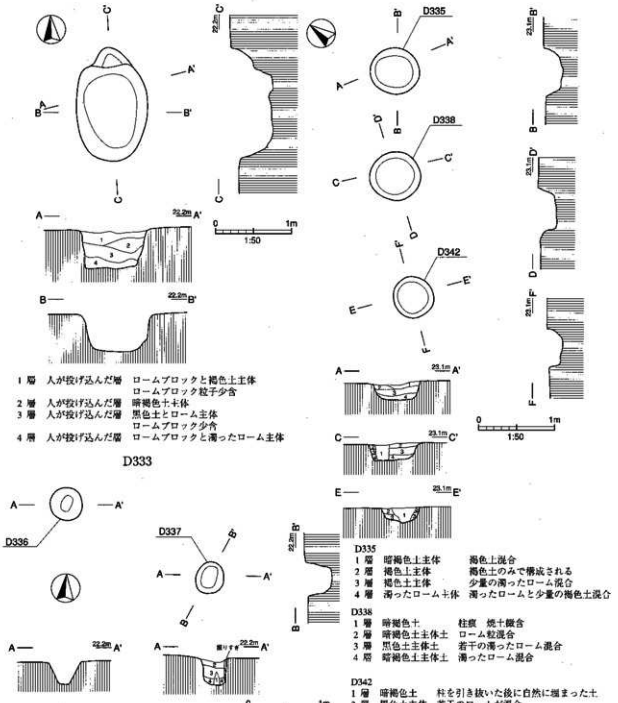


図162　D333・D335・D336・D337・D338・D342

遺　構　長軸0.65m×短軸0.61m×深さ0.24m、方位は形状から計測しなかった。平面形は円形である。ロームを掘込んだ坑底は凹凸を有し、やや急に壁は立上がっている。覆土は褐色土を主体として、突固められた様子が認められた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土の突固められた様子から、掘立柱の柱穴と捉えた。また、覆土の整然さから柱材は立腐れと判断した。奈良・平安時代の所産である。

D336

検出地区　L5-10-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.42m×短軸0.42m×深さ0.29m、方位は形状より計測しなかった。平面形は円形である。坑底は平坦で、壁の立上がりは急である。覆土は掲示できなかったが、黒色土を主体とする。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　D335と近似する土坑から、掘立柱の柱穴と捉えた。奈良・平安時代の所産である。

D337

検出地区　L5-20-2gにて検出した。

遺　構　長軸0.41m×短軸0.36m×深さ0.34m、方位は形状より計測しなかった。平面形は略円形である。ロームを略垂直に掘込み、坑底はやや丸みを帯びる。覆土はロームを包含した黒褐色土を主体とし、充填土である。下部に柱痕を検出した。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　覆土下部のみに柱痕を検出したことから、柱材は折損し、立腐れたものと捉えた。掘立柱の柱穴である。奈良・平安時代の所産である。

D338

検出地区　L5-88-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.70m×短軸0.62m×深さ0.23m、方位は形状より計測しなかった。平面形は円形である。ソフトロームを掘込んだ平坦な坑底で、壁はやや急に立上がっている。柱痕を検出した。覆土は暗褐色土を主体として充填されたものであり、突固められていた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　掘立柱の柱穴である。D335・D341と近接し、それぞれ同一建物跡の柱穴かも知れない。奈良・平安時代の所産である。

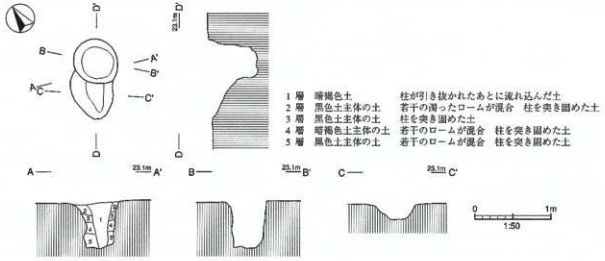


図　D339

D339

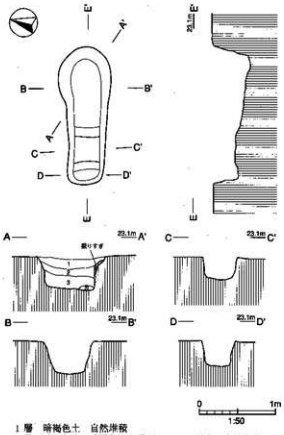
検出地区　L5-19-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.59（最大長軸1.06）m×短軸0.56m×深さ0.61m、方位は計測しなかった。b坑は長軸(0.47)m×短軸0.56m×深さ0.21m、方位はN-22°-Eとなっている。平面形は円形に楕円形が付いた形状である。ハードロームまで略垂直に掘込み、坑底は凹凸が著しい。柱痕を検出した覆土は突固められ

ており、ロームを多含した黒色土を主体とした充填土である。

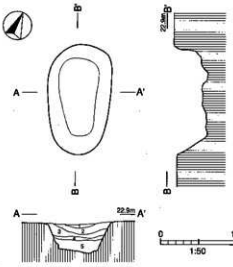
遺　物　縄文早期・撚糸文片及び土師器の小片が出土するが、稀である。

所　見　柱痕覆土の上部がやや開き、柱材は立腐れと捉えられた掘立柱の柱穴である。



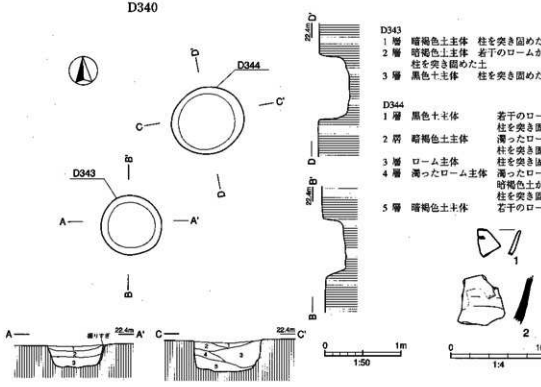
1 層　暗褐色土　自然堆積
2 層　暗褐色土　暗褐色土と若干のローム混合　自然堆積
3 層　暗褐色土　少量の濁ったローム混合　自然堆積

D340



1 層　褐色土　自然堆積
2 層　暗褐色土　暗褐色土と褐色土混合　自然堆積
3 層　暗褐色土　濁ったローム　黒色土少含　自然堆積
4 層　暗褐色土　濁ったローム混合　自然堆積
5 層　暗黄褐色土　ロームブロック主体　人為堆積

D341



D343
1 層　暗褐色土主体　柱を突き固めた土
2 層　暗褐色土主体　若干のロームが混合
柱を突き固めた土
3 層　黒色土主体　柱を突き固めた土

D344
1 層　黒色土主体　若干のロームが混合
柱を突き固めた土
2 層　暗褐色土主体　濁ったロームが混合
柱を突き固めた土
3 層　ローム主体　柱を突き固めた土
4 層　濁ったローム主体　濁ったロームと少量の
暗褐色土が混合
柱を突き固めた土
5 層　暗褐色土主体　若干のロームが混合

図164　D340・D341・D343・D344

D340

検出地区　L5-18gにて検出した。

遺　構　長軸1.82m×短軸0.54m×深さ0.29～0.48m、方位はN-77°-Eを示す。平面形は土筆状である。ハードロームを掘込み、坑底は中央にテラスを有し、西壁側は一段低くなる。また、中央から東壁にかけて次第に下り、壁は垂直に近いものである。覆土は暗褐色土を主体として、自然堆積と捉えた。

遺　物　土師器・須恵器の各小片が、少量出土した。

所　見　用途不明の土坑である。出土遺物などから奈良・平安時代の所産と捉えた。

D341

検出地区　L5-38-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.46m×短軸0.83m×深さ0.34m、方位はN-23°-Wを示す。平面形は長楕円形である。ハードロームを掘込み、凹凸著しい坑底である。壁の立上がりは急である。覆土は坑底直上層は投入土であり、中層～上層は自然堆積と捉えた。

遺　物　土師器の小片が出土するが、稀である。

所　見　用途不明の土坑である。出土遺物などから奈良・平安時代の所産と捉えた。

D342

検出地区　L5-89-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.55m×短軸0.51m×深さ0.19m、方位は形状より計測しなかった。平面形は円形である。ソフトロームを掘込んだやや凹凸ある坑底で、壁の立上がりは急である。柱痕を検出した。覆土は黒色土を主体とし、やや突固められた様子が窺えた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　掘立柱の柱穴である。柱痕上部の広がりから、柱材は脇を掘込まれ、引抜枯れたものと判断した。D335・D338との近接や、同程度の遺構規模などから、同一建物跡の可能性も否定できなかった。奈良・平安時代の所産である。

D343

検出地区　L5-39-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.80m×短軸0.78m×深さ0.27m、方位は形状より計測しなかった。平面形は円形である。ロームを掘込んだやや凹凸を有する坑底で、壁は略垂直に立上がっている。覆土は暗褐色土を主体とし、突固められた充填土である。

遺　物　土師器・須恵器片が出土するが、稀である。須恵器甕は常陸産である。1は土師器・坏で判読不明だが、墨書土器片である。2は須恵器・坏で墨痕が残っていた。

所　見　柱痕は検出できなかったが、覆土から掘立柱の柱穴と捉えた。覆土の整然さから柱材は立腐れと判断している。D344と近接し、遺構規模などが類似することから同一の建物跡の柱穴とも思われる。奈良・平安時代の所産である。

D344

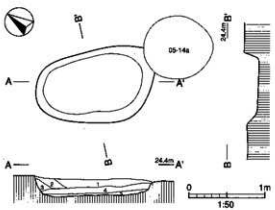
検出地区　L5-39-3gにて検出した。

遺　構　長軸0.96m×短軸0.87m×深さ0.39m、方位はN-58°-Eを示す。平面形は円形である。ハードロームを本だ坑底は平坦ではあるが、若干の凹凸を有していた。覆土は突固められた様子から、ロームを包含した充填土と捉えた。

遺　物　縄文早期・条痕文片が1点出土したが、流込みと捉えた。

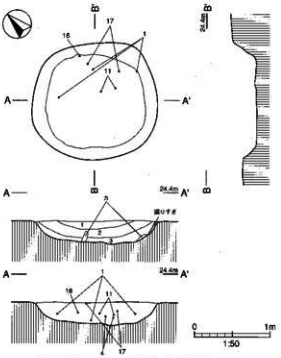
所　見　柱痕は検出できなかったが、覆土が突固められた様子から掘立柱の柱穴と判断した。D343

と近接し、類似した遺構規模であることから同一の建物跡の柱穴とも思われる。奈良・平安時代の所産である。

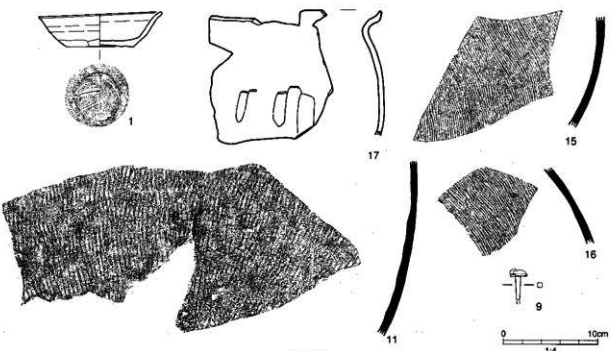


1 層　黒色土　ローム微量　焼土粒微含
2 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒多含
3 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒多含
4 層　黒褐色土　ローム少量混　ローム粒少含
5 層　暗褐色土　ローム少量混　ローム粒多量

D347



1 層　黒褐色土　ローム少量混　焼土粒微含
2 層　黒色土　ローム微量　ローム粒少含
径10mm大のロームブロック微量
3 層　黒色土　ローム少量混　ローム粒少含



D348

図　D347・D348

D347

検出地区　　L5-35-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.57m×短軸0.95m×深さ0.34m、方位はN-48°-Wを示す。平面形は隅丸長方形である。ソフトロームを掘込んだ平坦な坑底で、壁は急に立上がっている。覆土はロームの多寡で分層し、

黒褐色土が主体となっている。

遺　物　土師器の小片などが出土しているが、出土は少ない。

所　見　B138の柱穴群内の北東コーナーに検出した遺構で、当初は、B138との関連遺構とも考えていた。しかし判然とせず、土坑として扱うことにした。用途は不明であり、奈良・平安時代の所産と捉えたが、時代の移動があるかもしれない。

D348

検出地区　L5-35-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.71m×短軸1.56m×深さ0.25m、方位はN-30°-Wを示す。平面形は隅丸方形状である。ソフトロームを掘込んだ比較的平坦な坑底で、僅かに凹凸を有している。壁はやや湾曲して立上がっているが、傾斜はきついものである。覆土は包含するロームの多寡で分層したが、黒色土を主体とした自然堆積と捉えている。

遺　物　土坑としては多く、土坑中央より北東側に出土が集中する傾向があった。出土層においての出土傾向は把握できなかった。ただ、須恵器・甕片では覆土中層～上層に多かった。

所　見　D347と同様、B138の柱穴群内の南東コーナーに検出した土坑である。やはりB138に関連する遺構かとも思われたが判然とせず、単独の土坑として報告することとした。遺物は須恵器・甕の出土分布傾向から、遺構廃絶後の流込みとは思えず、廃棄したものと捉え、廃棄場所としての用途も有していたと判断した。奈良・平安時代の所産と捉えたが、B138との先後関係は不明である。

表54　D348遺物観察表　（単位mm）

	種別 器形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	128×70×37　ロクロ成形　体部外傾　口縁外反 外面　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐灰 普	砂粒赤色 粒	2／3	線刻「×」 墨書「口」 底部外面
11	須恵器 甕	－×－ ×－　タテのタタキ目	暗赤褐色 普	白色粒	胴部片	
15	須恵器 甕	－×－ ×－　やや細かなタテに近い斜位のタタキ目	灰色 良	微密	胴部片	
16	須恵器 甕	－×－ ×－　や細かなタテに近い斜位のタタキ目	灰色 良	微密	胴部片	15と同一個体？
17	土師器 甕	－×－ ×－ 頸部括れ、口縁は大きく外に開く　口唇はつまみ上げて立立に近い 口縁～頸部－ナデ　胴部中位以下－ヘラケズリ	褐色 普	砂粒 雲母	口縁～ 胴部	常総型

D349

検出地区　L5-6-1gにて検出した。

遺　構　長軸1.06m×短軸0.70m×深さ0.28m、方位はN-15°-Eを示す。平面形は楕円形である。ソフトロームを掘込みんだ土坑で、坑底はやや丸みを有している。壁は斜めに立上がり、坑底と壁の境が不明瞭である。覆土は、暗褐色土を主体した自然堆積と捉えた。

遺　物　土師器・須恵器の各小片が出土するが、稀である。墨書・線刻土器が各1点出土した。線

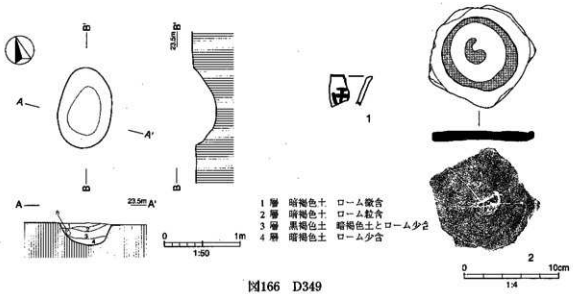


図166 D349

刻土器は硯に転用していた。

所　見　用途不明の土坑である。出土遺物から奈良・平安時代の所産と捉えた。

表55 D349遺物観察表

(単位mm)

	種別 器形	法量 口径× 底径× 器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	−× −× −ロクロ成形 外面 ナデ 内面 丁寧なヘラミガキ	橙褐 良	雲母 スコリア 微細粒 緻密	口縁片	墨書「西」 体部外面正位内黒 (可能性高い)
2	須恵器 坏	−× −× − 外面 底部一静止ヘラ切り後回転ヘラケズリ 内面 ナデ	灰 良	雲母 石英細粒 比較的 緻密	底部片	線刻「□」 底部外面 転用硯 常陸産

D353

検出地区　L5-16-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.95m×短軸0.90m×深さ0.29m、方位はN-3°-Wを示す。平面形は円形である。ハードロームを掘込んだやや凹凸あるる坑底であり、壁は垂直に近く立上がっている。覆土はローム包含の多寡で分層したが、黒褐色土を主体とした人為堆積と捉えた。

遺　物　土師器・須恵器片の小片が出土するが、稀である。

所　見　掘立柱の柱穴覆土と類似し、人為堆積と捉えた土坑である。用途は捉えられなかった。柱穴覆土と類似するなどから、奈良・平安時代の所産と捉えた。

D354

検出地区　L5-26-4gにて検出した。

遺　構　長軸0.58m×短軸0.45m×深さ0.51m、方位はN-11°-Eを示す。平面形は略円形であり、遺構規模は小さい。ロームを垂直に近く掘込み坑底とするが、坑底は丸みを帯びている。覆土は黒色土を主体としており、人為堆積か自然堆積かは捉えられなかった。ただ、堆積状況から遺構埋没後に動かされている可能性が窺えた。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　掘込みなどから掘立柱の柱穴に類似する土坑であるが、柱穴かは捉えられなかった。覆土は攪乱を被るため判然としないが、柱材の引抜きに伴う覆土の動きに類似していた。出土遺物は無いが、遺構状況より奈良・平安時代の所産と捉えた。

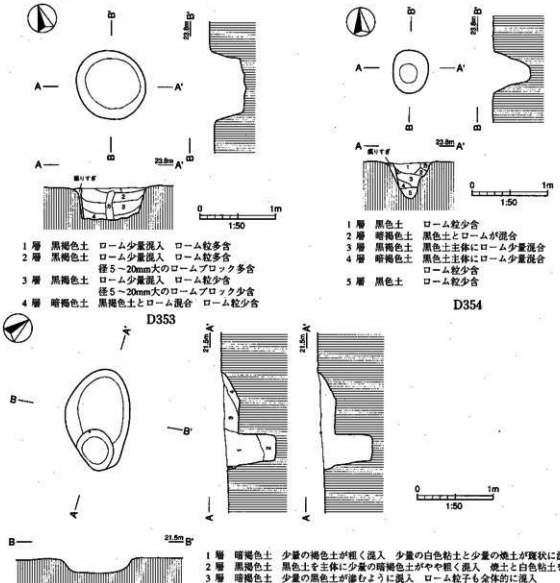


図167　D353・D354・D359

D359

検出地区　　L4-90-4gにて検出した。

遺　　構　　2基の土坑の重複である。

D359aは、長軸(1.20)m×短軸0.86m×深さ0.20m、方位はN-52°-Wを示す。平面形は歪んだ略楕円形である。ソフトロームを浅く掘込んだ坑底は平坦であり、壁は斜めに立上がっている。覆土はロームを包含した暗褐色土を主体とする。

D359bは、長軸(0.60)m×短軸(0.45)m×深さ0.65m、方位はN-84°-Eを示す。平面形は略円形である。D359aの埋没後、略垂直に掘込んだ土坑であり、坑底も平坦であった。形状は掘立柱建物跡の柱穴である。覆土は白色粘土を包含する。

遺　　構　　土師器小片が出土している。

所　　見　　D359bの覆土に白色粘土が混入することは、周辺の掘立柱建物跡の柱穴覆土例と同様であり、建物跡の柱穴と捉えられるが、柱穴配置で建物跡と土師器成らず、単独の土坑として扱った。

D359aはｄ359bとあまり時間差のない土坑と判断したが、用途は捉えられなかった。

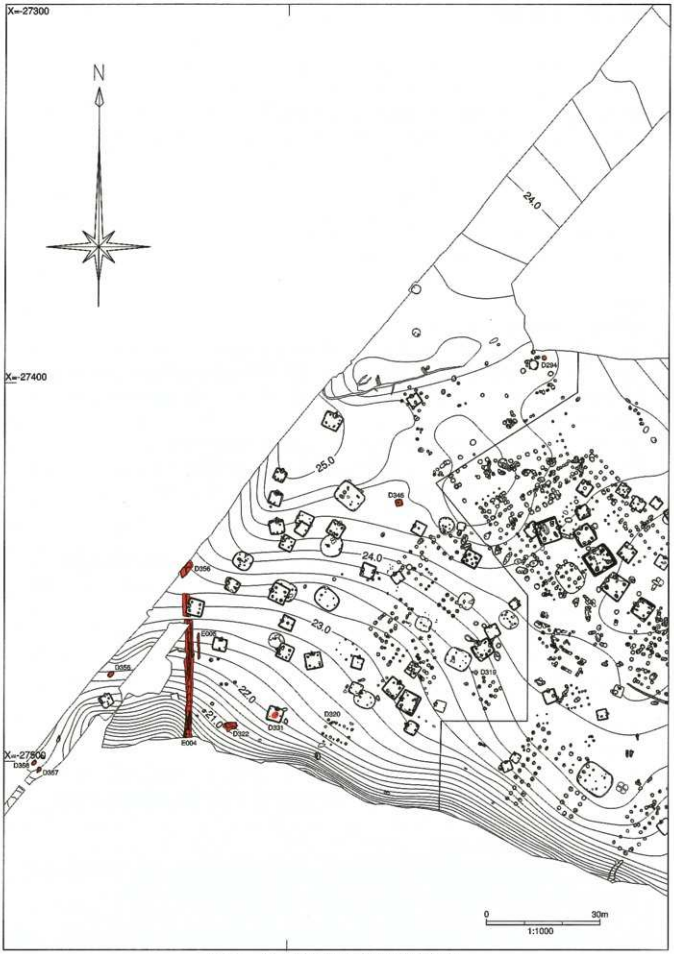


図168　上谷遺跡Ⅴ地区中世以降遺構配置図

第４節　中世以降

本節では、中世及び中世以降に属すると考えられる11基の土坑と２条の溝を報告する。この中には、本来は縄文時代から奈良・平安時代に属するものであろうが、その属することが明確にできなかった遺構も扱うこととした。特に本節で扱う遺構は、主に出土遺物が無いか、出土しても後世の流込みと捉えられたものであり、一部を除いて所属時代・時期を中世・近世・近代と区分できない遺構が多い。そしてもしかしたらその一部は近代に及ぶかも知れない。

上谷遺跡では中世以降の検出遺構は、他の時代に比して少ない傾向がある。検出された遺構は土坑11基、溝状遺構２条と極めて少なかった。中世以降の上谷遺跡が所在する台地は「居住の場」というより、「生産の場」として使用されたことも関係するかも知れない。

以下に、中世以降について報告することとする。

D294

検出地区　K5-70-3gにて検出した。

遺　構　長軸1.21m×短軸1.17m×深さ0.39m、方位は形状より計測しなかった。平面形は円形である。ハードローム上部まで掘込んだ土坑で、坑底中央に僅かな凹みを認めるが全体として平坦であり、壁は垂直に近く立上がっていた。覆土は褐色土と黒色土を主体として、一部に焼土を微含するが、自然堆積と捉えている。

遺　物　縄文早期・撚糸文片が僅かに出土している。覆土から流込みと捉えた。

所　見　調査時には「墓壙」かとも想定されたが、覆土堆積が自然堆積であることなどから、用途不明の土坑とした。また、遺物からも時代を捉えられなかったため、中世以降とした。

D311

検出地区　K5-35-4gにて検出した。

遺　構　長軸2.07m×短軸0.91m×深さ0.13m、方位はN-43°-Wを示す。平面形は長方形である。ソフトロームを掘込んだ平坦な坑底であり、壁は垂直に近く立上がっていた。覆土は色調・包含物の多寡で２層に分層したが、自然堆積である。

遺　物　土師器・須恵器片の小片が、少量出土している。

所　見　B126P１と重複するが、先後関係はB126→D311と覆土から捉えられた。B126の柱穴群の外側に掘込まれた土坑であり、B126と時間差がないのか判断できなかった。そのため中世以降の所産とした。

D319

検出地区　L5-59-2gにて検出した。

遺　構　長軸0.96m×短軸0.80m×深さ0.22m、方位はN-84°-Wを示す。平面形は不整楕円形である。ソフトロームを斜めに掘込み、坑底と壁の境が不明瞭となる土坑である。覆土は暗褐色土を主体した、自然堆積である。

遺　物　出土遺物は無かった。

所　見　用途不明の土坑である。出土遺物が無く、覆土からの判然としないため、中世以降の所産と捉えた。覆土が暗褐色土を主体しているため、本来は、縄文時代に属するかも知れない。

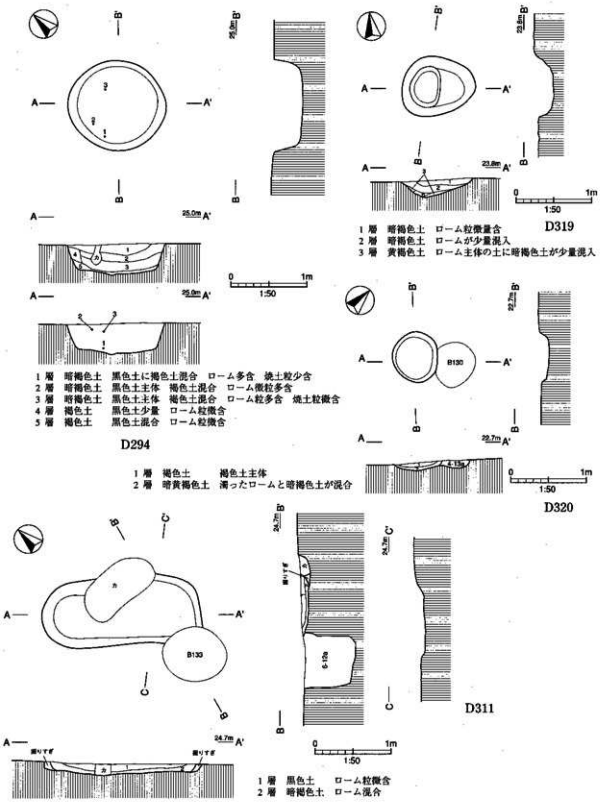


図168　D294・D311・D319・D320

D320

検出地区　L5-20-1gにて検出した。

遺　構　長軸0.66m×短軸0.59m×深さ0.12m、方位はN-44°-Wを示す。平面形は円形である。掘凹めただけの様な土坑である。丸みを帯びた坑底から、やや斜めに壁が立上がっている。覆土は褐色土を

主体とした、自然堆積と捉えた。

遺　　物　　土師器・甕片が出土するが、稀である。

所　　見　　奈良・平安時代のB130P１と重複するが、本土坑が新しいと覆土より捉た。このため中世以降と判断した。

D322

検出地区　　L4-90-1・2gにて検出した。

遺　　構　　長軸(3.92)m×短軸1.84m×深さ0.17m、方位はN-86°-Eを示す。平面形は長方形であり、東壁中央に方形の突出部が付帯して造り出されている遺構である。また、斜面部に設けられ、谷側となる西壁と南壁西側が失われている。ソフトロームを浅く掘込み、坑底は平坦としている。壁は垂直に近くなっている。覆土は炭化材・粘土が多く、また、火熱の影響を大きく被っているが、基本的には遺構廃絶後の自然崩壊と堆積であると捉えた。

炭化材を含む層が遺存している遺構の７割程度に平面分布し、造出し部から北東部に被熱を被った粘土が、また、西壁周辺には赤色硬化したローム面を検出した。

遺　　物　　土器片などは出土しなかった。

所　　見　　長方形の構造窯としての炭窯である。東壁の造出し部は煙道と捉えた。焚き口は赤化したローム面の検出から、西壁にあったと考えられる。粘土で窯本体を造ったものである。東壁側は台地平坦面に向き、焚き口と想定される西壁は谷津に下る位置となり、風に方向を計算した位置に造ったと思われる。自家消費分ではなく生産用（出荷用）の炭窯である。近世以降の所産であろうか。

D331

検出地区　　L4-94-4gにて検出した。

遺　　構　　長軸1.55m×短軸1.35m×深さ0.06m、方位はN-26°-Wを示す。平面形は円形である。A236の覆土を僅かに掘込んで、円形の壁を粘土で造りだしたものである。坑底はA236の覆土であり、粘土などを貼付した痕跡は窺えなかった。北東と南側に粘土壁が途切れる部分があった。覆土は１層のみであり、坑底として充填したものと捉えた。

遺　　物　　A236の覆土を掘込んだ造ったものであり、土師器小片が出土する。

所　　見　　円形の炭窯と捉えた。D322に比し、粘土壁の崩壊や坑底の焚き口の赤色硬化、小炭化材の多量などは認められなかった。南側の粘土壁の途切れは焚き口と捉えた。規模などから生産用の炭窯と言え、近世以降の所産であろうか。

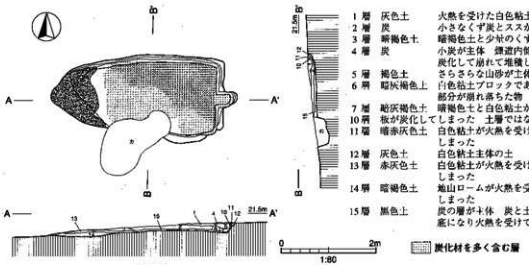
D346

検出地区　　L5-24-3g・34-1gにて検出した。

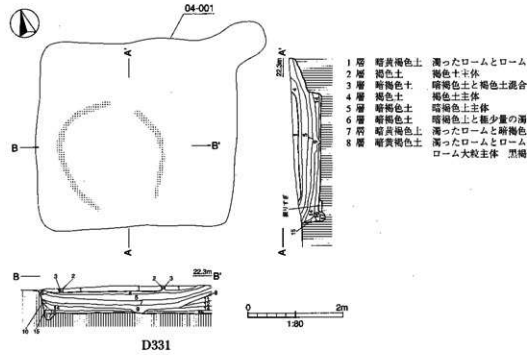
遺　　構　　長軸1.84m×短軸1.84m×深さ0.42m、方位は坑底のピット方向からみると、N-14°-Wを示している。平面形は方形である。坑底中央に浅い溝状のピットを検出した。坑底は平坦であり、壁は立上がりは急である。覆土は小炭化材を多く含み、焼土の包含する人為堆積と捉えた。

遺　　物　　土器片などは出土していない。

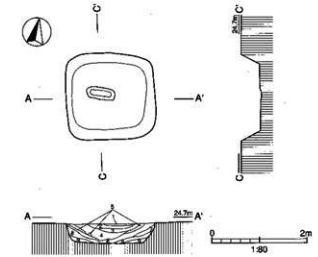
所　　見　　小規模な炭窯である。D322・D331と比較すると、規模において見劣りがする遺構である。生産用と言うより自家消費分としての炭窯であろう。炭窯と言うより、「墨穴」と呼んだ方がよいかもしれない。人為的投入土により埋没していることから、目的を果たした後に埋戻して平坦化の作業を行ったものとみられる。近世以降の所産であろうか。



D322

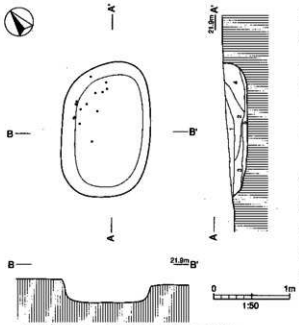


D331



D346

図169 D322・D331・D346



1 層　暗褐色土　少量の褐色土が滲むように混合
2 層　暗褐色土　少量の褐色土にロームが混合
3 層　暗褐色土　ロームが全体に滲むように混合
4 層　暗褐色土　少量の褐色土と少量のロームが混合
5 層　暗黄褐色土　汚れたローム多量　全体に滲むように混合

D356

D356

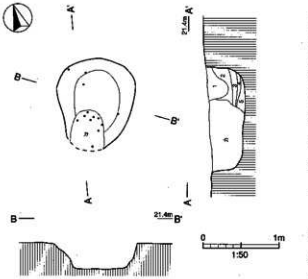
検出地区　L4-58-2gにて検出した。

遺　構　長軸1.78m×短軸1.18m×深さ0.27m、方位はN-36°-Eを示している。平面形は楕円形である。坑底はロームの略平坦で、坑底には付属施設は検出されなかった。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は5層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　覆土中から奈良・平安時代の土師器、須恵器片が少量出土した。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。



1 層　暗褐色土　少量の褐色土が滲むように混合　焼土少含
2 層　黒褐色土　暗褐色土がほぼ均一に混合
3 層　黒黄褐色土　多量のロームが粗く混合
4 層　黒褐色土　少量の暗褐色土が滲むように混合
5 層　暗黄褐色土　多量ロームが粗く混合

D357

D357

検出地区　L4-90-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.22m×短軸1m×深さ0.48m、方位はN-26°-Eを示している。平面形は楕円形で一部攪乱によって損壊している。ロームを掘込んだ坑底は略平坦で、しっかりとしていた。坑底に小ピット等の付属施設は検出されなかった。壁は斜めに立ち上がっている。

覆土は5層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺　物　覆土中層から上層にかけて、奈良・平安時代の土師器、須恵器片が少量出土した。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

図170　D356・D357

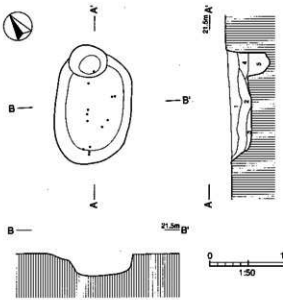


図171　D358

D358

検出地区　L4-90-4gにて検出した。

遺　構　長軸1.54m×短軸1.0m×深さ0.28m、方位はN-40°-Eを示している。平面形は楕円形である。坑底はロームのほぼ平坦な底部で、北東壁際に小ピット1基を検出した。壁は斜めに立ち上がっている。

覆土は5層に分層され、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺　物　覆土中から奈良・平安時代の土師器、須恵器片が少量出土した。

所　見　出土遺物から奈良・平安時代の土坑とも判断しうるが、覆土からは判然とせず、中世以降と捉えることとした。同様の遺構にD○○（2-005）がある。

D361

検出地区　L4-75-2gにて検出した。

遺　構　長軸(1.85)m×短軸(2.45)m×深さ0.85m、現状からの方位はN-57°-Wを示す。平面形は楕円形状と捉えた。坑底は凹凸を有し、無壁は垂直に近い状態で立上がっている。

覆土は包含物の多寡をを基本として5層に捉え、また、自然堆積による埋没と捉えた。

遺　物　土師器の小片が出土しているが、掲示できるものは無かった。

所　見　調査区外へ遺構の一部が掛かるため遺構の全体を捉えることはできず、平面形は想定したものである。このため長軸方向と方位は異なるかも知れない。土師器小片が坑底直上層から出土しており奈良・平安時代の土坑とも想定したが、覆土等からも判然としないため中世以降の土坑と判断した。時代・時期の変更があるかもしれない遺構である。また、重複するE004とは覆土から先後関係はD361→E004と捉えられた。E004の所属時代も判然とせず、覆土も近似することから、時間差はあまりないかも知れない。

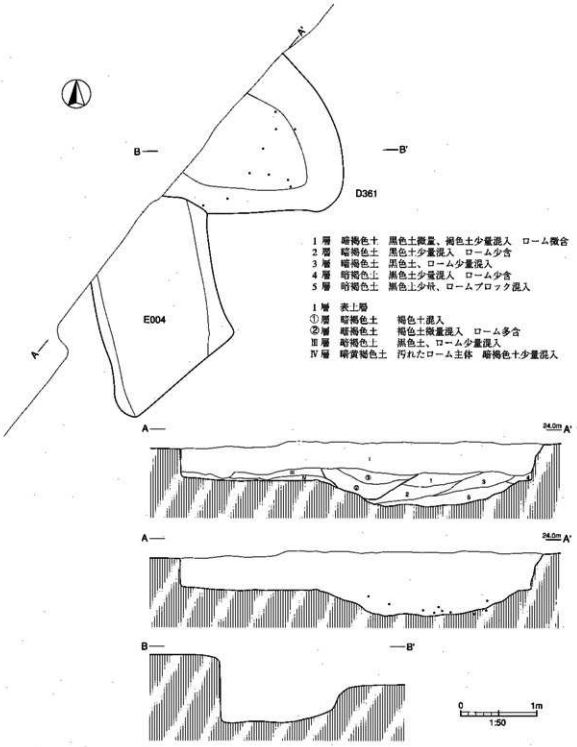


図172　E004・D361

第2項　溝状遺構

上谷遺跡Ⅴ地区からは2条の溝が検出されたが、いずれも本来の目的が何であったのかは判然としない。Ⅰ地区の溝の様に、中世以降とする根拠が確認されればよいのだが、本地区においては明確にし得なかった。

何れにしても奈良・平安時代に比べ極端に減少する遺構の検出状況から、上谷遺跡が所在する台地にあって、中世以降は「林地」「畑地」として利用されてきたであろうと想定される。このとき、溝が「区画」あるいは「境界」として掘込まれたかの判断できなかった。2条の溝について報告しておきたい。

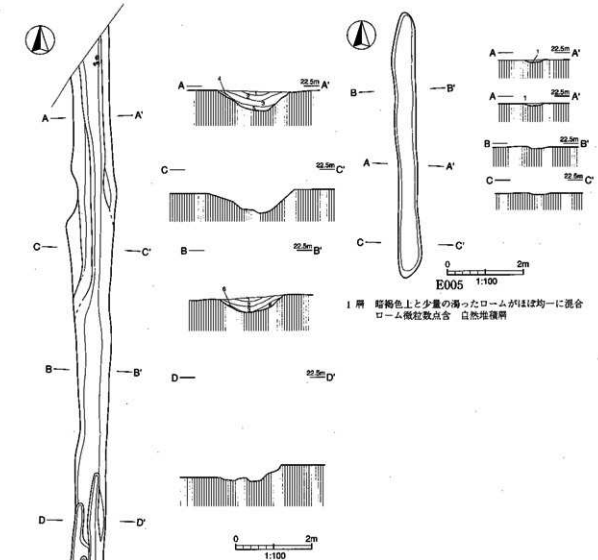


図173　E004・E005

E004

検出地区　L4-75区～80区にわたって検出した。

遺　構　規模は長径(47.75)m×幅1.40～2.00m×深さ0.40～0.50m、方位はN-1°-Wを示す。断面形は箱薬研状となる地区と、一段テラス状に段差を有して溝底に下る地区、溝底中央が帯状に高くなり2条の溝となっている地区と、様々である。溝底は全体的に硬化している。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺　物　土師器小片を主体として、多量に出土している。しかし覆土中層～上層が多く、溝底には少ない様向が窺えた。遺物の出土は多いが、何れも出土状態から流込みと捉えられた。

所　見　時代不明の溝である。南北とも調査区外へ続き、南側は谷津に下っており、全体の形状等は捉えられなかった。検出された溝は、全体としては直線的な溝であるが、緩い弧状を描く溝である。調査時には、一部、Ⅳ・Ⅴ地区の奈良・平安時代の掘立柱建物跡を区分する境界遺構とも想定されたが、遺物が流込みと捉えられ、中世以降の所産と判断した。更なる精査により、時代に異動はあるかもしれない。

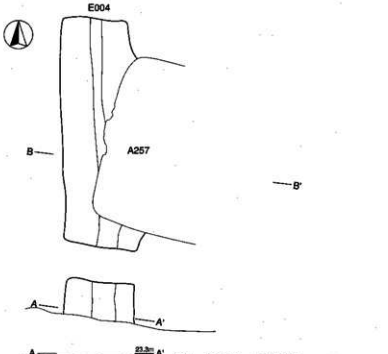


図174　E004

E005

検出地区　L4-77-4g、78-3gにて検出した。

遺　構　長径7.00m×幅0.52m×深さ0.05m、方位はN-2°-Wを示す。ソフトロームを僅か凹めた様な溝である。断面径は丸みを帯びるが、壁は溝底からなだらかに立上がっている。

覆土は暗褐色土層の1層のみの把握であり、ロームへの掘込みが浅く、自然堆積か人為堆積か判然としない。自然堆積による埋没と想定している。

遺　物　礫と言うより小石が1点出土するのみであった。

所　見　ソフトローム上部が、そのまま溝底になる様ま遺構である。出土遺物も殆どなく、時代・時期は捉えられなかった。このため中世以降として報告する。

第５節　調査区出土の遺物

上谷遺跡の調査は114,300㎡に及び、確認調査・本調査において数多くの遺物が出土している。遺構に伴う遺物については報告してきたところであるが、遺構外の遺物については殆ど報告することができないのが現実である。また、本調査における表土除去作業は重機によって行われ、包含層遺物を明確にできない気来があるが、本節では遺構外において出土した遺物の一部を報告することとする。しかし紙数の関係から各時代の遺物を掲載することはできず、各時代については概要を記し、特に調査区出土の遺物として墨書土器片を代表例を報告することとしたい。

旧石器時代は台地平坦部の一部、29調査区において確認調査を実施した。黒曜石が主体を占め、砕片の出土のみで図化はできなかった。また他の時代の遺構確認において若干出土をみている。

縄文時代の遺構は炉穴が主体となる関係上から、早期・撚糸文片、条痕文片が多量に出土しているが、これは「小結」にて報告することとした。また、前期末葉～中期初頭の破片も出土した。若干であるが、後期・堀之内式の出土していた。

弥生時代も土器片の出土をみるが、全体量は少なかった。

奈良・平安時代の墨書土器

上谷遺跡の調査では、本来は遺構内に包含された土器片であろうが、遺構確認作業において遺構に伴わない状態で土師器片や須恵器片が出土した。このうち特に遺構から遺漏したものや、単独で出土した墨書土器片について報告することとしたい。

調査区出土の墨書土器については表56に記載したが、報告の都合上、Ⅴ地区としてまとめている。また、図示したものは出土例の一部であることをお断りしておく。そして墨書がうすれた破片は判断がつきにくく、総点数は増える可能性も指摘しておきたい。

調査区出土の墨書土器も、当然ながら遺構出土の墨書土器の文字傾向を示している。これは他の地区からは出土しないことではなく、その地区の中心となる文字であるが、Ⅰ・Ⅱ地区は「得」「万」であり、Ⅲ・Ⅳ地区は「竹」、Ⅳ・Ⅴ地区は「西」が出土する傾向を示している。しかしⅠ・Ⅱ地区の中では「得」「万」がれぞれ調査区からも出土してよさそうだが、「得」の文字が「万」に比べて調査区よりの出土は少ない傾向を示している。

図175に示したものは何れも土師器であり、ロクロ成形であった。体部外面に墨書されたものが多い。H5・J8はⅠ・Ⅱ地区となるがやはり「万」が調査区遺物として出土しており、L7・M5区はⅢ地区となるが出土の墨書は「竹」出土の傾向をしめしていた。

K7-13-1GやK8-43-3Gの２点については、判読はできなかったが、長文の可能性あるものであった。また、K8-43-3体部外面に複数記された「万」は習書であろうか。

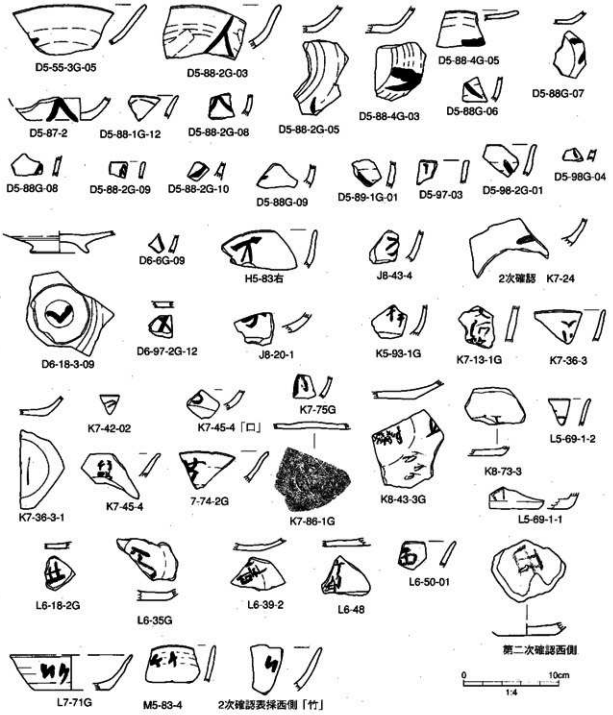


図175　奈良・平安時代の遺物（墨書土器）

第3章　小　結

以上、上谷遺跡Ⅴ地区について報告してきた。本地区も奈良・平安時代の遺構を主体としたものであったが、Ⅴ地区の調査成果について若干まとめておきたい。

第1節　旧石器時代

他の時代の遺構に伴う当該遺物については、一部について遺構報告中において行った。しかし当該時代の確認調査は殆ど実施できず、台地平坦面である29調査区において若干行ったのみであった。試掘トレンチの大半からは出土せず、また、出土しても砕片が多く図化することができなかった。黒曜石片が出体を占めていた。なお、遺構確認の際にも若干の出土を確認したが、紙数の関係もあり別途に報告を考えている。

第2節　縄文時代

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡1軒（後期・堀之内1式期）、早期・条痕文期の炉穴29基、土坑44基が検出されている。このうち炉穴が遺構の主体となっているが、炉穴のみではなく、縄文時代の遺構の検出状況はⅤ地区の台地平坦面を主体として、報告地区の中央から北側に多く検出される傾向が窺えた。南側の台地斜面部には検出遺構は極端に少なかった。

炉穴は上谷Ⅰ～Ⅳ地区に比してやや遺構数としては減少（炉穴として不明瞭なものは土坑と捉えたことと関係があるかも知れないが）するが、Ⅳ地区からの繋がりとして捉えられよう。出土遺物から野島期が主体を占めていた。

中期・五領ヶ台期の土坑は4基を検出した。タライ状の小竪穴状の遺構が2基であった。当該時期の遺構は上谷Ⅱ地区東側より、Ⅲ・Ⅳ地区にわたって検出しているが、東西に帯状に遺構が形成される傾向が本地区でも確認された。Ⅱ～Ⅴ地区の当該時期の遺構の広がりを概観すると、Ⅳ・Ⅴ地区の北側に入込む谷頭と南側の谷津に挟まれた帯状に広がる台地平坦面に主に形成されるものであった。これらは台地の南側の谷津に面すると言うより、北側の谷頭に沿って帯状に残されたものと判断された。

後期・堀之内期の遺構については、竪穴住居跡（A227）1軒と土坑2基を検出した。遺構検出作業において土器片が出土していることは認めていたが、遺構として捉えられたものは上谷遺跡では初めてであった。しかしA227からの当該時期の遺物は極端に少なく、図示したものが全てであり、早期・条痕文片が圧倒的に多かった。

第3節　弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居跡のみであり、Ⅴ地区の南側の台地緩斜面部に11軒を検出した。本時代もⅣ地区からの集落跡の続きとなっているが、Ⅴ地区にその主体をおいている。大型住居跡は3軒であり、その他は中規模から小型の遺構となっていた。遺構の形成時期は後期であり、Ⅳ地区で不確定だが認められた中期・宮ノ台期の住居跡は検出されなかった。

なお、全体として上谷遺跡の本時代の集落は、Ⅰ地区、Ⅲ地区、Ⅳ～Ⅴ地区の3群の竪穴住居跡群の構成として大きく捉えることができた。

第4節　奈良・平安時代

当該年代の遺構は竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡18棟、土坑31基を数えた。掘立柱建物跡についてはⅣ地区から連なるものの、密集する分けではなく、単独の建物跡が主体を占めている。各遺構は台地平坦面から緩斜面部に残されており、Ⅴ地区北側は遺構数が少なくなっている。

竪穴竪穴住居跡は一部について重複するものの、単独の住居跡が主体であり、また、Ⅳ地区に比べ掘立柱建物跡との重複も少なくなっている。Ⅴ地区中央南東部に営まれた掘立柱建物跡を取り囲むように住居跡が展開している。

掘立柱建物跡はⅤ地区西中央から南東側を主体として検出しているが、一部はⅣ地区の掘立柱建物跡群との関連があろうが、複雑に重複する建物跡が少ないことから、各集団に属する建物跡が主体となろう。

第5節　上谷遺跡Ⅴ地区の墨書土器について

第1項　墨書土器について

本遺跡では墨書土器を主体として、線刻・篦書土器（以下「墨書土器等」と記す）の出土が多いことが特徴づけられる。Ⅴ地区でも例外ではなく竪穴住居跡32軒に対して210点の墨書土器等が出土した。この点数には遺漏もあろうが、これらは図180の各遺構から出土した。Ⅳ地区の竪穴住居跡38軒・143点の出土に比べ、出土は増加しているといえよう。

墨書土器等に記された文字の大半は判読できないが、判読できるもののうち、「西」がその主体を占めている。Ⅳ地区に多かった「竹」も出土するが、「西」に比べ少なくなっていた。また出土点数は少ないが、Ⅰ・Ⅱ地区において特徴的な文字とされる「得」「万」も出土している。

出土する竪穴住居跡を比べてみると、「西」は単独に、または「竹」と重複して出土し、Ⅴ地区の掘立柱建物跡郡を囲むように出土している。竹はⅤ地区の竪穴住居跡群を取り囲むようなに北側や東側から出土していた。

第2項　長文墨書

上谷遺跡Ⅴ地区から出土した長文または、長文と想定される墨書土器は6点を数える。何れも竪穴住居跡からの出土であり、各々2点の出土であった。本地区の長文墨書土器については、隣接するⅣ地区からはA193出土の1点に比し、出土点数は増加している。また、Ⅴ地区では西側よりの特定の遺構から出土する傾向が窺えた。

出土した長文墨書は、

A226「廣友進召代　弘仁十二年十二日／（人面）／□」　土師器・坏
　「丈部千総石　□／□」　土師器・坏
A258「丈マ申万」　土師器・坏
　「丈マ角万呂」　土師器・坏
A260「□□□□□／下□」　土師器・甕
　「下総□／村神□／□□／□□／□（人面カ）」　土師器・甕

となっているが、これら墨書土器の出土遺構と墨書の傾向が窺えた。A258は「部姓＋名」であるが、A226の2点が「名＋目的」、A260が「國＋郡名」が記されていたのではないかと想定されることである。

それぞれの住居跡からそれぞれ近似した傾向の長文墨書土器が出土したことは、使用目的とその行為日が近接していたことを窺わせるものである。

A226は祭儀行為を目的としたことが「召代」「進上」によって明確化されており、A260の2点(註1)は判読不能な文字が多いが、他の資料から祭儀行為に係わるものと想定できるものであった。また、A258の2点は「部姓＋人名」だけであるが、所有を表すというより、上谷遺跡の長文墨書の出土例から、何らかの祭儀行為と関わりあるものと想定している。

ところで上谷遺跡で出土した長文墨書は、墨書が不鮮明なものもあり、確認できるものをあげると現在までのところ24点(註2)に及んでいる。V地区以外を掲げると以下のとおりとなっている。

Ⅰ地区	A036	「承和二年十八日進／野家立馬子召代進」	土師器・坏
Ⅱ地区	A082	「村神郷　　召」	土師器・坏
	A103	「　神郷　／　真廿九日」	土師器・坏
	A109	「　神郷丈　」	土師器・坏
		「　四日　」	土師器・坏
	A112	「丈マ麻□女身目代　　／西／西」	土師器・坏
		「丈マ真里刀女身召代二月十五日」	土師器・坏
		「丈マ□□身召代二月／西」	土師器・坏
		「丈マ稲依身召代二月十五日」	土師器・坏
	A115	「□□播郡□□」	土師器・坏
	A116	「物部真依　延暦十年十一月七　」	土師器・坏
	A124a	「(人面)」	土師器・小型甕
	A099	「下／□」	土師器・甕
Ⅲ地区	A174	「吉足」	土師器・坏
	A167	「□□／清　　／□□／□／梗□　」	土師器・高坏脚部（赤彩）
	A164	「下総　　／□　　／延　　／（人面)」	土師器・甕
Ⅳ地区	A193	「(人面）／下総國印播郡村神郷／丈マ廣刀自□召代進上／延暦十年十月二十日」	土師器甕を底部を帳状に磨った甕

Ⅳ地区の6点という多さとともに、Ⅱ地区は12点と突出した出土点数となっている。長文墨書土器の主体は土師器・坏であった。土師器・甕においては上谷遺跡の出土傾向ではあるが、常総型に記されたものである。「下総」と国名を記すものは土師器・甕に2点で確認されており、A099・A260の例も「下総国」と読むことの蓋然性が高いかも知れない。国名まで記すと必然的に長文化せざるを得ず、数行にわたった墨書となるが、記せる面積から甕の使用が当然なのかも知れない。

A112の4点は「部姓＋名＋身＋目的」の墨書であり、「身を召さるる代わり」(註3)と解釈すると、より一層、祭儀の目的が明確に記された墨書土器となっている。これらから他の近似する類例の墨書土器もまた、同様な内容となろう。

長文が何らかの「延命祈願」の祭儀と関わりがあるとするならば、Ⅱ・V地区を中心として行われ、廃棄されたことを窺わせている。

註

1　A193例から「下□」の文字を「下総国」と判断している。

2　赤外線モニター等による確認を行ったが、不鮮明なものも認めている。このため、今後、多くはな

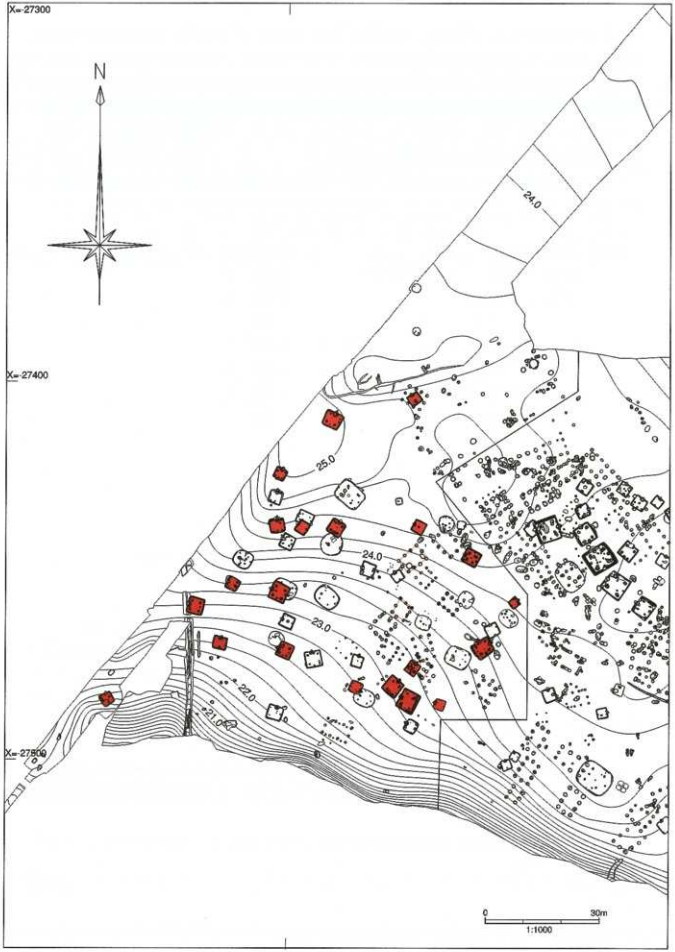


図176　上谷遺跡Ⅴ地区墨書土器検出遺構配置図

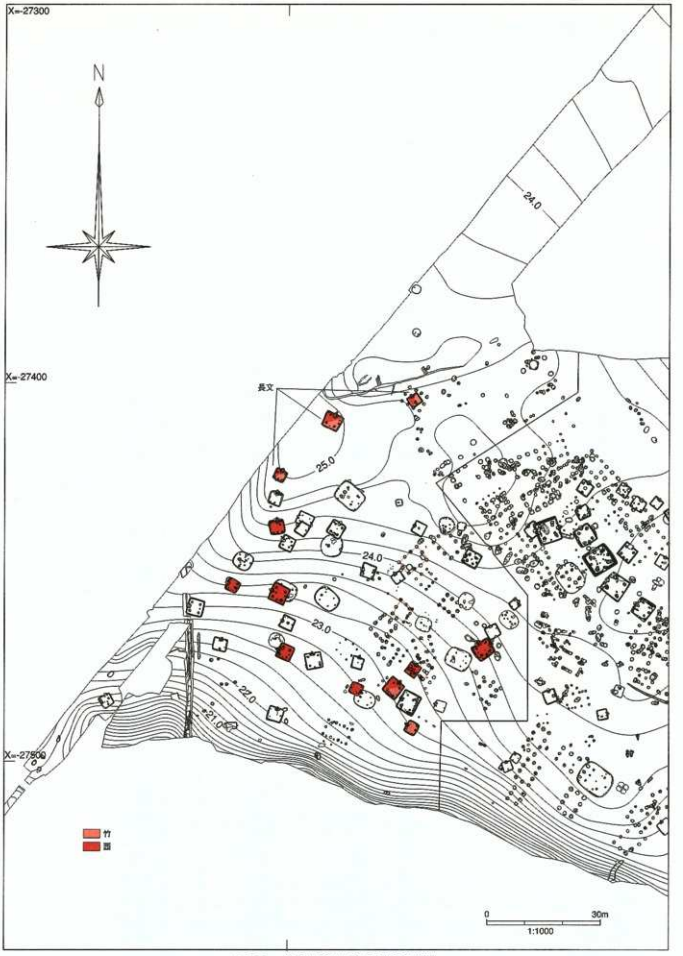


図177　「西」「竹」出土遺構配置図

表56　上谷遺跡Ⅴ地区墨書土器等一覧

番号	釈　文	種別	器　種	部　位		出土遺構	備考
1	廣友連召代光仁十二年十二日/(人面)田	墨書 線刻	土師器・坏	体部外 底部外	横　位	A226-1	
2	丈部千絵石女進上　／□	墨書	土師器・坏	体部外／同	横位	A226-2	
3	祥	墨書	土師器・皿	体部外	正位	A226-3	
4	生	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A226-4	
4	祥	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A226-7	出土遺構
5	生	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A226-9	
6	得	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A226-11	
7	人？	墨書	土師器・坏	体部外	正位？	A226-14	
8	酉	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A226-15	
9	竹	朱書	須恵器・坏	体部外	正位	A226-16	
10	□	墨書	須恵器・坏	体部外		A226-18	
11	□	墨書	土師器・坏	体部外		A229-5	
12	×？	墨書	土師器・坏	底部外		A229-9	
13	□	墨書	土師器・坏	底部外		A229-10	
14	□	墨書	土師器・坏	体部外		A231-11	竹？
15	酉	線刻	土師器・高台付皿	底部内		A233-20	
16	酉	線刻	土師器・坏	底部内		A233-23	
17	酉	線刻	土師器・坏	体部外		A233-24	
18	酉	線刻	土師器・坏	底部		A233-25	用途不明の土製品に転用
19	酉	線刻	土師器・坏	体部外	正位	A233-26	
20	酉	墨書	土師器・坏	底部内		A233-45	
21	酉	墨書	土師器・坏	底部内		A233-46	
22	酉	墨書	土師器・高台付皿	底部		A233-47	
23	酉	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A233-48	底部内にも有るか？
24	酉	墨書	土師器・坏	底部内		A233-49	
25	□	墨書	土師器・坏	底部内		A233-50	
26	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-51	
27	廿	墨書	土師器・坏	底部内		A233-52	
28	酉	墨書	土師器・坏	体部外		A233-53	
29	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-56	
30	酉	墨書	土師器・坏	体部外		A233-57	
31	酉	墨書	土師器・坏	体部外		A233-58	
32	酉	墨書	土師器・坏	体部外		A233-59	
33	竹	墨書	土師器・坏	体部外		A233-60	
34	酉	墨書	土師器・坏	体部外		A233-61	
35	酉	墨書	土師器・坏	底部内		A233-62	
36	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-63	
37	酉	墨書	土師器・坏	体部外		A233-64	
38	酉？	墨書	土師器・坏	底部内		A233-65	
39	酉？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-66	
40	酉？	墨書	土師器・坏	底部内		A233-67	

41	□	墨書	土師器・高台付皿	体部外		A233-68	
42	西	墨書	土師器・皿？	体部外		A233-69	
43	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-70	
44	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-71	
45	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-72	
46	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-73	
47	西？	墨書	土師器・坏	底部内		A233-74	
48	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-75	
49	□	墨書	土師器・坏	底部内		A233-76	
50	□	墨書	土師器・坏	底部内		A233-77	
51	西	墨書	土師器・坏	底部内		A233-78	
52	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-79	
53	西？	墨書	土師器・皿	体部外		A233-80	
54	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-81	
55	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-82	
56	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-83	
57	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-84	
58	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-85	
59	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-86	
60	西？	墨書	土師器・坏	底部内		A233-87	
61	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-88	
62	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-89	
63	西	墨書	土師器・坏	底部内		A233-90	
64	□	墨書	土師器・甕	胴部外		A233-91	
65	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-92	内黒
66	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-93	
67	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-94	
68	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-95	
69	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-96	
70	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-97	
71	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-98	
72	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-99	
73	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-100	
74	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-101	
75	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-102	
76	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-103	
77	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-104	
78	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-105	
79	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-106	
80	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-107	
81	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-108	
82	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-109	
83	□	墨書	土師器・坏	体部外		A233-110	
84	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-112	

85	□	墨書	土師器・坏	底部内		A233-113	内黒
86	西	墨書	土師器・坏	体部外		A233-114	
87	西？	墨書	土師器・坏	体部外		A233-115	
88	□	墨書	土師器・坏	底部外		A238b	
89	西	墨書	土師器・坏	底部内		A241b-8	
90	西	墨書	土師器・坏	体部外		A241b-9	
91	×／□	箆書	須恵器・甕	底部外		A242-15	
92	竹□	墨書	土師器・坏	体部外		A242-23	
93	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-32	
94	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-39	
95	竹？	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-41	
96	得？	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-42	
97	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-43	
98	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-44	
99	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A242-45	
100	□	墨書	土師器・坏	体部外		A242-46	
101	□	墨書	土師器・坏	体部外		A242-49	
102	□	墨書	土師器・坏	体部外		A242-50	内黒
103	竹	墨書	土師器・坏	体部外		A243-1	
104	西	墨書	土師器・坏	体部外		A243-5	
105	神	墨書	土師器・坏	体部外		A243-6	
106	竹	墨書	土師器・坏	体部外		A243-7	
107	×	線刻	須恵器坏	底部外		A244-4	
108	□	線刻	須恵器・高台付坏	底部外		A244-9	
109	□	墨書	須恵器・甕	胴部外		A244-13	常陸産
110	□	墨書	土師器・坏	底部外		A245-12	
111	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A245-15	
112	□	線刻	須恵器・坏			A248b-16	常陸産
113	得	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A250b-4	内黒
114	万	墨書	土師器・坏	底部外		A250b-11	
115	□	墨書	土師器・坏	体部外		A250b-13	
116	万	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A250b-20	
117	□	墨書	土師器・坏	体部外		A250b-23	未掲示
118	□	墨書	土師器・坏	体部外		250b-24	未掲示
119	千？	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A250b-25	
120	得	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A250b-26	
121	×	線刻	須恵器・坏	底部外		A251b-1	常陸産
122	□	線刻	須恵器・坏	底部外		A251b-9	
123	□	墨書	土師器・坏	底部内		A251b-17	非轆轤成形？
124	□	線刻	須恵器・坏	底部外		A254-1	
125	成	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A256-1	
126	×	箆書	須恵器・甕	底部外		A256-11	
127	万	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A256-12	
128	□	墨書	土師器・坏	底部外		A256-13	

129	□	墨書	須恵器・坏	底部外		A257-4	
130	□	墨書	土師器・坏	体部外		A258-5	
131	□	墨書	土師器・坏	体部外		A258-8	
132	□	墨書	土師器・坏	体部外		A258-10	
133	□	墨書	土師器・坏	体部外		A258-14	
134	□	墨書	土師器・坏	体部外		A258-16	
135	□	墨書	土師器・坏	体部外		A258-17	
136	丈マ申万	墨書	土師器・坏	体部外	横位	A258-39	
137	丈マ角万呂	墨書	土師器・坏	体部外	横位	A258-40	
138	得	墨書	土師器・坏	体部外	横位	A260-10	
140	得	墨書	土師器・坏	体部外	横位	A260-17	
141	井	線刻	土師器・坏	体部外	正位？	A260-18	
142	□□□□□　／ト□	墨書	須恵器・坏	体部外	横位	A260-25	墨書が擦れる
143	□	墨書	土師器・坏	体部外		A260-45	
144	下鈴□　／村神□　／□□ □□／ □□	墨書 墨書 墨書	上師器・甕	口縁?頸部外 胴下端外 胴外	正位	A260-46-1 A260-46-2 A260-46-3	人面か？
145	□	墨書	土師器・坏	体部外		A260-48	
146	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A263-12	
147	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A263-13	
148	□	墨書	土師器・坏	体部外	正位？	A263-14	
149	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-17	
150	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-19	
151	□	墨書	土師器・坏	底部外		A263-20	
152	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A263-21	
153	万？	墨書	土師器・坏	底部外		A263-22	
154	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A263-23	
155	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-24	
156	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-25	
157	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-27	
158	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-29	
159	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-30	
160	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-31	
161	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-33	
162	□	墨書	土師器・坏	底部外		A263-34	
163	□	墨書	土師器・坏	体部外		A263-40	
164	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-16	内黒
165	西 西	墨書	土師・高台付碗？	体部外 底部内	正位	A265-23	土器内外に2か所墨書
166	西 西	墨書	土師器・坏	体部外 底部内	正位	A265-26	土器内外に2か所墨書
167	西	墨書	土師器・坏	底部内		A265-27	
168	巻	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-29	
169	巻	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-30	

170	券	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-34	
171	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-36	
172	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-37	体部外面にス ス付着
173	券	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-38	
174	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-39	内面に墨痕多 数
175	□ 竹	墨書	土師器・坏	体部外 体部内		A265-41	土器内外に2 か所墨書
176	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-53	未掲示
177	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-54	未掲示
178	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-55	未掲示
179	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-57	未掲示
180	西	墨書	土師器・坏	体部外		A265-58	未掲示
181	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-59	未掲示
182	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-60	未掲示
183	□	墨書	土師器・坏	底部外		A265-61	未掲示
184	西	墨書	土師器・坏	体部外	正 位	A265-63	未掲示
185	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-64	未掲示
186	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-65	未掲示
187	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-66	未掲示
188	神	墨書	土師器・坏	体部外	正 位	A265-67	未掲示
189	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-68	未掲示
190	券	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-69	未掲示
191	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-70	未掲示
192	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-71	未掲示
193	井?	墨書	土師器・坏	体部外		A265-72	未掲示
194	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-73	未掲示
195	□	墨書	土師器・坏	体部外		A265-75	未掲示
196	□	墨書	土師器・坏	底部内		A265-77	未掲示
197	券	墨書	土師器・坏	体部外	正位	A265-78	未掲示
198	万	墨書	土師器・坏	体部外	逆位?	B125	
199	西	墨書	土師器・坏	体部外		"B134a,b"	
200	□	箆書	土師器・坏	体部外		"B134a,b"	
201	西?	墨書	土師器・坏	底部内		B136-1	
202	× □ □	線刻 箆書 線刻?	土師器・坏	底部外 底部外 体部外		B138-1	
203	□	墨書	土師器・坏	体部外		B138-3	
204	西	墨書	土師器・坏	体部外		B138-5	
205	西	墨書	土師器・高台付皿	底部内		B138-6	
206	□	墨書	土師器・坏	体部外		D343-1	
207	□	墨痕?	須恵器・坏	体部外		D343-2	
208	西	墨書	土師器・坏	体部外	正位	D349-1	
209	□	線刻	須恵器・坏	底部外		D349-2	

210	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-55-3G-05	
211	人？	墨書	土師器・坏	体部外	正位？	D5-87-2	
212	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-1G-12	
213	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-2G-03	
214	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-2G-05	
215	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-2G-08	
216	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-4G-03	
217	□	墨書	土師器・皿	体部外		D5-88-4G-05	
218	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88G-06	
219	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88G-07	
220	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88G-08	
221	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-2G-09	
222	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88-2G-10	
223	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-88G-09	
224	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-89-1G-01	
225	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-97-03	
226	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-98-2G-01	
227	□	墨書	土師器・坏	体部外		D5-98G-04	
228	□	墨書	土師器・高台付皿	底部外		D6-18-3-09	
229	□	墨書	土師器・坏	体部外		D6-97-2G-12	
230	万	墨書	土師器・坏	体部外		H5-83右	
231	万	墨書	土師器・坏	体部外		J8-20-1	
232	□	墨書	土師器・坏	体部外		J8-43-4	
233	□	墨書	土師器・坏	体部外		K5-93-1G	
234	□	墨書	土師器・坏	体部外		K7-24	2次確認
235	□	墨書	土師器・坏	体部外		K7-13-1G	
236	□	墨書	土師器・坏	底部外		K7-36-3-1	
237	□	墨書	土師器・坏	体部外		K7-42-02	
238	竹野	墨書	土師器・坏	体部外	正位	K7-45-4	
239	□	墨書	土師器・坏	体部外		K7-45-4「ロ」	
240	□	墨書	土師器・坏	体部外		K7-75G	
241	×	線刻	土師器・坏	底部外		K7-86-1G	
242	万／万／万／万 □□□	墨書	土師器・坏	体部外 底部外		K8-43-3G	
243	□	墨書	土師器・坏	底部内		K8-73-3	
244	□	墨書	土師器・坏	体部外		7-74-2G	

245	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-69-1-1	
246	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-69-1-2	
247	□	墨書	土師器・坏	体部外		L6-18-2G	
248	酉	墨書	土師器・坏	体部外		L6-35G	
249	□	墨書	土師器・坏	底部外		L6-39-2	
250	竹野	墨書	土師器・坏	底部外		L6-48	
251	酉	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L6-50-01	
252	酉	墨書	土師器・坏	体部外		第二次確認西側	
253	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L7-71G	
254	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	M5-83-4	
255	竹	墨書	土師器・坏	底部内	正位	2次確認表採西側	
256	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-58G-02	
257	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-58G-03	
258	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-59-1	
259	券	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L5-13-1G	
260	新	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L5-4-1G	
261	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-45-1	
262	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-50-1G	
263	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-56-1G	
264	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-58G-1	未掲示
265	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-37G	未掲示
266	券	墨書	土師器・坏	体部外		L5-33-1G	未掲示
267	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-38-26左	未掲示
268	野？	墨書	土師器・坏	体部外		L5-4-1G-2左	未掲示
269	□	墨書	土師器・坏	体部外		L5-4-1G-3	未掲示
270	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L6-19-2G	未掲示
271	竹	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L6-30-1G	未掲示
272	□	墨書	土師器・坏	体部外		L6-55-4G	未掲示
273	□	墨書	土師器・坏	体部外		L6-79-1G	未掲示
274	野？	墨書	土師器・坏	底部外		L6-90-3G	未掲示
275	□	墨書	土師器・坏	底部内		L6-9-2G	未掲示
276	□野	墨書	土師器・坏	底部外		L6-30-3G	未掲示
277	□	墨書	土師器・坏	体部外		第3次確認南側	未掲示
278	□	墨書	土師器・坏	体部外		第2次確認西側	未掲示
279	□	墨書	土師器・坏	体部外		J8-42-1G	未掲示
280	牛	墨書	土師器・坏	体部外	正位	L4-46-3G	未掲示

いが、長文墨書土器の類例が増える可能性があることをお断りしておく。

3　平川南氏ご教授。

第6節　墨書土器に見る信仰と習俗

東京成徳大学　増尾　伸一郎

はじめに

八千代市北東部の保品、神野、米本地区に計画された八千代カルチャータウン開発事業に伴なう発掘調査の結果、上谷遺跡、向境遺跡をはじめとする9遺跡から、夥しい量の墨書土器が出土した。千葉県は全国的にみても墨書土器の出土量が多いことで知られているが、その中でも八千代市域からはこれまでの調査で約3000点余りが確認され、県内全体の約1割を占める。その大半は一文字だが、人名や地名、紀年などを含む長文のものが多数みられることも、この地域の特色である。

第1項　墨書土器の記載内容

上谷遺跡で最も数が多いのは「得」と「万」で「竹」が続き、「西」「富」「福」「人」「才」「田」「仁」「寺」「在」「家」「加」「大」「延」「生」「王」「午」「具」「十」「井」「山」「新」「位」などがある（註1）。それに対して向境遺跡では「富」「寺」「田」の三文字が目立つ（註2）。

近接する村上地区の村上込の向遺跡では「来」「毛」「山」、名主山遺跡では「加」が多く、萱田地区の白幡前遺跡では「生」「立」「廓」「継」、井戸向遺跡では「富」、北海道遺跡でも「富」、極現後遺跡では「生」というように遺跡によって主体となる文字に違いがあり（註3）、使用した集団や地域あるいは時期的な差異を反映するものと考えられる。

二字熟語としては上谷遺跡に「七万」「八万」「廿万」「大万」「竹野」「寺芳」「三寶」「大家」「下総」「吉足」「大井」などがあり、向境遺跡では「三寶」が4例と「山人」がある。このうち「廿万」と「大万」などは具体的な数量というよりは招福祈願に関わるものであろう。多数みられる「竹野」は一文字の「竹」と同じく地名をさすと思われる。「大井」「大家」も他の遺跡に出土例があり（註4）、やはり地名とみられる。「吉足」は白幡前遺跡の「人足」「赤足」「得足」と同じく人名であろう。「下総」は類例が比較的少なく上谷遺跡にもう1点（後述）ある他は、多古町の信濃台遺跡と成田市の中台遺跡の2点が知られるだけである。

注目に値するのは向境遺跡の「三寶」である。上谷遺跡にも1点あるが、向境遺跡は4点と多いうえに、「寺」も11点を数え、その内の1点は赤色で彩色された土師器の坏で、仏教的な要素が色濃い。萱田地区の北海道遺跡の墨書土器には「勝光寺」「尼」「経」などがあり、井戸向遺跡からは、「寺」「寺坏」「仏」などの墨書土器の他に奈良三彩の小壺と托、金銅製の小形仏像（菩薩形坐像）が出土している。白幡前遺跡からも「寺」「大寺」「仏」「寺坏」と墨書した土器や奈良三彩小壺、瓦塔などの他、遺跡中央区域で周囲を浅い溝で区画した四面廂付きの堂字とみられる建物跡が一棟検出され、いわゆる「村落内寺院」の存在が推定されているが（註5）、向境遺跡の場合は遺跡の様相がこれらとはやや異なる。報告書によれば8世紀後期から9世紀後期にかけて機能したこの集落の土坑からは碗型鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土するほか、赤色塗彩の野土も多いことなどから、仏教に帰依した集団により、官衙との関係をもつ鍛冶工房が営まれていた可能性が高い。

一方、上谷遺跡で際立っているのは、長文の墨書が多いことである。8世紀末の土師器の甕に人面を墨書した後に三行にわたって、

（1）「下総国印播郡村神郷／丈部廣刀自咩召代進上／延暦十年十月廿二日」

と記したものをはじめとして、9世紀代の土師器の杯に記された墨書には、

（2）「承和二年十八日進／野立家立馬子／召代進」

（3）「丈部麻□女身召代二　／西」「西」
（4）「丈部真里刀女身召代二月十五日」
（5）「丈部□□身召代二月／西」「西」
（6）「丈部稲依身召代二月十五日」
（7）「丈部千総石女進上」
（8）「□□廣友進代弘仁十二年十二月　／田」
（9）「物部真依□　延暦十年十二月」
などがある。他の遺跡から出土した類似の内容をもつものとしては、
（10）「村神郷丈部国依甘魚／（人面）」（八千代市椎現後遺跡、9世紀前期・土師器坏）
（11）「丈部乙刀自女形代」（八千代市北海道遺跡、8世紀中期・土師器坏）
（12）「丈部人足召代／（人面）」（八千代市白幡前遺跡、8世紀後期・土師器甕）
（13）「国玉神　上奉　丈部鳥万呂」（印西市鳴神山遺跡、8世紀末・土師器甕）
（14）「丈尼／丈尼／丈部山城方代奉」（同前、8世紀後期・土師器坏）
（15）「同□□丈部刀自女召代進上」（同前、9世紀前期・土師器坏）
（16）「□香取郡大坏郷中臣人成女替承□□年四月四日」（佐原市吉原三王遺跡、9世紀中期・土師器坏）
（17）「丈部真次召代　国神奉／（人面）」（芝山町庄作遺跡、9世紀前期・土師器坏）
（18）「上総□□秋人歳神奉神」（同前、9世紀前期・土師器坏）
（19）「□□命替神奉」（酒々井町、長勝寺脇館跡、9世紀前期・土師器坏）
（20）「罪司進上代」（富里町久能高野遺跡、9世紀前期・土師器坏）
（21）「磐城郡／磐城郷／丈部手子万呂／召代／（人面）」（福島県いわき市荒田目条里遺跡、土師器鉢）
などが主な例である。（10）から（15）までは印旛沼西岸に近接しており、この地域に集中することがわかる。

こうした長文の記載例により、墨書土器によく見られる「召代」「形代」「命替」「方代」「身代」などの語句は、身（＝形＝方＝命）＋召＋代（＝替）という表現形式と同じく、いずれも「身召代」の省略形と見做すことができる、と指摘した平川南氏は、「（冥界に）身を召される代りに」という意味の他に「召代」を神の依り代としての「招代」（おぎしろ）の意義も併せ持つことを示唆した（註6）。さらに高島英之氏も『常陸国風土記』那賀郡茨城里の哺時臥山伝承に神の子の小蛇を土器に入れて安置したとあるのに基づき、これらの墨書土器は神霊への要応に用いるだけでなく、土器自体が依代としての意味をもつ祭祀具で、日用の食器類とは明確に区別されるべきものであったという（註7）。神祇祭祀の場では樹木や御幣などを依代として神々を迎え、飲食や幣帛を供えて祝詞を奏上するが、これらの墨書土器は、祈願する内容を直接書き付けることにより、神饌を盛る器も依代と化すというような古代的思惟の産物であるかも知れない。

第2項　招福・延命祈願と疫神祭祀

1節に列挙した多文字墨書土器にみえる人名のうち、（9）の物部と（16）の中臣以外は、（21）の陸奥国の例まで含めて全て丈部である。千葉県内で出土した人名記載の墨書土器全体をみても丈部が占める割合は圧倒的で、他には雀部（佐倉市高岡大福寺遺跡）、大伴部（八千代市村上込ノ内遺跡）、檜前部（酒々井町伊條白幡遺跡）、物部（八千代市高津新山遺跡）、日下部（印西市鳴神山遺跡、成田市大袋腰巻遺跡）、軽部（千潟町桜井平遺跡）、火神部（佐原市東野遺跡）、真髪部（佐原市吉原山王遺跡）、占部（同前）、刑部（千葉市中鹿子第二遺跡）、長谷部（市原氏上総国分尼寺跡）、大生部（富津市狐塚遺跡）、私部（大網白里町大網山田台遺跡群）、刑部（東金市新林遺跡）などがあるものの、いずれも1例から数例

なのに対して、丈部は約30例を数え、全体の過半数に達する（註８）。

丈部は主に宮廷の警備や雑使を担当した軍事的性格の強い部民であったと考えられ、『倭名類聚抄』には伊勢国朝明郡、美濃国不破郡、越中国新川郡、下野国河内郡、芳賀郡、安房国長狭郡、陸奥国磐井郡に丈部郷があるので、東海道と東山道のこれらの地域を中心に設定されたことがわかる。他の文献では、『続日本紀』の天応元年（781）１月15日条に下総国印播郡大領（郡司）として丈部直牛養がみえ、『万葉集』巻20には天平勝宝７年（755）２月の防人歌の中に印波（播）郡の丈部直大麻呂が１首（4389）を残す。また正倉院文書の天平10年（738）『駿河国正税帳』には、やはり印波（播）郡から貢進されて聖武天皇に近侍した采女として丈部直広成の名前があり、同じく天平宝字６年（762）２月14日付の『奉写大般若経所解』にも丈部高虫という下総の仕丁がいる（註９）。これらの史料から、下総国の印播郡には直の姓をもつ丈部氏とその部民が多数居住し、郡司をはじめ、采女や仕丁あるいは防人などとして都との直接的な関係を有していたことがわかるが、丈部の人名を記した墨書土器が多数出土する背景には、こうした事情の反映もあるだろう。

１節の長文墨書に共通する「身召代」とその類似表現は、いずれも「（冥界）に身を召される代りに（供物を捧げる）」ことを意味すると考えられるが、こうした発想を具体的に物語る伝承としてよく引用されるのは、９世紀初期に薬師寺の景戒が撰録した『日本霊異記』中巻第24縁「閻羅王の使の鬼、召さるる人の賂を得て免す縁」と同第25縁「閻羅王の使の鬼、召さるる人の饗を受けて、恩を報ずる縁」という２つの説話である。ともに冥界の閻羅王の命令で人の命を奪いに来た鬼が、ご馳走を饗応された身返りとして身代りの命と引きかえにするという内容をもつ。前者は引用文から唐の孟献忠編『金剛般若経集験記』に依拠するのもで、こうしたモチーフは唐臨編『冥報記』のような中国の志怪小説に広くみられるが、後者の冒頭部に「偉しく百味を備けて、門の左右に祭り、疫神に路ひて饗しめ」とあることから、道饗祭のような鬼魅に饗応して侵入を防ごうとする疫神祭儀も下地になっていると思われる。

道饗祭は神祇令によれば月次祭、鎮火祭とともに季夏（陰暦６月）と季冬（同12月）に行われることになっていた。『続日本紀』天平７年（735）８月に、大宰府から流行し始めた疫瘡の拡大を防ぐために、大宰府管内の神祇への奉幣や観世音寺以下の諸寺における『金剛般若経』の読誦、病者への賑給や湯薬の恵施などと併せて行われたのが初見だが、この時は長門以西の諸国における臨時祭であった。『金剛般若経』の読誦は、前述の『日本霊異記』中巻第24縁とも共通する。

『延喜式』祝詞では八衢比古、八衢比売、久那土の三神に幣帛を奉斎して「根の国・底の国より穢び疎び来む者」から守るよう祈願するが、『令義解』や『令集解』では外界から迫り来る鬼魅を斥けるために、京の四方の京極大路において卜部らが路上で鬼魅を饗応して退散させた、と説く。道饗祭祝詞は平安初期頃に大幅な改変を経て現在のような内容になったことが指摘されており（註10）、本来は『令義解』などの説くように、鬼魅を饗応して災厄を防ぐことを目的としたと考えられる。

道饗祭と並んで神祇令に祭祀の時期が規定されている鎮火祭が、下野国府跡から出土した木簡に記されているので（註11）、これらが都だけでなく地方でも行われたことがわかるが、奈良時代後期になると、道饗祭と類似の疫神祭が新たに始められた。

『続日本紀』宝亀元年（770）６月23日条には「疫神を京師の四隅と畿内の十堺とに祭らしむ」とあり、翌２年の３月５日条には「天下の諸国をして疫神を祭らしむ」、同６年（775）６月22日条にも「使を遣して疫神を畿内の諸国に祭らしむ」という記事があるが、いずれもその理由は明らかではない。宝亀元年の場合は６月初めに由義宮に行幸した称徳天皇の不予が続いていたので、その平癒祈願であろう。翌年春の場合は左大臣藤原永手の急逝、また６年６月の場合は井上内親王と他戸王の死をめぐる政情不安に対応して行われた可能性が高い。その後も『続日本後紀』承和６年（839）閏正月23日条には、疫

疾のため死者が多く、国分寺で『大般若経』を転読し、僧医が治療にあたるとともに、郷邑で季毎に疫神を祀るよう命じている。同9年3月の場合は雨が少なく播種に支障が生じたため、やはり諸国の国分寺で『金剛般若経』を読誦して薬師悔過を行なうとともに殺生を禁断し、あわせて国司が率先して精進斎戒して疫神を祀り、豊稔を祈願したように、仏教的色彩を強めている。

これらの記事から疫病に対する畏怖と警戒心の広がりを看取できるが、その結果、『延喜式』神祇臨時祭条に、宮城四隅疫神祭、京城四隅疫神祭、畿内堺十処疫神祭をはじめ、八衢祭、坰祭障神祭など諸種の疫神祭が記載されるに至った（註12）。

第1項に挙げた「身召代」関係の墨書土器もこのような環境の中で用いられるものと思われる。上谷遺跡出土の（3）や（5）は「身召代」を含む文字を薄くした上に、新たに濃く「西」と墨書し、住居跡の南隅の壁際から同様の墨書土器と2枚重ねた状態で出土しており、何らかの祭祀の場であった可能性が推測されているが（13）、「西」の文字は疫神の侵入を防ぐための結界を示すものかも知れない。古代の建物遺構からは東西中南北の方位を記した墨書土器が銭貨などと一緒に出土する例が各地にみられ、地鎮に関わるものと解釈されているが（14）、上谷遺跡では方位を記した墨書土器は「西」に集中し、権現後遺跡では「南」が4点、井戸向遺跡では「中」が出土しているので、集落を越えた広範囲に及ぶ祭儀が営まれた可能性もある。

疫病の流行が、深刻な影響をもたらす都では、政争の激化に伴なう犠牲者の祟り（怨霊）への畏怖とも相俟って、祓と饗応による疫神祭儀が多様化する中で、新たな問題も生れた。『続日本紀』宝亀11年（780）12月14日条には、平城京とその周辺で「此来、無知の百姓、巫覡を搆合いて妄に淫祀を崇め、犬狗の設、符書の類、百方に怪を作して街路に堺ち溢る。事に託せて福を求め、還りて厭魅に渉る。」という状況を呈しているので、これらの行為を厳しく禁断するが、疾病のある者が京外で祈_する場合に限り容認する、という勅が出された。この勅では京内か京外かという点が重視され、百姓らが巫覡に呪術的行為を求めることが、内裏を中心とする都の清浄保全と政治的観点の両面から警戒されている。

この勅で述べられた巫覡による呪法は、賊盗律の厭魅条に、「凡そ憎み悪む所有りて、厭魅を造り、及び符書呪詛を造りて、以て人を殺さむとせらむは、各謀殺を以て論じて二等減ぜよ。（後略）」というように厭魅や符書を造作して人を呪詛する行為に対する罰則規定や、僧尼令の卜相吉凶条に「凡そ僧尼、吉凶を卜い相り、及び小道、巫術して病療らば、皆還俗。其れ仏法に依りて、呪を持して疾を救はむは、禁むる限りに在らず。」と規定して僧侶が仏法の持呪以外の道術符禁などによる治療行為を行なうことを禁ずる法令の文言を踏まえるものである。

畿内の百姓は巫覡に対して治病だけでなく、人形などの呪物を用いて淫祀を祀り、事に託せて福を求めたというが、巫覡と呼ばれるような民間の宗教者が諸種の呪法を行なったことは、例えば『日本書紀』皇極天皇元年（642）7月25日条の雨乞いの記事に「村々の祝部の所教の随に、或いは牛馬を殺して諸の社の神を祭る。」とあることからも推測できる。

古代下総の集落遺跡から出土した信仰や呪術に関わると思われる墨書土器が、どのような宗教者によって用いられたのかは明らかではないが、多数の「得」「福」「富」や「万」「七万」「八万」「廿万」「大万」などは、いずれも福徳の祈願と関係するものだろう。また井戸向遺跡からは「厭」や「鬼」の文字が記された9世紀中期の土師器の坏が出土しており、同時期の平城京とその周辺の様相とも符合する。

また県内各地の遺跡からは「神」と墨書した土器も多数出土しているが、なかには「国玉神」（印西市鳴神山遺跡、佐原市東野遺跡、芝山町庄作遺跡）、「歳神」（成田市大袋腰巻遺跡）、「石神」（東庄町小座ふちき遺跡）、「竈神」（芝山町庄作遺跡）のように個有の名称の付いた神格もみえており、その多様性が窺える。

奈良時代から平安時代前期の東国、特に下総・上総地域では、畿内との通交によって早くから仏教が浸透し（15）、在地の神々をめぐる信仰と習合しながら独自の精神世界を形成したことが、これらの墨書土器を通じて具体的に把握できるのである。

〈註〉

（1）『上谷遺跡』第１分冊（2001年）～第４分冊（2004年）・八千代市遺跡調査会

（2）『向境遺跡』2004年・八千代市遺跡調査会

（3）『八千代市の歴史　資料篇　原始・古代・中世』1991年・八千代市史編さん委員会

『千葉県の歴史　資料篇・古代』1996年・千葉県史料研究財団

（4）「大家」は井戸向遺跡と白幡前遺跡のほか、佐原市の吉原三王遺跡、長部山遺跡、仁井宿東遺跡などでも出土している。

（5）須田勉「平安時代初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』1985年・早稲田大学出版部

高木博彦「墨書土器からみた房総古代仏教の一側面」『MUSEUMちば』10号　1979年・千葉県博物館協会

千葉県立房総風土記の丘「『シンポジウム　平安時代の村落と仏教』記録集」『千葉県立房総風土記の丘年報』14号　1991　年など。

（6）平川南「"古代人の死"と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集・1996年

同　『墨書土器の研究』2000年・吉川弘文館

（7）高島英之「第二章　墨書土器と村落祭祀」『古代出土文字資料の研究』2000年・東京堂出版

（8）『千葉県の歴史　通史篇・古代２』2001年・千葉県史料研究財団

（9）佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考證篇第二　1982年・吉川弘文館

同　「丈部氏および丈部の基礎的研究」『日本古代氏族の研究』1985年・吉川弘文館

（10）三宅和朗「『延喜式』祝詞の成立」『古代国家の神祇と祭祀』1995年・吉川弘文館

（11）『下野国府跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第74集　1987年・栃木県教育委員会

所収、第4173号木簡。

（12）笹生衛「奈良・平安時代における疫神観の諸相」二十二社研究会編『平安時代の神社の祭祀』1986年・国書刊行会

宮崎健司「奈良末・平安初期における疫神祭祀」　日野昭編『日本古代の社会と宗教』1996年・永田文昌堂

拙稿「都城の鎮祭と〈疫神〉祭儀の展開」『環境と心性の文化史』下巻　2003年・勉誠出版など。

（13）『上谷遺跡』第２分冊186頁　2003年・八千代市遺跡調査会

（14）水野正好「まじないの考古学・事始」『どるめん』18号　1987年・JICC出版局

以下、一連の論考。

（15）原島礼二・金井塚良一編『古代を考える・東国と大和政権』1994年・吉川古文館など。

第７節　上谷遺跡出土の撚糸文土器について

峰村　篤

上谷遺跡からは、114,300㎡の発掘調査により１万点以上の縄文時代早期前半(KZ1)撚糸文土器が出土している。時期的には井草Ⅰ式～花輪台Ⅰ式にわたるが、主体を成すのは稲荷台式で、次いで夏島式、花輪台Ⅰ式の纏まった出土がある。但しこの台地上は縄文時代早期条痕文期以降、古代に至るまで頻繁な土地利用が行われており、遺物包含層は必ずしも良好な状態ではなかったようである。土器は殆どが小破片で器形復元ができるようなものは無かった。しかし多量に出土した撚糸文土器には重要な資料が多く含まれており、更に該期の土偶２点の出土もある。印旛沼南岸地域における該期研究に重要な位置を占めると考えられるため、基礎的な資料提示を最優先に報告を行う。

分布状況

上谷遺跡の遺物包含層出土縄文土器には、早期前半撚糸文土器・同中葉沈線文土器・同後半条痕文土器、前期中葉黒浜式土器・同後半浮島式土器、前期末～中期初頭土器群、中期初頭五領ヶ台式土器・同前半勝坂・阿玉台式土器・同後半加曽利E式土器、後期初頭称名寺式土器・同前半堀之内１・２式土器・同中葉加曽利B式土器がある。最も出土量が多いのは早期後半条痕文土器であり、次いで撚糸文土器があり、更に中期初頭五領ヶ台式がKL5・6グリッドを中心に集中域を形成している。五領ヶ台式はⅠａ式～Ⅱ式に亘るが、特にⅠａ式が纏まっているようである。一方この他の前期、中期前半・後半、後期は散発的で土器の量は多くない。

撚糸文土器は遺構外出土土器全点及び古代等の遺構覆土出土土器の一部からの口縁部2,348点、胴部11,630点、合計13,978点を抽出した。図183は10mグリッド別の出土状況を示したものである。縄文時代の遺物包含層は、確認調査の結果に基づき、特に遺物が多かった台地縁辺部を中心に調査範囲が設定されている。従って、例えばK8グリッドとK7グリッドやM7グリッドとM6グリッドにおける極端な出土量の違いは調査方法に起因するものであり、本図における土器分布の濃淡を直接遺物集中地点と捉えることは躊躇される。しかし上谷遺跡の撚糸文土器は、L5グリッドにやや纏まった分布が認められる他はほぼ台地縁辺部を中心に分布していることは窺がえよう。とりわけK8グリッド、L7南～M7グリッドに際立った集中域を認めることができる。K8グリッドでは200或いは300点を超える集中区が存在しており、最も出土量が多かったK8-45グリッドでは519点の撚糸文土器が出土している。

次に図184・185により口縁部破片のみを対象にした型式別の分布状況を見ると、L5グリッドに井草Ⅰ式の散漫な分布があり、出土量が増加する井草Ⅱ・夏島式はK8グリッドを中心に分布している（図184）。後半期の稲荷台式はK8グリッド及びL7南・M7グリッドに多く分布し、それぞれ胴部破片も相当量出土している（図185）。更にL5・J8グリッドにもやや纏まる地区がある。K8グリッド及びL7南～M8グリッドは後述するが稲荷台式でもその様相に違いが見られており、それぞれ集中域として捉えられる。花輪台Ⅰ式はK7グリッド南東～K8グリッドに偏在した分布状況を呈している。

出土土器（図186～193）

ここでは主に型式別を念頭におきながら資料の概要について記載する。個々の資料の記述については観察表を参照されたい。挿図では施文部位を長い細線で表し、口縁部等で磨消されている場合は点線で実際の施文開始位置を示した。また形態の変換点になる稜を短線で表示している。

井草Ⅰ式（1～7）

遺跡全体で口縁部36点・胴部（口頸部）7点が出土した。全てJ型である。口頸部に異方向施文帯を有する1～4・7、地縄文上に縄側面圧痕を有する5があり、異方向施文帯が無い6も口唇部装飾や口唇部の肥厚が強く胴張りになる器形からこの時期と考えられる。5は小突起を有する例である。

井草Ⅱ式（8～14）

遺跡全体で口縁部69点（J型55点・Y型10点・不明4点）が出土した。胴部を施文した後、肥厚する口唇部下に指頭圧痕（8）、指頭調整（12～14）を加え、口唇部装飾を行うのが普通であるが、10のように口唇部装飾と胴部施文が密接するものも存在する。9は肥厚する口唇部下に縄の側面圧痕を一条施文するものである。11は小突起を有する例と考えられる。13・14はY型だが、口唇部装飾は西関東の「大丸式」に一般的な横位でなく斜位に施文しており、J型の効果を意識していると考えている。

夏島式（15～39、65）

遺跡全体で口縁部392点（J型236点・Y型140点・不明16点）が出土している。この他多量に出土している胴部破片については井草Ⅰ式～夏島式の分類は不可能であったが、撚糸文土器前半期（井草～夏島式）として1595点（J型940点・Y型642点・不明13点）を分類している。最も集中しているK8グリッドでは、口縁部251点（J型149点・Y型92点・不明10点）、撚糸文土器前半期（井草～夏島式）胴部1,023点（J型588点・Y型425点・不明10点）が出土している。資料提示が不充分であるが一応の分類をしておく。

J型（15～28）

1類（15・16）　井草Ⅱ式の形態を有するが、口唇部装飾を行わないもの。この類については井草Ⅱ式に共伴する可能性があり、編年的位置付けは不確定である。Y型にも同様な類があり、下総台地では井草Ⅱ式～夏島式でしばしば出土する。

2類（17～21）　胴部縄文施文後、口唇部下に指頭による調整を施すもの。A：指頭圧痕があるもの（18）、B：肥厚部にナデ調整を施し無文帯とするもの（19）、C：指頭調整を施すもの（17・20・21）がある。17は口唇部に低い粘土瘤を貼り付けている。その部分を肥厚させるような明確な意図を認めることはできないので突起とは言えないものの5などの井草式にみられる突起と共通する手法である点や、更には北関東・中部地方の表裏縄文土器にも類似の手法が見られる点から注意を要する。

3類　口唇部下から縄文が施されるもの（23～28）。縄文施文後に口唇部にナデ調整や研磨を施す類は図示した中には存在しない。22・27・28は口唇部下に異方向施文帯を有するものである。

Y型（29～39）

1類（30・31）　J型1類同様、井草Ⅱ式の形態を有するもの。30は口唇部下に指頭圧痕列がある。

2類（29）　J型2類同様、胴部撚糸文施文後口唇部下に指頭調整を施すものである。縦位施文後、部分的に横位撚糸文が施されている。

3類（32～36）　口唇部下から撚糸文が施されるもの　A：口唇部直下から撚糸文が施文されるもの（32・34～36）と、B：撚糸文施文後口唇部にナデ調整を施して平滑にするもの（33）がある。32・33は口唇部下に狭い異方向施文帯がある。

4類（37）　口唇部下に短い縦位撚糸文を施文し、以下斜位撚糸文を施文するもの。口唇部には撚糸文施文後横研磨が施されている。西関東において典型的な「夏島式」の基準とされた殿屋敷遺跡群C地区で第Ⅱ群2類cと分類された一群に共通する（戸田1985）。

5類（38・39）　絡条体条痕が施されるもの。夏島式には一定量の絡条体条痕が伴うのが一般的だが、本遺跡では少ない。38は口唇部外端に横位に条痕が施文され、磨り消されている。

以上、当遺跡の夏島式は、古段階に一つの纏まりを有し、33・37に見られるように典型的な段階まで

まで出土している。細かな検討はできなかったが無文土器も伴っていると考えられ、65は口唇部整形、調整から夏島式に伴うと考えている。

稲荷台式（40～64、66～142、144～146、148～151、157～175、218～220、226～240）

ここでは典型的な稲荷台式から、近年「稲荷台２式」と呼称されているものに相当すると考えられる一群やいわゆる「稲荷原式古段階」といわれている一群等を一括している。遺跡全体で口縁部937点（J型52点・Y型794点・不明91点）、胴部4,596点（J型87点・Y型4,427点・不明82点）が出土している。なお、夏島式との分離が困難な一群も存在しており、それらについては、「撚糸文土器口縁部」及び「撚糸文土器胴部」の分類項を設定してそこに加えている。口縁部267点（J型53点・Y型46点・不明165点）、胴部2,879点（J型758点・Y型730点・不明1,391点）がある。集計は細片に至るまで「１点」としているので、表面が摩滅している細片等も全て「不明」に加えられている。

本遺跡の稲荷台式は、「分布状況」で述べたように、K7グリッド及びL6グリッド南～M7グリッドの際立った二箇所の集中域を認めることが可能で、それぞれ土器様相が異なっている。ここでは周辺のグリッド出土土器を加えながら、主にこの２箇所の集中域を中心に分類を行う。

K8グリッドを中心とする稲荷台式（40～71）

挿図には一部K7グリッド出土の土器を加えている。K8グリッドからは口縁部205点（J型23点・Y型140点・不明34点）、胴部828点（J型27点・Y型795点・不明６点）が出土している。

Ｊ型（40～46）

１類（40～44）　口唇部下から縄文が施文され、口縁部が外傾する夏島型口縁を有するもの。２・３類も含め、単節縄文は節が大きく丸みがある圧痕が特徴的である。

２類（45）　口唇部下から縄文が施され,口縁部の直立傾向が強まり内側に肥厚するため、内面と口唇部との境界に稜を有するもの。

３類（46）　口縁部に斜位の施文を有するもの。施文後図の点線で挟まれた範囲が磨り消されている。

Ｙ型（47～64）

１類（47・49～53）　口唇部下から撚糸文が施文され、口縁部が外傾する夏島型口縁を有するもの。２～５類も含め、撚糸文施文後口唇部にナデ調整、或いは研磨を施すものが多い。50は口唇部下に整形段階の横調整が施され、肥厚部を強調するような弱い段がある。

２類（48・54～57）　口唇部下から撚糸文が施文され、口唇部内端、内面との境界に稜を有するもの。57はＪ型２類と同様の形態である。

３類（58）　撚糸文が帯状施文されるもの。口縁部は外傾する夏島型である。帯状施文はK8グリッドでは口縁部３点、胴部９点であり、目立つ存在ではない。

４類（61）　空白部を多く残しながら撚糸文が施文されるもの。口縁部は殆んど器厚を変えずに外傾するが、口唇部下に指頭による大柄な凹みがある。

５類（59・60）　口唇部外端が肥厚し、弱い稜を有するもの。59のように整形段階における口唇部下の横調整により、その部分が僅かに器厚を減じるものがある。

７類（63・64）　口唇部外端が突出するように強く肥厚するもの。肥厚部には撚糸文施文後ナデ調節が施されている。

Ｍ型（66～71）

K8グリッドは花輪台Ｉ式に関わると考えられる無文土器が大量に出土しており、69はそれに該当する可能性がある。70・71の小形土器も時期は確定できない。図示した以外にも特に胴部破片では稲荷台式以前と考えられるものも存在しているが、全体としてJ或いはY型の口唇部整形と一致するものは多くな

い印象である。68は内傾する形態から、Y型７類に関わる時期であると考えられる。

以上、K8グリッドを中心とする稲荷台式は、施文が口唇部下からなされ、帯状施文は少なく、外傾する口唇部を有する典型的な稲荷台式土器が纏まっている。６・７類は後述するM7グリッドを中心とする区域で主体を成す類である。

L6グリッド南～M7グリッドを中心とする稲荷台式（72～142、144～146、148～151、157～175）

挿図にはL5グリッドを中心とする区域を含めている。これらは上谷遺跡の台地南側辺付近ということになるが、M6グリッド付近からは北に向って小支谷が入り込んでいるため、M7グリッドを中心とする区域とは地形的に区分される可能性もある。記述の効率化という事情もあったものの、後述するがL５グリッドには特徴的な土器が幾つか存在することもあり、こうした場合両者を一括するのは適当でないかもしれない。個々の土器の出土位置は観察表で確認できるので、まず土器が集中するM7グリッドとL5グリッド出土土器についてそれぞれ記載しておく。M７グリッドからは口縁部231点（J型７点・Y型214点・不明10点）、胴部1,275点（J型20点・Y型1,231点・不明24点）が出土している。また無文土器が口縁部100点・胴部291点ある。小破片は無文部の可能性があるものの、目立つ存在である。一方L５グリッドからは、口縁部134点（J型５点・Y型114点・不明15点）、胴部820点（J型18点・Y型780点・不明22点）が出土している。無文土器は口縁部44点、胴部133点である。但しL５グリッドは口縁部破片がやや少なく、小破片が多い。

J型（72・91～95・103・108）

１類（72・103・108）　口唇部下に無文帯を有するもの。口縁部は外傾或いは直立する夏島型かそれに類する形態を有する。無文帯は狭いもので72の約1.5㎝、広いものは103の約３㎝がある。J型は図示した以外で、口唇部下から縄文が施文される類が６点ある。

２類（91～95）　原体縦位回転による帯状施文を有するもの。縄文は口唇部下から施文される。L5グリッドから纏まって出土しており、図示した以外に91～93の同一個体と思われる破片を中心に７点出土している。M７グリッドからも何れも小破片だが、口縁部１点、胴部３点が出土している。

Y型（73～90・96～142・144～146・148～151・209・218）

１類（73～76）　口唇部下から撚糸文が施文され、外傾、或いは直立する夏島型或いは直口口縁を有するもの。K８グリッドY型１類に相当する。

２類（77・82・84）　口唇部下から撚糸文が施され、口唇部内端、内面との境界に稜を有するもの。82は内面が特に強く内傾している。K８グリッドY型2類に相当する。

３類（78・80・81）　概ね２類に準ずるが、整形段階で口唇部下に外端の肥厚部を強調するような横調整が施されるもの。結果その部分が僅かに凹んでいる。80は厚手で凹んだ部分に施文された撚糸文の周囲が磨消されている。やや異質な土器である。本類はK８グリッドY型５類に相当する。

４類（79・83・87～90・96・97）　口唇部下から撚糸文が帯状施文されるもの。口唇部は内外端に稜を有するが、83・90のように直口するもの、87・97のように肥厚し強い外削ぎ状の調整が加えられるもの等がある。A：縦位撚糸文を帯状施文するもの（79・83・87・88・97）、B：斜位撚糸文を縦帯状に施文するもの（89・90・96）がある。Aの撚糸文は回転圧痕が深く明瞭なものが多い。Bの90は全体の構成は不明だが、部分的に疎らな縦位撚糸文が観察できる。帯状施文はM7グリッドで 口縁部25点・胴部238点、L５グリッドで口縁部６点・胴部47点が確認されており、安定した存在といえる。

５類（86）　胴上半部に段を有するもの。

６類（98・99）　殆んど器厚を変えずに直立或いは内傾し、口唇部が外削ぎ状に整形されるもの。撚糸文は口唇部下から施文される。

7類（100～102・104・106・107・109～115）　口縁部に無文帯を有するもの。無文帯は1.5cm～3.5cmで、口縁部は夏島型では口唇部内側が肥厚する形態（109・110）が特徴的であり、また外傾するもの（101・102・104）、直立～内傾するもの（100・107・111・112）がある。113～116は外面が肥厚する。

8類（116～130）　口唇部外端が肥厚無文帯となるもの。以下のように細分される。

8ａ類（116～121・123）　肥厚部下端には整形段階の横調整が施されるものが多く、結果口唇部外側がやや突出するような形態となるもの。撚糸文は概ね肥厚部下端付近から施文されるが、肥厚部に及ぶものもある（120）。帯状施文も安定している。

8ｂ類（122・124～130）　口唇部外端肥厚部の横調整が明瞭になり、肥厚部下端が横一次区画的な効果を有するもの。口縁部は直立～内傾するものが多い。撚糸文は肥厚部下端付近から施文され、施文後更に肥厚部に横調整が施されるもの（124～127）がある。やはり帯状施文が安定している。

9類（131～137）　口唇部外端肥厚部が段状に整形されるもの。下端の横調整が明瞭に工具で行われるもの（134～136）もある。口縁部は直立～内傾するものが多い。137は肥厚部下端の調整が東山式に類似した細い沈線状になっており、9類の主体的な土器よりも時期が下る可能性がある。

10類（138～142）　口唇部下に無文帯を有し、胴部撚糸文との境界に絡条体圧痕を施すものである。絡条体圧痕は胴部撚糸文の上端に、それと重複して押圧される特徴がある。Ａ：7類の特徴を有するもの（138～140）、Ｂ：8類の特徴を有するもの（141）、Ｃ：9類の特徴を有するもの（142）があり、ある程度の時間幅を有する類と考える。

11類（144～146・148～151・209、218）　胴部破片を一括している。144～146は帯状施文の類である。148は撚糸文施文前に横沈線のようなものがあるが、意図的なものか否かは判断できない。149～150・218は、いわゆる底部「同心円状擦痕」と呼ばれているもの、及びそれに関連すると考えられる破片の一部を抽出したものである。149や218を観察すると深い溝状になった内部に細かい節のようなものが認められるような部分があり、これらは「同心円状圧痕」と呼称したほうが適切であると考えられる(註21)。

Ｍ型（157～175）

1類（157～164）　整形が主にＹ型に認められるそれと一致するもの。157はＹ型1類、158～164は概ね6～8類の整形と認められる。但し調整は異なる部分がある。

2類（165～174）　整形がＭ型に特徴的と考えられるもの。口縁部は外傾～直立を基本とし、多くは口唇部の肥厚が見らない。L5グリッドでは上端に平坦面を有するものが比較的多く認められる（171～173）。但し例えば84などはこれらと類似した整形であるが、本遺跡の様相では、むしろＭ型に特徴的と認められる。

3類（175）　ミニチュア土器。

その他のグリッドの土器（219・220・226～240）

今回は、遺構外出土撚糸文土器全点の分類作業の結果、遺跡内で有意な纏まりを形成していると思われたK8・M7グリッドの資料提示に主眼において挿図を作成したが、ここでは他のグリッドの稲荷台式について特徴的なものに若干触れておく。分類はL6グリッド南～M7グリッドのそれを用いる。219はＹ型1類に近いが外面に指頭圧痕がある点で異なり、図に示したように内外面共に破片の湾曲が無く直線的である。小破片なので判断しかねるが、或いは上面観が方形になるのかもしれない。木の根No 6遺跡で類似の例が出土している（宮1981　第88図47）。226～234はＪ8グリッドの土器である。J8グリッドからは口縁部37点・胴部187点の稲荷台式が出土している。圧倒的にＹ型が多く、Ｊ型は口縁部1点・胴部2点のみである。無文土器は口縁部21点・胴部32点が出土している。また花輪台Ｉ式の胴部破片2点と、これに関わると考えられる厚手の無文土器2点が出土している。口縁部の226はＹ型1類、227

はY型２類、228はY型4類、229はY型７類、231・232はY型10類A、230はM型２類である。K８グリッドに多いY型１・２類が多く出土しているが、M７グリッドに多い類も少なからず出土しており、228・234のように帯状施文も安定している。235～240は古代等の遺構覆土から出土した土器である。235はY型２類、236はY型７類だが、撚糸文施文後口唇部下の他に胴部にも縦に強い調整が施され、撚糸文を帯状に磨り消している。237はY型８ｂ類、238はY型４類B、239はY型10類C、240はM型１類である。

以上、当遺跡の稲荷台式について報告してきた。L6グリッド南～M7グリッドを中心とする稲荷台式は、Y型１～３類はK８グリッドで主体をなす類との対応を指摘できるが、４類以下は様相が異なっている。口縁部の直立・内傾化が強まり、口唇部外側、内側の肥厚が顕著な土器が多い。特に外側が肥厚する類が多く、Y型８類～９類の変化は肥厚部下端の横調整により、横一次区画的な効果を強めてゆく過程が指摘できる。ここでは記述の都合上一括したが、９類及び10類Cは既に稲荷台式の範疇を外れている。但し典型的な花輪台Ⅰ式の出土がないことからその成立以前ということになろう。一方、口唇部下に幅広の無文帯を有する７類は外側の肥厚は顕著にならない。４類の帯状施文の安定も特筆される。J型Y型の比率は両地点ともに圧倒的にY型優位だが、K8グリッドでは50点出土したJ型が、より稲荷台式の出土量が多いM7グリッドでは27点に止まっており、Y型優位の状況が更に進んでいるといえるかもしれない。またM型は、M７グリッドでは安定した量が伴っている。K８グリッドでも分類が不充分だったため正確な比率は出せないが一定量伴っていることは窺がえる。以上から上谷遺跡の稲荷台式は、稲荷台式（K８グリッド）→稲荷台式新（L6グリッド南～M7グリッド）の変遷が地点差として検討できる好資料である。本遺跡は終末期にはJ型主体の花輪台Ⅰ式が席捲しており、前述のM７グリッドの状況に鑑み、稲荷台式新以降、花輪台Ⅰ式成立に至る過程が改めて課題となろう。

稲荷台式～花輪台Ⅰ式に帰属する土器群（143・147・153～156・176～208・210～217・221～225）

第189図を中心に、主に稲荷台式新～花輪台Ⅰ式成立以前、一部花輪台Ⅰ式に下る可能性がある土器を纏めている。これらの一群については細片以外、大半を図示している。

沈線文土器（176～190）

１類（180・184）　沈線による意匠文が認められるもの。184は撚糸文と併用される。沈線は極めて細く、木の根No６遺跡の「木の根式」の特徴と一致している。

２類（176～178）　短い横沈線を口縁部から底部付近まで施文するもの。沈線はヘラ状工具を斜めに当てており、特徴的である。

３類（182・183）　口縁部の横区画として沈線が施文されるもの。182は円形の焼成前貫通孔がある。

４類（187～190）　単方向の沈線が施文されるもの。沈線の特徴は１類と同じで、同一個体の可能性のあるものも含まれている。

５類（179・181・185・186）　撚糸文・縄文と併用されるもの。沈線は１類よりもやや太い。A：口唇部下、或いは帯状施文の空白に単沈線列を充填するもの（179・185）、B：帯状施文の撚糸文の外縁を縁取るように施文するもの（186）がある。Aは木の根No６遺跡にも類似の例がある（宮1981　第103図２）。

押型文併用土器（221）　帯状施文された撚糸文の空白部に横線が連続して施文される土器である。粘土が乾燥した段階で施文されていると考えられ、横線は浅く印刻的で、周囲・内部に施文時の粘土の盛り上がり、擦過痕は認められない。帯状施文の撚糸文はこの部分では磨消されているが、完全に消されてはいない。横線右側は撚糸文と重複していて、横線施文に伴って撚糸文の圧痕が潰れたように見える。

横線の内部には潰れた撚糸文の圧痕が観察できるが、横線と横線の間の高い部分も撚糸文の圧痕が潰れている。以上の点を勘案してこの横線は回転によって施文されていると考えるに至った。各圧痕は図182のように対応すると考えられる。横線の形状は完全には一致しないが、Dより下は、上のE～Cよりも圧痕が浅くなっており、押圧が不完全なために横線のラインが不明確になったのであろう。対応する各横線間の距離は2.25cmなので原体の径は約7mmで、長さは横線Aの長さから1.5cm程であったと考えられる。これに軸に並行の凸線を5本刻んで縦回転しているのであろう（Bit3）。

図182　押型文と考えられる土器

異方向施文土器（191）　小破片1点のみだが、口唇部外端に異方向の撚糸文が施文される土器である。節が大きく条間が極端に開いた撚糸文が施文されている。

絡条体圧痕文土器（143・192～199）

1類（143）　口縁部の横区画として絡条体圧痕が施文されるもの。M7グリッド稲荷台式10類に類似した構成だが、口縁部形態、整形・調整手法がその範疇を外れていると考えられる。

2類（192～196・198・199）　横位多段の絡条体圧痕が施文されるもの。木の根No6遺跡でも類似の構成が出土しているが、胴部は縦位撚糸文とされている。本類は恐らく底部付近までこの構成になると考えられる。絡条体圧痕は短く回転されている部分が目立つ特徴がある。198は胎土・整形手法が3類に類似しており、時期的に分離される可能性がある。

3類（197）　絡条体圧痕による意匠文が施されるもの。

刺突文土器（201～204・211）

1類（201・202）　刺突文が縦位に施文されるもの。丸みのある工具を下から斜めに押圧している。

2類（203・204）　刺突文が施文されるもの。203は縦位の配列を採っているようにも見えるが、構成は不明。203は角状工具の角を、204は円形の工具の角を押圧している。

3類（211）　円形竹管刺突が施文されるもの。小破片で、意匠を構成しているように見える。別時期（前期以降）の可能性もある。

絡条体圧痕と刺突文が併用された土器（200）　胴下半部の破片である。絡条体圧痕文土器2類の特徴を有する短く回転する圧痕を施文した後。部分的に「～」字状の刺突文を施している。

押圧文土器（224・225）　角形の押圧文により意匠を構成する土器である。整形・調整手法は花輪台Ⅰ式に近い。本例は生谷境堀遺跡や久我台遺跡に類例があり、「歯車状」の原体による押型文という見解がある。但しこれには慎重な意見もあり、まずは回転施文であることの証明が急務であろう。現時点では、押圧文土器としておく。

凹線文土器（153～156）　木の根No6遺跡（宮1981　第97図41～45）等に類例がある。

条痕文土器（217・222・223）

1類（222・223）　装飾的な構成を有するもの。羽状、或いは矢羽状の構成をとっていると考えられる考えられるが、条痕は全体として曲線的である。条痕の原体は不明だが、3条一組で断面が浅い角形を呈している。

2類（217）　縦位施文するもの。乾燥した器面に太い絡条体を引きずっている可能性もある。

条線文土器（212～216）　工具によると考えられる雑な条線文である。中鹿子第２遺跡で類似の土器が出土している（横田1992　第740図253等）。

特徴ある胴部破片（147・152・205～208・210）　147は撚糸文が交差し、格子目或いは羽状を呈するものである。152は横位（やや斜位）撚糸文が帯状に磨消される土器。205はRの撚糸文と重複してLの撚糸文が施文される。整形・調整が197とよく類似している。206～208はR・L同時巻き原体による撚糸文である。210は異原体併用の土器で、上段は撚糸文、下段は縄文の可能性が高い。木の根No６遺跡に類例がある（宮1981第103図３～６）。

以上の土器群は「撚糸文土器終末期」に下総台地を中心として出現する「多様な有文土器群」の一角である。沈線文土器、異方向縄文土器、絡条体圧痕文・刺突文及び両者併用の土器、凹線文土器、条痕文土器２類、条線文土器、胴部破片は、大半が稲荷台式新を中心とするL5・M７グリッドから出土している。また古代等の住居跡覆土から出土した押型文併用土器、条痕文土器１類も、口縁部整形手法の特徴から、これらの一群に含まれるものであると考える。絡条体圧痕文土器３類、刺突文土器２・３類などはやや後出する可能性も考えられるが、従って大半はK８グリッドを中心とする花輪台Ⅰ式ではなく、稲荷台式新～花輪台Ⅰ式成立以前に関わる土器群であると考える。押圧文土器は古代等の住居跡覆土から出土しているが、整形・調整手法は本遺跡で多く出土している花輪台Ⅰ式に近い印象を受ける。他遺跡の状況を含めて、改めてその位置付けを検討する必要があろう。

花輪台Ⅰ式（図24）**及び関連する土器群**（241～412）

花輪台Ⅰ式は無文土器を除き、遺跡全体で口縁部126点、胴部506点が出土している。分類作業の際、口縁部無文帯の破片（例えば262）が相当量あり、集計ににはこれらもその特徴的な形態から花輪台Ⅰ式と判断して点数に含めている。また器厚が１cmを超える厚手の斜縄文・撚糸文の胴部破片102点も含めている。胴部撚糸文には点数は少ないが稲荷原式（332・333）が含まれよう。前述のように殆んどはK７グリッド南東からK8グリッドの台地縁辺部に偏在しており（K8グリッドで口縁部92点・胴部400点出土）、他のグリッドからの出土は散発的である。稲荷台式と比較して整形手法に大きな変化が見られ、器厚は同程度のものもあるが、１cmを越える厚手のものが多い。そして既に指摘があるように口唇部形態も尖頭・内削ぎ等が安定して存在する。遺跡全体で特徴があるものを集計すると、丸頭（241・254等）33点・尖頭（257等）32点・内削ぎ（255・268等）26点・角頭（277・281等）16点・その他・不明19点となる。丸頭は幾つかの種類を含んでおり、241・245・246・251～253は稲荷台式以来の口唇部形態を踏襲している例である。これらは器厚も厚手のものは含んでいない。比較的目立つのは244のような直口や254のような先細り状になる形態で、厚手の土器が多い。尖頭・内削ぎは中間的な形態のものが存在する（255等）。角頭は主に口唇部上端が平らになるものを分類しているが、284のように切断されたような平坦面を持つものは稀で、多くは角に丸みを帯びる形態である。施文原体は、遺跡全体で J 型：口縁部73点（RL18点・LR27点・R11点・L1点・不明16点）・胴部380点（RL73点・LR184点・RL+LR併用1点・R13点・不明109点）、Y型：口縁部９点（R６点・LR１点・不明２点）・胴部79点（R58点・L６点・LR１点・不明14点）がある。口縁部・胴部の「LR」は、共に2段の縄を絡げた絡条体による撚糸文である（346・360）。また側面圧痕と胴部の回転圧痕が異原体となる口縁部もしくは口縁部付近の破片がある。縄文原体を使い分けるもの７点（側面圧痕+胴部施文RL+LR５点・R+LR２点）、縄側面圧痕と撚糸文を組み合わせたもの（例えば335）10点（RL+YR１点・LR+YR３点・JR+YR４点・JL+YR１点・JR+Y？１点）。但し前述の口縁部無文帯の部分や、圧痕が極めて浅いために原体が不明となるものが胴部小破片を中心に相当量ある。この花輪台Ⅰ式集中区には、やはり厚手の整形を特徴とする無文土器が

相当量伴っている点が特筆される。

J型（241～308・310～323）

1類（241～285・294・295）　口縁部縄側面圧痕・胴部異方向縄文という典型的な構成を採るもの。縄側面圧痕によって画される口唇部下無文帯の幅は、後述のY型・そして稲荷原式を含め、全体としては2.5～3㎝前後でよく纏まっているといえよう。しかしやや変異もあり、252・285のように1㎝前後のもの、247・263・284、Y型とした336のように1.5㎝前後のものもある。当遺跡では径が小さい土器（或いは器高が関係するのかもしれない）は無文帯の幅が狭くなる傾向がある。大雑把だがA：口縁部外面が膨らむように肥厚するもの（274）、側面圧痕は2条以上施される、B：側面圧痕が2条施文されるもの（244・268）、C：それ以外と分類しておく。272は側面圧痕を装飾的に施している可能性があるが、小破片なので判断しかねる。

2類（286・287）　縄側面圧痕のみが施され、胴部縄文を欠くもの。244もその可能性がある。

3類（288～293）　回転縄文のみ施文されるもの。A：口縁部に無文帯を有するもの（289・290・292・293）と、B：口唇部直下から施文されるもの（288・291）がある。縄文は単方向と考えられるが、293は異方向施文が行われている可能性もあろう。

4類（296～308・310～323）　胴部・底部破片。縄文は、そればかりではないが、節が大きく丸みのあるもの（296～298・314等）が特徴的であり、これは稲荷台式のJ型で用いられるそれと類似している。圧痕は296～298、311、312・319のように深く明瞭なものもあるが、303～308のように圧痕が浅く条間が開くものが目立っている。異方向縄文は同一原体の縦回転と横回転によって表出されるが、1点のみ異原体による羽状縄文と判断される土器がある（299）。312・313に見られるように縦回転は深く明瞭に施文されるが、横回転は軽く施文される傾向がある。また313に典型的だが、縦回転の施文域が広く、縦位帯状のように施文されるものもあり、321はそうした部分の可能性も考えられよう。縦回転と横回転との重複関係が判断できた例は意外と少ないが、縦→横14点、横→縦6点である。312は縦→横→縦・・と施文されている。但し材料不足の観が否めないものの、縦→横の順序の破片が多いということと、前述の異方向縄文の特徴から縦回転施文間を横回転施文で充填している土器も存在することが予想されよう。

Y型（309？・334～350・352～369）

1類（334・338）　絡条体圧痕+撚糸文の構成を採るもの。

2類（335～337・339～342・344・345）　縄側面圧痕+撚糸文の構成を採るもの。集計ではY型には含めていないが、側面圧痕+胴部施文の構成における撚糸施文は、1類よりも本類が一般的であり、その場合、縄側面圧痕には、殆ど1段の縄が使用されている。側面圧痕の原体と胴部のそれと使い分ける土器は前述のようにJ型にも存在しており、後述のこの部異に刺突文を施文する土器と併せて注意される。

3類（346～350）　撚糸文のみが施文されるもの。A：口縁部に無文帯を有し、横位施文されるもの（346）、B：口縁部に無文帯・或いは明瞭な施文後調整帯を有し縦位施文されるもの（347・349）、C：口唇部下から縦位施文されるもの（348・350）がある。348は器厚・内面調整の特徴から該期としたが、やや異質な特徴を有する。

4類（309？・352～369）　胴部破片。厚手の撚糸文施文の土器が中心であり、その特徴から該期のものと判断されたものである。A：格子目状の構成を採るもの（363～369）、B：縦位～斜位施文されるもの（352～360・362）、C：横位施文されるもの（361）、D：絡条体圧痕？が斜位に施文されるもの（309）羽状構成を採っている可能性が高い、がある。

その他（343）　小破片で確実ではないが、側面圧痕の部異に刺突文が施されるものである。

稲荷原式（332・333・351）

Ｍ７グリッド稲荷台式で記述したＹ型９類をとりあえず除くと、口縁部として確実な例は遺跡全体でこの332・333のみである。胎土・整形手法共にＹ型９類とは異なっており、大粒の撚糸文も特徴的である。胴部破片としては、胎土・撚糸文の特徴から351がこれに該当する可能性が高いと考えられる。

刺突文土器（326～329・331）

１類（326～329）　縄側面圧痕を有し、胴部に刺突文が施されるもの。326は口縁部無文帯が狭く、胴部に刺突文が施されている。刺突文は縦に垂下しているようにも見えるが規則性を窺がうのは難しい。ただ破片右の縦に３個並ぶ刺突文は、その左よりもやや密に施文されており、これを縦位施文と見ればその左のやや疎らな刺突文は充填文の可能性もあろう。327～329は類似の刺突文が施される胴部破片である。327はやはり縦・斜の意匠を構成している可能性がある。

２類（331）　恐らく口縁部に小角状の刺突文列が施されるもの。胴部は無文となる。

押圧文土器？（330）　破片下端に長方形の圧痕が見える。小部分なので判断し辛いが、圧痕の形状から意図的な施文で、先に押圧文土器としたものの可能性が高いと考えている。

沈線文土器（324・325）

324は胴部に部分的に鋭利な工具による粗い縦沈線が４本施文されている。また右上の横位の１本も沈線と考えられる。Ｍ７グリッドを中心に出土しているいわゆる「木の根式」の沈線文土器とは土器の整形・調整手法、沈線の描出手法も異なっており、花輪台Ｉ式に関わると考えられる。資料を実見していないが、西ノ谷貝塚Ｊ28号住の土器（坂本2003）が類例として挙げられると考えている。325は厚手の胴部で、小破片のため判断し辛いが、上部に見える２本は沈線と考えられる。

無文土器（370～412）

無文土器はＫ8グリッド全体で口縁部198点・胴部904点が出土している。但し同グリッドからは井草Ｉ式～稲荷台式の出土も相当量あり、ここにはそれらも含まれている。更に細片などは単に無文部の破片も含まれよう。ここに図示した土器は胎土・整形・調整手法から確実に稲荷台式以前の無文土器とは分離され、花輪台Ｉ式に関わっていると判断したものである。器厚は厚手のものが多く、こうした特徴を有する無文土器はＫ8グリッドから口縁部35点・胴部303点が出土している。こうした状況から筆者は上谷遺跡では相当量の無文土器が花輪台Ｉ式に伴っていると考える。

１類（370・371・375～377・381）　東山式といわれている土器群で、図示したものが全てである。Ａ：口唇部が肥厚し段・沈線を有するもの（371・375）、Ｂ：口唇部が外側に屈曲し、段・凹線が施されるもの（376・381）、Ｃ：直口する口唇部下に沈線が施されるもの（370・377）がある。

２類（372・373・378・379）　口縁部に段を有し、急激に器厚を減じるもの。Ａ：外面が丸く括れ、肥厚して上端が平らな口唇部を有するもの（372・373）、Ｂ：段で器厚を減じ直口するもの（378・379）がある。

３類（374・380・382・383）　やや外傾する口縁部に何らかの横区画が認められるもの。内削ぎ状の口唇部形態を有する382の左の破片は縄の短い側面圧痕の可能性がある。

４類（384～395）　その他の無文土器。Ａ：口唇部形態が丸頭状を基本とするもの（384～390）、Ｂ：口唇部上端が平らになるもの（391～393・395）、Ｃ：明確に角頭状を呈するもの（394）がある。Ａ～Ｃは内面にケズリによる擦痕を有する土器が目立つ。Ａは最も多いが、386のように内削ぎ状に近いものもある。また390は弱い波状口縁を呈する可能性がある。外面は研磨（384・385）や入念なナデ（386・387等）が施され平滑に調整される土器が目立つが、先行して地に細かい擦痕を有するものが多い。Ｂ・Ｃは外面に細かい擦痕がある。392は縄文が施文されている可能性があり、花輪台Ｉ式Ｊ型３類Ａかもしれ

ない。

5類（396～412）　無文の胴部・底部破片である。やはり口縁部と同様に内面は擦痕が目立ち、外面は研磨・入念なナデが施されるものや擦痕がある土器が多い。底部（410～412）は丸底或いはそれに近い尖底と考えられるが、小平底（412）も存在する。

以上、上谷遺跡の花輪台Ⅰ式は、主に厚手の整形を特徴としている点、装飾では口縁部無文帯が比較的広く、J型・Y型があるが前者が優位である点、相当量の無文土器を伴う点を確認しておく。また少量出土した刺突文、沈線文もこれに伴うのであろう。J型では口縁部縄の側面圧痕を2条以上施文するものが3点見られた。但しここに異原体の縄を押圧したり、或いは意匠を構成するような圧痕を施文するといった、この部異を装飾的に加飾する明確な例は認められない。本遺跡の花輪台Ⅰ式はその様相としては花輪台貝塚に近いのではないかと予想している。花輪台Ⅰ式については既に幾つかの細別案があるが、今後本遺跡と周辺遺跡との対比から改めてこの問題に接近することが可能であると考えられる。

土製円盤（413～425）

土製円盤、或いはその可能性があるものが21点出土している。撚糸文土器前半期（井草～夏島式）4点（413・415・416）、稲荷台式11点（418・420～425）、不明6点（414・417・419）がある。425は裏面に未貫通孔を穿っている。

註1　本稿における撚糸文土器の大別区分や「井草Ⅰ式・同Ⅱ式」といった用語法については本報告の編集方針に従っている。

註2　いわゆる「同心円状擦痕」と呼ばれているものに一種の圧痕の可能性が高いものが存在しているという点は、とある研究会における斎藤弘道・宮内良隆・鈴木正博・塚本師也氏等の観察・教示によるものである。

註3　実験によっても類似の回転圧痕を得ることができた。本資料については松井朗氏に多くの助言を得ている。

註4　筆者は現状では口縁部縄側面圧痕・胴部異方向縄文の土器を典型とし、それに組成すると考えられる縄文、撚糸文、無文の土器に限定して「花輪台Ⅰ式」の呼称を採用する。当該土器群に対しては、近年その内容の拡大、「花輪台Ⅱ式」への批判に伴って「花輪台式」との呼称も多く用いられている。これにはその「花輪台式」との内容の峻別という意図もある。

＊今回、本遺跡の早期縄文土器を整理するにあたり、金子直行氏、須賀博子氏、松本建速氏、松井朗氏からご教示、ご協力を得た。記して謝意を表したい。

遺構外出土縄文時代早期の土器（第190～193図）

上谷遺跡出土の縄文時代早期の土器には、沈線文土器、条痕文土器がある。沈線文土器（1～3）は図示した3点が全てである。一方条痕文土器はほぼ遺跡全体から多量に出土している。有文土器を見るとその殆んどが野島式で占められており、古い段階から新しい段階のものまである。ここでは主な有文土器を中心に掲載したが、41の内面に深い斜沈線が施される土器などはその編年的位置付けに問題を残す資料であろう。

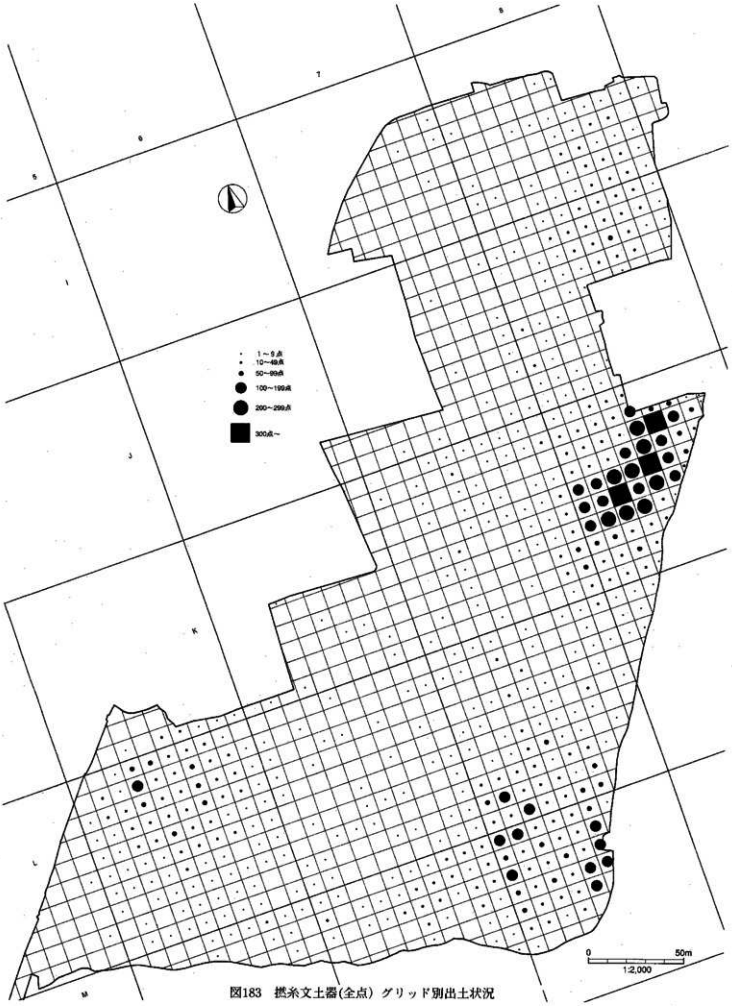


図183　撚糸文土器(全点) グリッド別出土状況

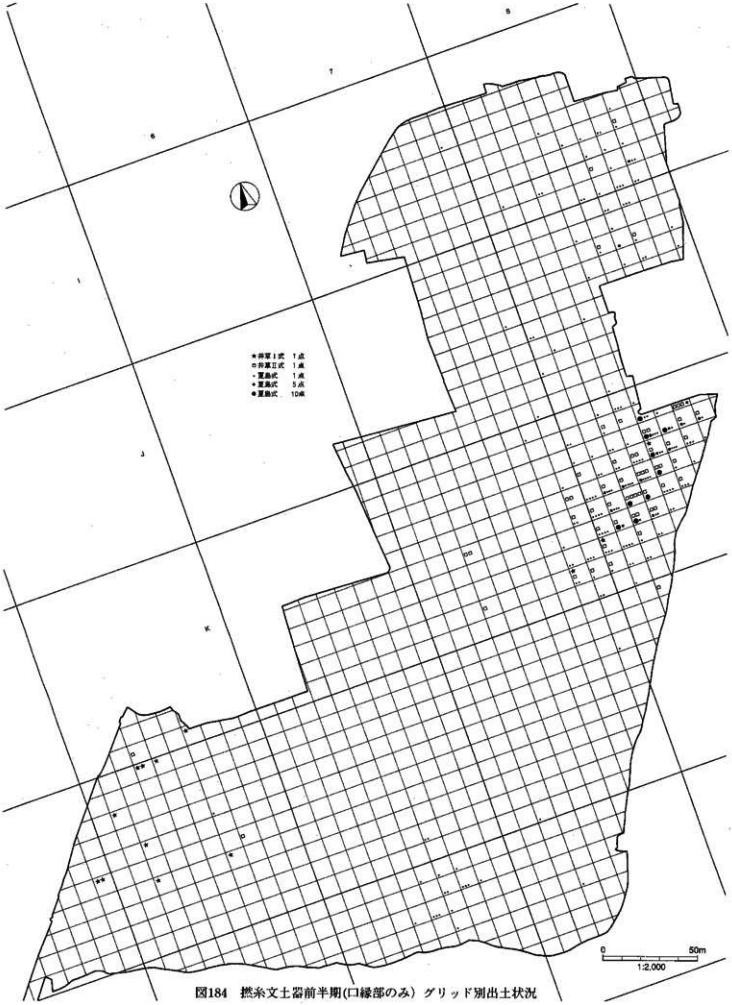


図184　撚糸文土器前半期(口縁部のみ)　グリッド別出土状況

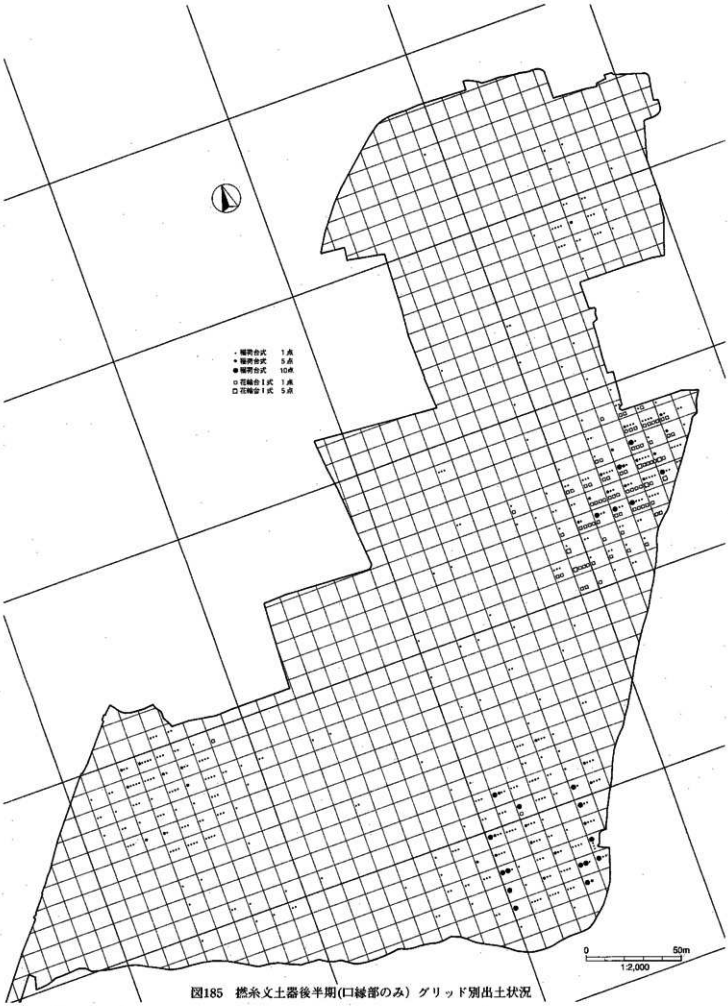


図185　撚糸文土器後半期(口縁部のみ) グリッド別出土状況

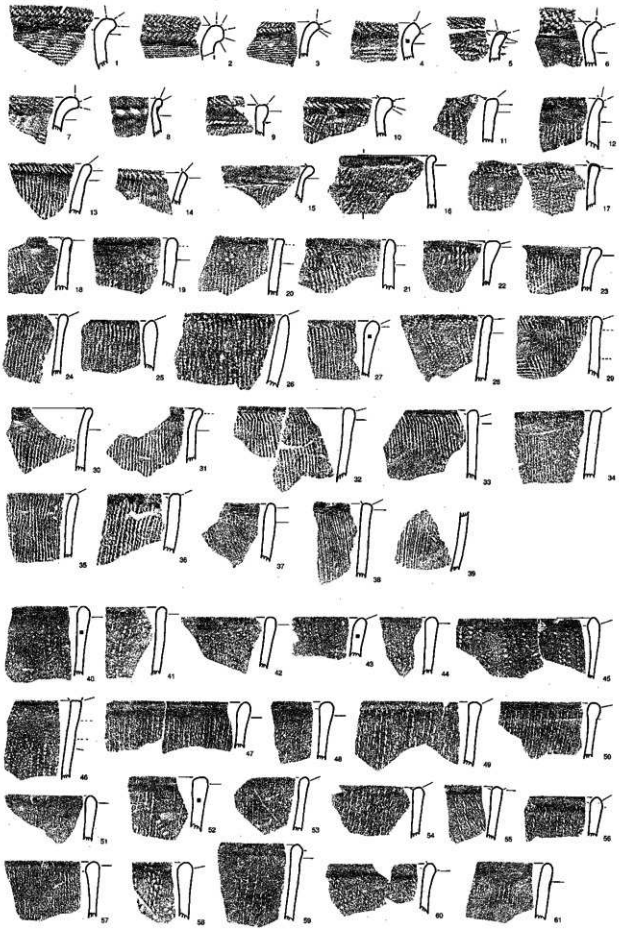


図186　撚糸文土器（1）

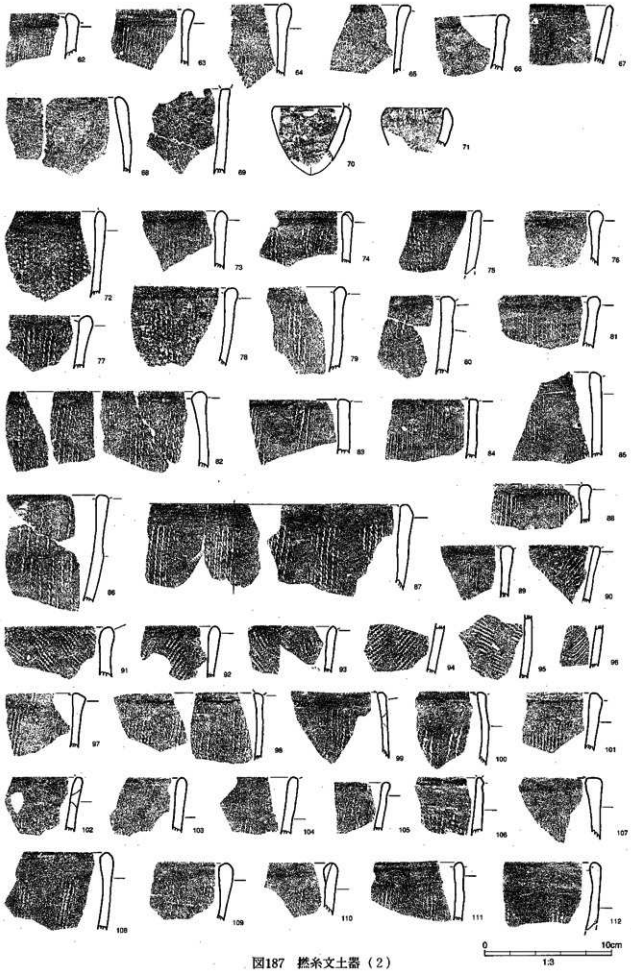


図187　撚糸文土器（2）

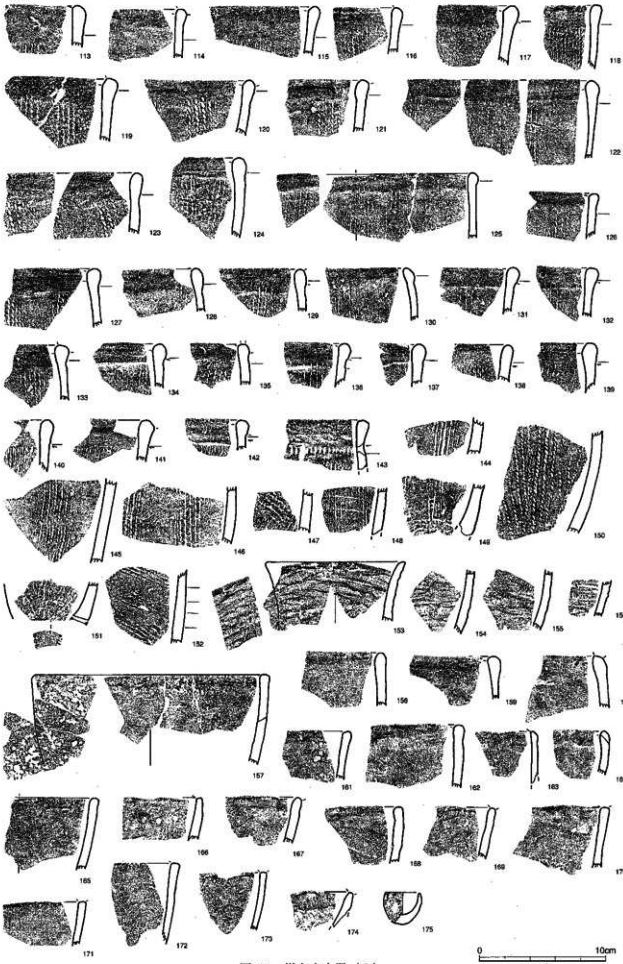


図188　撚糸文土器（3）

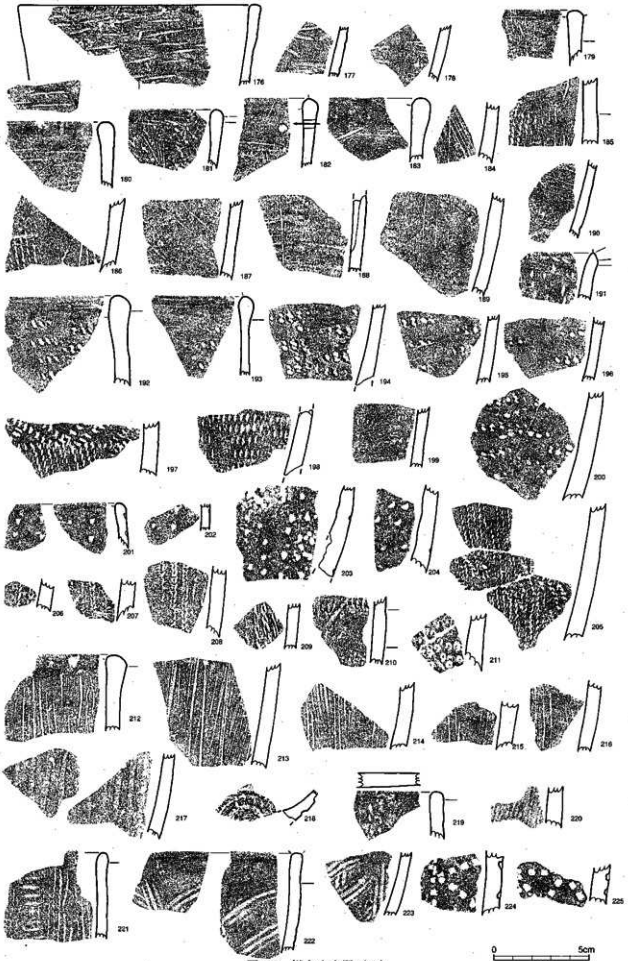


図189 撚糸文土器（4）

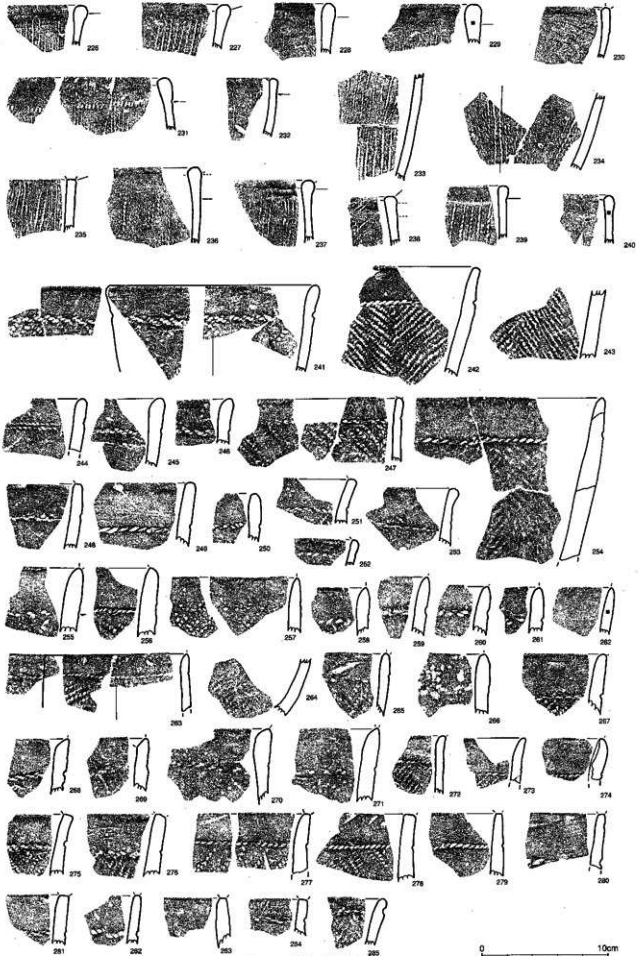


図190　撚糸文土器（5）

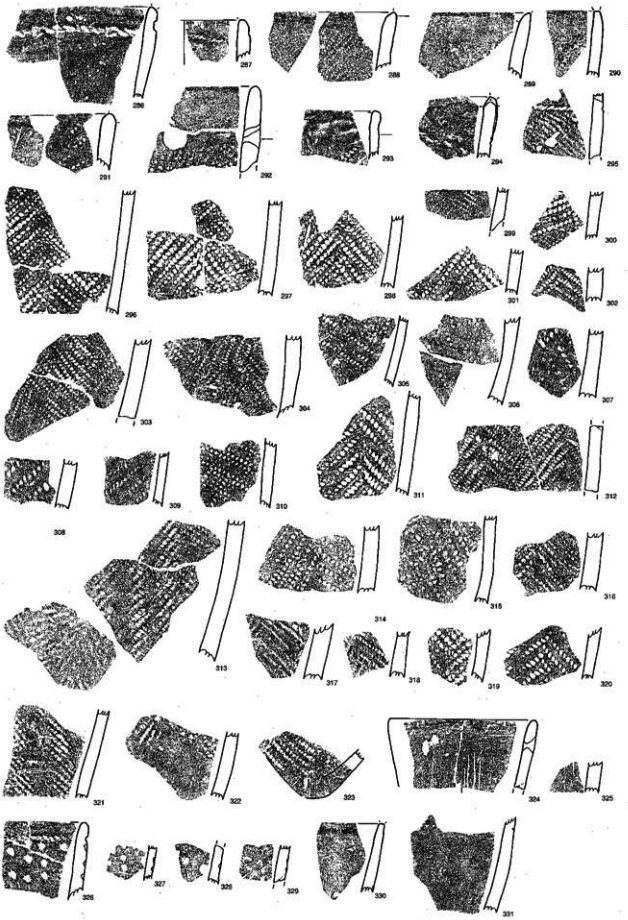

286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
0
10cm
1:3

図191　撚糸文土器（6）

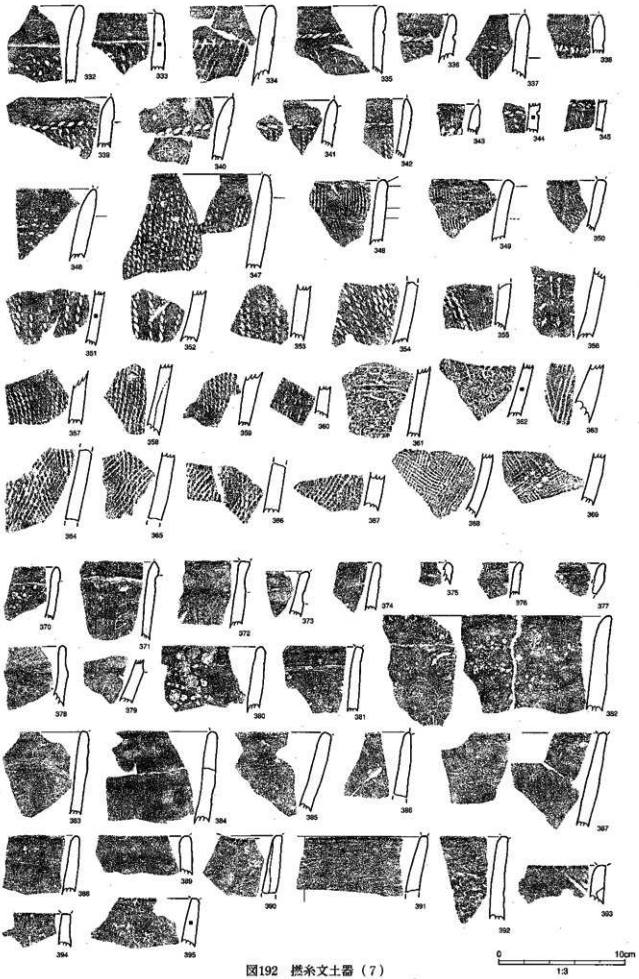


図192　撚糸文土器（7）

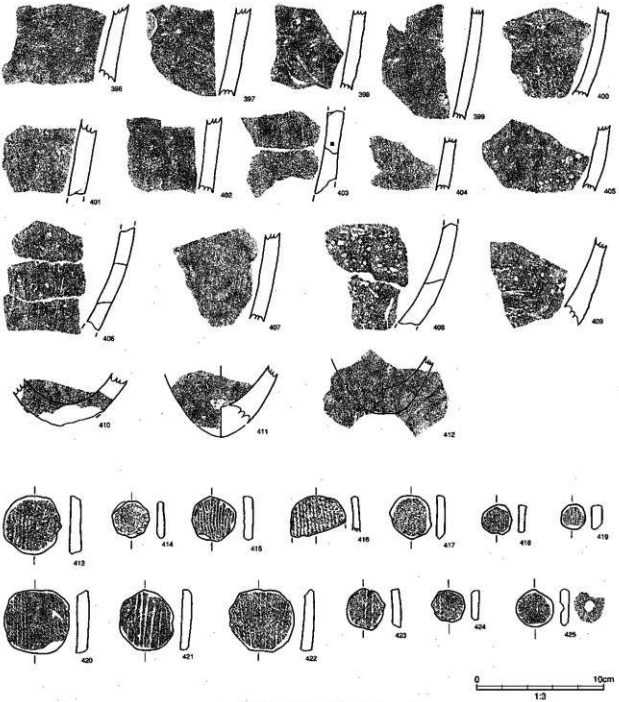

396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
0
10cm
1:3

図193　撚糸文土器（8）

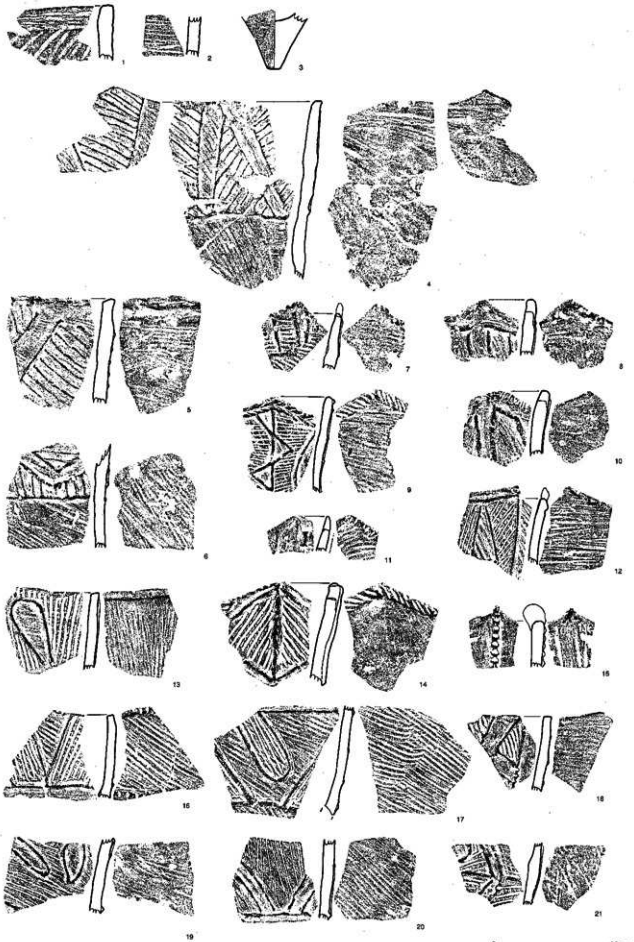


図194　条痕文土器（1）

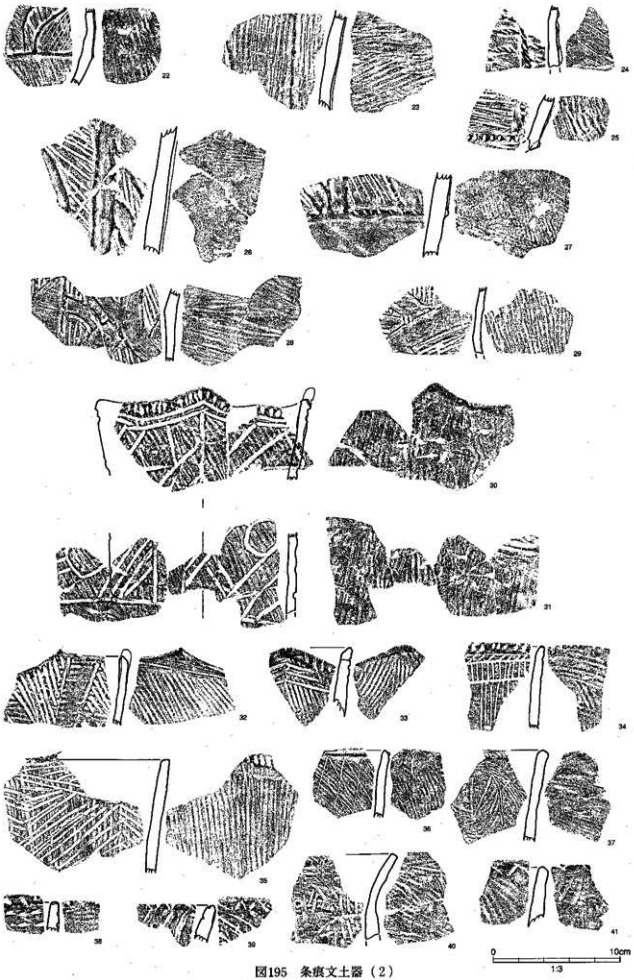


図195　条痕文土器（2）

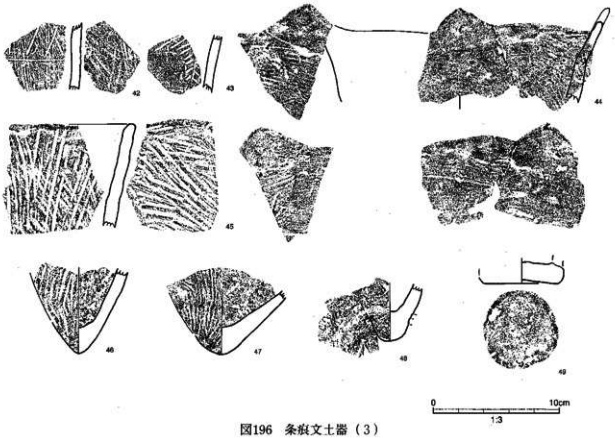


図196　条痕文土器（3）

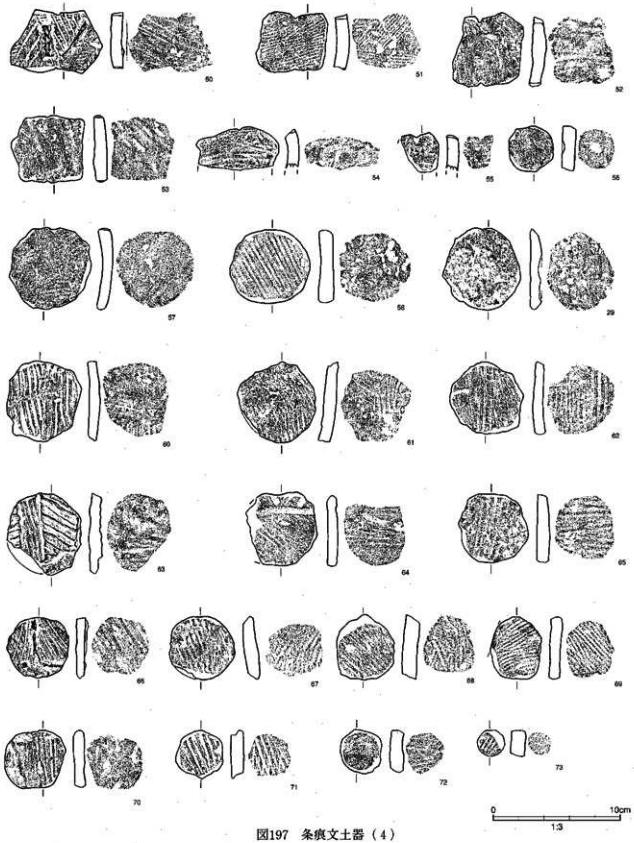

50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
0
10cm
1:3

図197　条痕文土器（4）

表57　調査区遺物観察表

挿図No	出土地点	部位・器形の特徴	調整・施文の特徴	色調	胎土	備考
1	K5-70-2	口縁部。肥厚・外反。胴張り。	外：口縁部横縄文LR。口唇部斜縄文（2段異方向外端LR→上端RL）。内：ナデ。	外：暗黄褐色。内：黒褐色。	やや粗。砂粒・石英粒・白色不透明粒子多い。	
2	L4-96	口縁部。肥厚・外反。肥厚部下弱い指頭圧痕列。胴張り。	外：口縁部横縄文LR→肥厚部下端調整→口唇部LR（4段異方向・外端下段横位→外端上段縦位→縦位→上端横位）。内：ナデにより平滑。	外・内：淡い橙褐色。	緻密。細砂粒・細かい石英粒・白色不透明粒子。角閃石。	
3	L5-67	口縁部。肥厚・外反。肥厚部下指頭圧痕列。	外：口縁部横縄文JR・口唇部外端JR（2段異方向）。内：ナデ。	外：淡い橙褐色。内：淡い赤褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒多い。	
4	L5-13	口縁部。肥厚・外反。胴張り。	外：口縁部縄文RL・口唇部外端RL（1段）。内：ナデにより平滑。	外：橙褐色。内：赤～黄褐色。	粗。大粒の砂粒多い。石英粒。	
5	L5-31	口縁部。突起あり（円形・内面が瘤状に僅かに盛り上がる）。外反。	外：肥厚部下から縦縄文JR→口縁部縄側面圧痕JR（2条、突起下付近で両者の間隔が狭まり側面圧痕の先端が折れ曲がって接続しているように見える）。口唇部縄文JR（外端・上端2段）→突起上端短い縄側面圧痕R。内：ナデ。	外：暗褐色～茶褐色。内：茶褐色。	緻密。細砂粒少量。	
6	L4-96	口縁部。外反。胴張り。内面屈曲部に指頭調整痕。	外：胴部縄文RL→口縁部ナデにより平滑。口唇部外端及び内端RL。内：ナデ。	外：暗褐色。内：暗黄褐色。	緻密。砂粒・石英粒多い。白色不透明粒子。	
7	L5-27	口縁部。肥厚・外反。胴張り。肥厚部下爪痕を伴う浅い指頭圧痕列。	外：口縁部斜縄文RL→肥厚部下調整→口唇部RL（2段同方向）。内：ナデにより平滑。	外・内：暗褐色。	緻密。細砂粒。白色不透明粒子。	
8	L5-76	口縁部。肥厚・外反。胴張り。肥厚部下爪痕を伴う浅い指頭圧痕列。内面口唇部下指頭調整痕。	外：胴部細い縄文JR→口唇部下調整。口唇部同原体JR。内：口縁部付近弱い横擦痕。ナデ。	外：茶褐色。内：茶褐色～暗褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒少量。	
9	K7-99	口縁部。外面が突出するように肥厚し、口唇部上端は平らに整形されている。	外：肥厚部下端側面圧痕RL。口唇部外端・上端・胴部縄文RL。内：横擦痕→ナデにより平滑。	外・内：暗赤褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
10	K8-36	口縁部。肥厚・外反。やや胴張り。	外：胴部縄文JR。口唇部外端縄文JR。口唇部ナデにより平滑。内：弱い横擦痕→ナデにより平滑。	外：茶褐色・暗褐色。内：橙褐色。	緻密。細砂粒。	
11	K8-54	口縁部。外面から肥厚する。破片右端は突起が欠損している。恐らく円形で、内面が僅かに瘤状に盛り上がっている。	外：胴部縄文JR。口唇部下指頭調整。口唇部外端縄文JR。口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：暗茶褐色。内：橙褐色。	緻密。細砂粒少量。	
12	K8-4	口縁部。胴部からやや器厚を減じ、口唇部はやや外屈する。	外：胴部縄文JR→口唇部下指頭調整。口唇部部分的（破片右端）に恐らく同原体による施文・ナデにより平滑。内：荒れている。	外：暗茶褐色。内：淡い橙褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
13	K8-37	口縁部。外反。	外：胴部撚糸文R→口唇部下指頭調整→口唇部外端斜位撚糸文R。内：弱い横擦痕。	外・内：暗茶褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒。	
14	K8-32	口縁部。外面が弱く「く」の字状に屈曲し、口唇部がやや肥厚する。	外：胴部撚糸文R→口唇部下付近指頭調整→口唇部斜撚糸文R。口唇部ナデにより平滑。内：横擦痕。	外：暗茶褐色。内：淡い茶褐色。	緻密。砂粒・細石英粒多い。白色不透明粒子。	
15	表採	口縁部。肥厚・突出。	外：縄文RL。口唇部ナデにより平滑。内：弱い横擦痕・平滑。	外：暗茶褐色。内：暗茶～黄褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒少量。	
16	表採	口縁部。外端が突出するように肥厚する。口唇部下指頭調整。やや胴張り。	外：縄文JR。口唇部ナデにより平滑。内：横擦痕→ナデにより平滑。	外・内：暗黄褐色。	緻密。細砂粒・白色不透明粒子。細石英粒少量。	
17	J8-73・J8-74	口縁部。内面がほぼ直線的に立ち上がり、外面が肥厚する。口唇部はやや丸みを帯びている。左破片は口唇部に内外両面から瘤状の粘土を貼り付けている部分があり、その部分が僅かに盛り上がっている。右破片も外面に僅かに盛り上がった部分がある。	外：縄文RL（右側の破片は口唇部下で方向を変えて強く押圧されており、異方向施文のようななる）→口唇部下弱い指頭調整。口唇部ナデにより平滑。内：横擦痕。	外：黒褐色・暗褐色。内：暗褐色・黄褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒。	
18	K8-25	口縁部。口唇部は胴部よりやや器厚を減じ小さく外屈する。	外：縄文LR？→口唇部下指頭圧痕・指頭調整。口唇部ナデ。胴部縦・口縁部横擦痕。	外・内：橙褐色。	緻密。細砂粒。	
19	K8-34	口縁部。ほぼ直口。	外：縄文JR→口縁部～口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：暗茶褐色。内：茶褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
20	K7-88	口縁部。外面が僅かに肥厚する。口唇部は丸みを帯びる。	外：縄文RL→口唇部下指頭調整。口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外・内：黄褐色。	緻密。砂粒・白色不透明粒子。細石英粒少量。	
21	K8-41	口縁部。胴部から器厚を減じ口唇部が僅かに外屈する。	外：縄文LR→口唇部下調整。口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外・内：淡い黄褐色。	緻密。砂粒・細石英粒少量。	
22	K7-88	口縁部。外面から器厚を増して肥厚する。口唇部は平坦に整形される部分がある。	外：縄文JR→口唇部外端狭い幅に縄文JR異方向施文。口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：赤～暗茶褐色。内：赤褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
23	K8-45	口縁部。肥厚・外反。	外：縄文RL。口唇部ナデ。内：荒れている。	外：黒褐色。内：黄褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
24	J8-44	口縁部。外面が突出するように肥厚。口唇部下に弱い指頭調整痕。	外：縄文RL。口唇部ナデ。内：横～斜擦痕（平滑）。	外・内：橙褐色。	緻密。細砂粒。細石英粒少量。	
25	K7-98	口縁部。夏島型。	外：縄文RL。口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外・内：赤褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。角閃石。	
26	M6-64	口縁部。直口。	外：縄文RL。口唇部～内：ナデ。内：荒れている。	外・内：赤褐色。	緻密。白色不透明粒子。細砂粒少量。	
27	M6-72	口縁部。夏島型。外面が大きく外反するように肥厚する。	外：縄文RL→口唇部外端恐らく同原体による狭い異方向施文。口唇部～内：ナデにより平滑。	外・内：暗茶褐色。	やや粗。大粒の石英・砂粒多く含む。	
28	K7-76	口縁部。口唇部は胴部から殆ど器厚を変えずに外傾する。	外：胴部横擦痕→口縁部縄文LR→口唇部下同原体による異方向施文。口唇部ナデ。内：横擦痕顕著（部分的に縦擦痕）。	外：橙褐色。口唇部付近～内面：淡い橙褐色。	緻密。細石英粒多い。砂粒・白色不透明粒子。	
29	K8-26	口縁部。口唇部内端に稜を有する。	外：撚糸文R（縦位→横位）→口唇部下ナデ・指頭調整。口唇部ナデ。内：横擦痕。	外・内：黄褐色。	緻密。砂粒・細石英粒。	
30	J8-19	口縁部。外面が小さく外屈するように肥厚する。肥厚部下弱い指頭圧痕列。	外：肥厚部下より撚糸文R→口唇部～口縁部約2.5pナデ（撚糸文擦消し）。内：口縁部付近横擦痕・ナデ。	外・内：橙褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒。	
31	K8-35	口縁部。肥厚・外反。内面口唇部下に指頭調整痕。	外：撚糸文R→口唇部下指頭調整。内：横擦痕→口唇部周辺ナデにより平滑。	外・内：橙褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒。	
32	D-[illegible]	口縁部。口唇部内端に稜を有する。	外：撚糸文R→口唇部下異方向施文撚糸文R。口唇部から内：ナデにより平滑。	外・内：黄褐色。	緻密。砂粒・細石英粒。	
33	K8-16	口縁部。口唇部内端に稜を有する。	外：撚糸文R→口唇部下異方向施文R→口唇部周辺ナデにより平滑。撚糸文は口縁部約3pは強く押圧され、以下は圧痕が浅く更に摩耗によって殆ど消えている。内：ナデ。	外・内：暗黄褐色。	緻密。砂粒・細石英粒多い。	
34	J8-61	口縁部。ほぼ直口。内外面の口唇部下に弱い指頭調整痕。	外：撚糸文R。口唇部ナデにより平滑。内：口縁部付近横～斜・胴部縦擦痕→ナデにより平滑。	外・内：橙褐色。	緻密。砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
35	M6-63	口縁部。丸く整形された口唇部が僅かに外屈する。	外：口唇部下指頭調整→撚糸文YR。内：口唇部下指頭調整、口縁部横・胴部縦擦痕→口縁部から口唇部ナデにより平滑。	外・内：黄褐色。	緻密。白色不透明粒子。砂粒・石英粒多い。	
36	J8-73	口縁部。ほぼ直口。	外：撚糸文R。口唇部・内：ナデ。	外・内：黄褐色。	緻密。細砂粒少量。	
37	J8-73	口縁部。ほぼ直口。	外：口唇部下短い縦・胴部斜撚糸文R→口唇部付近横研磨。内：口縁部付近横・胴部縦弱い横擦痕→ナデにより平滑。	外・内：暗褐色。	緻密。砂粒・細石英粒多い。	
38	表採	口縁部。口唇部は内端に稜があり、上端丸くやや凹凸がある。	外：縦絡条体条痕→口唇部外端横絡条体条痕→口唇部ナデにより平滑（横絡条体条痕は殆ど消されている）。内：横擦痕・破片下端付近縦擦痕→内：ナデにより平滑。	外・内：橙褐色。	緻密。細砂粒少量。	
39	表採	胴部。	外：絡条体条痕。内：ナデ。	外：赤褐色。内：淡い橙褐色。	緻密。砂粒・細石英粒・白色不透明粒子少量。	
40	K8-7	口縁部。夏島型。	外：浅い縄文RL→口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：淡い橙褐色。口唇部付近：黒褐色。内面：暗黄褐色。	やや粗。大粒の砂粒・石英粒を多く含む。白色不透明粒子。	
41	K8-34	口縁部。ほぼ直口。	外：縄文RL→口唇部ナデにより平滑。内：荒れている。	外・内：暗褐色。	緻密。砂粒・細石英粒多い。白色不透明粒子。	
42	K7-86	口縁部。夏島型。	外：浅い縄文RL→口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：暗黄褐色。内：黒褐色。	緻密。細砂粒・細石英粒・白色不透明粒子。	
43	K8-73	口縁部。夏島型。	外：浅い縄文RL→口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外・内：暗黄褐色。	やや粗。大粒の砂粒・細石英粒多い。白色不透明粒子。	
44	K8-17	口縁部。夏島型。	外：浅い縄文RL→口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：茶褐色。内：黄褐色。	緻密。砂粒・石英粒・白色不透明粒子。	

陶院No	出土位置	部位・整形の特徴	調整・装飾の特徴	色調	胎土	備考
45	K7-96+表	口縁部、内面が内傾し、口唇部内端外へ引っ張り出している。	外：沈線文1R→口縁部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黄褐色。内：褐色。	微密、白色不透明粒子。褐鉄粒・銀石英粒少量。	
46	K8-24	口縁部、口唇部は内側に近いほど中央みを帯びている。	外：側部浅い横文RL→口縁部より上部原作の縄文横回転→横方向の沒作付加ナデにより平滑。口縁部：横方向の平滑。	外：黄褐色。口縁部近一内面：黒少量。	微密、鉄粒状・銀石英粒多い。	
47	K8-63	口縁部、胴部。	外：横方向R→口縁部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黄→橙褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
48	K8-56	口縁部、口唇部は外側が緩やかに肥厚し、内端に稜を有する。	外：横方向R→口縁部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黄→橙褐色。内：黒→褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
49	K8-44	口縁部、外周が強かに張出するように肥厚する。	外：口縁部下から横方向R→口縁部付近ナデにより平滑。内：ナデにより平滑。	外：赤褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
50	K8-55	口縁部、内外周に肥厚し、外端部内部下端が強く整形される。	外：口縁部下から横方向R→口縁部付近ナデにより平滑。内：ナデにより平滑。	外：黒褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
51	K8-64	口縁部、胴部。	外：横方向R→口縁部→内：ナデにより平滑。	外：白褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
52	K8-46	口縁部、胴部。	外：横方向R→口縁部→内：ナデにより平滑。	外：褐→黒褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。多い。	
53	K8-53	口縁部、胴部。	外：横方向R→口縁部→内：ナデ。横→縦擦痕。	外：暗黄褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。砂粒少量。	
54	K8-54	口縁部、口唇部内端に稜を有する。	外：口唇部直下から横方向R→口唇部ナデにより平滑。内：斜→横方向擦痕→ナデにより平滑。	外：黒褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・浅い茶褐色。	
55	K8-30	口縁部、口唇部内外周に稜を有する。	外：横方向R→口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黄褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
56	K8-44	口縁部、口唇部外端に稜を有する。	外：口唇部下から横方向R。口唇部→内：ナデにより平滑。	外：黄褐色。内：褐色。	微密、砂粒・銀石英粒。	
57	K7-43	口縁部、内面の内傾し、口唇部内端に稜を有する。	外：横方向R。内：口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黒褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子多い。	
58	K8-16	口縁部、胴部。	外：横方向R。内：口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黒褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子多い。	
59	K8-36	口縁部、口唇部上で強かに肥厚を減じ、口唇部内端に稜を有する。	外：横方向R→口唇部→内：ナデにより平滑。	外：赤褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。砂粒少多い。	
60	K8-33	口縁部、口唇部内端に稜を有する。	外：肥厚部から横方向R。口唇部→内：口縁部付近ナデにより平滑。内：横方向ナデにより平滑。	外：内：暗黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子多い。	
61	K8-8	口縁部、ほぼ水平。口唇部は外側が強かに肥厚し、その下端に境界線。	外：横方向R。口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黒褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・茶褐色。	
62	K7-42	口縁部、外面多様。	外：横方向R。口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
63	K7-76	口縁部、外面が強かに肥厚し、その下端に境界線。	外：肥厚部下端から横方向R→肥厚部→口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：暗黒褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
64	K8-56	口縁部、外面が強かにせりだしするように肥厚し、その下端に境界線。	外：肥厚部から横方向R→肥厚部下端→口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黒褐色。内：褐色。	微密、砂粒少。白色不透明粒子。	
65	K8-45	口縁部、外面から肩部を有して肥厚する。	外：口縁部側・胴部肩の強い沒撫。口唇部ナデ。内：強い横擦痕。	外：内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
66	K8-65	口縁部、外面が肥厚する。外周に稜を有する。口唇部内端に稜を有する。	外：口唇部ナデ。	外：黒→赤褐色。内：褐色。	微密、砂粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
67	K7-65	口縁部、ほぼ直立。	外：口縁部→胴部縦擦痕→ナデにより平滑（擦痕は特に強されている）。口唇部ナデにより平滑。内：強い横擦痕→ナデにより平滑。	外：暗褐色。内：黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
68	K7-37+K7-36	口縁部、胴部。口唇部は外方へ張りなる結合と宜為型に近くなる部分が多い。	外：口縁部ナデ。電丸でいる。胴部ナデにより平滑。口唇部→内：ナデ。口縁部横方向ナデにより平滑。	外：内：黒→赤褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
69	K8-16	口縁部、外面状。	外：口縁部→胴部縦擦痕→口唇部下端沒撫。口唇部ナデにより平滑。内：横方向ナデにより平滑。	外：茶褐色。内：黒褐色。	微密、砂粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
70	K8-45	口縁部→胴下部。口唇部は内側に張出しなる。外面は内傾する。外周部内端に稜を有する。	外：外面側沒撫→ナデ。口唇部ナデ。内：横→斜擦痕。	外：黒褐色。内：暗赤褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
71	K8-36	口縁部、→若干直線の整形。口唇部は内側に出たがあり、胴部とより内傾する。	外：内：ナデ。	外：淡い赤褐色。内：茶褐色。	微密、白色不透明粒子。細鉄粒・銀石英粒少量。	
72	L7-19	口縁部、胴部。口唇部は外方へ張りなる。ナデで丸く仕上げている。	外：浅い横文LR→口唇部下約1.5p→口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：黒褐色。内：褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒。	
73	M7-14	口縁部、胴部。	外：横方向R→口唇部ナデにより平滑。内：荒れている。	外：淡い赤褐色。内：暗褐色。内：淡い赤褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒。細砂粒・銀石英粒少量。	
74	M6-95	口縁部、胴部。	外：横方向R→外内：ナデにより平滑。	外：第一黄褐色。内：褐色。	微密、白色不透明粒子。砂粒。白英粒。	
75	M7-45	口縁部、口唇部。	外：横方向R→口唇部から内：ナデにより平滑。	外：暗褐色。内：赤褐色。	微密、白色不透明粒子。細砂粒・銀石英粒。	
76	M7-34	口縁部、胴部。口唇部内外端が肥厚する。	外：横方向R。口唇部ナデにより平滑。内：荒れている。	外：黄褐色。内：暗褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒。	
77	L7-31	口縁部、内面の調整により口唇部内端に稜を有する。	外：横方向R。口唇部ナデ。内：ナデ。	外：第一黄褐色。内：褐色。	微密、白色不透明粒子。細砂粒・銀石英粒。	
78	M7-21	口縁部、内面。口唇部外内端に稜を有する。ナデ。	外：横方向R→口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。荒れている。	外：黒褐色。内：黒褐色。	微密、白色不透明粒子多い。細砂粒・銀石英粒。	
79	L5-62	口縁部、口唇部は外面がやや突出するように肥厚し、内端に稜を有する。肥厚部下端は横擦痕によりやや凹む。	外：横方向R（条状条方か？）→口唇部付近ナデにより平滑。内：ナデ。荒れている。	外：淡い赤褐色。内：黒褐色。	微密、砂粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
80	L5-63	口縁部、厚手の胴部から口縁部付近は内側へ向かってやや凹む。口唇部は内端に稜を有する。口唇部内端に稜を有する。外面は内傾する。口唇部ナデ。内：荒れている。	外：口唇部下端→横方向R（条状条方か？）。肩部を減じてやや凹む。→口唇部ナデにより平滑。内：ナデ。	外：第一暗茶褐色。内：黒→暗黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
81	L5-46	口縁部、口唇部は外面がやや突出するように肥厚し、内端に稜を有する。肥厚部下は横擦痕によりやや凹む。外面は傾斜。	外：横方向R→肥厚部→口唇部→内：ナデにより平滑。	外：茶褐色。内：第一黒褐色。	微密、砂粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
82	M7-43+M7-44	口縁部、内面が強く内傾し、胴部は外周に稜を有する。	外：横方向R。内：ナデ→口唇部外端→内：口唇部下約1.5pまで横擦痕。	外：内：茶褐色。	微密、白色不透明粒子。細砂粒・銀石英粒。	
83	L7-84	口縁部、直口。口唇部下が部分的に強かに出る。	外：横方向R→条状撫文→内：横→斜擦痕→口唇部ナデにより平滑。内：強い横→縦擦痕。	外：第一→暗褐色。内：赤褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒。	
84	L5-71	口縁部、ほぼ直立。口唇部下でやや凹む。口唇部上端は張り出している。	外：横方向R→条状撫文。外面ナデにより平滑。口唇部部分的に強い横擦痕。→口唇部ナデにより平滑。内：口唇部付近撫→横擦痕→ナデにより平滑。	外：内：第一→暗黒褐色。	微密、雲母粒・銀石英粒・白色不透明粒子。	
85	M6-92	口縁部、強かに張出する。	外：口唇部下約1.5pまで強い横擦痕→撫条文→内：ナデ→外内：口唇部下約1.5pまでナデにより平滑。	外：第一→暗褐色。内：暗褐色。	微密、白色不透明粒子。細砂粒・銀石英粒少量。	
86	M7-1+M7-7	口縁部、口唇部内外端に稜を有する。外内：口唇部上端は張り出しなる。口唇部下端は強かに張出している。口唇部ナデ。内：ナデ→口唇部ナデにより平滑。	外：口縁部（撫結構文上）→撫条文→横擦痕→撫条文→横擦痕→口唇部ナデにより平滑。内：強い横擦痕→ナデにより平滑。	外：内：淡い赤褐色。内：黒褐色。	微密、砂粒。細石英粒。	
87	M6-94+L7-20+L6-43	口縁部、口唇部は外端に稜を有する。外面ナデ。	外：横方向R→条状撫文（巳敬撫文（明敬））。内：ナデにより平滑→口唇部ナデにより平滑。	外：暗黒褐色。内：暗褐色。	微密、砂粒・細石英粒。	
88	M7-54	口縁部、外周が中央部近するように肥厚、その下端に境界。	外：横方向R（巳敬撫文）。外内：ナデにより平滑。	外：内：暗褐色。	微密、砂粒・細石英粒。	
89	L5-61	口縁部、口唇部は外内端に稜を有する。	外：横方向R（やや斜作気味に巳敬撫）→撫条文間面整頓し（斜作）。浅い横撫（結構）。口唇部→内：ナデにより平滑。	外：内：淡い赤褐色。内：黒褐色。	微密、砂粒・細石英粒。白色不透明粒子多い。	
90	M7-54	口縁部、ほぼ直口。	外：横方向R（斜位巳敬撫文・横方向撫結構文）。内：胴部縦擦痕→ナデにより平滑。	外：内：第一黒褐色。	微密、白色不透明粒子。砂粒少量。	